

奇譚クラブ

■ 新しい風俗文献誌 ■



11
月
号



奇譚クラブ 昭和四十四年十一月号

定価三〇〇円

350

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsuki Syuppan

Osaka Japan



11月号 V 350

'69
11

作・六・鬼・団

花と蛇 特集号

好評の傑作集大成第四弾刊行!!

定価 五〇〇円 略号 「花」

団鬼六作長篇サディズム小説「花と蛇」は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気を博した傑作であり、過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三頁数十頁の特集に加えて四馬孝則伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

四馬孝則口絵

美女羞恥責「花と蛇」画集

一、恐ろしい洗腸の末排泄を強要される美女
二、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
三、刺毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
四、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
五、後のように縛られて宙吊りにされた美女
六、股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
七、足吊りで強制洗腸を施される全裸の美女
八、日本人内容見出し

発端 美女を狙う狼たち

第一章 清純な令嬢の屈辱

(カメラと令嬢・女奴隷・白痴しき陶酔)

第二章 人身御供の令夫人

(燃ゆる美体・狼の清宴・人身御供)

第三章 深窓の美少女とスベ公

(赤いしこき・再び奈落へ・奸計)

第四章 小夜子への執拗な調教

(鈴と縄)

第五章 変色事師の登場

(二人のシスター・ボーイ・化物の計画・京子の哀泣)

第六章 生れかわるスター京子

(崩壊する京子・狼の囁・地獄の宣誓・まんじの舞)

第七章 激しいスターへの訓練

(奈落への道・美女と白痴)

第八章 低脳男と令夫人の結婚

(奴隷の花嫁・二対一)

第九章 愛弟子を調教する静子夫人

(蛇の果・悲しき沈黙)

第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊

(美花の踊り・前後と百合)

第十一章 悪魔たちの哄笑

(白い関係・調教日記・手籠)

第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄

(甘い調教・挫折)

第十三章 珍芸を開陳する令夫人

(おとし穴・筆と呪)

第十四章 淫靡な時代劇ショー

(三人の風来坊・時代劇ムード・牢獄にて・フランス式)

第十五章 華々しきショーの展開

(ショーの開幕・楽屋の中・検舞台)

第十六章 野卑な妻二人のいたぶり

(珍芸・姐の上)

第十七章 スベ公達の邪悪な責め

(美女と野獣・ある日の回想)

第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち

(美女崩潰・別巻)

第十九章 悪党の執拗ないたぶり

(狼の部屋・卑劣な録音)

第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面

(地獄・斯楚令嬢・悲しき対面)

第二十一章 勝ち誇る悪党一味

(受難の姉妹)

第二十二章 中国伝来の秘法

(鬼女よりの招待・中国の秘法・羞しい囁)

第二十三章 緊縛された美女の涕泣

(三悪女の狂態)

第二十四章 新しい餌食への触手

(義兄弟)

第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄

(肉の媒介・美津子の号泣・同志討)

第二十六章 恐怖の責め続く

(地獄の接吻・巨大な責め)

第二十七章 結末なき責めの結末

(調教柱・復讐劇・肉の快楽・京子の珍芸)

【最新版】美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印刷紙 (9×13cm) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円

十組十枚 一〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇円

新装番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒通りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

- 1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
- 2 美貌は瞳に泣く (関谷富佐子)
- 3 緊う影に憧のく (佐々木真弓)
- 4 弾む裸身に拘目 (佐々木真弓)
- 5 縛りて鞭打ち (関谷富佐子)
- 6 縛りて困るわ (金原奈加子)
- 7 私を喰わないで (左近麻里子)
- 8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
- 9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)
- 10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
- 11 豊満女体の細目 (大島 照代)

- 12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
- 13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
- 14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
- 15 若肌は細に美し (長井葉津子)
- 16 恥らいの女体美 (中河 恵子)
- 17 何故私を縛るの (金原奈加子)
- 18 感泣する開股縛 (ローズ秋山)
- 19 猿くつわの悦度 (関谷富佐子)
- 20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)
- 21 足指はくの子に (佐々木真弓)
- 22 麻痺の美肌責め (金原奈加子)
- 23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)
- 24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
- 25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
- 26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
- 27 全裸の細は細く (佐々木真弓)
- 28 鎖骨と細に泣く (川越美佐子)
- 29 細に喘いだ童顔 (長井葉津子)
- 30 出話を囁す縛り (佐々木真弓)
- 31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
- 32 首膝間にあえぐ (長井葉津子)
- 33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
- 34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
- 35 高小手の全裸 (佐々木真弓)
- 36 真迫の縛ブレイ (ローズ秋山)
- 37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

- 38 亀甲縛りに似て (大島 照代)
- 39 細目に喘ぐ表情 (中河 恵子)
- 40 開股縛りの正面 (中河 恵子)
- 41 狼背に喰う美貌 (左近麻里子)
- 42 私を縛りが好き (金原奈加子)
- 43 強烈縛りを味わ (金原奈加子)
- 44 縛身を横たえて (左近麻里子)
- 45 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
- 46 柔肌に細は細く (長井葉津子)
- 47 柔肌に痛む麻痺 (左近麻里子)
- 48 全裸の女体引越 (中河 恵子)
- 49 開股縛りを締結 (左近麻里子)
- 50 突き出した尻 (中河 恵子)
- 51 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
- 52 首細股間縛の女 (長井葉津子)
- 53 強烈後手で括る (佐々木真弓)
- 54 恥しい縛り初め (金原奈加子)
- 55 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)
- 56 隠れる緊縛女 (長井葉津子)
- 57 豆絞りの狼背で (金原奈加子)
- 58 もう虐めな (金原奈加子)
- 59 女性に転す股間縛 (金原奈加子)
- 60 全裸の縛を見て (長井葉津子)
- 61 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
- 62 腎部には作製 (関谷富佐子)
- 63 この裸身を縛る (佐々木真弓)
- 64 諸親の縛り表情 (長井葉津子)
- 65 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

- 66 美体は細に映る (中河 恵子)
- 67 選きし髻部晒 (左近麻里子)
- 68 両手吊りに喰う (長井葉津子)
- 69 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
- 70 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)
- 71 捧げられる女体 (中河 恵子)
- 72 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
- 73 麗わしの肌を細 (佐々木真弓)
- 74 後手縛りの連続 (ローズ秋山)
- 75 開股の股間縛り (大島 照代)
- 76 強烈な細目の女 (川越美佐子)
- 77 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)
- 78 豊満な裸身の美 (関谷富佐子)
- 79 羞らいの流し目 (佐々木真弓)
- 80 肌を喰い込む細 (長井葉津子)
- 81 開股縛りと狼背 (長井葉津子)
- 82 投げ出された裸 (金原奈加子)
- 83 正面の亀甲縛り (左近麻里子)
- 84 開股縛りの女体 (左近麻里子)
- 85 後手縛りの全裸 (中河 恵子)
- 86 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)
- 87 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)
- 88 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)
- 89 美しい女の縛り (佐々木真弓)
- 90 股間縛りに着う (長井葉津子)
- 91 ホスチエスの緊縛 (佐々木真弓)
- 92 椅子坐開股縛り (関谷富佐子)
- 93 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
- 94 息づまる狼背 (川越美佐子)
- 95 人身御供の乙女 (長井葉津子)
- 96 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
- 97 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)



奇譚クラブ

第三卷 第十二号・通刊第二五九号

(昭和四十四年) 十一月号 目次

△本 文▽

- ある男の宿命「鎖された夜」…………… 藤田 敏二 (10)
- 一夜の情夢 ク赤い月々…………… 宇光 仙 (19)
- SMカメラ・ハント△村田キヨ子・松山真樹子の巻▽
- 「悦虐の昼と夜」…………… 辻村 隆 (22)
- 黒い日記帳 スベ公を締めあげる…………… 加藤 広夫 (47)
- 珍書探訪英名二十八衆句より…………… 斎藤 夜居 (51)
- 連載小説「大噴火」(14)…………… 千住 青鬼 (58)
- あぶ・らぶす・こんと 甘い降伏…………… 水沢 登 (66)
- 連載時代伝奇小説「緋縮緬地獄」(18)…………… 白鳥 大蔵 (72)
- 懸賞入選告白「いいたい放題」…………… 暗閑 太郎 (83)
- 中河恵子さんに捧ぐ 恵子生賛の随月夢…………… 高野 原美 (88)
- 告白手記 紀子との切腹プレイ…………… 西条 夏 (94)

奇クサロン

編集部構成… (232)

- 偏見に抗議します…………… 藤田千代子
- 忘れぬ舞台「女性切腹」…………… 高野 原美
- サロン楽我記 (第百十五回)…………… 辻村 隆
- へたど蛇(前) 千原美沙江に対する判決…………… 東山大作
- 「サディスト」私見…………… 物知 仙人
- 「花と蛇」への願望…………… 小杉 千恵
- 伊太利シ画「なんの手術?」…………… 志羽 利也
- 或る投稿者からの便り…………… 英 聖寺
- 伊太利シ画「くやし涙」…………… 小宮 伸子
- 迎白 縛りと共に…………… 早木 夢二
- 伊太利シ画「拷問」…………… 宮城 昌子
- 私の縛った女性…………… 森川 信也
- 編集部だより…………… 編集部
- バラ色の幻想…………… 予田嶋良三
- 妊婦マニアの事件簿…………… 羽鳥 水江
- 伊太利シ画「切ろうかね」…………… 藤 誠二
- 僕の伊太利シ画集「身重の白鳥」…………… 室井亜砂路
- ふんどしローザ…………… 鈴木ゆり子
- 伊太利シ画「わにかしタフね」…………… 赤木 人
- ヘンテコリンなヤツ…………… 須渾 朝
- 短信往来 私のブレイメイト…………… 浅田 守
- マニヤのメモより…………… 九鬼好太郎
- マニア通信 排泄責め 讃辞…………… 三木 勇
- 伊太利シ画 嵐の夜に現われるおんな…………… 野江 三郎

男性虐待快楽園 (第十話)

「フレンチ・キッス劇場」 (中)…………… 馬族 保 (104)

奇クについてのOとXの対話…………… 新宿 町人 (114)

告白 私の鳥獣戯画…………… 高浜 満六 (122)

文芸切腹史 烈女篇…………… 中康 弘通 (132)

青春の陥穽 「二匹の雄犬」…………… 芳野 眉笑 (142)

告白 濡れる・洩れるの記…………… 並田 新一 (151)

緊縛モデルの素顔・関谷富佐子さんを責める

「狂乱の一夜」…………… 塚本 鉄三 (161)

ファンタジー「白樺夫人」…………… 保藤 久人 (162)

アマゾンと皮革フェチシズム…………… 佐野 寿 (173)

連載M小説 クビエロ床屋…………… 奥山 綿策 (181)

女とふんどし 文子の場合…………… 海野三津男 (191)

連載小説「花と蛇」(続前第五十八回)…………… 団 鬼六 (194)

団先生へお願い…………… 香美山仙逸 (207)

白昼夢 「演習拷問」…………… 風流極道軒 (218)

懸賞創作 被験者屈伏へ魅鬼館(上)▽…………… 高杉 慈郎 (218)

読者通信…………… 編集部選 (231)

(目次カット「装身具売場」…………… 日本 武士)

(扉カット「薔薇の青春」…………… 室井亜砂路)

【最新緊縛資料写真一覽】

梁からの両手吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろふ)

床柱に宙吊り縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろふ)

開股股間縛り正面

大手札二枚一組 三〇〇円
山原 清子 略号(ろは)

二女連縛責模様組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(ろそ)

二女連縛煩悶場面組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(ろひ)

股間縛り刺青競艶

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろき)

股間縛り正面妖美表情

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろす)

喰込む股間縛りの縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろせ)

手足宙吊り

大手札三枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(つた)

オムツの股間縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(ひく)

強烈責、被虐の果

大手札五枚一組 八〇〇円
梨花悠紀子 略号(りお)

乳房 いじめ

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(とお)

激痛ノ逆エビ責め

大手札四枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(きえ)

美貌の裸身に縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
堀川 文代 略号(きん)

腰元吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
村井知可子 略号(こり)

腰元間腰の拷問

大手札四枚一組 六〇〇円
村井知可子 略号(こく)

椅子エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(おき)

六尺縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(ろは)

弓吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号(つき)

組われた和装の娘

大手札十二枚一組 二〇〇〇円
愛川 悦子 略号(ねい)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(えひ)

ゴム衣緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(みす)

抓ねりと擦ぐり責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚・東浦・木村 略号(きし)

バンド責め

大手札五枚一組 八〇〇円
東浦ひかる 略号(はん)

夫人の表情

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(せや)

後手吊り足挙縛り

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うら)

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うり)

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うる)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(えり)

鼻の穴責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大手 啓子 略号(なく)

鼻なぶり

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ない)

鼻責めの陶酔

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(なは)

完全逆さ吊りフオート

大判判三枚一組 一五〇〇円
木村 洋子 略号(さつり)

両足首括り逆さ吊り

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さか)

逆さ吊り女体折檻

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(させ)

手足逆滑車宙吊り

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さと)

啓子をいじめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(うの)

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(うな)

山原を責める大塚

大手札八枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(うね)

逆さ吊り正面と背面

大手札二枚一組 四〇〇円
増田みゆき 略号(つる)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(たく)

乳房責め五態

大手札五枚一組 七〇〇円
山原 清子 略号(てら)

全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号(いね)

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 44 年 11 月 号

(1969年・11月号<第23巻第12号・通刊第259号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
として編集しておりますが、青少年の保護
育成に関する条例には抵触しないよう、十
分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
載した文章は十二分に検討を加え、いやし
くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
めの努力はいたしません。



1

「性的不一致——と書いてありますが……」

初老の調停員は、眼鏡を額へ持ち上げ、書類を見たまま言った。

「具体的には、どういうことなですか。」

こういう言葉が、最近どうも安直に使われ過ぎていて、どうも……それが本質的に離婚の理由になるか、どうか……」

まるで額が眼鏡をかけて物を言っているようだ。中央部まで禿げ上ったラッキョウ型の

ある男の宿命

鎖 され た 夜

麒 田 欧 二

頭が、答を催促するように、眼の前に突き出されているのを凝視めながら、彼はこんな場所へ来たことを後悔していた。

こうした人種には、所詮、何も判りはしないのだ。連中が常用する紋切型の規格で解決されるような問題は、よほど愚かな人間同志のトラブルか、もともと問題にするほどの価値もないものだろう。

調停員は相変わらず書類に視線を落としたまま、彼の方は見ようとしてもしないで続けた。「ま、何かとプライバシーに触れることでも

あり、話にくいでしょうが、さしつかえなかったら、もう少し委しく聞かせてくれませんか」

いったい何を委しく話せというのだろうか。話せば、そのまま信じてくれるとでもいうのか。それとも、聞くだけ聞いた上で、おもむろに得意の説論にかかろうというのか。彼はただ、なろうことなら自分も妻も傷つかず、円満に別れたいと思っただけだ。別れること——それだけが、彼にとっても妻にとっても、さらに調停員にとっても、たった一つ

の解決方法であることを知っている。それ以外の総ての方法が無意味なことも。

へやっぱり、俺にとっては場違いだったな」

彼は憂鬱になって、周囲を見回した。

来訪者の湿った気持を少しでも和らげようという心くばりからか、壁も天井も明るく彩られ、丹念に磨かれた窓から射し込む午後之光線が部屋いっぱいに溢れていた。

彼と調停員が対座している大きなデスクの上には、ヨーロッパ風の花瓶が置いてあったが、何という花か、鼻先に漂うひどく甘ったるい香りが、奇妙に彼を苛々させた。

「ぼくには、男女の性生活が、生理的に不可能なんです」

突然、投げやりな調子で彼が言った。

同時に、調停員の俯向けた貌に、ある種の表情が浮かぶのを彼は見た。多分、勝手な想像をしているのだろう。彼は苦笑して、つけ加えた。

「といって、ホモじゃありませんよ」

びっくりしたように、相手の顔が上った。

日頃から耳にするのも、うとましいような言葉を、しごく無造作に吐き出す若い男に対する嫌悪と、自分の中の狼狽とが、はっきり顔を隈どっていった。

家庭は中流で妻は賢夫人。上の息子は東大進学、の悲願を負わされて机へしがみつきの、齡をとってから生まれた下の子はまだ小学生。

近所の評判では謹厳実直な知識人である以上に恐妻家の噂が高い——そういった類型に属するこの初老の調停員は、しかし気弱そうにすぐ視線を落とした。

「ぼくは、妻を含めて女性、男性の区別なく他人と接触することが、苦痛なんです」

「理解できません」

「ぼく自身にも判らないんです。だから一度は結婚する気にもなりました。でも、結婚してみても、いっそう、それがどうにもならないことを知ったんです」

「あんまり、例のない話ですな」

調停員は、独り言のようにいった。

「要するに、一種のアレルギーのように、あなたの体質が他人を寄せつけない、ということですか」

「現象的には、そういうことになりますね」

調停員は、処置なしという風に、首を振りしばらく口を噤んだ。

やがて、咽喉の奥から無理に押し出すような声で「ところで」と言った。

「からだの……いや、性的な……その、欲望

の方は……」

今度はおれを不能者にしようというんだな——彼は危うく吹き出すところだった。

それにしても、なぜ素直に「性欲」と言えないんだ。彼は、ちょっと意地の悪い気持になっっていた。

「それはもう……人並というか、正常だと思えます。というのは、少なくとも一日に一回は——処理の必要を感じるくらいですから」

こうした答え方は、明らかに相手にショックを与えたようだったが、もはや先刻からの茶番めいた対話の結果を期待していない彼にとっては、一種の気晴しにはなった。

これを境に、主客は顛倒したかたちになり調停員の方が、取調べ室に閉じこめられた犯人のように、目に見えて落着きを失っていった。

「すると、つまり……欲望は存在するが、それが……何というか、その……正常な状態では起こらない、と……」

その声は、殆ど呟くようにしか聞こえなかった。この期に到って調停員を支えているのは、職務に対する執念にも似た義務感だけだったろう。尊厳と良識に裏打ちされた職務の上からも、とにかく何かを喋らなければなら

なかったのだ。

「それは、変態性欲者という意味ですか」

彼は、わざと、相手が避けている言葉を使った。

「常識的な考え方からすれば、多分、そうでしょう」

「困りましたな。何分、こんなことは初めてなんで……。夫が正常でないから離婚したいと妻が申し出るケースはありますが、その……妻が同意しないのに、夫の方から……」

「それは、まだあなたに充分、理解していただけないからです」

もともと彼は、相手に理解してもらおうとは思ってもしなかった。しかし、調停員も執拗だった。誇り高い職務への忠実さが、決しておめおめと退きさがることを許さなかったのだ。

「それでは、私が納得できるように、話してもらえますか」

「ええ、結構です」

彼はこの時、一種の嗜虐的な衝動が血を熱くするのを感じた。

この天使のような初老の男が、自分の話の内容に、どんな反応を示し、どんな表情をするか、見たいと思った。

彼は、相手を納得させるに足る「具体的」な物語を始めた。

2

自分の存在に対する不安と恐怖——それがぼくの心をとらえて離れなくなったのは、小学校を卒業する頃でした。誰にも同じような経験はあると思いますが、それは死の予感とでもいうべきものでした。

夜、寝床にはいって灯を消したあとの闇と静寂が、生命への不安と死への恐怖で、ぼくの心臓を締めつけるのです。漆を流したような黒一色の空間がぼくを呑み込み、翌日、目を醒ますと、姿も形もなくなっているのではないかという一種の強迫観念にとりつかれたぼくは、全身を石のようにして一生懸命、眠ろうと努力する。そうすると今度は、このまま深い眠りに落ちたが最後、本当の石になって永久に目醒めないのではないかという恐怖がぼくの心臓を冷たくするのです。しかも、この無限の暗黒の中で、それを否定しうる確かなものは何一つありません。

ぼくは、この底知れない闇黒の中で、何か縋るべきもの、確かなものを求めました。ぼくの両手は、あてもなく、しかし必死に空間

をさまよい、どんな僅かなものでもいい、自分の存在を証拠づけるもの、生命の証明となるものを求め続け、しまいに疲れきって、泥のように眠るのでした。

こんな夜が、どのくらい続いたでしょう。ところが、とうとうぼくの手は、あるものを探りあてました。それはほんとにちっぽけな頼りなげなカタマリに過ぎませんでした。しかし、その弱々しい小さなものは、暗闇の中で、はっきりと生命を持っていました。ぼくの疑問に対して、それはやさしく息づき、含羞むように応えてくるのです。しかもおどろいたことに、その微かな生き物は徐々に確固たる力強さを加えてゆくのがわかりました。それは信じられないほど、脈々とぼくに語りかけ、力づけてくれるのでした。

その生き生きとした充実感——これこそ、ぼくの生命の証明でした。どんな底深い闇の中でも、それは脈動していました。ぼくは毎夜その充実感をしっかりと受けとめてから、安らかな眠りに落ちてゆくようになりました。暗黒の恐怖と不安が、ふたたびぼくを襲うことはなくなりました。

ぼくが自慰をおぼえたのは、そんなわけで普通の少年より何年か早かったと思います。

一瞬の感動、甘美な恍惚が、みずからの存在を確かめ、生命を充実させる唯一の手段であることを知ってからのぼくは、この閉鎖的なしかも灼けるような烈しい悦楽の密室に自分を閉じこめました。

青年期になっても、夜の生活に関する限りぼくには何の変化もありませんでした。学生時代を経て現代の職に就きましたが、その間いかなる形においても異性に欲望を感じたことはなく、そればかりか、教室に居ても職場に居ても、ぼくの頭を離れないのは、一刻も早く独りになり、自分だけの世界に閉じこもりたいという熱い欲望だけでした。

会社と自宅を、僅かな時間のロスも許さず忠実に往復するだけのぼくは、だから滑稽なことに、極く常識的な第三者から「堅物」と呼ばれました。結婚という、全く予期もしなかった事態にぼくが追い込まれる羽目になったのも、多分、こうした無責任な周囲の独断が理由になっていたのでしょう。

結婚——それはまさに青天の霹靂でした。ぼくにとって、これまで謂わば別の世界の出来事としてしか意味をもたなかった言葉が、突然、白日のもとに突きつけられたのです。客観的には、相手が美人であることも、また

それ以上に、上役の娘を妻にすることがぼくの将来にとってどんな意味をもっているかということも、むろん知らないわけではなく、それだけに、周囲を取巻く羨望と嫉妬の眼中で、なすべき術を失ったのです。

にもかかわらず、ぼくが結婚した理由については、自分でもはっきりとはいえません。断わるのが恥かしかつたから、と言ったら、笑われるでしょうか。第一、確固たる理由もなしに断わる権利なんか、ぼくにはないように思われたのです。ただ言えることは、ぼくにとって、相手が上役の娘であろうが、それ以外の誰であろうが、結局、断われなかったに違いないということでは、結果は同じだったと思います。

3

相手に対するどんな欲望も存在しない結婚生活というものが想像できますか。といって妻はむろん夫婦の営みについても一応の知識は持っていたし、それなりに、ぼくから与えられ求められることを期待していたのは当然でしょう。が、ぼくはといえば、妻の唇や肉体に触れたいという欲望が全く起こって来ないばかりか、妻という共同生活者の介在で、

あれほど永い間、大事にして来た自分一人の世界まで奪われてしまったのです。

夫婦となった以上、妻に対して何かしなければいけないという義務感に迫られて、ぼくは生まれてはじめて、女のからだというものに触れました。しかし、その重く湿ったような、奇妙な温さと柔らかさを感じた途端、ぼくの全身の膚が栗立ちました。ぼくの中で、義務感と嫌悪感との猛烈な争いが続き、どうやらそれに耐えたぼくは、不快な食物を無理矢理、嚥み下す時のように、目の前に突き出されている紅い唇を、荒々しく啜えました。妻が微かに呻き、身を跳くのがわかりましたが、ここまでは、ぼくの忍耐の限度でした。予定された順序で、ぼくの指先が、妻の手でリードされた時、ぼくの四肢を電流に似た戦慄が走り、反射的に彼女を突き離してしまいました。どうにも我慢できなかったのです。

ぼくの敏感な手は、自分の皮膚以外のものに、接触することに馴らされていなかったのです。あるいは、繰り返す努力する間に馴れるかもしれないという淡い期待も忽ち失望に変わりました。しまいに、その行為を予想したり想像するだけで、全身が鳥肌となり、ぼくの手は自由を失うのです。

やがて妻は、軽度の神経衰弱を示し、ぼく自身も、このままの生活が続けていたら、遠からず気が狂うんじゃないかと思いました。で、ある日、自分の過去などについて、正直に打ち明けました。

「とにかく、ぼくたちがこれ以上、夫婦生活が続けるのは、賢明なこととは思えない。といって、決して君が嫌いなわけじゃない。ただ、ぼくの因果な生理のために、二人ながら不幸にならなければならない理由は少しもないんだ。今日まで君も辛かったろうけど、ぼくも努力してきた。しかし、もうどうしようもないと思うんだが……」

妻は終始、俯向いて聞いていました。結婚して三カ月、肉体的には完全に処女である彼女は、ぼくの予想に反して、涙こそ浮かべていましたが、笑顔でぼくを見上げました。「真実を言っていただけで嬉しいわ。ずいぶん苦しかったでしょう。わたしも辛かったけれど、きつと、あなた程じゃないと思うの。でも、わたしは別れる必要なんてないわ。理由さえ判れば解決の道だってあると思うし何よりも、わたし、あなたを愛しているんですもの。もう少し時間をかけてみましょう。わたしも我慢します。あなたは、結婚前と同

じにしてくださってよろしいの。わたしが居ないと思えばいいんです。だから、別れるなんてだけは言わないで」

それからの彼女は積極的でした。夫婦間の障害を取り除く方法を見つけるために、新聞雑誌の相談欄から、さらに縁故をもとめて医師や精神分析学者まで訪ね廻り、かれらから与えられる僅かな——むしろ無責任な——助言やヒントを頼りにして、ぼくを「正常」な夫に改造するための努力を惜しみませんでした。しかし、こうしたことに彼女が異常な熱意を示せば示すほど、ぼくには煩わしさと嫌悪感がつのるばかりでした。

ぼくの手が、妻の肉体に反発するだけではなく、ぼくの肌もまた、馴れ親しんだ自分の手よりは、はるかに柔らかく優しい筈の彼女の手にちよつとでも触れられようものなら、どうにもならない悪寒に毛孔が粟立つのです。「やっぱ無理だよ。ぼくたちは、これ以上どうにもならないんだ」

「いいえ、わたしは諦めません。わたしたちは夫婦なんですから」

「だって、君」

「別れるのは、絶対いやです」

妻は頑として、離婚を拒否し続けました。

これは、ぼくにとっては意外でした。ぼくの正体を知れば、彼女の方から離婚を宣言するか、愛想を尽かして出て行くものと信じていました。しかし、この期待は、みごとに裏切られ、ぼくたちは、その間にも奇妙な夫婦生活を繰り返していたのです。

ぼくと妻は、一つベッドに、出来るだけ離れて背中を向け合ったまま、彼女は少女時代に習い覚えた方法で、ぼくはぼくの、あの習慣れた仕方、それぞれ別に、自分の欲望を満たしていたのです。

ぼくの掌は、ぼくの肌に触れ得る唯一の存在である喜びに頼り、ぼくの肌は、自分をいちばん熟知しているたった一つの掌に触れる時にだけ、やさしく応えるのです。

へ何という素晴らしい肌触りだろう。死ぬまで離したくない」と、その掌は思い、その下にある肌はへ何という優しい愛撫だろう。死ぬまで触れられていたい」と思う、この感覚の相乗作用が一つの波となってリビドーを昂めぼくを忘我の世界へ導くのです。——この時ぼくは、妻を含めた他の一切のものから完全に自分を隔離し一人の世界を取り戻します。ゆっくりとした足取りで恍惚の波が去り、ぼくの中に静寂が戻ると、そこには否定しよ

うもない現実が待ちうけていて、ぼくを一挙に絶望の谷底へ突き落とすのです。ぼくの直ぐ近くに厳然と存在する一個の女体が、容赦なく、ぼくが妻を持つ夫であることを思い出させるのです。

ぼくが安らかな眠りにつくまで、身も心も包みこんで、魂まで虹色に染めた一人だけの世界は、妻を持つことによって破壊され、ふたたび戻っては来ませんでした。

ぼくは、妻が待つ家へ帰るのが、死ぬほどの苦痛になりました。

ちょうどこの頃——そう、結婚して半年くらい経ったある夜、偶然のことから、ぼくは同性のそれを知る機会に行き当たったのです。

4

むろん、たった一度の経験でした。

会社の先輩に強いられるままに、常になく飲み歩いたぼくは、殆ど前後不覚になって新宿辺の薄汚れたホテルへ連れ込まれました。

幹部社員以外では最古参の彼が、永い間かぶり続けて来た仮面を、この時はじめて脱ぎ捨てたのです。

「わかっていたんだ」

だしぬけにそう言うと、彼は愉快そうに笑

いました。ぼくは彼に抱きかかえられたまましかし頭だけが奇妙に冴えていました。

「何が、です」

「君が結婚したって、うまく行くはずがないってことさ」

「どうしてですか」

ぼくの視界で、壁やカーテンや、派手な毛布を掛けたベッドが、ぐるぐる廻っていました。

「つまり、君には、ある種の素質があるということだ」

「素質——」

「まあ、いい。しかし今夜は愉快だ」

彼は底抜けに上機嫌で、ぼくを抱えたままどっかりとベッドに腰をかけました。

「はじめて君が入社した時から、俺には予感がした。君が生理的、体質的に、そうじゃないか、という想像は、しかし君があっさり結婚したことで裏切られた。実は内心がっかりしてたんだが、やっぱり俺の目に狂いはなかった。君に、女との夫婦生活が出来るわけがない」

彼は、殆ど一人で喋り続けました。というより、ぼくにはもう口をきく気力もなかったのです。もともと酒に自信のなかったぼくは

彼に引き廻されているうちに、酔いが全身のたがをはずし、坐った途端に、身動きも出来なくなっていたんです。そればかりか、胃袋が引き裂かれるように痙攣し、どろどろとした不快感が咽喉へ突き上げて来るのを耐えるのが精一杯の状態でした。

「君とぼくとは、きつとうまく行くと思う」彼の酔った顔が、赤鬼のように迫って来た時も、だからぼくは、

「少し横になりたいんです。ひどく酔ってしまっただけ」

それだけ言うのが、やっとだったのです。

「けっこう、けっこう。楽にした方がいい」

彼は、くらげのようなぼくのからだから、上着もズボンも脱がせると、ベッドに仰向けに寝かせました。ぼくは堪えられなくなって目を閉じましたが、その目蓋の裏でも、火のような酔いが渦を巻いていました。

ぼくの耳許で、彼が頻りに何か喋っているのがわかりましたが、ぼくは何よりも現在の苦しみから少しでも早く解放されることだけを考えていたのです。

自分では眠った記憶がないのに、気がついてみると、ぼくは裸でベッドに俯伏せ、彼の掌が、ぼくの背中の上で動いていました。彼

の動作は、ぼくを親切に介抱しているようにも、それ以外の目的があるようにも受け取れました。いつの間にか彼も裸だったのです。

やがて彼の掌が、ぼくの背骨に添って滑るのがわかりました。同時に、はずんだ声が足の方から聞こえました。

「何てきれいなからだをしてるんだ」

さらに何か言うのが聞こえましたが、彼の声は乱れ、にわかに熱っぽくなりました。と突如、不思議な感覚が、ぼくの全身を硬直させたのです。それは、ぼくが今まで一度も経験したことのない未知の感覚でした。しばらくは呼吸することも忘れていたぼくは、それが彼の唇だと気がついた時、気の遠くなるような羞恥に襲われました。ぼくは渾身の努力でからだを反転させようとしたが、徒勞でした。ぼくの全身は、麻痺したように、凡ての力を失っていたのです。

「頼む。止してくれませんか」

震える声で哀願していましたが、多分、彼の耳にははいらなかったのでしょう。

ぼくに対して彼が行なっている行為そのものに、ぼくは特別な不快感や嫌悪を感じたわけではありません。だからといって、快感などでも無論なく、要するに感覚は問題外だっ

たのです。ただ、ぼくは、自分がとらされている無様な姿勢を想像することが、死ぬほど恥かしかったのです。

「いやだ。やめてくれ」

今度は、大声で叫びかけました。が、それと同時に、からだの内部で、地割れのような痙攣が起こり、それは煮え立ち、波うって咽喉を突き上げて来ました。おそろべき分量の粘液物質が、溶岩のようにぼくの口から噴き出し、シーツの上を忽ち泥沼にしました。しかも、それは絶続的な地鳴りとともに、あとからあとから進み、ぼくはその生ぬるい泥沼の中に顔を埋めたまま、底のない混濁の闇に陥ちて行く自分を感じていました。

再び意識を取り戻した時、ぼくは彼と寝ていたのです。

彼の顔が、驚くほど目近にありました。

「酔いは醒めたかね」

熱い息が、ぼくの顔にかかります。

「わからない」

ほんとうにぼくは、自分がまだ酔っているのか、それとも完全に酔いからも眠りからも覚めているのか、判らなかつたのです。

しかし、全身の感覚が蘇えるにつれて、ぼくは紛れもなく目覚めていること、しかも彼

によって新しい状態に置かれていることを知らされました。それは、ぼくの感覚を、それも背後に回わされた彼の手がぼくの感覚を侵している奇妙な異物感です。

「俺はいま」と彼が言いました。「君の感覚に、何を教えているかね」

それ自体は特別の苦痛を与えるものではなかつたけれど、経験しなれない感覚が、ぼくを戸惑わせました。

「さあ、何を君に教えるか、言ってみ給え」

「わからない」

ぼくは弱々しく、そう応えるよりほか仕方がなかつたのです。

「やがて判るさ。君はいま、開発途上にあるんだ。ぼくが花を咲かせてやる」

「開発？」

「そうだ。性はみずから開発すべきもの、というのが俺の持論だ。だが、誤解を招かないように断っておくが、俺は単なるペダラスティじゃない。それも謂わば、俺のレパートリーのひとつということだ。といっても、これだけじゃ納得がゆくまいから、少し説明しようか。たとえば、あのホモというやつだ——」

彼は、突如として、止まるところを知らない大演説を、こともあろうに、ぼくを捕えた

ままで始めたのです。

5

世の中には、自ら呪われた星の下に生まれた疎外者だの、日蔭に咲いた変種だの、中には第三の性なんていう耳触りのいい言葉を作って、奇妙に深刻がったり、感傷的なコンプレックスに生温く浸っているかと思えば、逆に自虐的なエリート意識に思い上っている連中があるが、これほど鼻もちならぬ滑稽なことはないし、ナンセンスだよ。かれらは十字架を背負っているのでも何でもない。おれにいわせれば、無知なだけだ。

もともと、セックスなんてものは、そんな陰気な、じめじめしたものじゃない、もっとカラッとしたものだ。

フロイトやクラフト、エビングが何と言おうと、性を解決するのは医学や精神分析じゃなく、知恵だ。知恵の支配下に置くことによって、性は全きものとなる。例えば、われわれは女に接吻したり、乳房を愛撫したりするが、それは唇や乳房が性感帯であることを、経験的知識として持っているからだ。もともと、唇にしろ、乳房にしろ、性器ではない。だが、性器自体にしても、思春期以前には単

なる排泄器官に過ぎなかったのだ。

現に君のからだの一部を考えてみたまえ。慥かにここも、現時点では単なる排泄口に過ぎない。これを処女地のまま放置しておいたら、永久に即物的な部位として終わってしまうだろう。しかし、人間のもっている凡ゆる部分は、そこに意識的、積極的な開発を行なうことによって、その努力の度合に応じて、全く新しい感覚帯としての機能を具えることが出来るのだ。それは恰度、人跡未踏の荒野を開墾して、肥沃な農耕地に変え、そこから地上の幸を刈り取るのに似ている。人間の肉体は無限の可能性を内蔵した性の宝庫であり、それを開発し、新しい性感帯を次々と発見し、かつ最高度を利用することは、知恵によってのみ可能なのだ。

人間の知恵は、まず「性を愉しむ」ことを覚え、「性を考える」ことを会得し、「性を創造する」能力を持ったのだ。ここで断っておきたいのは、生殖という問題は、この場合論外だ。いわゆる性的なものと、生殖とは何の関係もなく、これを混同すると、誤りをおかすことになるからね。セックスといえば、生殖しか考えない人間など、今時いやしないだろう。そこが、人間と他の動物の違うところだ。

ろだ。人間以外の動物には、性と生殖の区別がない。だから、セックスとは男女の慣習的交合だけと信じ込んでいる人間が居たら、それは動物の無知と動物的本能しか持ち合わせない哀れむべき人種だ。そういう考え方は、われわれだけに与えられた知恵を否定する人間性への逆行にはかならない。

さて、人間は、その知恵の教えるところに従って、自ら「性を創り出す」と言ったが、元来食物の入口である唇や、母乳の排出部である乳房から、新しい感覚を創り出したのと同じに、性器以外の凡ゆる部位、耳であれ、鼻孔であれ、腋の下であれ、足指の股であれそれが性の創造に役立つものであれば、忌避する理由は何もない。どれを選ぶかは、その人間の自由であり、選択の基準となるのは、個人個人がそれによって与えられる快感の量と質だけだ。食べ物を選ぶのだって、個人の味覚と、それを教えた知恵がするのだ。

ところで、性器以外による性行為は変態だと、よく言われる。性器とは、生殖にたずさわる器官の意味だろう。むろん、生殖という目的しか持たない性行為には、性器以外に何の意味もないにちがいない。しかし、接吻という性行為が、性器以外の部位で行なわれ、

生殖に直接関与しないからといって、変態と呼ぶだろうか。それとも、接吻を性行為とは言わないのだろうか。しかし、接吻だけで充分性的満足を得る場合もあることからすれば独立した性行為ということが出来る。変態という言葉は、性行為を生殖に従属するものとしてのみ考えるところに由来している。だから性が生殖の継^{きずな}を断ち、自由を獲得したのちには、ノーマルもアブノーマルもない。生殖を離れれば、凡ゆる器官が性器となり得る。男女生殖器官の相対関係だけに縛られていた性は、複雑多岐なバリエーションを生み、それには附随した豊富な性感を創り出すのだ。性には本来、正常も変態も存在しない代りに無知と知恵があるだけだ。一般に正常と考えられている人間が実は無知であるのと同様、自分自身正常でないと思っっている連中、たとえばホモだが、かれらもまた別の半面での無知であり、どちらもセックスの片輪なんだ。

男女の性生活の当然の帰結ともいべき浮気——意識しようとしまいと、それは確かに一種の新しい感覚、未知なる刺激への志向であり、これは、同じことの繰り返し、単一な感覚から脱け出そうとする極めて自然な欲求にはかならない。

だが、すべての性生活が単純な公式を脱却して、もっと多様な、複雑な変化を持ったものとしたら、どうだろう。あらゆる器官を動員し、それを多角的に組み合わせることによって、どれほど多くの種類の性感が生み出されるか、君は想像したことがあるかい。考える性生活、創造される性生活は、こうした無知による同じことの繰り返しから必然的に起こる倦怠を防ぎ、ひいては浮気や、それに附随するトラブルを未然に抑制する利点も持っているというわけだ。

人間は誰でも、自らの性の条件を、それも明確な理性のもとに選ぶべきだ。だから、俺が仮りに、同性を性的に愛撫し、あるいはそれによって愛撫されることを望んだとしてもこの場合、俺は肉体的にも精神的にもそういう欲求しか起こらないからではなく、少なくともそれが、単純な女相手のそれより快感が大きいという理由のためであって、両者を冷静に比較することによって、理性自らが選んだものなんだ。だから、こうした現象的な行為だけで、俺を同性愛者とか男色者と呼ぶのは間違っているわけだ。

生殖以外の性行為に、変態も常態もないとさっき言ったが、さらに同性^{ホモ}とか異性^{クナール}の区別

も全く無意味なんだ。男だの女だのという小さな世界を超越して、純粹に知恵だけを頼りに、凡ゆる可能性を追求するところに、性の本当の姿がある、と俺は思っている。

ところで、君と奥さんとの夫婦生活は少なくとも満足すべきものではなかった。が、だからといって、失望したり落胆したりする必要は聊かもない。性の世界は広大なんだ。君は、君の肉体の中に新しい可能性を探し、それを開発すればいいのだ。及ばずながら、おれが水先案内をしよう。

さあ、もう一度試してみたまえ。君は戸惑っているようだが、それはただ馴れていないだけのことなんだ」

この長い演説に続いて、ぼくは二度、裂かれるような激痛を感じて叫びました。

それだけでした。彼の雄弁も、熱心な努力も、遂にぼくの閉鎖した肉体を開発することは出来なかったのです。

ぼくは、男にも女にも絶望したんです。ぼく自身だけが、ぼくにとっての唯一の伴侶なんです。ぼくの希うのは、ただ一人で居ることだけです。これでも、離婚の理由にならないでしょうか。

「これで、納得してもらえましたか」
「……」

調停員は、全く身動きもしなかった。

願望抑圧による

一夜の憤夢



落ち着きを欠いている。どうして怯える。何をそのようにうろたえる。主人が久しぶりに衣服を脱ぎ捨て、完全に自由な気分になったことが、それほどまでにお前の精神を不愉快にいらだたせるというのか。いまだに直ら

埒輪みたいな虚な瞳は、もう何も見ていないにちがいない。意志を失った上下の唇は、ぼっかりと暗い洞穴をひらき、その入口に、長い灰を作って消えた紙巻タバコがひっかかっている。

赤 い 月

仙 光 宇

ない自己中心的であからさまな傲慢。お前のために、今まで長く貴重な時間をお前は失ってきた。もはやお前を許すことができない。堪忍の緒は切れた。お前は断固としてお前を裁く。今日は、権力を背にした昨日のように

彼は、相手の返事を待たず立ち上った。

今しがたまで窓越しに見えていた碧空は、いちめんの茜色に変わり、恰で魔法で石にされてしまったような初老の男の横顔を、血の色に染めていた。

—(完)—

ことの運ばないことぐらい、おれが口からつばを飛ばさずともわかるはずなのに。

お前は、奴隷である自分を、忘れているわけではなからう。お前の立つことも坐ることも、命令するのはこのおれだ。おれはお前の主人である。そのお前のふてくされた顔は、おれの血を熱くする。よろしい、もっと楯突くがよい。奴隷のたしなみを忘れたその罰がどんなものか、しかと覚えさしてやろうじゃないか。百の鞭打ちなどものの数ではない。お前の下肢は、あの青白い天井めがけて突き立つのだ。やがて骸骨どもの夜祭りのざわめきを聞くだろう。その時、お前の下肢が裂けるような痛みの中で、お前は女であることを傲慢であったことと共に後悔するのだ。

さあ、おれの奴隷にまきつく強いおのこたちよ。元気よく駆け上がり、闇を切り裂くのだ。手加減は一切、必要ではない。世界中のもっとも鋭い刃をよりすぐり、見事にしとげるのだ！ おお、そうだ。全く、首尾よい。君たちは実にすばしっこく器用である。奴隷

は完全に地上から断絶されながら、あまりの一瞬の出来事に、おのれの身におこったことを理解していない。もっと引き絞れ。君たちも憎かろう。君たちを顎であしらい鼻で嘲った女が、この奴隷だ。多大の収益をおれから搾取していながら、赤字であるとシラを切りおれの人間性を無視して、勝手な理屈のもとに主人を操っていた女がこの奴隷なのだ。遠慮などすることはない。

さあ、間髪を入れずに掛かりたまえ。次はグリセリン氏、君の出番だ。そう、君の待ちに待った独壇場が、いま訪れたのだ。ことの成否は君の微妙なふるまいにかかっている。君がこの女の主張する偽善論にたぶらかされている間に、多くの貧しい者たちが、精神的にまで益々貧しくなったのだ。君はここでその償いをさせる必要がある。でもグリセリン氏よ、おれは少しも煩うことがなさそうだ。君は、いつも心得ている。諸君、見たまえ、奴隷のものがきを。これは君がいかに素晴らしい名手であるかを示す、なによりの証拠だ。きみは「これでもか、これでもか」といわんばかりに妙技を揮う。そして君は、ぼくの笑い声に耳をふさぐだろう。

強いおのこたちよ、もがく奴隷をがんじがらめにおさえろ。奴隷の行為には未だかつて真実が含まれていたらめしはない。「苦しい許して」と叫ぶ。ありとあらゆる慈悲の言葉

をかき集める。それは皆、いつわりである。でも、その口をふさぐために手古摺ることはなく、百の鞭打ちで十分である。ほら、見ろわずか二十の鞭打ちで奴隷の顔から苦痛などどこにも見つけ出すことができなかった。一皮をむけば、こうである。奴隷はこんなにも上気し、こんなにも陶酔に浸っていたのにのどもとをしめつけられた豚のように、口から出まかせをいっていたのである。どんなにおれをいつわろうと目先きを変えようとも、もうその手には乗りはしない。鞭君よ、空を切って躍動したまえ。奴隷の肌に黒く醜い傷をつくり、二度と宝石をちりばめたイブニング・ドレスなどを着けられないようにするのだ。とりかえしのつかないこの日を記念する跡を刻み込むのだ。

煮えたつ蠟君よ、奴隷の肉を焼きたまえ。水君よ、四方の壁から噴き出る摂氏零度の水君よ、奴隷の肉を氷と変えてやれ。奴隷は人間などではないのだ。奴隷は奴隷。そうだ、奴隷よ、お前は世界から見捨てられたのだ。お前がいかに助けを求めても、誰一人としてやってくることはない。そのことを、よく考えろ。お前がてなずけていたと思っていたみながみな、お前にそっぽを向いているのだ。泣くがよい。涙がおれを押し流したその時に、お前は解放される。どうした。ちっとも涙は流れをつくらない。流れをつくらずに、

どうして眉をひそめ口を開く。ああ、そうかわかった。排出したいのか。自分の羞恥による遠慮など、奴隷にふさわしいことでない。奴隷は犬畜生だ。自制することはできないしする必要もない。完全に奴隷になり切っていないから許しが欲しくなるのだ。よろしい。主人であるおれが、奴隷であるお前に特別に許しを与えよう。安心してやれ。そのように固くなくても無駄だ。耐えようとしても耐えられるものか。ほら……だから、いわぬことではない。

どうだ、爽快な気分だろうか？ 自らのものによって自らを清めるということは……諸君、見たまえ。これが、かつて数千人の聴衆を集めては、壇上で片腕をふりまわし、べからず集こそ正義だとして、我々のささやかな主張を押し潰そうと演説していた、美德の権化と名のる化物の姿だ。

そうだ、われわれは奴隷に見とれてはならない。奴隷に、人間として忘れていられるものと思ひ出させてやろう。まず、この清められた身体を、さらに清めてあげようではないか。強いおのこたちよ、一旦奴隷を地上に帰還させるのだ。急いでだ。一息を入れたら、すぐに又、そこへ戻そう。そして奴隷の髪を、顔を、胸を、足を一層、念入りに洗い清めるのだ。美德という名の肌を、ダイヤモンドに劣らず磨きたててみようではないか。その下か

ら何が顔を出すか楽しみだ。奴隷は、ことさらに、その仮面に隠れながら、相手の責任による襲撃を受けることが好きである。

よし、験してみたまえ。ぐずぐずさせずに四つん這いにしろ。奴隷よ、床をなめろ。足を広げろ。尻を、もっと持ち上げろ。そうだといい。さあ、這え。尻をふることを忘れるな。もっとだ。よし、ご気嫌だ。立ち止まるなよ。さて、小道具係君、奴隷の両足に鎖のついた枷を取りつけてみたまえ。よおーし。これでいい。奴隷よ、続ける。前よりも景気よくやれ。尻をふれ。進め。止まるな。たかが四十二センチの深さもないプールではないか。それも、長さは五メートルだ。枷を引きずり、自分がいかに罪多い女であるかをしかと知り、その重さを記憶するのだ。そうだ。犬や豚が水を切って進む様にやるのだ。いい調子だ。ほら、あと一メートルだ。道具係君、奴隷の足枷を乱暴に取りはずしてやってくれたまえ。よし、それでいい。

さあ、奴隷よ。主人の前まで、さらに這ってこい。もっと近くだ。おれがお前をどんなに好意を持って尊重しようとしていたか、そしてそれが如何に大きな犠牲だったかを知らせてあげよう。押し込められていた助手君たちよ、出て来たまえ。奴隷を台の上に押しこめるのだ。そうだ、そしてその両手を、頭の上で一つにまとめて台の脚にくくりつける

のだ。次は分別も忘れてバタバタする脚を、身体の上に折り曲げて乳房の根元に縛りつけるのだ。それでいい。助手君たちよ、よく見たまえよ。この奴隷は、君たちには不徳として禁じていながら、おのれは甘いキャンディを好み、仔猫にじゃれつくのもそれと同じ位に好きなのだ。もちろん、じゃれつかれるほうが更に好きである。だから、こうして縛りつけられた上でじゃれつかれると、逃れるすべはなしとして、むせぶほどの歓びの声を発するであろう。ラベルがオオケストラを魔力にかけてつくった『ボレロ』が、うねうねと聴衆を感動に誘い込むように、仮面にしがみついた奴隷の内にひた隠しされている、あらゆる本性を引きずり出してやりたまえ。

おれを含めた全部をバカにし、鼻で嘲笑ってきた、そのひとつひとつに対し、おのれの本性を偽ってきたことを拷問にかけても自白させるのだ。「悪徳なんぞは、この世にはなかった。あるといったのは、わたしの全くの偽善だった」と。そして、奴隷に我々のいう拷問のもつ甘さをキャンディと比較させよう。きつと自ら偽善を悔ゆるだろう。それから、一転して引き上げるのだ。

吹きあがる火柱のように激しく引き上げるのだ。まだ、足りはしない。引き上げたまえもっと高く引き上げたまえ。でも、ぶつことを忘れてはいけない。何で奴隷もどきに陶酔

の境地を与えられようか。天国の門に、いま一步のところまで地獄へたたき落とせ。

何という未練な、無作法な声を響かす奴隷だろうか。助手君たちよ、カミソリをとりたまえ。今までの罪ほろぼしに、できることなら尼僧にしてやりたいところであるが、今夜は不幸なことにもう朝が近い、少しだけいい助手君たちよ、そのような奴隷の見せかけの悔悟の言葉に、気をそらせることはよしなまえ。戦いに傷ついた兵士が、死を拒絶しようとして機関銃を打ちまくるにも似た奴隷のふるまいなんかに、どうしてもかわりあう必要などあるう。ただ、少しでもカミソリを当てた後はよくマッサージしてあげろ。それが君達とおれの流儀だから――。それでいい。では、奴隷を台から引きずり落としてやりたまえ。

奴隷よ、顔をあげる。お前にごほうびをやるう。キングサイズのキャンディだ。お前の欲しがっていたものだ。さあ、ここにひざまずいて、その赤い口を大きく開くのだ。それでいい。眉をひそめるな。感謝をこめろ。そして、よくその甘さを比較しろ。

三人の助手君たちよ、みたまえ。君たちを嘲笑してきた奴隷の、あのあられもない喜悦の表情を――。

S M カメラ・ハント

悦虐の昼と夜

昼：村田キヨ子 || 夜：松山真樹子の巻

辻村 隆

連日の猛暑続きで、さっぱり意慾をなくした日が続いている。仕事をするでもなし、さりとてゆっくりと体を休めるでもなし、唯何となくのんびんだらりと暑い一日が終って、家族中がそろそろ寝ようかという頃から、体がシャンとして、溜ったフオトを整理してみたり、夜もすがら怪しげな本を耽読して、東の空が白みかかると、ウトウトと寝入ってしまう。謂わば、昼と夜を取り違えたような、昨今の日常である。そこはサラリーマンでない気楽さでもあろうか――。

そんな怠惰な私に、気合いをかける様な電話が京都からかかる。例の同好の徳永昭三からであった。以前からたびたび、ハントを慫慂しながら、一向に煮えきらぬ私に業を煮やしたのか、すっかりお膳立てを整えて、しかも否応なしの、日時場所までチャンときめて提供してくれる。強引な親切さであった。

「どうや、もうこうなったら、いかなあんたも行かんことには恰好つかんやろ。私が三度ばかりプレイして、既に飼育済みやから、ラクだっせ。口説く必要あれへんさかいな。勿

論出掛けまっしゃろな」

と、こんな口調である。

この徳永氏の調子に限らず、ハントの女性の言葉を標準語？ で書いていたら、先月の九月号で山本八郎さんという、かつての近鉄パファローの一発屋のハチと同名の人が、常連作家を批評する」という一文で、女性がみんな齒切れのいい東京弁使っていて、何か空々しく作りごとらしく感じられるとクレームをつけていた。この人は私のハントを全部お読みでないらしい。以前のものにはハント女



性のお喋りを、京都弁、大阪弁で書いてあるのが結構沢山ある筈だが、全国に読者があるのに、一地方の方言にかたよった読み辛いぜとある同好の人に言われ、それもそうかとその後なるべく、標準語？らしきものに改めて書いている苦勞も知るや、知らずや。あちら立てればこちら立たずで私も辛いところである。それにしても、モタついた標準語らしき？ものを齒切れのよい東京弁とは恐れ入ったお褒めで、そうでなくてもボキャブラリーの中味の薄い私、一層恐縮している。こは一度昔に戻って、山本氏の言をいれて、我流の関西弁？らしきもので書かして頂く

ことにする。

それはさておき――

「そりゃ有難いけど、えらい強引な押しつけやなあ。前からあんた言うてた例のデパートの女の子なんやろ。M化粧品のマネキンしてる……」

「そうやがな。飼育の目的でホン（奇ク）みせたったら、すっかりあんたのファンになってしもて、いっぺん紹介せえいうて喧ましよう言いよる。」

どうせ毎日ブラブラしてるあんたはんのこっちゃんいつでもええやろおもてきめましたで。この間まで中元の売出しで、デパートも忙しおしたが、八月下旬は一寸ヒマになるし、ええ頃や。月曜日の午後一時四条南座前のKレストラン。おなごと一緒に行つて待つてるさかい、きつとおゆきやすえ」

「おおきに、そこまでやってくれたら行かんわけにもいかんやろ。ほんならその時――」（日頃の喋り調子で書くところなる。私達の喋ってる言葉、分りますやろか？書き易いような、書きづらいようなヘンな気持）

とにもかくにも、親しい同好の士は有難い

もの。自分だけ愉しまないで、博愛衆に及ぼしよると、お膳立してくれた徳永昭三に感謝しながら、そのくせ心の片隅では、このくそ暑いのにえらいこっちなあと独りボヤいてる。

電話のない日は全然ないくせに、かかってくるとなると妙に重なるもので、それから三十分もせんうちに又電話があつて、それが理容師の松山真樹子――。といつても分らん人もあろうが、散髪屋の小池美喜ちゃんが、大阪キタのようハやる店に移り変わって、そこで友達になった同じアパートの仲間で、この二人おきまりのレズの関係らしい。

小池美喜に彼女を紹介してもらつて、三人でバイキング料理たべたが、若い娘二人のようたべよることたべよること。こんな連中をつれて食事する時はバイキングに限ると思つて、その大食ぶりを驚嘆したら、ご本人達はケロリとして、

「そやかてセンセー、たべてもたべんかても同じ値やったら、たべんにゃ損ですやろ。ほんでウチラ、つめ込めるだけつめ込みましてん。普段やったら、あないに喰べしまへん」と、当世の娘達は、まことにチャッカリしている。

理髪店の仕事を終った夜で、その時始めて会った松山真樹子は、小柄な美喜とは正反對に大柄な感情を余り外に表わさぬ、どちらかというとボーカルフエイスの娘であった。

それとなく美喜との会話の中に、SMの話をさりげなく取り混ぜて、彼女の気持を打診してみたが、一向に反応なく、ケロリとした顔付できいていたが、当分は初対面の私の気持を持度しかねて、ボーカルフエイスをつづけていたらしい。

美喜は、しきりに私と二人になりたがっていたが、ここは我慢のしどころ。カメラの準備もなし、二人になってホテルにしけこんだところで、セックスするのが関の山。そのセックスに皆目自信のない私。若い娘の前で恥かくのがいやさに、知っていつら知らない素振り。阪急梅田の改札で手を振って、あっさり別れて、奢ってやっただけのその夜から数日経って、夜の九時頃、松山真樹子から思いがけない電話がかかる。

「誰かと思ったら松山さんかいな。一体、又どうしたというの」

「この間は、えらいご馳走になりましたとおおきに。センサーの言うてはったこと、ウチにもようのみ込めましたんやけど、美喜ちゃん

いたから羞かしうて、何もいってませんでした。センサーいっぺんうちと二人きりで会ってくれはれませんか？」

と、これ又、思いがけない返事チャンチャコ（仁鶴の影響大なり）脈ありもいいところで昔でいうと、飛んで灯に入る夏の虫。

「ほんなら近いうちに是非いっぺん」

といっておきながら、このうるさがりやの中年男、若い娘のデートの申し込みをその俚ずるべつたりに放っておいたもんや。

連絡しようしようと思ううち日が経ってしもうて、ええわ、そのうち髪の毛伸びたらいったら。しかし美喜ちゃん、ゼラシーおこすんやないやろかと、それを考えると何とはなしに気が重くなる。小池美喜には、まだまだ未練のある私であった。

それが、徳永昭三の電話と、まるで符牒を合わせたように掛かってきて、

「センサー、まだ忙がいんですの？」

と囁かれ、あわてて弁解するように、

「いや、やっと暇になった。けど、毎日暑いしねえ」

といえ、ピシリとシッペ返されて、

「暑いいうたかて、一寸したところならみな冷房してますわ。今度の月曜日いけません？」

「ああ、いいよ。是非会いましょう、何処がいい？」

「何処でも、キタなら大体知ってますけど」

「ほんなら午後一時頃……」

といいかけてハツと気がつく。午後一時には、京都で徳永氏と会う手筈が出来ている。

幸か不幸か、デパートも理髪店も、月曜日休みとはよう出来ていました。こらいかん、心は二つ、身は一つ、あわててごまかす。

「午後の七時だよ、一時と違うよ。夕方まで一寸用事あるのでね、その方が涼しくていいし、少し遅いけど、ゆっくりと夕食でもしてそれから……ネ、分ってるでしょ。夜遅くなってもいいんやろ」

「本当は午後から体あいてるんですけど、センサーの都合悪いんやったら、それでも構しません。美喜ね、日曜日の夜から火曜日の朝まで、郷里へ帰るんです。それで恰度いいんです」

「美喜の郷里、どこ？」

「和歌山県の御坊とかいうところ」

「あんたの郷里は？」

「ウチは滋賀県の近江八幡の田舎」

「どちらも近いんやね。でもそれなら美喜にわるいけど、いい工合やな。何なら一時間く

り上げて六時にしようか。一寸でも早く会いたくなった」

「うまいこといいはって。ほんなら、ウチも洗濯や片付けものして、お昼寝でもしてから出掛けますわ」

「Hビルのロビーの喫茶で待つからね。プレイの方はO・Kなんやろね」

「分りません、その時になってみないと」

電話では諒解ともいいかねてか、この娘も女らしく、一応は私に気を持たせた。かけてくる以上、勿論その気になってはいても、やはり、すぐにはハイ承知しましたとはいえないのだろう。

俄然、忙しくなった八月十八日の月曜日、昼と夜、私はかけ持ちでハントに駆けずり廻らねばならない。

(昼の部)

盆を過ぎると、朝晩いくらか涼しくなったが、それでも日盛りの日中はすごく暑い。京都南座横の疎水駐車場に車を置いて、市電の線路を小走りに渡り、約束のKレストランへ入る。近頃めっきり髪の毛の薄くなった徳永氏が入る。焦茶色のベレー帽をかぶって、やあと手を振った。時間は午後一時八分。私は八分遅刻し

たが、駐車と横断で五分許りかかったので、

京都まで足を伸ばしたにしては正確な方だ。

「今坐ったばかりや。」

ピタッと時間通りで気持ええわ。辻村さん時

間にうるさいので、近頃は私まで、時間勵行

のくせができましたで——。早速、紹介しま

ひよ。この娘村田キヨ子さん。二十二、高卒

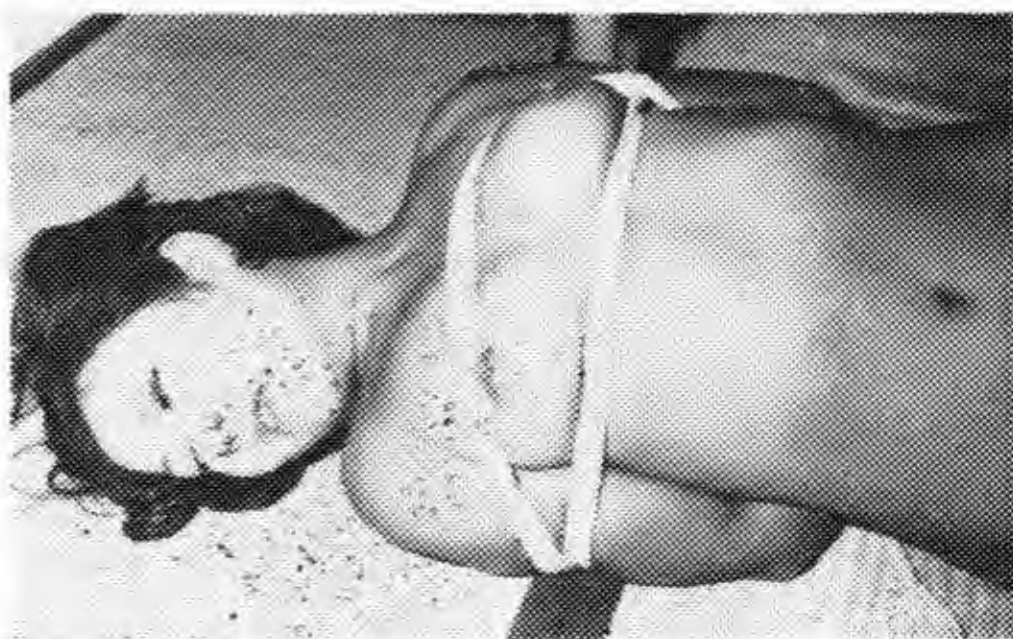
独身、性格M、あとは体つき見とくはなはれ」

妙な紹介のしかたをして徳永氏はニヤリと

笑う。自分のハントした娘を私に紹介するのが、半ば得意で嬉しかったらしい。村田キヨ

子はペコリと頭を下げた。化粧部のマネキンだけに、お手のものの化粧は、かなり濃く、

よくみると、つけ睫毛が彼女の眸を黒く涼やかにしていた。丸顔のぼちゃぼちゃした肉感的な娘である。ノースリーブの桃色のワンピースがよく似合うが、どことなしに崩れた肢



態を感じさせるのは、徳永

氏の飼育が勿論セックスに

及んでいる結果に違いなかった。成熟したオンナの色

香が、そこに漂っていた。「万里さんが待っていますよ」

「何処で」

「岡崎のアリーナ」

「何時？」

「二時——」

これで私達の会話は諒解する。かねがね肥満型の好きな徳永氏から、その典型ともいうべき肥満タイプの中村万里さんの紹介を頼まれていた私は、別段交換条

件のつもりでもなかったが、ことのついでにと、この同じ日に彼と中村万里さんに連絡を

とっておいたのであった。エヘンエヘンと彼はしきりに空咳を始める。昂奮はじめた時のこれが彼のくせであった。

「ほんならボツボツ」

「未だ早い——」

「もうワシ、飯がノド通らんわ」

「阿呆らしい。何か喰べましようや」

私達のこのやりとりを、村田キヨ子は呆氣にとられて眺めていた。

「村田さん、何たべる？」

「ハア。ウチなら、辻村さんと同じものでよろしおます」

「ほんならエビフライ。ビールどう」

「少しなら……」

車にのるので、三人で一本、私はのどをうるおす程度で我慢する。

もう徳永氏、二度ばかりも時計をみて、氣もそぞろである。この村田キヨ子を、やいのやいのいってプレイに誘ったのは、ひとつには中村万里とのプレイを待ち望んでいたせいもあった。私は彼なら肥満好みだからと、いつでも紹介する氣でいたのに、律氣な彼は、しからば私にもお相手をと、かなり無理をして、村田キヨ子を説得したらしい様子であった。反面その律氣さが、彼のいいところでもあったのである。

「もう時間や、待たしたら悪い」

心は既に中村万里の方へ走るのか、私達二人のことは眼中にない。苦笑して肩を叩くと何を感じていたか、ピヨコンと立上って、

「ほんならキヨ子、わかってるやろナ。あん

じょうやってや」

と彼女に声をかけ、私にチラリと目をつぶって出ていってしまった。意馬心猿、もう矢も楯もたまらぬといったポーズ。

「困ったオッサンやで」

呟くようにいうと、村田キヨ子はクスッと口を押えて笑った。

「百貨店に勤めてはるそうですね」

相對して口火をきると、氣さくな調子で

「ええ、化粧品Mからの出張員なんです」

「中元には、かなり忙しかったでしょ」

「贈答品売場は、すごい混雑してましたけどウチらの方は、日頃と余り変わらしまへん」

「何かノルマみたいなものあるの」

「そういったものはおへんけど、やっぱり、みんなと競争になりますもんやから、つい」

「彼とどうして知り合ったの？」

彼女はハッとして顔を伏せ、貝殻が蓋を閉じたように急に押し黙ってしまった。私としては、彼と彼女のプレイのそもそのなりそめに興味があっただけに、この事は知っておきたかったのである。

「言い難いことなの？」

「ウチの口からは、よう言えまへん。あの人からきき出しとおくれやす」

村田キヨ子は苦渋にみちた表情で、ハンカチを出すと、そっと、ひたいを押えた。

「私とのプレイは承知なんだろ」

「ハイ、その事は聞いています。カメラお撮りになることも。ただ、私のことは、何もきかんで欲しいという約束やったんです」

この謎めいた彼女の言葉から、私はフト何の関連もなく、或る種のコール組織を想い浮かべた。それはフィクションではない。デパートをやめた古顔の女性が、スナックバーを開店し、客の中から金と地位のありそうな絶対大丈夫というような男性だけを選んで、デパート勤めの、多少は浮氣心のある若い娘と密絡をとり、恋愛の仲立ちをしていたという事実——。バーのママは絶対強制しない。唯単に、男対女のとりもちをするだけであつたが、男は知合いの仲間を客として連れてくるし、娘達は、恋愛成立の場合、ママに分相応に感謝のお礼をしていたというケース。娘達はサイドビジネスで潤い、客は粹なママと益々足繁くバーに通うといった次第で、今ではママは我れ関せず、デパートガール女店員、オフィスレディ達が、その友達とお互いに連絡をとって、搾取者なしの自由恋愛で、大いに若さを駆歌していると聞く。男達

の地位や名誉が高いだけに、背信行為のない限り、それは闇から闇へと、生き生きと息づいてつづいてると聞いている。中年の男性が、単なるセックスよりも、SMのプレイを飲むことを、この若い娘達は逸早く肌で感じとっていて、近頃の女性週刊誌の、そうしたサド、マゾ云々の記事と共に、娘達は、時にはSに交じり、Mに応じて、男達を飲ばすコツも心得ているようであった。

徳永昭三は、SMを伴うセックス駆歌の方である。勿論、彼の飼育もあろうが、易々としてそれに応ずる村田キヨ子に、私はフト前述のような組織の匂いを感じたのも、又無理からぬ次第であった。組織に対しての彼女達の口は堅かった。唯、その場限りの、痴戯に溺れ、快虐にうつつをぬかす場合、彼女達は百パーセント献身的な協力を惜しまず、女性自身も、その雰囲気、完全にドッポリと沈み込み、身も世もなくのたうち廻るのであった。

村田キヨ子の場合にしても、これが彼女の本名ではなく、デパート勤めにしたところで或いは虚言であるかも知れないが、そう信じることによって交渉は成立するのである。それ以上のことは、見ざる聞かざる知らざるの



三猿主義であればある程、彼女は安心して悦虐に耽溺するかも知れなかった。しかし、これは飽くまでも私の推測であった。

「そろそろ行こうか——」

彼女は私の誘いにうなずいて立上ると、「あのう、今日は五時に会う人がおますからそれまでにすむようお願いどすえ」

その言葉は柔からいが、やや切口上で、ビジネス的であった。

「デートだね」

「ええ、まあそんなとこです」

敢えて逆らおうとはしない。

「恰度いいや。私も大阪で午後六時に会う人があるのですね」

「デートですか」

「ああ、そんなとこだね」

オーム返しが可笑しかったのか、顔を見合せて、私達は始めて笑った。

「八坂神社の方へ向かって、ぶらぶら歩いていってくだませんか、車を出してくるから」
うなずいて別れると、日盛りの舗道を歩いて行く。

車を出して迂回するのにかなり時間がかかり、彼女に追いついた時は、もう祇園下の交差点に近かった。

「あのう、ウチ、デートする場所、京都會館の前なんです。そやから、あの辺、なるべく避けて欲しいんですけど」

車に乗込むなり、いきなり釘をさされた。

中年の私と二人のところを、いつ誰かに見咎められるかも知れないという配慮が感じられた。以前、魔子と会った時も、彼女はしば



しば、あそこはダメだとか、ここはいけないとかよくクレームをつけたが、今考えると、彼女もかなり私以外に発展していたらしい可能性があった。京都も、アベックホテルのかたまっている処は、ほぼきまっている。清水坂、南禅寺、岡崎など、その最たるもので、大抵はこの一帯を利用するのであった。

「山科まで足を伸ばそうか？」

「あの辺にホテルありますやろか」

「モーターがある。気楽でいいよ」

「ほんなら、お任せします」

車中とり立てて喋ることもない。岡崎から蹴上を越えて一号線走ると、忽ち山科、国

道に面したモーターに右折して車を突込む。

モーターの草分けのような逸早く出来た処だけに、設備に些か不満もあるが、気楽なのが取柄であった。コの字形の二階建のアパートのような様式で、その前庭には車が既に数台――、先客ありという処か。

「あのう、よかったら、これ使って下さい」

車を停めた時、村田キヨ子は、スーパーマ

ーケットの紙袋を私に差出した。

「何なの、これ？」

「ロープです」

「持ってきてくれたの？」

「ええ」

私は、いよいよブラックガールの想像を確定的にした。SMプレイでロープ御持参という娘は、先ず一寸私の範疇では、思い出せない。男性の中にはSMを好む者もいて、それを予定に入れて、チャンと持参したらしいところに、反ってうすら寒いセミプロ意識を覚えたのである。

「一応、お借りしよう」

私はそれで、いつも使用する方の縄袋をその俥車に残し、雑多な紐や、真田紐、きれぎれの縄束の入っている、予備袋の方だけを握って、例のカメラ一式の入った革袋と二つ提げて車を降りた。

受付で、ビール三本ばかりと突出しを買って、籠に入れると、二階の和室へ向かう。鍵を開くと、ここは狭い乍らもアパートの一室めいて、炊事一式、自分で出来るようになっていて、フライパンから鍋、調味料、食器のたぐいまで、万端とこのっている便利さであった。キヨ子に風呂をすすめ、時計をみると午後二時を少し廻っている。独りでビールをのみながらフト茶目気を出して、徳永氏へ電話を入れる気になり、メモを開いて、平安神宮大鳥居前のアリーナへ電話する。いつか左近麻里子と待合わせた場所であった。

徳永氏を呼出す、ウェイトレスの声が微かに聞こえて、やがて近づいてきた気配――。

「なんや、辻村ダンナか。びっくりするやないか。すべてO・Kや。おとなしそうな、ええ奥さんやで。大丈夫なんやろな」

「勿論、お気に召すままや」

「今、キヨ子どうしてる」

「バスへ入りにいった。一体あの娘の素性ど

うなんや（声をひそめて）何にもいいよらんで。しかも紐つきならぬ縄つきや、ロープ御持参におそれいりやの鬼子母神。どうなってるの？ 何も知らんとなると、一寸やるの気色わるいがな」

「絶対あれにいわんときや。実はな、M化粧品の販売部長の軽妾みたいなもんやね。販売部長とわしと、軍隊の同年兵で戦友——。今年の生き残りの会合の時、意気投合して、それであいつもその気があること分って、わしは美木乃々子を紹介し、あいつは、キヨ子を紹介してくれよった。見掛けはしっかりしているけど、あんまりスレてへんはずやで。男は部長とわしとしか知らんことになっているけど、そう信じたっとくなはれ。わしが飼育する迄もなく、チャンとM気出しよった。それだけに扱いもラクや。でも、これは内緒にしたっというてや、次々タイ廻しされてると思て、気悪うしたらあかんさかい」

「私は又、ブラックガールかと思た」

「ブラックガールで聞き始めや、黒い女って何やの？」

「コールガールでもない。自由恋愛の闇のオンナ。私が命名した」

「違う違う。それはあの子にとって、一寸殺

生や。オンリイやで」

「安心したよ。それでギャラは」

「ワシに任せといて、金は出さん方がええ、水臭うなる」

「五時にデートするとうてたで」

「そら、恋人の一人や二人はいるやろ。そこまで詮索せんかてええのと違うやろか」

「部長、知ってるの、そのこと」

「SMのプレイで結びついた仲や。ペイで割切っているんやろ。恋人が出来た方が、かえって手を切り易いのと違いまっしゃるか」

「えらい、はっきりしてるんやね」

「ジキルはアバン、ハイドはアプレ。プレイについては、そう堅苦しゅう考えん方がよろしおすわ。辻村はんもそうと違う？」

「いわれてみりゃ、あんたの言う通りだよ。」

「万里さんどう、うまくいってる？」

「ウン、辻村はんのこと、いろいろ聞いてるで。あの人、辻村はんは大分好意もってるらしい。あんまり欲ばせ過ぎたのと違う？」

「パイプ許りで、とんと本物は役に立たずってとこさ」

「よっしゃ、わしが引受けたる。ええんやろな」

「構わないよ、どうぞ。恋の奴隷——あんた

好みの女にしていいで」

「しきりにこっちみてるわ、もう切るよ。御成功を祈ります、お互いにね」

中年のオッサン同志、ジョークとばして電話をきる。私は村田キヨ子の素性を臆る気ながら知った事で、心のやすらぎを覚えた。振向くと、村田キヨ子がバスタオルを裸身に纏ってたたずんでいる。

「どこへ電話しはりましたの？」

「徳永氏だよ」

隠してはかえって怪しまれようから、在りの俚をつげる。

「ウチのことききはったのでっしゃろ」

「ああ、一寸だけね」

「どない言うてはりました？」

「とってもいい子だから、よろしうたのむって」

「それから……」

探るような目で、じっと私を射るようにつづける。

「隠したって始まらないネ。M化粧の販売部長の彼女だって」

「それから」

「それだけさ」

「本当に？」

「本当に？」

「ああ本当だとも。部長もその方が好きだと分って、紹介して貰うたというてたよ」

村田キヨ子の頬に、アルカイックな笑みが漂よって消えた。その謎めいた笑みに、私は未だ隠されている未知の秘密を嗅ぎとった。それは徳永氏も知らない、部長と彼女だけが知っている、プライベートな秘めごとであるかも知れなかった。もうそこまでは探索する必要もない。いずれにしても、こうして易々として私に附随して来た彼女に、私はプレイの一端を披露すればよかったのである。

「徳永氏と部長さん——えーっと山田だったかな……」

「桑田部長よ」

「そう、桑田さんだった。二人は戦友なんだってさ」

「そういつてましたわ」

私の誘導に引っ掛かって、彼女は思わず、部長の名前を口にした。

「桑田さんは、あんたに恋人がいるのを知ってるらしいよ」

「ウチの方から部長さんに白状しましたんやもの、そら知ってはるはずどすわ」

「妙な仲なんだね」

「恋人は恋人、プレイはプレイ、ウチはそう

判っきり割り切ってますねん。部長さんは、ウチが結婚する時には、ウンとお祝いするかというてくれてはります」

「私のこと知ってる？」

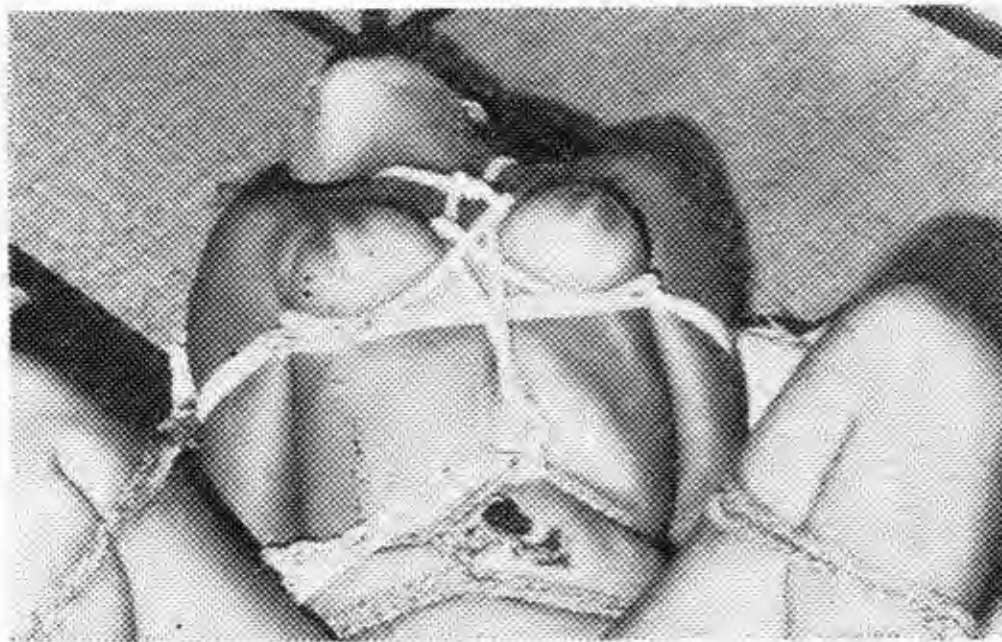
「奇クの、カメラ・ハントの辻村さんでしょう。部長から毎月雑誌みせてもらてましたから、よう知ってます。時々ハントに出てる辻村はんの感じと一寸違いますけど」

「どう違う？」

「口でうまく言うわんけど、実物の方がスゴ味ないみたい。もっと怖い人かと思てました」

「サングラスかけてるからだろ。奇クは徳永のダンナが見せたのと違うの？」

「あの人も見せてくれて、押しつけるように読めといいはったけどその前にチャンと読んでましてん。あの人ピエロみたい。何でも知ったかぶりで、SやM



やプレイのこといろいろ言いはるけど、役者は部長が一枚上どすえ。徳永はんはプレイが始まると、すぐセックスにかわるんです。本当はその方が好きなんと違いますやろか。部長はトコトンまでいろいろと虐め抜いて、セックスはまるでつけ足しみたい。それだけにこわいけど」

「私もその方だよ」

「ハント通りならそやけど……。でも辻村はんも糖尿やなかったら、その方へ走る方でっしゃろ」

痛い図星である。男である以上、それは当然だが、私の厄介な持病が、それをセーブしていることは事実であった。それが已むなくパイプやその他の器具の方に走らせる所以でもある。

「そろそろ始めよか」

私はやっとその気になって、カメラを取り出す。ストロボを装填する。そろそろと雑多な縄を袋より引きずり出す。

「ハントに書かれますの？」

「いけないかい」

「かめしまへん。部長が愉しみにしてはります」

「分かると困るかね」

「天涯孤独のひとりぼっち。別段、困る人なんかあれしまへん」

「恋人に知れたら……」

「あの人も、この道が好きですもん。いつも縄持参してるのも、目的はあの人のためたいなもんだす」

「彼氏いくつ」

「年きいてどうしはるの？」

「若いんだろ」

「たしか二十七才」

「大したもんだ」

「辻村さんかて、その頃もう始めていたんでっしやる」

「そういえば、その年でもうやっていたね」

村田キヨ子はいつしか大胆になり饒舌になりつつあった。私の思う壺である。何も知らず、何も分らない女性なんて、プレイするにしても興味半減である。それだけ、村田キヨ子は雰囲気馴れてきたのかも知れない。

サラリとバスタオルを落下させたキヨ子の

全裸は、眼を睨るばかりの素晴らしさであった。顔は洗わなかったが、髪が湯気に濡れそぼれてかなり乱れて、ひたいにへばりつき、やや浅黒い裸身にくらべて顔面のみ一際、白いのが妙にコケティッシュでなまめかしかった。ムチムチと盛上ったオッパイの見事さ。成熟し、男の体液を吸った双丘は年令以上に発達して、臍下からデルタに垂直にのびた、黒褐色の直線が、この女の過去を歴々と物語っていた。それは妊娠線——。

「ソーハしたの？」
ズバリ訊ねると、心持ち頬を染めたが平然と、

「いっぺんだけ」

「部長のタネ？」

「その前——」

「ききたいね」

「ウチの人生を狂わした男、——言いとおおまへん。余りジロジロと見やんといて……」

ウチ薄いですやろ」

さりげなく足を組んで、しゃがみ込む。無毛症ではないが、確かに薄い。風にそよぐ葦といったところ。

「私は又、剃ったのかと思った」

「生まれつきですもん。何度剃られても、あ

んまり濃うならへんの。薄いのおキライ？」
「関係ないさ。でも濃い人は情もこまやかっというけど、あんたは」

「愛情の方は濃いつもり」

「なら、俗信なんて当てにならない」

「始めての男、私をK国人かって侮辱しよったわ。でも、これでも純粹の日本人なんよ、バカにしてはるわ。K国人だって、濃い人も薄い人もいてはること知ってるもの」

「一般に世間ではそういうがね、人間性には全然関係のないことだよ。私はそんなこと問題にしない」

「有難う、そういうて頂いて。さあ、お好きなようにくくって——。きつうてもよろしおすわ。ウチ、大抵なら我慢出来るつもり」

「鞭打ちされたことある」

「おます、たびたび……。痛いけど、痛いなかに口でいえない快感をカンじます。そやけど、何もせんと、いきなり叩かれたら、痛いだけやわ。順序を追うて叩いてね」

順序を追えとは、悦虐を覚え、愉悦に五体をしびれさせた上、叩けという意味であろうか。これは悦虐のプレイのルールかも知れない。

手始めの縛りは、どうしても簡単なものに

なる。かなり太く、柔軟な、キヨ子持参の綿ロープで、胸を二巻きして、高手小手にして背後で縛る。プツリと突出した大きめの乳首が、男心の吸引をそそるかのように浮かび上がっている。

前面から、背後から、側面から、このオーソドックスな立ちポーズに閃光を走らせ、ついで坐らせて又撮り急ぐ。女の表情に、既に被虐の切なげなうるんだ翳が流れ始める。それは身についた悦虐の悶えの表情でもあろうか——。ぐっと高手にした両手の指先が、虚空を掴んで被虐の様相を示している。しかし私はそれに彼女のたくまれた演技を感じた。

この程度の縛り方では左程に虚空を掴むこともなく、悦虐にひたることもない筈であったから——。しかし、演技にしる、こうして、悦虐の表情をみせてくれることは、それだけSMのプレイを理解し、協力していることにもなった。無表情より、表情の流れのあるに越したことはなかった。或いは又、私という人間に、縄をかけられるという、唯、その事実だけによって、村田キヨ子は、内面的に、早くもプレイの雰囲気浸っているのかも知れなかった。

肩を抱いてそっと仰向けに寝かせると、キ

ヨ子は微かに、あぁと呻いた。絞り上げられた両手の痛みにもまして、ポーズの変化がこれから起こる事態を予期して、それが呻きとなって吐露された感じである。眉をよせ、唇をかみ、時には鼻を鳴らして、キヨ子自身悦虐へ悦虐へと走ろうとしている。その期待に応えて、私は羞恥の……で大きく開いて行く。何の抵抗もなしに、両脚が幅一杯に拡がり、私の眼前に、これみよがしに拡大され、彼女はその刹那、歎歎に似た吐息を大きく洩らして、鼻をならした。私が羞……大を直視していることを感じての態度である。それにヒタとカメラを近づけ、愛……った神……をカメラに納める。この際、薄毛が、より一層くっきりと物体を露呈させ、それは到底二十二才の若い女性のものとは思えぬ幅広さを、まざまざと感じさせて息づいていたのであった。

わざと粗々しく足蹴にして、女体を裏返しにする。鞭の洗礼をうけた臀部は異常に発達して、強靱な皮膚は、少々の叩きを甘受する肉の厚さに発育していた。私は村田キヨ子の体に並々ならぬ飼育の成果を発見した思いであった。ボロボロになった、初期の使い古した斑ら縄で両足首を縛るとぐいと持上げ、縛

った両手首に繋ぎ止める。ついで直田紐で、太く白いロープの上から更に縄をかけて、上半身を引絞って足首に連絡させる。乳房がタミより浮き上り苦しい逆海老のポーズで、キヨ子の呻きは次第に頻繁になっていった。パンティの跡のくっきりとついた双臀に、私は眼を投げかけると無性に叩きたくなった。この女は、男の嗜虐心をそそるようになってくるといふのか。

「何で叩かれた？ バンドか、縄か、それともムチか？」

「ウーン、革のムチで……」

「部長は持ってるんだね」

「自分で作らはったんです。ああ……」

「よし、ズボンのバンドで叩いてやろう。いいね」

苦しげに、挙げた首で二、三度うなずく。

叩かぬ前から、鞭打ちを想定して、女の息は粗々しく弾み出していた。

ハンガーに掛けてあるズボンからバンドを引抜くと、一曳して、唸りを生じて、したたかにキヨ子の臀部に発止とばかり、小気味よい音を立てて帯革が飛ぶ。

「ヒエーッ、うッ、痛い……」

苦痛の悲鳴に甘い響きが籠っていた。私は



その時、突如として、関谷富佐子の、あの耽溺に似た悦虐の表情を思い浮かべた。何か、そっくりである。関谷富佐子も、最初の縛り始めた時から、既に鞭打ち想定の甘い陶醉に似た悦虐の表情を露わに泛かべ、縛っただけで軽い呻きを洩らしていたではなかったか。今この村田キヨ子も亦、そうであった。関谷夫人も夫によって散々飼育された結果、縄をかけられ、いましめを受けるというだけで体を疼かせ、この村田キヨ子も、それと同じことがいえたのである。それはMに飼育された女の、軌を一にする同類の悦虐のポーズであった。

唸りを生じて、帯革は二度三度、キヨ子の裸臀に飛ぶ。その時いきなり私の後頭部はカッとして血が昇ったのか、ズキズキし始めてくる。これは近頃よく起こる私の昂揚状態の、一つの証左であった。脳溢血の懼れがあるから、気をつけなければいけないと、同好のドクターは忠告してくれるのだが、現に今その状態になりつつあった。

女に甘い陶醉の悦楽が漂っていた。苦しいポーズを尚更にのけぞらせて、喘ぐ吐息は激しさを増し、ウンウンいい乍ら、やめてくれとは叫ばなかった。桃色のみみず腫れが数条鮮かに豊饒な裸臀を彩っていた。

女をその俤にして、私は頭を抱えて、ヘタヘタとその場に坐り込んでしまった。沈黙の数十秒が流れる。

「どうしはったの？」

私の異常に気付いて、キヨ子は顔を振じまげて私を凝視した。

「ウン、頭が痛い」

女はじっと黙って私の顔をみつめていた。

突然の私の変化に、咄嗟には納得出来なかったらしい。ズキツとする重苦しい後頭部の痛みをこらえつつ、のろのろと、かなりの時間をかけて、緊縛を解きほぐしてゆく。ようやく自由になった身を起こすと、キヨ子は私に駆け寄り

「本当にどうなりはったの？」

と、案じ顔で覗き込んだ。

「すまないが指圧してくれないか」

「私に出来る？」

「うん、ツボを教えるから……」

私は自からの親指と人差指で、後頭部の、うなじを押え、ぼんのくぼをぐっと押すように教えた。裸身を私にヒタと擦りよせ、彼女は私の押えた個所に二本の右指をあてがい、左手額を逃げないように押えつけ乍ら、ぐっぐっと力を入れて、指圧を試みってくれた。満足の状態ではないが、徐々に頭が軽くなってくる。やっと立上って、いつも携帯している鎮痛剤のセデスをのむとゴロリと横たわる。その私に蔽いかぶさるようにして、不安げにキヨ子は私をじっと見守っていた。

激しい昂奮がいけないのだ。私は動から静に移って、極力じっと息を殺す思いで、転がっていた。

こんな場所で、或る日、突然に脳溢血でコロリとマイったらどうしよう。そんな不吉な予感がフト私の頭をよぎるのであった。昂揚による四十肩の凝りとしりつつ、いい気持のものではない。精尿の余病が、案外こんなところにも現われ始めているのかも知れなかった。

× × ×

首筋から肩へタオルをのせた上から、村田キヨ子は十数分近くも、馴れぬ手付でマッサージをつづけてくれた。小さなバスの、窓も扉も開け放し、熱気を放散させて、私は裸身を彼女の両手で揉みゆさぶられ続けていた。胸の隆起が、しばしば私の背を無意識に撫ぜる。キヨ子も又、惜しげもなく裸身をさらした筈、懸命に首を揉みつづけてくれた。

「有難う、もういいよ。すっかり体が軽くなった、頭もすっきりしたよ」

「本当？」

「ああ、全くもって妙なことになってしまったね。すまない……」

「よろしおしたな。こんなことお安いことどすえ」

彼女は湯桶でザブザブと数杯、私の背に湯をかけ終ると、さっとタオルで洗い流してく

れた。

くるりと振向いた背後に、屹立した豊かな二本の腿がニョキリとある。いきなり腰をぐっと抱きしめて、私はYの……に顔を押しあてる。

「いや、こそばい……やめとくれやす——いやーん」

女の手が私の髪を握って引離そうとする。

尚更むしゃぶりつくように顔を埋めて、私の舌端が尖……を這いずり廻ってゆく。キヨ子の息が弾み、握りしめた私の髪の毛にいつしか力がこもり始める。徐々に……そしてそれはスピードを増して、堅く抱きしめた腰が震え始め、腿の力が抜けていった。

ぬめつく唇を離した時、キヨ子の瞳は妖しく潤み、吐息が私の肩に熱く突きささった。私としては精一杯の感謝のしるしであった。声もなく女は、ザブザブと湯をかけてすぐと、私を放ってさっとバスを飛び出していった。ノロノロと私は滴を垂らせた筈、部屋に歩を運ぶ。

奥のベッドに、キヨ子は打伏した筈、大きく肩で息をしていた。数分前に、衝撃的に襲った陶酔を鎮めるかのように——。

私は放心したように、ボンヤリと突っ立つ

た筈である。

「もうやめはりますか？」

顔を伏せた筈、くぐもり声でキヨ子は、やや怒ったような口調で問いかけてきた。

「もう一度だけ——いいかい？」

「ええ、早ようくくって……」

パツと身を翻がえして起き上ってくると、

彼女は生気をとり戻したように、私の眼前にスツと立ちはだかった。

「又、あんまりこーふんせんようにしとくれやす。でないと心配するやないの」

切長の目が艶に笑って、女はどうにでもしてくれといわんばかりに私を見上げた。その眼をしっかりと受止めて、私は静かに彼女の持参した太いロープを取り上げる。

むしゃぶりつきたいような乳房を強調した縛りが始まる。首縄をかけ、二の腕を強くしめつけて後手に縛り上げ乍ら、乳房の上下に縄を巻いて、オッパイがポックリと飛出すように双丘の谷間でしめ上げた処で、縄が終った。

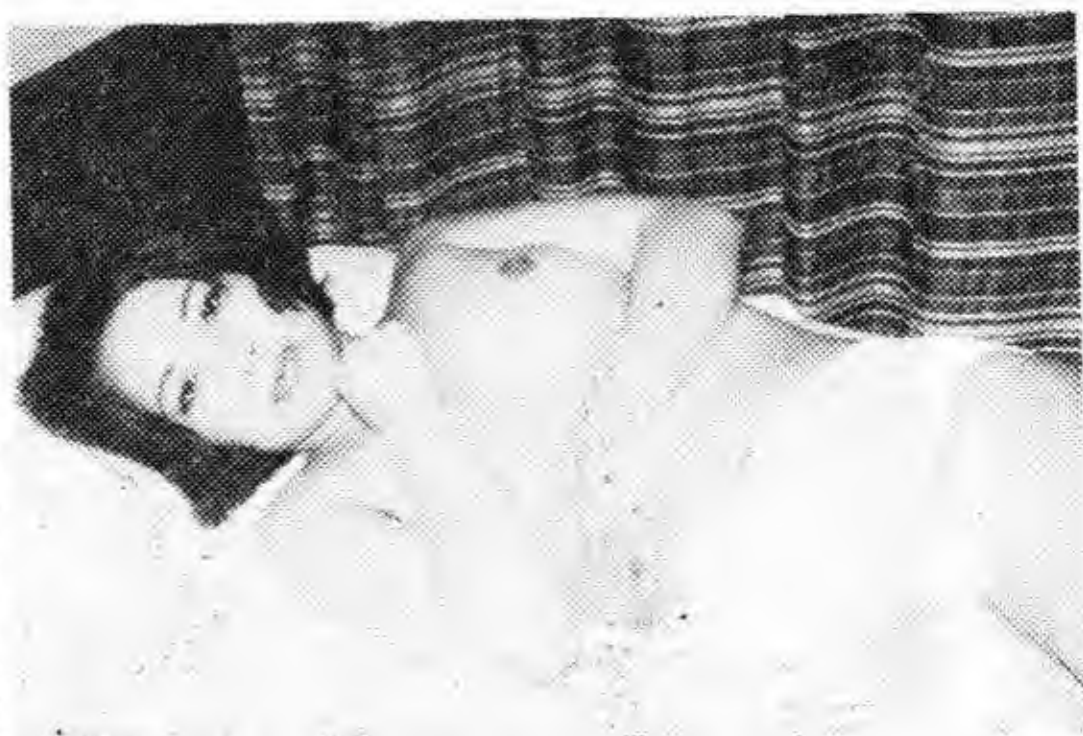
ウエストがぐつとくびれるぐらいに別の斑ら紐で巻いて結ぶと、それに白のロープを連結させる。斑ら紐は臍下から下って、Yの接点で双臀の谷間を這って、後手につながる。

私の作業はこうして終った。

側面から眺めると、胸の双つの隆起だけがまるで別の生きもののように見事に突出し、それは壯観としか言いようがなかった。そつと指先で触れてみると、かたくしまりきってコリコリとした感触が伝わってくる。その岬の尖端を、パチッと指で弾くと、キヨ子は声にならぬ呻きを挙げて、背をのけぞらせた。のけぞりにつれて縄がしまるのか、両腿をこすり合せて、それが更にキヨ子の官能を刺激して疼きを高めてゆくようであった。

緊縛という名のもとに、それがプレイへの前提条件となつて、私の心は急激に傾斜してゆく。先刻のあの後頭部の鈍痛を忘れて、ひたすらに女を歓喜の底辺へ沈めようと逸り立っていた。それには締りきった縄は邪魔ものであった。

背後に廻つて後手に繋いだ斑紐をとくと、うっすらとしめりを帯びた紐を腰に巻きつける。体をだきかかえるようにして仰向けにそつと寝かせる。後手縛りの手首が痛むのか、キヨ子は体をよじらせ、痛みを訴えた。座布団を一枚差し込むようにして挿入すると、やつとポーズがきまり、女の体は静止する。ぐいと力を籠めて、両脚を膝で屈曲させる



と、おなじみのダンダラ縄で腿と胫をしめつけるようにして縛り、腰の背面を通して、もう一方の脚も同様にして、二の腕の縄に繋ぎ止める。

私の視野一杯に、キヨ子の悦虐に溺れた姿が否な応く拡がっている。ポクリとお腕を伏せたような、円型の大パットの実物が、モリ

モリと肉をはち切らせて私の心を疼かせてゆくのであった。

東京・秋葉原の「ダゲール」で買った大型のパイプをとり出すと、電動音を響かせて、そのはちきれそうなベルの尖端にタッチさせる。

ピクンと体が躍って、キヨ子の甘い悲鳴が走る。右に左に、又右にと、その双丘をパイプは往復する。いやます声はきれぎれに激しく、悶絶に近い陶醉の呻きが部屋に充滿し、乾いた物頼い音をたてて、パイプが根よく微動を続けて数分――。

激しい絶叫と共に、彼女の全身のうねりは大きさを増していった。

唸りを止めたパイプを投げ出すと、私の顔が俄破と吸引されていったのである。

× × ×

緊縛の種類は数少なくとも充実したプレイのひとつときであった。

私も裸――キヨ子も裸。二つの異形が、ベッドに転がっている。

飽和状態のあとの、怠惰な物頼い空氣に包まれた狭い密室で、かなりの時間、私達はこゝうして虚無感を愉しんでいた。又しても女を飲ばす手段ばかりに熱中して、いつしかその



間に、私のセックスはプレイによって昇華していたのである。肝心のフォトの方はさっぱりなおざりになっていて、幾ら撮っていい。プレイに熱中し出すと、もうカメラ撮る手がおどましくなっていて、どうでもよくなってくる——これが近頃の私の傾向であった。

先に女がノロノロと身を起こす。乱れて、ベツタリとひたいにまつわりついた黒髪が愉悦に悶えたあとをありありと物語っていた。卓上にいざりよると、外しておいた腕時計を

チラリと覗いて、

「まあ、もう四時を過ぎているんやわ。時間経つの早いこと」

現実に戻ったように、女はスックと立上ると、全裸のままトイレに消えた。

戻ってくると、悪戯っぽい眼になって、

「辻村はんの紹介しはった人と、徳永さんうまいことやってはるんでっしゃるか。もういっぺん、ひやかし電話かけてみはったら……きっとマゴマゴしはりますえ」

チャンと知ってる口吻であった。

「邪魔したら悪いよ、折角のところを……」

それに、どこへ沈没したことか、ホテルも分らないし」

「あの人やったら、いつも岡崎のOホテルです。ウチとの時かて、いつもあそこやったもん」

「オヤオヤ、手離しで言われると返事のしようもないな。じゃあ試しにかけてみるとするか。怒られてもしらないぞ」

「面白いやおへんか。あの人、今頃汗みどろになりはって、フウフウいうてはる最中に、いきなり電話かかったら、いっぺんにシユンとなりはるやろ思て……」

情事に濡れそぼった女は大胆になる。その

言葉のはしばしには、ドキリとするようなエロチズムが含まれていた。

それは一種の覗きの心理にも似ていた。女の言葉に気圧され受話器をとる。繋ったらしい。

「辻村はんか？ よくここが分ったね」

「ウン、彼女がかけろというんで……どう、進行中なの」

「ああ、第二ラウンド進行中や、きかしてやろうか？」

「何を？」

「雁字搦目にくくって、尻持ち上げさせて、バシバシやってた最中や。電話のところまで引曳ってきたる」

聞き覚えのある中村万里の、甘い陶酔を含んだ、呻きと悲鳴が微かに流れる。私は黙ってキヨ子に受話器をリレーさせた。

耳をすます女の眸に、淫らな翳が走った。

片手で押えていた胸のふくらみを、女はいつしかじわじわとこね廻し始めていた。彼の声と代ったらしい様子に、あわてて受話器をとる。

「どうや、ええとこでっしゃろが」

「ああ、きかせるね」

「辻村はんどこ、どうでおした？」

「プレイしてるさいちゅうに、途中でクラクラッとしてな、頭のうしろモーレッツに痛うなあって、彼女に指圧してもらって続行——、まあ何とか恰好をつけましたがね。この暑さのせいやろか」

「年やなあ、しっかりしとくなはれ。しかしあの子ええこでっしゃろ」

「ああ、とても協力的でよかったですよ、又会ってみたいな」

「どうぞどうぞ。これからあとのことはお任せしませ」

「じゃあ電話きりますよ。中村万里さんに、どうぞよろしくね」

私に凭れかかるようにして、村田キヨ子は受話器の彼方の声に耳を澄ませていた。

「どうぞす、かけてよかったですよ」

「ああ、しかし、折角のプレイを中断した様だよ。で、どう、ひとのプレイの様子をきいた気持は？」

「しびれますやんかあ。もういっぺんといいたいとこやけど、もうあんまり時間もおへんし、第一、辻村はんあかんでっしゃろ。せやさかい、今日のところはまあ、あきらめとしまひよ」

苦笑して、オンナの裸身をぐっと抱く。彼

女は私の体をひきつけて、その俤ベッドに倒れていった。強いくちづけ——。村田キヨ子の軀は又してもうるおいを帯び始めていた。離して、私はいさぎよく、下着をつけ始めた。

「又、会うてくれはりますか？」

うるんだ眸が私を見上げて、名残り惜しげに訴えるようにいう。黙ってうなずいて、私はテレビのチャンネルをひねった。夏の高校野球の決勝戦が、青森の三沢高と、愛媛の松山高とで未だ争われていた。零対零の俤、延長十六回に入っている。

太陽が厚い雲に蔽われていたが、冷房の部屋から出たせいもあるって、

午後四時半すぎの外気は、ムンムンしてやけに暑い。

すべての細胞から汗がしぼり出すように噴き出していた。炎天下に鍵をかけて、

密閉しておいた車中は更に暑い。まるでサウナ風呂にでも入ったような熱気であった。大急ぎですべての窓を開放して、村田キヨ子を迎え入れる。

ノースリーブの肩から剥き出しの二の腕、手首に、いやにくつきりと縄目の跡——。

夏の緊縛で一番辟易する現象である。

「どうする、縄のあとがいやに判っきりしているよ、恋人と会う迄に取れそうもないね」

「仕方あれしまへん、いさぎよう白状しますわ。その方が反ってよろしおすやろ。辻村はんにくくられたゆうたら、あの人、余計にハッスルするかも知れまへん」

チラリと縄目の痕に眼をやって、彼女はこともなげにいつてのけた。どこでデートするかは知らないが、或いは人目につくかも知れないこの異常な縄痕を、村田キヨ子は案外気



にとめる様子もなかった。

「辻村はん、もし又会う機会おしたら、ウチのシャシン見せとくれやす。どない撮ってるか、ウチみてみたい……」

私は大きくうなずく、彼女は助手席から私を、じっと凝視しているのを感じた。

岡崎動物園の前で村田キヨ子を降ろす。精悍な女豹のような彼女は、恋人と再び性懲りもなく甘い呻きを洩らすべく、振り返って手を振ると、急ぎ足でいそいそと京都会館の方へ急いでいった。

私は車をUターンさせてスタートする。出来ることなら、この俤一目散に帰って、涼しい縁側で、よく冷えたビールでものみたかった。しかし午後六時には松山真樹子が待っている。今更キャンセルのしようもなく、行かばなるまい好色人の宿命であった。

村田キヨ子が恋人とその足でデートし、甘い呻きを洩らすことを云々する資格は私にはない。この私自身が、これから又、性懲りもなく、次のハントの女性を求めて、一路大阪を目指していたのであったから……。

各人各様のダブルヘッドの激しさよ。残照がカッとフロントガラスに反射していた。信号待ちで、何気なく傍らの助手席に眼をや

った時、そこに紙袋がその俤ポツンと残されてあった。故意か忘失か——村田キヨ子は、あの白い太縄を、その俤車に残していったのであった。

× × ×

(夜の部)

国道一号線枚方バイパスの、淀のあたりでドライブインレストランに飛込み、コールドコーヒーと共に、赤まむしのドリンクを立て続けに二本のんだのが効いたのか、夕陽に向かって走るうち次第に体がシャンとし始めてくる。大阪市内の停滞で、かなり時間を喰ったと思ったが、意外にスムーズに到着して、約束の六時には未だ十分前、Hビルの扉を開いてロビーに立っていた。

喫茶でレモンスカッシュをのみ乍ら、彼女を待つ頃には、結構ハントする気に戻っていたから現金なものである。

午後の六時を少し廻った頃、約束通り松山真樹子が、辺りを見廻すようにして喫茶に入ってきた。涼しげな水色のポードレースのミニのワンピースに、ポリュームのある大柄な軀を包んで、颯爽としている。私は手を振る。逸早くさっさと見つけると、すぐテーブルの前に席を占めた。その時、私は不意に小池

美喜の顔が頭に浮かんだ。ミキには内緒でこうして二人でデートするのが、何か彼女に対して背信を犯したような気にとらわれる。

「ミキちゃん、くにへ帰ってるんだって——」

「ええ、明日の朝早く帰ってきます」

「あんたは帰らないの？」

「ウチも帰ろかと思ったんですけど……」

松山真樹子は、そういつて口を濁すと、

「待ちまりました？」と話題をそらす。

「ああ、十分ばかり。しかし私の勝手だよ、あんたは時間通り来たんだからね」

「そんなら、もっと早くここへ来るんやったわ。私、五時過から時間持て余してウロウロしてましてん」

「どう、前に喰べた、あのバイキング料理へ行こうか」

「暑さのせいかな、ウチ、今日はあんまり喰べたくないの。お寿司の方がええわ」

「私も本当は、その方がいい。バイキングも一寸こってりし過ぎるからね」

連れ立って、お初天神の食道街へ向かう。

始めて歩く二人きりのはずなのに、そうした違和感はなく、年令の少し開いたアベック風で、いつしか真樹子はごく自然にふるまって私の腕に片手を巻き込んでくる。出来れば食

後、この昏、最寄りの太融寺附近のアベックホテルへしけ込むつもりで、黒革の袋一つを持ち出して提げてきていた。中味はカメラとストロボと細い方の斑紐三本ぐらいの、最少限度に絞ってある。車中のすべてを持ち出してきたとて、唯いたずらに重く、又、それらを全部駆使してプレイする程の体力が、今の私にはなかった。パイプを置き忘れてきたのが、プレイがエキサイトした場合を考えて不利であったが、又の機会もあろうかと、緊縛だけで終始するつもりでいたのである。それというのも、村田キヨ子で、かなり発散させ



たエネルギーが、私を消極的にさせているようであった。

松山真樹子はウキウキとし、さもこの日を待ち兼ねていたかのようによろこびであった。彼女に全精力を打ち込むことの出来ない、私の体力の限界を、内心腹立たしく思い乍らもこれは身から出た錆で彼女の関知するところ

ではなかった。

「センサー、今日のこと、ミキに内緒にしといてね」

「どうして？」

「どうしてでも。でないと、ミキに恨まれるもの。あの子、センサーが好きらしいのよ」
「困ったな、いずれそのうちミキとマキと、二人で一緒にプレイしてもらおうと思っただのに」

「そんなこと恥かしいわ」

「でも二人きりでなら、チョコチョコやってるんだろ。ミキがそうだった」

「どんなことだったの？」

「縛って虐めてやるんだって」

「ウソやわ、そんなこと」

「ウソなもんか。いろいろと細かく、微に入り細に亘って話してくれたよ」

「いや、いや、きかない。センサーだったらいいけど」

「どうして私ならいいの？」

「センサー男だもん」

「フーン男ね」

言わず語らずのうちに彼女は自分の性向を告白している。SM的なプレイを、ミキと夜毎行いながら、やはりそれを口に出していることは、若い娘の羞恥が許さないようであった。

「今夜は覚悟してきたんだろ」

「縛られること？」

「ああ、そうして写真とることを」

「羞かしいわあウチ……。でもそんなことするセンサーに興味あるわ」

彼女は私に凭れかかるようにして、ひとと体を寄せてきた。そうした言葉のやりとりによって、マキの女体は既にしめり始めていたのかも知れない。それが私にぐっと寄り添う行為になって現われたと考えても、あながち

穿ち過ぎた推理ではなかった。

「ミキと一緒にだと、どうしても嫌かい」

「うん、どうしても」

「でも、ミキはいいっていつてゐるんだよ。マキさえよければってネ」

「毎日一緒に暮してゐるでしょ。それだけに、若しウチがセンサー好きになったら、お互いに気拙くて困ると思うの」

「好きになられたら、困るのは私だよ。もっと割切って、君達二人の夜のプレイを記録に残すという、そんな気持でいいじゃないか」

「第三者がいたらそんな気になれるかしら。きつと照れてしもて、何も出来へんと思うんやけど……」

「リードするのは私だから、あんた達はただ任せておいたらいいんだよ。な、その気になつてくれよな」

「ウン、まあ、もういっぺんよう考えてみます。でもセンサー、えらいウチに御執心やのね」

「どちらも可愛いくて、プレイを理解しているからさ。それに君等女同志でプレイしていても、真からのレスピアンやない。いうならば、男性の相手がいないので、仕方なく女同志でプレイしてゐるって感じ。そうと違う？」



「かも知れしまへん。先月、ミキと一緒にセンサーの緊縛指導しはった『責め地獄』みにいったんやけど、あんなスゴイ映画見始め。あれみて、気がおかしゅうなって、あの夜ミキえらいハッスルして、ウチは大分いじめられたんよ」

「自分からのぞんどくせに——」

「ウソ——、ミキからいい出したんやわ」

「どちらでもいいけど、あの映画の緊縛シーンは、あれでズタズタだよ。実際は、あの映画一本分の時間で、ワンカットの縛りだからね。何しろ女優さんを縛るために、十五日間も撮影所へ通いつめたんだからね」

「あんなの、ウチ、とてもよう辛抱せんわ」

この娘は緊縛のトリックは知らない。それだけに、見た目の凄さに圧倒されたのであろう。

数度立寄った寿司屋のノレンをくぐると、夕食時の混雑の中を縫って並んで腰を降ろす。ビールを注文して寿司をほおばると、私達のプレイの話は、そこで中断された。

× × ×

太融寺附近のアベックホテルへ、しけ込むつもりでいたのに、この娘何を想像してか、あんなホテルは羞かしいからいやだとい出した。娘の潔癖さか、それともこの辺りマキの理髪客が多いからであろうか。やむなく引返して、Oホテルの入口の扉を押す。冷気が肌に、じかに沁み渡ってくる。かなり高級なビジネスホテルだけに、全館に冷房がゆき亘っていた。フロントに数少ない和室を頼んでみたが満室で、やむなく洋室へ入る。予約なしの飛び込みだから、仕方もあるまいが、どうも洋室は私にとって苦手であった。予想通り、部屋の大半を占めるツインベッドが、情事やプレイの部屋には、およそふさわ

しくなく、唯、仄赤いルームライトに照らし出されてドッシリとした雰囲気を感じ出してゐるのが、松山真樹子を安堵させたらしかった。

バスは、一人用の浅い水色のポリバスで、一米と離れぬ目の前に洋式便器が据えつけられてある。

松山真樹子にバスを奨めると、私に先に入ってくれといって、なかなかえんじない。どこことなくこの娘には、男性優位の、しおらしい情念がひそんでいるようであった。

私にとって、この日三度目の入浴——。もうこうなればさっと汗を流すだけのことで、鴉の行水以上の早さである。狭苦しいポリバ

スにつかっていると、扉が開いて、おずおず真樹子の顔がのぞく。

「どうしたの、一緒に入る？」

「そやないんです。ウチ、オトイレへ行きたいんですけど、どこにもないんです」

「トイレは私の目の前だよ。どうぞ——」

ポーカーフェイスが、流石にびっくりして眼を丸くすると、あわてて扉をしめた。

長風呂して頑張ってた面白さ、と思う反面、私にそれだけの根気がなく、シャワーをあびて早々に飛び出す。濡れた素肌に、ヒンヤリとした冷房の空気が、快く毛穴の隅々まで浸透してゆく。

入れ違いに松山真樹子は、あわただしくバスへ飛び込んでいった。目的は放水——。

待てど暮せど上って来ない。しびれを切らす程長い時間、彼女は丹念に女体のすみずみまで洗い清めていたのであろうか。

次々と月毎に代る女性に、私の心はプレイに対して麻痺していても、彼女にとっては、今宵の行事が、それこそ清水の舞台からでも飛び降りるような決断を要したのであろう。

男対女の、二人きりのホテルの一室で、これから起ころうとするSMのプレイに対してとつおいつ思案にくれ、不安と淡い悔恨と、未知の期待に、千々に心を乱しているのが、入浴の時間の遅さとなって如実に現われていた。催眠にかかったように、このホテルまではスラスラときたものの、さてこれからのプレイに対して、自分をどう扱っていいのか、松山真樹子自身、途方に暮れている様子であった。

長風呂でのばせ上った真赤な顔で、マキはオズオズと部屋に現われる。湯上りの浴衣をキチンとつけ、パンツやシュミーズもその下に着用しているらしかった。いきなり激しいプレイに取り掛れば、この娘はショックで泣き出すかも知れない。この純真な彼女の心を傷つけぬよう、ジリジリとプレイへ誘導してゆくのは、かなり根気のいる仕事であった。

昼間の村田キヨ子は、かなり積極的だったので比較的扱い易かったが、ポーカーフェイスのマキは、感情を顔に現わさないだけに、果たしてどんな心理で、今私と対峙しようとしているのか、その心が掴みにくかった。

激しい羞恥、極度の不安、未知へのアバンチュール、内潜する被虐への願望——。そう



した一切のものが、ポーカーフフェイスに包まれて、喜怒哀楽を忘れた能面化した表情にくりかえていたのである。

ポーカーフフェイスの崩れるとき、それが彼女の本心の吐露されたときであった。

おずおずと佇むマキに向かって、私はベッドの端に腰を降ろして、手招きをしながら「おいでよ、マキ。長い入浴だったね、さあ疲れただろ」

と優しさをこめて呼ぶのであった。

躊躇しながらも、あやつり人形のように、マキは手招きに応じて、よろめくように歩を運んでくる。

「どうした——怖いの」

「ウン、怖い。だって生れて始めてやもの」

「そう、男と二人っ切りでホテルへ来るなんてね。でも心配しなさんな、マキが嫌なら何んにもしないから」

そっと背後から肩に手をやって、ベッドの端に並んで腰をかけている。私はそれ以上、何も云わない。彼女の出方を黙って観察していたのである。その空白の重圧に負けて真樹は口を切った。

「何もしはらへんの？」

「何を？」

「いろんなこと……」

「どんなこと」

「それなら、ここへ来た意味ないじゃない」

「いいのかね」

「脱ぐのでしょ」

私は黙ってうなづく。

浴衣はさっと思いきりよく脱いだものの、彼女は、ブラジャーを外すのに数分手間どった。やっと決断したようにそれを外すと、あわてて両手で胸を抱える。私は意地悪くそれを見守っている。

「これでいけない？」

泣きべそをかいたような表情で、私に哀願する。ポーカーフフェイスが少し崩れた。

「面白くも何ともないがね、まあいいや」

ベッドに横たわらせて、お付合いの一枚。

「ミキの縛られた写真みせてほしいわ」

呟くようにいう。

「奇クのハントでみたのだろ」

「ええ、でもあれだけじゃないんですよ、本当はもっとスゴイのとりはったのでしょ」

「そりゃ撮ったけど——」

「それをみたいの」

「どうして？」

「ミキ、羞かしい恰好で縛られている時、ど

んな顔してるかと思って」

「マキも本心は案外に好きなんだね」

「そうやないの、あの子いつもウチを虐める方に廻るでしょ。だからあの子の虐められ、縛られてる姿にスゴク興味あるの。ウチら二人の時と反対やから」

「ミキは両刀使いだ。でもどちらかというと虐める方が好きだってさ。私が縛ったのを、自分の体で確かめて、それを参考にするんだなんていったよ」

「ウチに——」

「そうらしい」

「センサー、ウチを縛りはらへんの？」

「いいんだね」

「その覚悟でついできたんやもの」

私はニヤリと北叟笑むと、真樹子に近づいた。いよいよ機は熟してきたようである。

手始めは乳房を中心に、胸縄をかけて後手に縛り上げる。ポリウムのある体に比較して、オッパイは尋常の発育振りであったが、豊かに膨れて、汚れのない清純さが溢れていた。パンティをつけた俤、ベッドの端に腰を降したマキを一枚撮ってから、私は矢庭に彼女の上半身を押し倒した。弾みで二本の脚線が宙におどる。パンティに手を掛けると、呀っ

という間もなく、一気に引き下げる。

「いやーッ、センサー羞ずかしい」

あわてて両腿をピッタリ組み合せて、マキは果敢ない抵抗をつづける。

「さあ、起き上って、そこへ立って御覧」

命令するようにいうと、もう覚悟をきめたのか、マキは体にはずみをつけてさっと立上った。精一杯蔽うように、上体をかがめ込んでいる。その羞恥のういういしさが、反ってなまめいた雰囲気を出していた。

しゃがませたり、ベッドに転がしたり、中腰にさせたりして、かなりのフィルムが、マキの裸身のあらゆる個所を這いなめずるようにして一コマ一コマ永久にしるしてゆく。

縄捌きをかえて又数回——。次第にマキは裸身に馴れてきたのか、貝殻のように固く閉じていた両腿を、いつしかそっと開くようになってきていた。

いつものくせで、こんな時、パイプで女の官能を試してみたかったが、生憎と車に置き忘れてきた俥である。ままよ今宵は、次のWプレイの前夜祭ぐらいの軽い気持で、彼女をここまで飼育することでコト足れりとしておこうという気になって、形を変えた縛り方でオーソドックスに、撮る方に専念することに



腹をきめる。ひとつは、昼の激しさが未だに尾を曳いているのか、も一つ緊縛のプレイに対する情熱が持てないせいもあった。やはりこの暑さの中で、一日に二回ものハントは、私の体力の限界を超えているように思われるのであった。

マキを縛ってフロアにひざまずかせた俥、

私はベッドに腰を落とすと、タバコに火をつけた。深く一服吸ってから、マキの唇へタバコを持ってゆくと、固く口をつぐんで開かない。鼻をつまむと、みけんにしわをよせて、苦しそうに口を開く。いやいやするの構わず、片手で髪を掴んで煙草を咥えさせる。

煙がのどを通過して、瞬間、はげしく咳きこむ。如何にも苦しそうである。

「イヤッ、センサーやめて……ウチ吸えしませんの。ひどいわ、ひどいわ」

マキは恨めしげな顔をして、尚も激しく咳きこんだ。彼女にとっては眼に涙した拒否でも、私にしては、カメラに飽いた挙句の、ほんの軽いタバコ責めのちょっとしたイタプリに過ぎなかった。

「もうようそうか——」

フト呟くように本心が口をついて出る。

「えッ、どうして？」

「疲れたよ、何となく……」

まさか、昼間の激しいプレイの疲労ともいえないので、口を濁す。

マキは途端にベソを掻いた。

「センサー、ウチがキライなんですよ。ミキなら、あんなに面白そうにプレイしてるのに」

「そうじゃないんだ。隠しても、いずれハントに書けば分かることだけど実の処、おひるに一人、京都で撮ってきたのさ。その時、すごく頭が痛くなって、何だか体が疲れたらしいのだよ。マキのせいじゃない」

タバコをにじり消すと、私はフロアに膝をついて、そっとマキの肩に手をやる。縛られた儘、彼女は私の懷ろに凭れ込んで来て、ソツと顔を埋めた。

「怖いよ……そのくせ、もっともっとされてみたい気持。自分で自分が分からない」

マキの裸身が私の腕の中で、微かに震えている。そっと抱きかかえて起こすと、その俣ベッドに並んで転がる。二の腕の縄が深く喰込み、両手首の縄の強さが、マキの指を白くしていた。唇をよせると拒まなかった。つぶった瞳に、微かに流れる愉悅のひらめき——

女はこうした環境での愛撫に、いつしか陶醉を覚えつつあった。それは被虐の悦楽でもあろうか。そっと片手を……わけてゆくと、両の股が弛緩して力を抜いていた。それはいつでも、その俣情事に滑り込めそうな状態を構成していた。マキは或いは、それを秘かに期待し、願望していたのではなからうか。

私の視線がなめらかに滑ってゆく。マキの

控え目な呼吸が、徐々に喘ぎに変わり始めていた。じっとつぶった俣の両の眸の眼尻に、妖しい淫蕩の翳りが流れていた。

私は女の観念しきった顔を凝視しながら自分でも分からぬ遠のく心をどうしようもなかった。私の淫らな視線とは反比例して、大脳神経は心の焦りを嘲笑するかのように冷却してゆくのであった。濡れた女体を眼前にしてこの割り切れぬ心の断層にはまり込んで、私は独りあがいていた——。

× × ×

その断層を埋めるかのように、私はマキに對して、かなり強烈な緊縛を試みていた。心なしか私の縄を振う手捌きは荒々しい。

折たたみ式のパイプ椅子をツインベッドの境界に立てて、松山真樹子をその上に行儀よく正座させ、持参した三本の斑ら紐を総動員しての緊縛である。マキは一言も発しないし私も亦無言である。そこには心の繋がりがプツリと切れた、いやな空気が漂っていた。

一本は首縄にして、乳房で振ってX型に縛り、二本目で胸縄にかけて乳房の上下をしめつけて腹をぐっと縛った。三本目の縄を後手につないで前へ廻し、デルタで一結びして、椅子ごと両腿をしめつけるようにして終る。

何重にも巻きついた二の腕に、縄は深々と喰いこみ、かたちよい乳房がポックリと突出して、はち切れそうに肉をふくらませていた。

松山真樹子はすっかり冷静に戻り、先刻のあの情熱を不燃焼の俣、深々と沈潜させて、例のポーカーフエイスの、やや不貞腐れた目付で、私のなすが俣に任せていた。

疼きかけ、陶醉にひたりかけた女体を、突如投げ出されて、中絶された、はかし切れぬ情念のほむらが身内にめらめらと燃えて、私の意地悪い仕打ちを恨んでいるかのような眸の色であった。そして今ここに展開されている緊縛に對して、マキは愉悅はおろか、色あせた緊縛のプレイに、ただ己むを得ずつき合っているといった風であった。

女同志の悦楽のプレイに馴れた被虐の想念は、私という男性に對して、未知の激しい願望を抱いていたのかも知れない。

ポーカーフエイスの裏に秘められた悦虐の願望が、小池美喜の話や、カメラ・ハントの月々のルポによって、膨れに膨れ上っていただけに、私のこの予想を裏切った行為に對して、女は失望落胆したようでもあった。

私のみたところでは、松山真樹子はバージンではなかった。女同志のプレイによる結果



ではなく、あきらかに異性を知った形容である。だからといって、それが忌避したこととは何ら関係なく、あの状態になれば、当然濡れてゆく女体はマキの責任ではない。

濡れそぼり、期待するマキを、どうにも処置しかねたのは、如何ともハッスルしがたき私自身の体の構造からであった。謂わば欠陥車にも等しい体が、マキの期待を裏切ったのである。

その鬱憤をはらすかのように、今こうして緊縛に精出していても、縛られる彼女の心情は、複雑でデリケートであった。心の通わぬ緊縛は苦痛以外の何ものでもない。さきほどあの尽深々と沈んでいったなら、恐らくマキはポーカーフェイスをかなぐり捨てて、ありの儘の女をさらけ出していたかも知れなかった。

一旦さめはてた情念の裸身に、いくら様々の緊縛を施してみたとして、それはもうマキ自身、むしろ屈辱にまみれるだけで、何ら快楽を伴わないことは、縛っている私自身一番よく知っている事実であった。マキの表情は苦悶にみちていた。私はカメラを手にすると閃光を前後より走らせていたが、果たして女は眉をしかめて訴えた。

「センサー、腕のところがすごく痛いわ。もうほどこいていただけませんか。何だかイヤになったの」

白々しい口吻で、なじるように言う。数枚とって、私はやむなく、その縄を解き放っていった。

さっと流れる白けた空気――。

椅子から降りると、マキは、大きく二度三度屈伸運動をして、さっさとパンティ、ブラ

ジャーをつけ始めていた。

はぐらかされた未遂の情事ほど、女を冷淡にさせるものはなかった。マキは顔を更に硬ばらせて次々と衣服をさっさと纏ってゆく。

その怒りがどこにあるか、私自身痛いほど分かっていたながら、今の疲れた体では、それに対応するだけの活力が体内にみなぎってはいなかった。

所詮、一日に二人のハントは、今の私にとっては、つくづく無理であることを、この時嫌という程思い知らされたのである。

私のエネルギーが、昼で燃焼されていることを、マキは敏感にも感じとっていた。それは女の本能のようなものであったかも知れない。マキの口でいえない憤り以上に、私のみじめな、やり切れない気持は、それ以上のものであった。今更、齒の浮くようなおつしようにもいえず、さりとて、もう一度マキを抱きにいったとて、きつとピシリと手ひどく反撥されることは分かっていた。今宵を愉しく過ごそうと、内心激しい期待を抱いてきただけに、マキの失望も大きかったに違いなかった。

松山真樹子はすっかりポーカーフェイスをとり戻していた。喜怒哀楽の変化をチラリと

も覗かせぬ、能面の表情で、みなりを整のえて、黙って立ちつくしていた。この女の激しい心の葛藤が、その能面にまざまざと表現されているようで、こうなると女は、もっとも扱いにくくなるのであった。

四年前の春、神戸で、刑部典子と志村善子を一日に二人ハントしたあの時の勢にくらべて、四年間の体力の衰えは、今こうして無慚な結末となって、カラストロフに近い別れを迎えようとしていた。

「帰ろうか」

強いてさりげなくいう。

「ええ」

短かくうなずくと、松山真樹子は、ボーダーレースのミニの裾を翻えして、先に立って部屋を出ていった。

「御機嫌斜めなんだね」

「……」

内心腹立たしい思いで、うしろから声をかけたが、返事はかえらなかつた。実際は未遂を喜んでいい筈なのに、その気になって、力を抜いた体をその俚にされた時、女は未遂に對して、激しい屈辱を抱くものなのであろうか――。

せめてパイプレーターでも持参すれば、一

応納得させられたのにと、悔んでもすべてはあとの祭り――。気を持たせておき乍ら、爾後の投げやりな態度がいけなかつたのだと、苦い自省が私の心をよぎる。

夜の大阪は相変わらず、熱気がこもって、むし暑かつた。

「暑いね、何か冷たいものでものんでゆかないか」

誘ってみたが

「ええ有難と、でものみたくも、たべたくもないんです」

ニベもない返事が返って、この蹉跎はどうにも救いようがなかつた。

曾根崎警察署の前でマキは足を止めた。ポーカーフェイスを崩さず、

「ではここでお別れます。センサーはエゴイストね、自分さえよければいいってもんやないわ」

それがいいたかつたのだろうか。急に硬ばった表情をくずすと、努めて笑顔をつくり、小さく呟くようにサヨナラというと、さっと小走りに馳けていった。

「……」

咄嗟のことで、弁明する間もなかつた。女

は私との悪い印象だけを、傷心の胸に烙印して去っていったのである。

赤い月が、私の愚行を嘲笑するかのようになオンの街の、ビルの谷間からニユツと覗いていた。

重い心を引きずるようにして、私はモータープールへと足を運ぶ。

これでマキとはもう縁切れかも知れない。秘かに小池美喜とのダブルプレイを期待していた私のアテは、はかなくもまんまと外れた感じである。

それから三日あとの夜の十時――。思いもかけぬマキからの電話があつた。

「センサー御免なさい。エゴイストやなんていうて……。エゴイストは、このウチやいうこと、夜独りねて考えたら分かりました。お願い……もういっぺん、改めて近いうちに会うて下さい」

げに不可思議なる女心よ――。消えかけた灯がパツと明るくまたたいて、再びあかかと照り映えた思いで、私の電話口の相好はいつしかひとりでに崩れていった。

×

×

×

×

黒い
日記帳



ズベ公を締めあげろ

加藤 広 夫

「黄金の指」だなんていったって、ギャンブラーなんてもともと陽の当る場所には出られない渡世人だ。その「カード屋」の俺は、人間の屑みたいなヤクザだが、暴力団には憎悪の念を持っている。だから、ヤツら同士がやり合うのは面白く、ザマアみると舌を出してやれることだ。こちらは逃げ廻ってまき込まれないようにさえしていればいい。俺は今まで、身近のデイリでもそうしてきた。だが、そんな俺が、今度ばかりは高見の見物とシャレてはおられぬ事件が起こった。

俺がワラジをぬいでいる〇〇会と、仲のよくない××組とのイザコザのとぼっちりで、

「白百合の令嬢」が拐かされたのだ。

令嬢の義理の母とゲームして、その秘密を知られたことは以前に書いた。俺は、あれから令嬢の前に土下座せんばかりにして謝り、夫人とは二度と逢わないことを誓って、どうにか内密にしてくれることを承諾して貰ったのだ。女に土下座するなんてことは、俺の今までに考えもしなかったことだが、あの気高い白百合の精のような令嬢がその相手なら、素直に謝ってもあたりまえに思える。俺は、きっと一眼見たときから、自分の意識以上にマイッテいたんだろう。暗い俺の心に初めて

点灯された清らかな光ともいえる。

その令嬢が誘拐された。——俺は受話器をとり落とししかけた。

あれから何度も誘われたが、令嬢への誓いを守って断り続けてきた夫人の声が、電話を通してうわずっていた。いつもの鼻にかかった甘い声とは別人のようだ。それは、義理を超越した「娘を憂うる母親」の祈りの声だ。俺の胸がじーんと締めつけられ、熱いものがこみ上ってきた。

俺はただちに活動に入った。アブク銭で手なづけてあったチンピラが四方にとんだ。

三日目に情報が入った。××組の手先となって、今度の誘拐劇におどったのは三人組のズベ公だという。蛇の道はヘビ。俺は内心、感心しながらズベ公の溜り場を探り始めた。さすがに名前まではつきとめられないらしいので、金使いの急に荒くなった三人組とでもあたりをつけなきゃ仕方がない。どうせ、タシマリと組から貰ってやがるに違いない。

ゴーゴー酒場、洋酒喫茶、ボーリング場、ズベ公の数の多いのに改めて驚く。足が棒になりかけた頃に浮き上ってきたのが、マキ、チカ、レイ子の三人組だ。念のために洗ってみるとますます臭い。確証を掴みたいが、ぐ

ずついている訳にはいかない。

「かまうもんか。絞り上げてハカそう」

俺は三人組に誘いをかけた。カードをちょいと捌いてみせてやると、用心していた眼の色が、たちまち神様をみるような色に変わったんだからズベ公なんて甘いもんだ。この調子で札束につられやがったに違いない。

俺は三人に、「ラスベガスの社交場への招待」を、餌にチラツカせてやった。案の定すぐ喰いついたのを、ドライブにことよせて、〇〇会の会長の、山奥にある別荘へ誘いこんでやった。予定のコースだ。豪華な部屋にズベ公達は、眼をパチクリやってやがった。

「ここ、おにいさんのヤサなの？」

「やっぱり、洋行帰りはイカスじゃない」

「なにしろドルなんだからね」

わけの分からないことをほざいているのに俺は細工したカクテルを並べてやった。眼の前でシェーカーを振ってやったもんだから、ヤツら一息に空けやがった。見覚えながら、うんと口当りをよくしてやったからでもあるんだが、おかげで薬の効くのが早かった。

俺は、ゲーム以外に女を縛るのは初めてだし、俺の手で衣服をハグのも初めてだ。ハダカにしても知らん顔で、グニャグニャしたの

を縛り上げるのはやっかいだし、だいいち、面白くもなんともない。手間をかけてる暇が惜しいから仕方がないが、こんなことは頼まれたっていやなこった。

「こんな女どもが、あの清らかなお嬢さんを誘拐しやがったのか！」

俺は信じられないような気持で、まだ睡りこけている三人の女の裸像を睨みつけた。

グンナリしたままのマキが、両手を頭の上で合掌するように縛られてクサリに繋がれている。クサリが上れば、両手吊りにぶら下がるはずだ。チカとレイ子が、後手に縛られた上に背中合せになっている。それぞれの腹に喰い込んだロープが臍の上から尻をまわって繋ぎついて、そのロープの中央部が二人の合わさった背中の中を通って、マキのクサリと一緒に吊り上げ式のシャンデリアの滑車に掛かっている。この仕掛けを聞かされた時には、ヤクザのやりそうなことだと軽蔑したのだが……

さすがに、女のハントゲームには年期の入った俺だ。つまらねえ、といいや縛ってもこれだけの縛りかたが出来るんだナ、などと自分の手際に妙な感心のしかたをしながら、ソファで一息ついた。

たばこが半分ほど灰になった頃、後手のレイ子がちよっと身じろぎをした。

「よし、いよいよやるか！」

俺はたばこを捨てて三つのハダカ人形に近寄った。背中合わせで転っているチカとレイ子の、ギユウとくいこんでロープの姿がかくれてしまっているような乳房を、両手でそれぞれひっ掴んだ。ズベ公でもやはり女だ。けっこう悪くない手応えだが、俺はゲームをしている訳じゃないから遠慮はしない。

グイーとそのまま引上げて、パッと手を放す。ドスツと二人が床に音を立てて、ムーンといいやがった。

「オイッ、起きナ！ テメエらのオネンネの時間はもう済んだ！」

俺は三人の女を、ところきらず蹴り上げたり踏みつけたりしてやった。

「ナ、ナニすんのよう」

俺の足の下で声が上り、足の裏にもぞもぞする反撥が起こった。やっとお目醒めになったらしい。マキは纏められた両手について起き上った。後手の二人は俺が引き起こしてやった。

最初から妙チクリンな顔付のヤツばかりとは思ったが、キョトンとした三人の顔はみら

れたもんじゃない。顔はなくて、縛られてさ
らけ出している体だけならよかったんだ、こ
いつらは……。

『チキシヨウ。なんの真似だい、これは！』

『ヤイツ、体が欲しいんならそういやいいじ
やないか、縛るなんて……ホ、ホドケッ』

がぜん喧しくなった。グニャグニャしてい
た体が生氣を取り戻してもがき出した。ちょ
っぱり俺の気持ちにゲームがしたい兆しが現わ
れたようだ。俺はあわててそれを打ち消す。

『女を裸にして縛りたいのは、あたいのダチ
公にもいるけど、おにいさんもそのクチなの
かい？ それならそうと……』

『やましいッ！』

俺は、物識り顔になっていうマキの言葉に
ギクッとなって、蹴りつけてやった。

『なにスンノヨッ。せっかく人が、それなら
そうつき合ってやろうと……』

『ウルセエッ！』

転びながら毒づくマキの横面を、ギニッと
踏みつけてねじってやった。この際、あまり
図星を指されるのは具合がよくない。

眺めたチカとレイ子が、明らかに恐怖した
らしく背中合せの肩を寄せ合った。そうだ、
そうこなくっちゃあいけない。

踏みつけた足をどけてやると、マキのやつ
がのろのろと上半身を起こし、まとめて縛ら
れた両手で踏みつけられた頬を押えた。繫っ
ているクサリが、ムッチリした太腿にドクロ
を巻いた。俺は、無言で片方の壁にあるスイ
ッチを押した。一杯に降ろしてあったシャン
デリア用兼用のクサリが滑車をキシマせて巻
き上げられ始めた。一斉に見上げた三人のズ
ベ公の表情が、我身の運命を悟ったとみえて
ひきつった。

『ど、どうしようっていうんだヨウ』

吊り上った三人は一つに固まった。それぞ
れにロープの接点は一カ所だから、こう吊ら
れると相当に痛いはずだ。三人三様に腕くも
んだから、互いに蹴り合い押し合う結果にな
って大きく揺れている。

『痛いかな？』

俺はニヤニヤしながら訊いた。半泣きの声
が、異口同音に返ってくる。

『オ、オロシテヨウ』

『降ろして欲しいんだナ』

『ア、アタリマエヨウ』

『どこへ連れてった？』

『アッ！』

三人が同時に声をのんだ。いよいよ、こい

つらの仕業に間違いない。

『いえッ。いったヤツだけ降ろしてやるッ』

『……』

『どこだ！』

『な、なんのことなんだヨウ』

マキが顔をしかめながらいった。コンチキ
シヨウ、シラを切るつもりらしい。さすがに
ズベ公だ。一応はヤクザの仁義を守ろうとす
る心根はあるらしい。だが、それはこちらも
計算済みのことだ。この状態でいつまでもつ
か。俺をアマク見るならそれでもよからう。

『俺はな、オメエらの裸おどきもキライとは
いわねえ。だがな、もちっとマシなのを見慣
れてるんで、あんまり有難くもねえんだ。も
っとも、駄菓子もたまにや喰ってみてもいい
んだがねえ』

俺は誰の足だかわからないが、一本をひっ
つかんで撫ぜ上げてやった。ツラは願ひ下げ
の連中だが、太腿の肉付きは、やはり女だ。

まっかになって一際もがいたのはレイ子だ
った。俺の手はぐっと伸びて隣の乳房の先っ
ちょを抓り上げてやった。マキが呻いた。な
んでも公平主義の俺は、今度はチカを見定め
て、一本引抜いてやる。

『どうだ？』

『いえないことぐらい、わかってるだろ』
チカがまっかな顔で喚いた。そりゃそうだろう。しゃべったことが組に聞こえたら、彼女達は無事では済まない。だからこそのお膳立てだ。

『だが、いわなかったも同じじゃないかな』
俺は、もがき回る六本の肉付きいい足を、蹴られないように用心しながら、叩いたり、撫ぜたり、抓ったりしていたが、ジワジワ責めでは時間の無駄だと気がついた。

こいつらは、俺が察した通り、けなげにもズベ公道？ を心得ているらしい。こうしている間にも、あの令嬢はどうされているかわからない。ひよっとすると××組のスケベエ野郎どもに、ハダカにされて縛られたうえ、あのキレイな肌を……と思うと俺はいたたまらなくなってきた。自分のしていることは棚に上げて勝手なことだが、それが人間の考え方というものさ。第一にこいつらとお嬢さんとは比較になるもんか。

俺は用意させて置いた水槽を押してきた。ウンウン唸っているズベ公達の真下に据える。と車台を外し、洗面所からひいてあるホースで水を満しながら、底に蠢いているウナギの動きを眺めてみた。僅かの水に固っていたウ

ナギは注がれる水量と共に活潑さをとり戻した。百匹は入れて置くようにいいつけてあったが、この分ではもっといいそうだ。

水槽はさほど大きくはないが、押しこめば三人ぐらい入るだろう。温泉の湯舟じやあるまいし、ちいっと狭いのは我慢してもらうとしようかい。水が溢れ出ると、じゅうたんがもったいない。半分ぐらいでいいだろう。

『オ、オネガイ、降ろしてーッ』
誰かが絶叫に近い声を出した。

『ああ、降ろしてやるともサ』
俺は気軽に応えてスイッチを押した。連れ合っている三匹のメスが降りてきた。

『キーッ。ナ、ナニヨ、コレ』
最初に足先が水に触れたのは、一番長く伸ばされている両手吊りのマキだ。続いて、チカ、レイ子の声。

『いってくれないから仕方がねえんだ』
そういいながら俺は、水槽の周りを一巡してみた。案の定、三人ではちよっと狭すぎるようだ。腰やら腹が水槽の縁に支えている。

『もうちっとお詰め合わせ願いたいもんで』
『キャー、やめてッ！』

俺が、支えてハミ出しているのを押し込み、に掛かると大仰な声をハリ上げやがる。かま

わずやると面白いようにへこんでは、ずるずると落ちこんでゆく。見た眼ほど狭くはないらしい。深さはだいたいミゾオチぐらいまでは入れるはずだ。

『イヤッ！ たすけてえ』

『アッアッ。ダ、ダシテヨウ』

三人を押しこむと、折角用心して半分ほどにして置いた水が溢れ落ちた。じゅうたんが濡れちまったが、もう仕方がない。全面をびったり埋めつくした三人の肉体と、水槽の縁の間にはさまって何匹かのウナギがもがいている、可哀そうに……。悪く思うなよ。

『オ、オネガ、イーッ。ヤ、ヤメテーッ』

俺は何もしていないのに、それぞれが同じようなことをわめき、三人三様にウネッている。水槽一杯に侵入してきた異様な物体に、折角与えられた僅かな遊泳場所を占領された百匹余りのウナギが、抗議攻撃をかけているに違いない。

そうだと、その白いケツタイなヤツどもは不法侵入者だ。やれやれ、うんとやれ。思いきり攻めたてる。

『イヤッ、ダメッ、ゴメンヨウッ』

三人のズベ公の悲鳴か歓声かしらないが、とにかく絶叫がミックスされて喧しい。

『そろそろ、いう気になったと思うがね』

俺は、ウネッているレイ子の顎をすくい上げて、両頬にビンタをとばしてから訊いた。

『ダ、ダシテヨッ』

『どこだッ!』

『と、とにかく出してッ』

『いうんだナ?』

こっくりと頷いたのを見て、俺は考えた。いいだろう、こいつだけ出してみよう。もし出たいだけの嘘だったら、それはそれで次のテも用意がないわけじゃなし……。

俺はナイフで、レイ子とチカの連繋ロープを切った。後手にしてあるのはそのままに、担ぎ上げるようにして引き抜こうとしたが、押し込む時と違って、容易なことではない。仕方がない。滑車に繋がっているマキのクサリを外して、レイコの後手のロープにひっかけてスイッチを押す。

『イ、イイ、イタイッ』

多分レイ子の悲鳴だと思う。だがやはりモーターの力は強い。ジワジワだが、俺の力ではとても無理だった引抜き作業を、こともなくやってのけてくれた。

またもや宙吊りになったレイ子の体から、水滴と同時に何匹かのウナギが降った。

『さあ、いえ。どこだ?』

『オ、オロ、シ、テ』

体重のかかった後手はこたえるに違いないが、レイ子は絶え入りそうな声だ。ちいっとオーバーだと思いが、俺はスイッチを降下に押し、抱き取って床に転がしてやった。

『フーッ』

大きな吐息で、レイ子はじゅうたんに長々と足を伸ばす。

『はやくいえ。どこなんだ。え?』

俺は、そんな恥も外聞もほうりなげたようなレイ子の肢体を見降ろして訊いた。

『ちょっと息をつかせてよ』

レイ子は薄目を開けて、フテクサレた態度でぬかした。途端に俺の左足が、大きく波打つ胸の丘を踏み潰した。

『グエッ!』

伸びきっていた肢体がハネルように二ツに折れ、縮こまって呻く。

『ナメるんじゃねえッ!』

やっぱり。そう感じとった俺は、或いはと予感していたのに、自分でも意外なほど腹が立った。こんなショウベンくさいオカメチンコに甘くみられてたまるもんか。よしッ、もうてめえからは聞いてやらねえ。

カッとなった俺は、踏みつけた足を思いきりにじっておいて、さっきまでチカと連繋してロープが長くまといっているのを取り上げた。腹はまだ絞り上げたままだから世話はない。臍の上から尻へ廻っているやつを、ぐいっと引っばって後手に通し、Uターンさせたやつで太腿を巻いて絞り上げ、もう片方に移して同じように巻き上げてまだまだ長く余っている。再びUターンさせて、首の後から、髪の毛をひっぱってのけぞらせた唇を割って噛みこませ、二巻したら丁度足りた。なんともヤヤコシイ縛り人形だ。

『ウウ、ウウウウ』

なにか盛んに云ってやがるが、もう遅い。バシッと一発、尻っペタをハリとばして転がすと、飾りパーセットの戸棚から、これも用意の泥落しを取り出した。よく自転車車軸にとりつけてあるヤツだ。いわゆるケムシ。しかも、細い針金製で、何に使うものか知らないが、会の倉庫にはたくさんある。俺は眼についたから持ってこさせて置いたのだ。

ゲームでは、こんな色気のない小道具は絶対に使う気にはなれないが、真底、腹の立つた今の拷問用には役に立つ。

俺はそれをフルに使った。鋭くとがった何

十本かの針金の先は、何匹かの本物のケムシのように、レイ子の肌とロープに挟まって刺しながら、俺の手足でゴロゴロ転がされるレイ子にとりついて、たちまち俺の一番キラいな血を吸い上げ始めたのだ。

『やめてッ！ おねがい。あたいがいう』

絹を裂くような声にふり向くと、水に光る肌をふるわせながら、両手を前で縛られたままのマキがまっさおになって立っていた。吊り上げていたクサリを外したままだったのでひとりで這い出したらしい。チカの姿は見えない。たぶん、広くなった水槽に、後手のままでウナギと遊んでいるんだろう。

俺は、黙って内ポケットから拳銃をとり出した。マキが気狂いのように首を振って何か叫んだ。

俺はその拳銃を、パーセットの棚に載せ、ヘタリ込んだマキの傍にしゃがみ、その髪を掴んで顔を仰向けさせた。膝に柔らかな重みがかかってきた。

『いいか。俺が出てったら、おめえが誰かの縄を解いてやれ、一人解きゃあ、後は簡単だろう。後のことは俺の口出しやあ無用ってとこだが、出来るだけ××組の眼につかねえように気をつけたほうがいいんじゃないか。』

あの世界のハライセはどこへとぶか、知らねえことはねえだろう？ おらあゲームの……いや、女を泣かした後で金を出したことはねえんだが、今度ばかりは別だ。三十万ばかりじゃどうなるもんでもねえが、これだけが持ち合せの全部だ。旅費にでもして貰おう』

俺はサイフを、マキのそり返った胸の丘に載せてやった。

マキは狐につままれたような表情で、俺の手に髪を掴まれたまま見上げている。

『あのハジキは万一の時の脅し用だ。俺の背中に向けたっていいんだが、なるだけブツ放すのはやめとくこったナ。わかったかい？』

じゃ、話して貰おう、お嬢さんはどこだ』

マキは放心したように白状した。嘘ではなさそう。

俺は、隠し戸棚を開けて、ガンベルトを出し、締めこんだ。銃はブローニング・ハイパワ―十三連発を用意して置いた。

『ありがとよ。痛いめさせて済まなかった。

だが、××組のリンチはこんなもんじゃねえと思うから気をつけナ』

俺は、ポカンとしてゐるズベ公にそういうと、大急ぎでとび出した。

町まではいくらすつとばしても大丈夫だと

思っていたが、案外に車の数は多いし、白バイも走っていた。俺はジリジリしてハンドルを握りながら、一計を思いついた。

ガソリンスタンドに車を止め、電話にとびついた。〇〇会に連絡して、令嬢は救け出すから安心してナグリ込みをかけるっていうてやった。××組にも、マキの代理だということ、〇〇会の襲撃を教えてやる。

すぐに車をとばして問題の、お嬢さん監禁の場所に走った。海岸に面した一戸建の家で青い屋根と、丸く突き出したベランダが目標だ。それらしいのはすぐわかったが、見通しがよすぎる。仕方なく相当に離れた家のかげに車を置き、道の反対側の松林に隠れながら近寄る。出来るだけ近くで様子をうかがってみると、やはりベランダに三下らしいのが立って見張ってやがる。忍びこみにくい、これでお嬢さんの居るのは間違いない。

俺はジリジリ這い進んだ。と、とつぜんその家の門が開いて、十数人の人間がとび出してきた。俺はギョッとなって銃を構えた。だが男たちは続いて出てきた車と、トラックに乗りこんで、俺の隠れているほうは見返りもせず走り出した。

俺はホッとして思わずニヤついた。きっと

さっきの電話が良かったのだ。今頃はヤツら同士、ドンパチ始まったに違いない。きっと手が欲しいもんだから、この見張りの野郎を呼び戻したんだろう。そこまで考えはしなかったが、これは思わぬ副収獲。ザマアミロ。

だが、ベランダにはまだ三下らしいのがいやがる。久しぶりに射的の腕をみせてもいいが、お嬢さんが危い。俺は、運を天にまかせて、ベランダの見張りの隙をうかがい、道を走り抜けてブロック塀にとりついた。

はりつくように横手に廻り、庭の木蔭を利用してとび込む。人影はない。家に忍び込むと、ちょっと小さいが、凝ったつくりだ。やはり別荘だろう。

「何人、残ってやがるか」

こそ泥のマネはしたことがないが、難しいものだ。そろそろ廊下を進んで、曲り角をそっとのぞく。しまった！ すぐ眼の前に二人居やがった。

とび上って仰天したのは、俺よりも向うさんのほうだ。俺はとっさにとび出して、拳法の一撃を見舞った。グツともいわずに一人がくずれた。残る一人は、何か喚いて走り出した。俺は銃で威嚇することも忘れて追った。どちらが侵入者かわからない。

駆け上った階段のおどり場で、やっと気づいて銃を構えた。一步踏み出した眼の前を、ごう音と共に風がかすめてとび抜けた。眼尻に男の影がよぎった。

「クソッ」

俺のハイパワーが横向きざまに火を噴き、男の影が伏せた。俺は思いきりとび上った。廊下の突き当りで変な構え方をしているやつからの発砲を避けたつもりだった。だが、その手のものは火を吹くものではなかった。らしく、弾はとんでこなかった。俺の銃がそいつに向けられると、がらりと投げ出されたのはアイクチだ。××組も、皆に行き渡るだけのピストルは持ってないらしい。せめて空気銃ぐらい買ってやりやいいのに、シケタ組だと思ったが、この際、いやな引き金を引かずに済むことは有難い。

俺はそいつにホールドアップさせて、ベランダから射ちやがったヤツの様子をみた。横射ちで倒せる自信はない。ヤツはきつと射ってくると思ったからだ。だが、どうだ。ヤツはブッ倒れたままもがいている。押えた右肩の辺りが血まみれだ。ずっと離れたところにライフルが転っている。俺はマグレ当りを心から感謝した。

『ほかに誰かいるか？』

俺は銃口でそいつの横面をこじり上げてやった。青くなつて震えながら、バカみたいに横に振る顔付は嘘ではなさそうだ。俺はそいつのズボンのベルトを抜きとり、後に回わせた手首を括り合せた。ぐいっと肩をこづいてやると、よろけた拍子にズボンが落ちた。青いパンツはいいんだが、うす汚れた感じがするのは、その下につき出した毛ズネのせいだ。俺のと余り変わらないようだが、妙にバッチイ感じだ。俺はペツと唾を吐いた。

『お嬢さんはどこだ。早くいえ！』

たたみ込む俺に、ヤツはガタガタ慄えながら横手のドアを顎で示した。

壁にハメ込みの洋服箆笥から、サルグツワに豊かな頬をくびられ、痛々しくも後手にされて、両足も揃えてめちやくちゃに縛り上げられた令嬢がころげ出た時、俺は思わず、教えたチンピラを殴りとばしていた。

あの清らかな白い服が無残に破れ、スナナリした二の腕や、豊さを秘めた胸元に、クツキリした縄痕をみせながら、サルグツワの痕を赤く充血させた頬が、俺の胸に埋められて咽び泣いた。俺は鼻の奥がむずがゆく、奇妙に眼尻が熱くなってくる感じだった。(了)

珍書探訪

英名二十八衆句より



斉藤夜居

たこともあり、当時ノ
ートに走り書きした雑
感をうつしてみた。

血の錦絵として知ら
れ古今にその類を絶す
る『英名二十八衆句』
は、浮世絵師、大蘇芳
年の名が高い。明治初
年の残酷血みどろ絵と
云う人もあるが、実際

浮世絵研究家吉田晩二氏は次の如く伝えてい
る。

「発狂してからはおとなしい患者であつた
らしいが、話をしていううちに暴れだし、
殺されるという幻影にさいなまれていたと
いう。殺戮の幻影がかれの本性であつたこ
とは、英名二十八衆句の作品が、すでに示
している。発狂の素因は、若くしてかれの
内に本性として内在していたことは明かだ
である。かれはその本性を理性で糊塗した。

社会的趨勢に順応するように糊塗した。そ
して世間的には成功したが、かれの身内に
は、苦しく二つの彼が相剋していたと思わ
れる。かれはついに、みずからに敗れたの
ではあるまいか」(『浮世絵』NO1昭

最近、季刊『浮世絵』36号(画文堂発行昭和44・2)を見て、英名二十八衆句全図がカラー版で掲げられているのに魂消てしまったが、同時によき時代になったものだとも思った。私も一時は二十八衆句全図を机辺に置い

和39・8)

と——。芳年芸術における純粋な浮世絵師としての面と、血臭を好んで描いた異常な性格を有した面とを解説されている。そしてその一つの本性こそ、英名二十八衆句に結集されているのだ。

次に芳幾だが、多作者で、まったくの錦絵職人で、なんでも器用にこなす絵師ではあるが、この二十八衆句のうちには構図筆力共に流石に幕末風雲急を告げる時代の筆だけに、これまた相当に殺気をはらんだもの数図をのこしている。芳幾は芳年よりも十年年長で、然かも同門の兄弟子でもあった。芳幾にも次のような挿話が伝えられている点は注目に価しよう。

安政二年十月二日。江戸の町を焦土と化した大地震があった。その惨状は、安政見聞録など当時のキワ物出版（災害画報に類するもの）が残っており、江戸・東京を通じて大正大震災以前における最大の地震であった。芳幾は吉原日本堤下で編笠茶屋（引手茶屋ともいう遊客のガイド業）を営んでいたが、その家も災禍に包まれ、家財は煙となって路頭に迷うばかりでなく、臨月のその妻は嫖客を稲本楼へ送りに行き、入口の梁に打たれて横

死を遂げるという不幸な目に遭った。

絵師をその職としていても、そうした場面に遭遇したら気が動転して、この災害の惨状をスケッチしようとする心が起こる筈のものではないのに、芳幾の画魂は妻の横死という悲歎をのり越えて、吉原の廓内はまだ熾^{さか}んに余燼はけぶり死臭漂うなかを、紙筆を求めて縦横に馳せ廻って写生し、その惨況を三枚続きの板下に仕上げ、それを持って絵草紙問屋の仮宅に出掛けて、出版の相談をしたというから驚く。

問屋連もその図を見て凄愴の感にうたれたが、そこは商売柄で、実地目撃の真景だから急に思い立って板行をすぐ引受けてくれた。

芳幾はこの種の吉原惨状の錦絵七、八種を描いており、その評判は市中に高く芳幾の画名を大いに広めたというが、際物とは云いながら実に四千組も売れたという。当時のベストセラーとなった。——『新小説』（大正15・8）樋口二葉「落合芳幾」に拠る。

幕末・明治初年における浮世絵師の置かれた地位は現今のジャーナリストであった。機を見るに敏速だったという点では、今日の新聞記者に匹敵すべき立場にあったという事のみならず、芳幾にもまた血の画家としての要

素が含まれていた、というよりも殺伐な変動激動の時代の空気が、その筆に紅を染めさせたのであろう。

大蘇芳年には落合芳幾のように、画商の注文に応じて何でもスラスラと器用に描きこなす当意即妙の手腕というものはなかった。それから、この英名二十八衆句には芳年特有のチリチリした感じの洋紙を揉んで抃^はげた時に現われるあの硬い線、明治の芳年調をまだ見せていない。

平井蒼太氏は、雑誌『デカメロン』（昭和7・1）の誌上に「血塗られし錦絵」と題して、芳年を主として英名二十八句を解題されているが、その中で、

「殺気・憤激・恐怖・死相などの怪絶な面貌を、人生に対する冒瀆とさへ思はせる惨酷な筆を以て抉り出している。そしてそれから暗澹たる画面の上に流れ空間を極む肉体から迸り散る惨血こそは、芳年の魂を打ち込んだと思はせる凄気が漲っている。血の色の実感を加へるためには、黝くとも数度の刷（はけ）を重ねた上、更に血糊の粘着性を添へる為、別に膠（にかわ）のみの刷を加へて血の迫真力の完成を期している周到さは、誠に芳年を血の浮世絵師と呼ば

せるに充分なものがある。全く、英名二十八衆句のそれは、血を描く為に描かれた惨血画譜であって、血を描くが為に、事件と人物を巷説から借りて来たものと、観察することが出来る」

と述べている。この篇の文章には伏字が多く使用されているが、するどい鑑賞眼を示している。無残絵（幕末明治初年に行なわれた血みどろを主点とした綿絵）は、戦前ではその△絵▽自体が、春画と同様に発表が許されなかったから、綿絵そのものの現物に接するか、たまに発禁物の雑誌の口絵などで見る位だった。従ってこの発表は珍しく貴重な記録でもあった。但し図は三図だけ掲げたものだった。

平井氏も云っているように、只惨血画譜を描かんが為に、事件と人物を借りて来たと評したのは、正に的を射た論と申すべきであろう。△血▽に対して程人間は神秘と恐怖を感じることはあるまい。人間の血が、若し万が一にも外部に多量に流出する場合は、いつ如何なる時にあっても、それは△死▽に直結する意味がひそんでいるのだから、血と死を表現化した作品はまったく恐ろしいという一語につきてしまう——。惨虐美を崇高な芸術と

はよび得ないのは当然である。血の芸術は刹那が永遠の意味をもつ一瞬を把握したドタン場であって、その時は殺す者と殺される者のどちらが正義を主張したって、そんなことはもうどうでもいい瞬間なのである。絵画芸術としての美をいうならば、その一点にだけ存在するのではなからうか。

次に血の科学について少し説明すると、血液は液状の血漿と有形成分からできていて、血漿は桃黄色の液体で、その九十パーセントは水で、固定形成成分の大部分の蛋白質となっている。ほかに無機塩類、糖類、脂肪、類脂肪体、アミノ酸などが含まれて血液は構成されておられ、血が流出して凝固するのは血漿の中に含まれている繊維素と固形成分が結合するためで、血餅（けっぺい）とよんでいる。それから全身の血液量だが、その大体のみ記すと、男子は体重の十二分の一から十三分の一、女子は体重の十四分の一だとされている。一般に成人で約七リットル。また、全血量をいくら失ったら生命に危険があるかというところ、四分の一までは危険はないが、三分の一を失う時は急に血圧がさがり、二分の一失った時は生命はまったく危険である。それから、血はなぜ赤いか？ ということが、これはへ

モグロビン（血色素）を含んでいるからだ。然し血液というのはその血色素を溶かした液というのではない——。

また血に関連する△赤い▽という言葉は、ギリシャ語でエリトロス、ラテン語ではルリックス、ドイツ語でロート、フランス語ではルージュというが、いずれもみな梵語のルヂラから出ていて、ルヂラは血液という意味である。伝説によれば、昔から血は赤い程、剛勇・善良・正義・正直であると信じられて来た。また、古代民族の所有物に赤く塗られた器物が多いのは、血を尊敬し愛していたからだといわれている。

大体以上参考までに血液そのものに関する説明をしたが、次に△死▽をアンリ・ド・ワリニーの著書『死』（莊司博士訳）から説明を借りると、

死とは物質が一切の生活現象から分離してしまうことで、運動、栄養および感覚が身体を去り、意識が消失する。そしてその物質は漸次に分解し、物質を構成する所のすべてが土地に帰り、空気に帰り、最も隣接せる周囲に復帰し、腐敗に移行し、そして消滅してしまふ。死は終局にして又分離であり、更には崩壊であり、感官によって摂受せらるる幾多

の現象の終止であって、個々の本質の終焉だ……と述べている。

英名二十八衆句における血と死の恐怖場面を、前記の平井蒼太氏は、「その怪絶な面貌は人生に対する冒瀆とさへ思はせる」と語っているが、私も初めてこの錦絵に接した時、一図一図を繰りひろげて行くうち、その生々しい凄惨な血の匂いに身震いしてしまった。私たち誰しも人間である以上時と場合によっては、人を殺す空想はできるが、相当の悪党でも、自分が実際に人殺されるV想像はできるものではないからだ。ところが大蘇芳年にはそれがあったようだ。殺される幻影にうびえていた。そしてそれを裏返しした心理が、

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いは致しておりませんの故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下さい。電話番号、連絡場所など御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

異常なまでに「殺し場」を追究したのではないだろうか。

英名二十八衆句は全編の物語ではなくて、物語における個々の場面であって、*Imagin-* *ation* な芸術である。従って物語の部分ではあるが、全部を知らなければ理解できぬというものではない。芝居、異談街説から取材しているから、当時にあつては江戸市井の誰もが知っている実話だった。殆ど、説明を不要とした話だったに違ひはない。それだけに、今日ではかえってアノ女を逆さに縛って吊し斬にしている、芳年の惨虐絵としてよく人に知られた福田九蔵新助など、実は話の種や出所がよく分らないというのもある。そうした図もあるけれど大半は少しく雑書を漁り読む人だったら馴染みの深い物語からのある場面に焦点が当てられていることに気付く筈だ。全図については、前掲誌を見られたい。いま、私にとって特に記憶に残った「五大力」の図柄を説明してみよう。

勝間源五兵衛 河箕水記

枯れはてて霜に恥ずや女郎花 杉風

並木五瓶が江戸狂言に綴りし薩摩源五兵衛は、浪花にありし菊野殺しの模様を写して、路考茶と沢むらさきに染てより、幾と

せ経れど色あせぬ、仕掛文庫のふたりが仲は、児の手柏の奈良坂や、大和町の浪宅へ、身揚げなして忍び駒、二世をばかけて三味線の、かわらぬ誓ひ五大力。いつまで草のいつまでもと、思い甲斐なき海老尾、せつなき義理のかせゆえに、無理に切れたる三の糸、狂う調子に小万をば、切害なしての後悔は、身の言訳の書置に、名残り雄鹿のいのち毛たち、泪のしぐれに袖ぬらしけり

さすが黙阿弥で、調子よく玉を転がすような名文である。画文ともにこの集の巻頭に置くにふさわしい作品。この話は薩摩の侍早田八左衛門が、大阪北の新地桜風呂の抱え女菊野（芝居では小万）を殺害した事件をもとに並木五瓶が早速にお家騒動とからませ、「五大力恋緘」（ごだいきこのふうじめ）という芝居狂言に仕立て大当りをとった。図は忠義の士勝間源五兵衛が誤って邪推いたすところから、愛する女小万を殺し、その生首を浪宅に持ち帰り、遺書に気がつき己れの非を悟るという場面だが、行灯の傍らの炬燵掛けの風呂敷包には小万の首が入っている。血が滲じみ出て、結び目の間から髪の毛がはみ出している……。



第十四回

コンテスト

青帮の団員から、ジャンヌ・ダークのように敬愛されていた周月鏡の無残な最期は居合わせた人々の慟哭をさそったけれども、同時に又、憎むべき敵に対して煮えたぎるような復讐心が沸々として湧き起こってくるのが、ありありと見えた。

日本にいる蔡樹理からも、すべて有明の指示に従って行動するようという暗号指令が返ってきた。さすがに彼の留守中といっても青帮の実力は大了たもので、これだけの事件

も遂に表面にあらわれず、警察の介入もなく、闇の中に葬られてしまったのである。葬ったといっても、可哀そうな周月鏡の手向け方については後日談がある。いずれ、その機会に書くことにして、ここでは汚された彼女の屍体が、有明の命令によって秘かに運び出されたとだけ置いて置こう。

さて、このような突発的事件で数日は、まったく間に飛び去ってしまったのだが、有明が無理をして星エミー司令をネプチューン号から招き寄せた目的は、勿論ほかにあった。数年前から、ある日本の化粧品会社がスポ

ンサーになって「ミス・アジアを選ぶ会」なるものが企画され、東京をはじめ各国の主要都市にアジア各国から選ばれた美女を集めて華やかなコンテストを開いてきた。たまたま今年は、それがホンコンで開催されることになって、期日が三日後に迫っていたのであった。有明は考えることがあって星恵美子を応募させるよう申込んでおいた。各国から派遣されてくる正式の代表候補のほかは、地元で居合わせた者で年令その他の条件に合った女性なら、いわば飛び入りで参加出来る規則になっていたからである。有明の思いつきが唐突だったため、ネプチューン号では間に合わ

ず、そのため星は危険を犯してミサイルで飛んできたというわけだった。既に二十三才の星は二十五才の年齢制限からいえば決して若い方ではなかったけれど、持ち前の美貌と鍛え抜かれた美事なプロポーション、それに加えて各国語を自由にあやつる社交性から、相応しい所にランクされる見込みは十分にあった。勿論、前日に開かれた飛び入り予選会も難なくパスしてしまった。

当日、ヒルトンホテルの特設ステージは百花繚乱、若く美しい女性の放つエネルギーがむんむんと漂っていた。各国の代表四十三名に地元を選んだ五十七名が加わって総数百名

から、予選、準決勝、決勝と三回の選抜によって、ミス・アジアを定めるのである。

次回、開催市であるマニラは、お国柄からいっても大変な力の入れようで、ラザチン市長自ら出席していた。彼は前夜祭のレセプションで、コンテスト終了の翌々日から参加した全員百名をチャーター機で三日間マニラへ招待する計画を発表していた。次回コンテストの雰囲気盛りあげておこうというスポンサーの希望が背景となっていることはいうまでもない。

莫大な賞金に加えて、こうした様々な招待が期待されるので、美女たちもエキサイトして何やら獲物をねらう牝獣のような眼光をキラキラ輝かせていた。

ラン・ラン・ショウが企画演出したステージの運びは流石に絢爛豪華なもので白い水着姿でエプロンの上を往き来する美しい肢体をクッキリと浮き彫りにしながら、尚、且つ、夢のように楽しい雰囲気を作りあげ加えていた。

ややもすれば単調に陥りやすいコンテストが、こんなわけで飽きる隙もなく終り、ミス・アジアが決定した。大方の予想通りミス・フィリッピンだった。アン



前号まで「強大、且つ不可思議な組織を操る有明には美しい女性の部下が多い。その一人、星恵美子は原潜ネプチューン号の司令として、ヨーロッパ、中近東などで冒険的な美女狩りをしながら、遂に有明の待つ香港に到着した。ここでは蔡樹理の指揮する青幫が中共系の地下組織と凄惨な死闘を繰返していた。輩下のジャンクを暴行略奪された蔡は、敵の根拠地を襲い、一味を殲殺したが、その復讐として可憐な周月鏡が殺され、屍体を送り届けられた。恥辱的な身体変工が施された上で……」

ヘレスの大農場主の娘、十九才のペルラ・ティニオはこの瞬間から最も有名な女性となった。前年のミス・アジアから宝石をちりばめた冠をかぶせられたとき、この純情な少女は涙をポロポロと流していた。わずか三日の後には、悲しい絶望の涙を流さねばならないとは、神ならぬ身の露程にも想像出来なかったのである。

千人を越す人たちが一様に歓声を洩らしながら受賞式の行なわれる舞台を凝視している中で、その片隅に目立たない服装で冷静に立ちつくしていた男、ガボン人有明友之助こそ数日後に起こる筈の出来事の蔭の主役だった。

しかし、今はそれと知る人もない。ただ、物好きに入ってきた中年の日本人旅行者としか認められていなかった。それどころか、彼の秘書である星恵美子が飛び入りながら善戦して第六位にランクされたのだという関係すら連想する者もいなかったのである。

中一日においてPAL（フィリッピン航空）差廻しのボーイング七三七は、ミニミニ・ジャンボという愛称にふさわしく色とりどりのミニスカートに彩られた美女百名を満載して快晴の啓徳飛行場を飛び去って行った。

マニラでは前日に帰っていたラザチン市長をはじめ大衆が飛行場へ詰めかけて、一行を歓迎するため待ちかねていた。ところが、予定時刻をすぎても七三七は姿を見せない。ホンコン・マニラ間は僅か一時間半の飛行距離なのに、三時間を経過しても同機からの連絡はプツリと途絶えたままであった。勿論、各地のリーダーサイトは、その機影を記録することすら出来なかった。後に発表されたホンコン側の資料によると、同機はスケジュール通りにビームに乗って、これからマニラの電波に自動操縦装置を切り換える旨を通報したのが最後の連絡になってしまっていた。

ホンコン・マニラ双方とも騒然となった。白昼、しかも大勢の人々が注目していた飛行機が突如、行方不明となってしまったからである。直ちに海空一体となった搜索体制が実施された。これには、フィリッピン駐在の米海空軍も協力する。

このニュースは直ちにテレビ、ラジオで報道され、一層市民の関心を煽る。マニラにいた新津謙介も当然、この事件を知った。とりわけ彼を愕然とさせたのは、テル・アビブ以来、彼が疑惑を持ちつづけていた謎の女、星恵美子が実名のままでコンテスの六位に入賞し、従って行方不明者のリストに混っていたことだった。これだけで、国際捜査官としての新津にはピンとくるものがあつた。ただし国際警察機構は依然として一連の美女性方不明事件の間に相関関係を認めることを拒否していたから、新津が如何に問題を提起したとしても機構全体として正式に取り上げられないのである。このような国際機関には、何となく、事なかれ主義が潜在していて、新津を歯がゆがらせるのであつた。兎に角、国際間の事件だから一応、調査して見るのがよからうというので、マニラ支部から一名の捜査官がホンコンへ派遣されることに決まった。マ

ニラでの要務を終えていた新津謙介も自発的に同行することになった。彼の関心は星恵美子のパトロンである有明にぶつかってみようということだった。

公平に言って新津と有明では人物に一廻りも二廻りも隔差があつた。

快く会って、自分の秘書を襲った苛酷な運命について、ひとしく心配を語り合ったとしても、所詮は核の外側を運行する衛星のようなものであつた。しかし、新津は専門家的なカンによって、有明という人物の背後にある秘密を、おぼろげながら感づいて来つつあつた。同時に、もっとおそろべきことは、有明も又そのことを覚えていたということである。新津に関して有明が既に或種の決心をしつつあつたのを、当の新津は夢にも知らない。

「新津さん。あなたは間もなく日本へお帰りになるのでしょうかね」

ゆったりとシガーをくゆらせな有明がさりげなく問いかけるのに、つい

「そうです。明朝、帰国するようにザープしております」

と答えると、すかさず

「それについて一寸したお願いがあります。」

勿論、あなたを立派な警察官と見込んでお願いするのですが……」

有明の態度には、下手に出ていて、それで有無をいわせないような雰囲気であった。

「それで、どういうことなのですか」

つい釣り込まれて行く。

「可哀そうな女の子がありましてね。林美玉というんですが、台湾にいる恋人を慕って、大変な苦勞をして中共を脱出してきたんです。そこで私共の方で手を廻して台湾の恋人を探してあげたんですが、結局、死んでしまっていたんです。それが又、哀れなお話してですね。彼は大陸にいる恋人に会おうとして金門守備兵を志願し、目と鼻の先に布陣している中共側へ亡命を企てたのです。それが発覚して彼は軍法会議にかけられ、敵前脱走の罪で射殺されてしまったという報告でした。二人の恋は全くスレ違いの悲劇に終わったのです。林美玉の悲歎は本当に、はたの見る目にも涙をさそうようなもので、到底、なぐさめて癒せるものではありません。そこで私共は彼女が父のようにして敬愛している蔡さんのところへ、彼女を送ろうと考えました。彼ならばきっと林美玉に生きる力を与えてくれるでしょう。ところで、蔡さんは今、東京におりま



す。そこで、お願いというのは林美玉を東京までエスコートしていただけないかということです。如何でしょう。大変ご迷惑なことだとは存じますが、まげてご承知いただけませんか」

「それは、どうせ帰る道ですから構わないのですが、しかし……」

と口ごもるところを、押しつけるように

「それは有難い。早速、林美玉をご紹介いたしましょう」

とガラスの鈴を鳴らしてしまう。手廻しよく扉をあけて入ってきた中国服の少女をみて新津は息を呑んだ。それ程、悲愁に包まれた林美玉の姿は、細々として哀れをさそうものがあつたのである。

翌日、新津は林美玉と連れ立ってホンコン発東京行きのキャセイ航空直行便に乗り込む羽目になった。

遭 難

ボーイング七三七の機内は騒然となっていた。ホンコンを出発して三時間も経ったというのに、この機は依然として飛行を続けている。いつの間にか乗組員もスチュアデスさえ座席に姿を見せなくなってしまっていた。つぎつぎと操縦室へ呼び込まれたまま、それっきり帰らなくなったらしい。座席と操縦室とを結ぶドアは、前方側から嚴重に施錠されていて、叩いても押してもビクともしないの

である。勿論、機長から何のアナウンスもないのだから、不安と焦慮は、つのるばかりである。百名の美女たちの中には、日頃のとりつくろった態度をカナグリすて、髪をかきむしったり、ヒステリカルに泣きわめくものもあったし、夢遊病者のように便所と座席の間を何回となく往復する女もあった。しかし恐怖に打ちのめされ、ぐったりと座席に顔を埋めてシクシク泣いているのが大部分であったろう。

ここで只一人、例外があった。いうまでもなく星恵美子である。彼女は頃合いを見て操縦席に侵入し、いきなり無線機を破壊し機長を残して、副操縦士兼無線士を麻酔銃で眠らせてしまった。スチュアーデス達も、機長を脅迫して、一人ずつ電話で呼び寄せ、これも眠らせてしまった。

それから、機長にピストルを突きつけながら、ホンコン・マニラのビームから離脱して南へ七十八度、転針を命じた。止むを得ず機長は、その命令に従う。しばらく飛行を続けるうちに、特殊な誘導電波をキャッチする。今後は、その電波に乗れと言いつける。

そのまま、機長は星エミー司令の監視下で冷汗をかきながら飛行を続けたわけである。

单身、しかも女性の身で誠に大胆な乗取りという他はない。

やがて乗客の中で元気のよい何人かが、堅く閉された操縦室のドアを壊そうと企て始めた。後部出入口に格納してあった非常用の斧をとってきて、ガンガンやりはじめたからである。機長を監視している星には、それを止めることはできない。一計を案じて機長にアナウンスさせることにした。

「乗客の皆さん。本機は着陸装置の故障でマニラ附近を旋回中です。万一の場合は海上に不時着しなければなりません。その前に危険防止のため燃料を使い果たすことにします。いずれにしても皆さん方を安全にお助けするように乗組員一同、頑張っておりますから、今暫く、動揺なさらずに、座席にかえってベルトを締めて、お待ち下さい。これから機体が動揺することがあります……」

実際、グラリと機を揺って見せろと要求される。七三七の巨体が右に傾いた。

座席では一時に悲鳴が爆発する。ドアを打ち破ろうとしていた連中も、斧を投げすてて座席に戻り、あわててベルトを着用する。こうして操縦席へ通じるドアは破壊を免れたのであった。

乗客たちは全部が全部、マニラ附近を大きく旋回して胴体着陸のチャンスを待っているのだと信じた。しかし、機長だけは破滅的な瞬間が免れ難いということを悟っていた。こはもう、南支那海の真只中である。通常の航路、航空路から遙か離れ去ってしまったていることも判っていたし、この分ではあと30分ぐらいしか燃料が保たれないということも認めていた。しかし、海上から出されている超短波の誘導電波が段々近づくことから、何か助かるような予感がしてならなかった。

目標海面に到着してみると、それとおぼしい艦船の姿はなく、ただ海面に位置をしらせるかのように黄色い染料が浮かんでいた。「あのあたりに緊急着水しなさい。慎重にやるんですよ」

星が鋭く言った。

機内のラウドスピーカーから、不時着水する旨を告げ、救命帯をつけた上、ベルトを締め、出来るだけ低い姿勢をとるようにアドバイスが流された。

機長が着水態勢をとりはじめたのを確認した星は、手早く睡っているスチュアーデスのスーツを剥ぎとって、それに着換えた。足早



やに座席通路に入ってきた星をみて、ニセ者と見破る余裕は、もう乗客の誰にも残されていなかった。むしろ、争うように助けを求め、る者も多かったが、中には、こんな状態でありながら、四人のスチュアーデスが一人も姿を見せない不始末を、罵る人達もあった。星は例の通り、テキパキと乗客達の不満をさばいて行った。

そうこうするうちに、機体はみるみる高度を下げ、やがて不愉快なショックと共に、数回バウンドしながら海面に着水した。気密構造だから、機体がこわれない限り沈む心配はない。それでも、乗客は何もわからないし、まして女ばかりだから、当然派手な叫び声が

手中に陥ってしまった。

通常の航空路を千キロ近くも離れてしまった南支那海の、まん中のことである。ボーイング七三七は池に落ちた一粒のケシみたいなもので、奇蹟でもないかぎり、短時間で発見することはできない。星等には、そのような計算も十分に検討しつくされていた。

大空を突きやぶるようにして飛翔した機体は、もはや動くこともないであろう。半ば水につかって、うねりのままに上下している姿は、まことに頼りなく見えた。

数分後、ざわざわと白波をさわがせながらネプチューン号が姿をあらわすと、この勝負

機内に充満した。星は再び操縦席に駆け戻ると、漸く操縦管から手を離したばかりの米人機長を麻酔銃で倒してしまふ。もう全く不必要になってしまったからである。

このようにして百人の美女達は、一挙にエミール司令、すなわち星恵美子の、いや、結局は有明の

は一層はつきりしてきた。

ネプチューン号の姿を一番、先きに発見したのは勿論、エミール司令だったけれども、乗客の中ではティニオ嬢が最初だった。彼女が坐っていた座席左後部の窓から、黒鯨のような艦体がハッキリと見えた。しかも星条旗がひるがえっているではないか。

「助かったわ。米艦が助けにきた」

ペルラ・ティニオは、上ずった声で隣のミス・インドネシアに声をかけた。もうその頃は全員がそれに気づいて、一斉に左側に寄ったので機体が傾いてしまったくらいである。

メーキャップと眼鏡で簡単に変装したエミール司令がスチュアーデス姿で再び戻ってくると、天蓋上部の脱出口を非常ボタンで吹き飛ばした。天井にポツカリ大穴があいて、青空が見える。吹きとばされたドアが海に落ちると、その裏に畳み込んであったゴムボートが自動的にふくらんでボートになった。合計三ばかりのゴムボートが浮かんでいた。

脱出口に梯子をかけて、星が真先に昇ると機体の上に立ち止った。司令塔にはアメリカ海軍の士官服に身をかためた高橋淑子副長が早くも星を見つけて大きく手を振った。アマゾン女兵たちは、ボーイング七三七の新しい

捕虜たちが、それと気づかないうちに素早く艦内へ収容してしまうために、一応男装して米海軍の士官や水兵に化けていたのである。

ネプチューン号は、ゆっくりと近づいてきて、機体との間をロープでつなぎとめると、ボートにもロープをとりつけて、往復できるようにした。

「さあ皆さん、助かりましたよ。向こうの潜水艦に順々に乗り移って下さい」

スチュアーデスらしい尻上りの早口でエミール司令が機内に向かって叫んだ。

先を争うようにして女達が梯子を上っていく。十人ずつゴムボートへ詰め込むと、先方の水兵がロープを引っばった。

ペルラは脱出孔が近かったし、生まれつき身のこなしが敏捷だったから、いち早く機外へ出て、一番目のボートに乗ってしまった。

丸くスベスベしたネプチューン号の舷側には網ロープが下っていて、昇りやすくしてあったが、これもペルラは一番によじのぼって行った。甲板で助け上げてくれた水兵の手が意外とあらぐれていないのに、オヤと思って目を合わせると、これは又意外と、女のようにやさしい水兵である。一寸奇妙に感じて、ためらっていると、艦橋から

「甲板に上った方は、早くハッチから艦内にお入り下さい。甲板が狭いので一時に大勢は立てないのです」

高橋副長がガンガンした声で怒鳴った。マイクを一ぱいにひねっていたから、女の声とはわからない。

早く、早くとせき立てられて、夢中でタラップを下へ下へと降りる。艦底でも数名の水兵が待っていて、忽ち抱きかかえるようにして次の部屋へ移される。

僅か二十畳ほどのガランとしたスペースに次から次へと押し込まれた美女達は、やがて百名に近く、文字通り立錐の余地もない程の混みようだった。ムツとするような体臭と複雑な脂粉の匂いがカラミ合って、何やら息苦しくなってくるようであった。

救助された嬉しさと、アメリカ国旗にだまされたので、ウツカリいわれるままになっていたのが、漸く何かおかしいと思うようになった頃、突然、電灯がパッと消えた。見ると天井の直中のあたりがポツカリ丸く穴があいていて、そこだけがあかるく残っていた。不安と期待とが交錯して、一瞬シンとなったとき、女たちを聳動させるような声が、穴のあたりから降って来たのであった。

「おまえたちは或る秘密の組織に囚えられたのだ。その目的は今では教えない。しかし、よくわれわれの命令を守って、暫くの間辛抱すれば、おそらく再び夫々の家庭に戻れるだろう。いうことを諾かない者の答えは簡単だ。その者は死ななければならない。おまえたちのいる部屋は船底のバラストタンクだ。このままでは海水が浸入してきて、悉く溺れ死ぬ運命にある。助かる道は、ただ一つ。このハッチからおろすレバーに一人ずつかまって、引きあげて貰うことだ。おまえたちが入ってきたドアは、すでに水密ロックされている。さあ、自らの運命に従順たらんとする者のみ、このレバーにプラ下がるがよい」

事実、いつの間にか、どこからともなく海水が流れてきて、踝を濡らしはじめていた。沈黙は、やがて涕泣の声に変わった。闇が彼女等をおしつぶして恐怖の叫び声すらあげられなくしていた。円いハッチから、スルスルと一本のロープが下ってきた。その端には30センチばかりの鉄棒が、直中にある錨でロープにつながれている。

固唾をのんでそれを見つめている人垣を、かきわけるようにして一人の女が、その鉄製のバーを両手で握んだ。すると、ロープが静

かに上へ昇りはじめる。みるみる、その女の肢体も、それにつれて空中に泛かんだ。それは星、つまりエミー司令その人だったのである。彼女は、あらかじめ打合せた上で、サクラとなるために犠牲者たちの中にまぎれこんでいたのであった。囚れの女達は依然として自分達の仲間の一人と信じていたのだけれども、その姿が天井のハッチから消えると、すぐまたロープが戻ってきた。そしてマイクがガナリ立てた。

「一人、あがった。次は誰だ。早くしないと最後の者が間に合わなくなるぞ」

こうした場合、誰かが口火をきると、あとの者は比較的、躊躇なくそれに従うという心の者が比較的、躊躇なくそれに従うという心の

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いませんが、分譲品用ですから誌上に発表いたしません。又、誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

理がある。エミーは勿論、それをねらったのだ。二、三人がレバーに手をのばす。

「だめだ、だめだ。一度に、一人ずつだ」

再びマイクが叫ぶ。勇を鼓してレバーを握ったのは十九才のペルラだった。

彼女の身体は、グイグイ引きあげられて行って、たちまちハッチをくぐった。途端に後ろから目かくしをされる。あわてて取り除こうとすると、

「手を離すな。落ちるぞ」

という声が耳のそばに聞こえた。

バーは、すでに横に移動し始めていた。それと代って、もう一本のロープが釣り糸のようにスルスルと下って行った。

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮て御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇々編集部△

ペルラの足先は床上、僅か10センチ位のところまで横に這っていた。手を離しても何ということもないのだけれども、目かくしされている彼女には、それが解らないので、ただ夢中でバーにブラさがっている。

次の部屋に入って、隔壁が閉される。手首に皮手錠が巻きつけられた。これで手を離そうにも離せなくなった。

アマゾン女兵の一人が、7の字型の金具の内側にカミソリの刃がついたような道具を持って、手慣れた動作でペラルのスーツの七分袖にひっかける。布地がアツケなく切り開かれて行った。右、左ともに袖がダラリとさがった。そこへ、もう一度、襟の直後ろへ刃をひっかけて、脊骨に沿ってスーッと切りおろすと、ペラルの上半身を覆っていた布地は、下着も含めて一切がズルズルと落ちて、なかなか裸身がいちどきに露わになった。

あまりのおそろしさに声も出せず、絶望にふるえる豊かな乳房がいっそう哀れだった。

その間にも、ネプチューン号は七三七の機体を水中に沈めたり、水面に浮かんでいるボートや漂流物の始末をしたりして犯跡をかくす作業を進めていた。

(未完)



あぶ・らぶす・こんと

甘 い 降 服

水 沢 登

今年も暑い夏がやってきた。熱気と湿度のせいばかりではあるまい。

それにしてもこの一年間、宇宙にも世界にも日本にもセンセーショナルな事件が相次いだものだ。新聞の一面は、戦国時代前夜の物情騒然たるものを感じさせるが、三面では俗世間がいかにハレンチであったかがわかる。

この世は異質な現象を併呑して、まさしく昭和元祿である。

筆者も痴人の一人として、明日の身は波に漂う笹小舟に託し、太平のムードに酔い痴れようとするのである。では手始めにコントを一つ。

男というものは

処女にはキスしながら、さてと考える。

妻にはキスしながら、さーてと考える。

恋人には猿轡をはめて、そしてと、ほくそ笑む。

妻には猿轡をはめて、しかしと考える。

1

七月も初旬、銀座で他人にはイエナイこの道の外国図書も売っている書店で、*Annan*

with a maid、という本を手に入れた。ヴィ

クトリア時代の有名なアンダーグラウンド小説で著者不明となっている。

内容は前編・悲劇、後編・喜劇の二部に分かれている。

前編では、主人公のジャックが袖にされた

娘アリスを防音装置の「狂気の部屋」と呼ばれる拷問部屋に連れこみ、巧妙な責めで生娘を性の快楽に開眼させるくだりが甘美に記されている。

後編では、この二人がアリスの女中を同じ責めで性の奴隷とし、次いでこの三人が若い未亡人を性の犠牲にする。最後に狂気のこの四人は適令期の娘と、その母親をたぶらかして、狂気の部屋につれこみ、母娘共々いたぶりつけるのである。

母娘を寝台にソアザント・ヌーフの型に緊縛し、相互責めを強いる。母娘はやがて屈辱の淵に落ちてゆく。この光景の描写は、まことに圧巻である。

全編を通してロンドにも似て繰り返される

主題は、被虐の経験のない美しい女達が、たんなんな責めと執拗な愛撫の攻撃に、次々と性の奴隷となり、サジスチンに変貌してゆく過程であろう。

古い読者は、お気づきになったと思うが、この前編は嘗てKK誌に「甘美なるアリスの降伏」として紹介されているのである。この翻訳文には、原本の極端な描写は一切、省略されているのは、止むを得ないことであつたろう。

当時、原本が欲しいと渴望して十数年、偶然の機会にめぐり逢えたのは、何とも形容し得ない嬉しさであつた。

尚、The Pearl という同時代の珍本が市販されているので、蛇足であるがつけ加える。ここでコントを一つ。

○

ヒモ物語

家出した妹のアパートを探しあてた姉。部屋に入るや、裸のままひもで縛り上げられベッドに放り出されている妹の無惨な姿が眼に映った。駆けよって猿轡をはずしてやる。ひもをほどこうとしても解けない。すると妹、しゃくり上げながら

「私は、これでいいの。家出して東京につい

た日、もう男にパンティのひもを解かれてしまったの、ひもで縛られたままで。くる日もくる日も、男は私のひもになって、ひもで、ゆわくと、いろいろ、ひもとかれたわ。外に出る時も、ひもつきよ。ひもがない時は、ひもに縛られて、ひもが解かれると、ひもがまたいついてくるの。そのうち、ひもに魅かれて、ひもと私は切っても切れない結びつきができてしまったの」

2

この間も、顔見知りのA女子大国文科の学生と郊外電車で一しょになった。

「今日は、とっても、しゃくにさわってるんです」

と言う。何の事か、わからない。

「あまり言いたくないの。人に言えないことよ。電車って満員でしょう」

国電や地下鉄は女性にとって酷電であり、痴漢鉄であることは常識である。

なるほど、この電車に乗り換える前、だから三十分前にはどこかの誰かに彼女は……「どんなことされたの」と聞きたいのは山々であったが、ぐっと我慢する。

見れば彼女、白いミニのワンピースで、シ

ー・スルーとまではいかないが、ブラジャーとパンティの線がくっきり。これじゃ誰でも……と思う。

「僕も男だよ。気にならない？」と問いかけると「水沢さんなら、大丈夫。信用してますもの」ツブらな眼でニッコリ。ホントかね。

以前、三十代後半の奥さんから、女学生時代、ぎゅうぎゅう詰め電車で約一時間、中年の痴漢に全身くまなくいたぶられた経験を羞恥に耳たばまで真赤にして言葉短かに語るのを、聞いたことがある。

羞かしさと恐ろしさと、おぞましさと心身を喪失しうになったという。他人には勿論夫君にさえ打明けられない自分の犯した罪だというのである。

ところが、かの娘は被害を受けて三十分もたたないうちに他人に気軽に話すのである。しかも感想は「しゃくにさわった」と言う。

毎朝、毎夕のラッシュでは当然のハプニングとして知っているはずである。

積極的に批判する現代娘の気質は理解できるが感ぐれば「今日の男は下手だったからしゃくにさわった」とでも言うのであろうか。

いずれにしても若い娘達は、痴漢に習慣づけられ、調教されて、ハプニングには驚かな

い免疫性をもってきているようである。

○

男と女

生来、男はロマンチスト、女はリアリストと一口に言われる。

男は物干のパンティを見ただけで想像し、刺激される。ずうずうしい年令になっても羞かしくてパンティを買う勇氣は出ない。

女は平気で男物のパンツを買う。慎重に品定めした上で値切ったり、サイズが合わないといっっては取り換えに行く。全く感情を動かされないらしい。

ところが一旦その中に内容物が包まれると「羞かしいわ」などと体裁はつくるが、眼の色が変わってくる。

3

友人でこういうのがいた。

「僕は、例えばね、都心のデパートの食堂で身だしなみのキチンとした気品のある三十代位の女性が、冷やしラーメンをつつましく食べているのを見ると、そそられるんだな」

「考えてみたまえ、郊外の奥さん達が銀座に出てくるのは月に一度だってありゃしない。だから髪をセットして着物もキチンとして久

し振りのショッピングで浮き浮きしている。

買物の途中で食堂に行く。今日は御馳走を食べようと思う。どれにしようかと迷う。ところが、そこで考えるんだな。家庭のこと経済のこと。私一人が贅沢してはいけなないとね。

小市民の良心というやつさ」

「そこで、冷しラーメンで我慢しよう。その分だけ子供のものを買っていこう。亭主の肌着もくたびれていたわ、なんてね。君、そういう貞淑な奥さんに魅力を感じないかね。彼女だってハレンチな夜を経験しているかも知れない。少なくとも人妻なんだ。僕はそういう女を、甘美な責めでのたうちまわらせ、可愛い妖婦に変身させたい欲望が起きてくるんだよ」

とんでもないと思っても、男は誰しもそういう欲望を持っているらしい。

一般にはSでもMでもない人間の方が絶対多数である事実は覆えしようがない。時たま衝動的に起きるS気、M気の極く僅かな欲求でも消化されれば満足する、平和な市民達なのである。

近来にない佳作「憎縄の記」——作者は女性名ではあったが、内容の裏返し、またはそれに近い経験をした男性と推測される——が発

表された時、センセーショナルな論議をかもしたしたのは、Mに飼育しようとする夫のエゴイズムに抵抗し、断絶する妻のエゴの訴えが、真実の声として共感を呼び起こしたからに他ならない。

マゾっ気のない妻や猿轡という言葉にさえ羞恥を感じる恋人。縄の洗礼を受けたことのない愛人を徐々にプレイに引きこみ、飼育してゆく過程は男の夢であり垂涎事である。K誌で告白やハント等のノン・フィクションが好評なのも故なきことではない。

辻村氏がこの上ナシの花としてMに飼育するという功？なり遂げて、今は人妻になられた梨花夫人を恋い、いまもって慕情を絶ち切れぬのは、傍目のやかみも加わって、男たるものの哀感を感じさせるのである。

4

秋もたけなわの昼下り、郊外住宅地の「しだら」と書かれた門標を確認すると、玄関の戸を開ける。

「どうぞ」と招じ入れるR夫人の顔に一瞬、期待と困惑の影が走る。主人の留守を守る夫人を訪れた時の、いつもの情景である。私の良心の疼く瞬間でもある。

「お久し振りでしたのね」にこやかな頬笑みにも怖れがある。

「自制しても、あなたの魅力には勝てない」夫人は俯いたままである。

「坊やは」「今さっき眠ったばかりですの」言葉は短い。

「自動車のオモチャ、喜んでもらえた」

「ええ、とっても自動車に夢中で……やっぱり男の子ですわ、主人に嘘を言っちゃいました。友達からって。あなたからは言えませんが。オモチャ大きくて、とても隠せません。坊やは離さないでしょう。だから」

「僕も、そう考えた。けれど坊やを喜ばしてやりたくてね。今日は、あなたに贈物したい小さいものだよ。どうぞ」

「いつも御心配かけて。子供がいてはデパートにも仲々出かけられません。お心尽しは嬉しいわ」

女性の心理である。プレゼントには弱い。そして緊張した雰囲気は和むのである。

Mデパートの包装紙から、銀台のパールのブローチが出てきたのを見ては、尚更の事であらう。

台所に立とうとする夫人を後から抱いた。十才も若い小柄な体は私の手の感触にふるえ

身悶えて、かすかに抵抗する。

唇は軟かく濡れていた。淑かな夫人は、この時を境にして情熱の女に変わる。

私の唇と指はせわしなく彼女の官能をかき立ててゆく。大きくはないが弾力を失っていない乳房に爪を立てる。合わせた唇の中に呻きが潜る。

「もう、いや。やめて……いけない。許して」彼女自身が激し、もたえるのである。甘美な責めを続けねばならない。

「興奮してしまつて。興奮してしまつて。苦しいわ、お願い」私のうなじに廻した彼女のかいなが、万力のように締めつける。いけないと自制する意志に反して性の快びは女体を狂わせる。そして、そのまま恍惚の佳境に入つてゆく。

仰むけた彼女の唇を掌で塞ぐと囁く。

「君は御主人から猿轡されたことはあるの」女は頭を横にふる。

「坊やが起きる。猿轡させてもらうよ」

「いや、いやよ」嵌口されることにおどましさを感じるのだろうか。無視して片方のストッキングを押しこむ。もう一方のストッキングを唇に喰ひこませ、もう一巻きして鼻口を掩う。

美しい女は猿轡をはめてもやはり美しい。色白の頬にくいこむストッキングは凄惨である。

胸元をはだけられたワンピースから、ずり上げられたブラジャーがのぞいている。更めて脱がせ始める。裸で暮す民族には文明人が何故、衣服をつけているか分るまい。女の着衣こそ男に脱がされるべくあるのではなからうか。おそらく衣服をつける習慣になじんだ裸族は、着衣剥脱という新しいセックス・アートを学んで狂喜するであろう。

ずり下りかけたパンティが引きあげられると、蟬の羽にも似た花模様のそれは、ふくやかにピッタリと肌にへばりついた。家庭の主婦となつても弛緩しない生活態度がうかがえる。

さる人妻の土壇場で探りあてた下着がゆつたりしたものだったので、途端に戦意を失い感興を削がれたことがあった。

いとおしさを一入、このR夫人に感ずるのもこんなところにあるのかも知れない。

「手を後にまわして組むんだ。絶対に放すんじゃない。違反したら、本当に縛り上げる」

自分の意志で自由になる両手を、これから加えられるであろう色々な責めにもあらがわ

させず、堪えさせようという魂胆である。私は、こういう甘くも優しい拷問が好きだ。そして私の言いなりに堪え、悶え、のたうち、喘ぐ夫人の姿こそ、何にもまさる私への愛の証左ではないか。

柔肌にパイプがうなる甘美な責めの序は繊細に、破は嵐のように、急は鋭く、そして労るように。

すべてが果てた時、夫人の瞳は一点を凝視し、顔の猿轡もいとわぬ如く、横臥の姿勢のまま微動もせず恍惚境をさまようのである。

三十分後、身嗜みを整えた夫人は、元の淑かな女性に戻っていた。

帰りしなに先ほどの陶酔を反芻する希求をこめてくちづけを交す。彼女の唇は情熱的ではなかった。しかし唇は熱く濡れていた。

突然、夫人は私を突き放すと両手で顔を掩った。

「もういや、やめて、お願い」絶え入るような、自分に言い聞かせるような小さな細々とした声であった。

貞節であるべき妻が女の性故に火をつけられれば、紅蓮の炎と燃え上る激情の奔流に身を任せてしまった悔恨か、良心の苛責か、はたまた自己嫌悪からなのだろうか。

「君の気持はよく分る。私だって辛いんだ」「独りになった時、考えます。そして苦しむのです。夫を愛しています。夫も愛していてくれています。夫は何も知りません。子供も……だから、だからもう来ないで下さい」

たたずみ、泣きじゃくる夫人を胸に引き寄せる。そのままの姿で髪を愛撫し涙を吸ってやる。沈黙の数瞬、やがて落ち着きを取り戻した夫人は私の胸の中で「あなたの奥さんに悪い。あなたの奥さんにわるい」と繰り返すばかりであった。

秋の日は暮れやすい。醒めた後の一抹の淋しさは、やるせなく拭い去ろうとしても拭い切れるものではない。

別れ際の最後の言葉は、深い抱擁を交わした後で夫人の口から、いつも洩らされる言の葉ではあったが、その度毎に私を苦しめる。何も知らぬ妻への詭言であろうか。罪を意識する夫人の悔いであろうか。

自責に堪えようと努力する夫人と私にとって、時間は悪魔である。地獄の淵に誘う。時間が経て夫人を恋う情が燃えさかる時、またしても欲望の渦に、私達は巻きこまれてしまうのだ。

思えば人間の業は怖ろしい。

夕闇にシルエットとなって浮かび上った夫人の家に向かって呟いた。

「私がわるいんだ。けれど、あなたぐらいかわいい女は、いない。心をもみしだかれるように」

こう書いていても淋しい。R夫人も私にとっては過去の女になってしまったのだから。

湿っぽいのは嫌いな性分である。まとめてこの二、三日に出来たコントを披露しよう。

暑氣払い

いたずら好きの御主人。お中元の買物を頼まれて買って来たカンヅメの、詰め合わせの中の一つを、パンティのカンヅメとすり換えておいた。

それとは知らぬ奥方。贈り先でいそいそと「奥様、まことに粗末なものでお口に合うかどうかかわりませんが、どうぞ御主人と御いっしょに御賞味下さい」

学者

学者にも、いろいろいて、世界中を駆けめぐって、プラチナ・ブロンドやサファイアの瞳、金剛石の歯、ルビーの

唇、むば玉の髪、白磁の肌を掘り出したり、温泉地では処女水を汲み上げるのに精を出している地質鉱物学者がいるかと思うと、

アポロよりも早く、満月に軟着陸を試み、クレーターを探索している天文学者もいる。一番、気の弱いのは文学博士で、「名月や池をめぐりて夜もすがら」と残念がっていた。

○

東洋哲理

なかなかになびかぬグラマラス美人プシーを一発で射落としたイタリー人のカツオ。うらやむ友達が「そのヒケツを教えてくれ」とせがむのに、涼しい顔で、

「プレゼントだよプレゼント。僕は彼女に日本の鯉節を贈ったんだ。日本ではね、猫に鯉節というんだよ」

○

出涸し

美貌を見こまれて、老大実業家の玉の輿に乗った娘。初夜の床で、

「私とっても幸せ。私はあなたの物。あなたにすべてを捧げてよ。浮気なんかしないわ。どんなハレンチなことでも、どんな恥かしいことも、あなたが要求した通り致しますわ。」

私、少しも驚かないわ。あなたは私の終着駅ですもの」

○

ファン

この頃のテレビの司会に際どいがある。特にタレントがイカス娘だと、

司会者「時にあなたは今どんなパンティおつけですか。それに何枚位もっているの」

タレント「花模様です。色は白ばかり三十枚もっていて、毎日、取り換えます」

一生懸命テレビを見ているファンの三人。

「ちえ、三十枚も持ってるんなら一枚ぐらい俺にくれたっていいんだよな」

「タレントさんて案外、少ないのね。私だって四十枚は持ってるわ」

「なによ。恰好つけてさ。あたいだってパンティなんか毎日、取りかえてるよ」

「おい、すげえじゃねえか。一枚くれよ」

「ところが駄目なんだな。ピンクにブルーの二枚きりだもん」

司会者「ところで自家発電なんかは……」

タレント「なんですの、自家発電って」

「カマトトぶっちゃってさ。知らないわけないでしょ」

「タレントさん、自家発電ないのかしら。可

哀想ね。私なんか寝室で停電して真暗になれば、すぐ自家発電に切りかえるのに」

○

近距離乗車

タフ・ガイ、ボインな娘を口説いてホテルにしけこんだ。ピンクのムード・ライトの下でのベッド・サイド・ストーリー。

「あなた、もう途中下車？ いやよ、せっかく私を小荷物に荷造りしたんだから目的地まで送り届けて」

ヒステリックな大声に、意気沮喪した男、女のここだけ自由な唇を押えると、

○

チン入者

留守居中の若妻、不意に暴漢に襲われ、それまでに経験したことのないような屈辱的な凌辱を加えられた。泣きじゃくる女の逆海老に縛り上げられた手足のロープを解いてやりながら、満足そうに暴漢曰く。

「奥さん、そんなに悲しむことはないよ。よく飲みこんでおいてくれ。あんたが口を拭いて洩らさなければ、旦那さんにだってわかりはしないんだから」

——（おわり）——

連載時代伝奇小説

緋

ひ

縮

ぢり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第十八回)

白 鳥 大 蔵

妄執の影

地下部屋の湿っぽい畳の上に寝ころがったまま、久六は恍惚として、極楽の境地をさまよっていた。

ここに隠れていれば、もう敵に襲われる心配はない。久六にとって、この地下部屋は自分の城であった。

お静とお雪のあげる悲鳴が、久六の耳に、天女の奏でる音楽のようにひびいた。

久六の衰えた視力には、お静とお雪の裸身も、いまはただ、ぼうつと白くかすんで映る

だけだったが、この執念の男は、それでも満足だった。

自分がつくった秘密の地下部屋で、大津屋彦兵衛の美しい女房とその娘を、あられもない姿に縛りあげ、思う存分、責めさいなんであることに、心の安らぎがあった。

二人の女がこっちの手中にある限り、おれは大津屋には絶対、負けない。と信じこんでいる久六だった。

いまが昼であるのか、夜なのか、その観念すら、いまの久六にはない。寺尾半九郎に右腕を斬り落とされてから幾日、経っているのかも忘れている。

復讐の快感と、官能の快感とが入り混ってどろどろと濁り淀んだ陶醉境のなかに、久六は沈んでいた。

「おい、政、行燈が暗くなった。もっとどんどん、景気よくつけてくれ。おい、政、政はいねえのか」

久六は、わずかに振った顔をあげて政を呼んだ。

政の姿はつい目の前にあるのに、衰弱している久六の目には、もうはっきりと見えないのだった。

「へい。ですが、親分、行燈はもうこれ以上あかるくなりませんぜ」

それでも火皿をのぞきこみながら、政がいった。

燈心をかきたてると、ジジジというかすかな音がして、いくらかは、あかるくなったような気がする。

天井の鉤から吊られた縄を、ようやく解かれたお静とお雪は、裸にされて改めてうしろ手に縛りあげられ、縄尻を柱につながれていた。

縛られてはいるものの、宙に吊られる苦痛とくらべれば、これはたしかに休憩のひとつときにはちがひなかった。

哀れな母と娘は、縛られたまま、つい、うとうとした。心身ともに極度に疲労しているため、裸でいる羞恥や、素肌に縄のくいこむ苦痛よりも、ただひたすらに眠りが欲しかったのである。

しかし久六は、二人の女に、いつまでも休息をあたえておかなかった。

「おい、政。おめえはお雪をつれて、となりの部屋へいけ。この部屋に、お静だけを置いていくんだ。わかったな」

その久六の言葉の意味がわからずに、

「へえ？」

と、政はきき返した。

「わからねえのか。この地下部屋にいるあいだけ、お雪はおめえにくれてやる。あっちへつれて行って、好きなようにかわいがってやれ」

「へえ……」

「お静は、おれがひき受ける。だからよ、おれとお静の邪魔をするなど言ってるんだ。わかったか」

「へい、わかりやした」

政は、やっと久六の腹のなかがわかって、べこりと頭をさげた。

おれはお雪よりも、こんどはお静のほうがよかったんだけどなあ……と思ったが、口にはだせない。

お雪のからだは、岩松の家の土蔵の中で、すっかり頂戴してしまつた政なのだ。

しかし、せっかくやると言つたものを、もらわないという法はない。まして、お雪は、めつたにお目にかかれなほどの美しい娘である。

「へい、ありがとうござえやす」

政は久六に礼をいって、お雪のそばへ寄ると、柱につないである縄を解きはじめた。

うたた寝をしていたお雪は、その気配に、ハッと目をさました。政の吐く息が耳もとに

かかり、本能的に首をひねって、縛られている上半身をもたえる。

政はお雪のその嫌悪の表情をみると、逆にこの娘への欲望が新しく湧くのをおぼえて、縄を解く手が、つい余計なところへのびるのだ。

「いやです、もうさわらないで！」

無駄とは知りながら、ついその言葉がお雪の口からでる。

お雪にとって、政は、ほかのだれよりもおそろしい男なのだ。政がそばへ寄ってくるだけで、お雪はふるえあがる。

「おいおい、そう嫌つたもんでもねえぜ、お雪。久六親分がおれとお前とを、夫婦にくださるとおっしゃるんだ。こいつは悪くねえ話だぜ。おめえはたしか、十六だと言つたなあ。おれは二十三だから、年まわりもちょっといいや。へへへ……そんなに嫌な顔をするもんじゃねえよ。もうお前とは夫婦みてえなもんだが、改めて枕をかわすとするか、えへへへ……」

「いやッ、いやですッ」

「いやだと言っても、もう仕方がねえんだ。これは親分のいいつけなんだからなあ。親分の言いつけとあれば、死んでも守らなければ

ならねえのが、おれたちの掟なんだ」

「おねがいです、もう、かんにんして！」

柱につなげられた縄尻は解かれたが、お雪の両腕を縛った縄は、まだ解かれない。政には、解く気がない。

縛ったまま、となりの部屋へ引き立てて行くというのだ。

「おい、立て。立ちやがれ」

政はお雪の背後にまわると、縄尻をつかんだ手に力をいれて引きずりあげた。

お雪は腰の筋肉にせいっぱいの力をこめて、お静のそばから離れまいと抵抗した。

「ぐずぐずしてやがると、また痛い目にあわすぜ」

政の大声に、お静が目をさました。娘が引きずられていくありさまを見ると、悲痛な声をあげた。

「ま、まってください。もうこれ以上、娘を責めるのはやめてください。責めるのなら、私を……私を責めて！」

お静は、ついさっき自分に加えられた残忍な吊り地獄の苦痛を忘れ、のびあがるようにしてさげんだ。

しかし、政はその言葉にふり返ると、卑しく口もとをねじまげて、せせら笑った。

「心配するなってことよ。お前を責める相手は、ちゃんときまってるんだ。久六親分が、じきじきにお前をかわいがってくれるとよ」

「ああ、おっかさん！」

縄にひきずられながら、お雪がうめいた。つつましいふくらみの乳房が、縄にねじれて痛々しくゆがんだ。母親と離れる不安を全身に表わして、お雪はおびえた。

「おっかさん！」

肩と尻をゆすって、なおもはかない抵抗をつづけたが、政は容赦なく縄尻を掌へ巻いて手もとに引き寄せ、お雪を部屋の外へつれだした。

「えへへへ、親分。邪魔者はこのへんで消えますから、あとは二人きりで、ごゆっくりお楽しみを……えへへへ」

お雪を抱いて、板戸の外へ出てから、もう一度、久六へふり返り、いっそう卑屈な声をあげて、政は笑った。

「うるせえ。早く消えろ！」

久六が、わめいた。

「へいへい、それじゃあっしらは、となりの部屋で……えへへ……えッヘッヘッヘッ」

政は、奇妙な声をあげて笑った。

片手片眼の化け物になり果てながらも、ま

だ女に対する執念を保ちつづけている久六という男に、畏怖とも軽蔑ともつかないものをおぼえ、政は複雑な気持ちでバカ笑いだしたのである。

暗い地下部屋の片隅にうごめいている久六の姿は、不気味な執念のかたまりだけに見えた。いや、やせ衰えた久六の肉体は、すでにかたまりではなくなっていた。

金網行燈のとぼしいあかりの下に、それはなにか、人間以外のものの影に見えた。妄執の影であった。

なめくじの舌

「おい、お静。もっとこっちへ寄れ……遠慮することはねえ……こっちへこい……」

久六は、のどに痰のからまったような声をあげ、うめくようにいった。

片手で半身を支えてようやく顔を起こし、やせ細った骨だらけの手をあげて、お静をまねくのだ。

もともと人相の悪い男である。それが極端な衰弱のために、眼窩が落ちくぼみ、頬骨ばかり突きだして、絵でみる男の幽霊そっくりの形相になっている。

着ている単衣物は、もうよれよれになって袖のあたりは大きく裂け、ただのボロきれを身にまとっているのと同じである。はだけた襟のあいだから、肋骨の浮きでているのが、濃い影をつくって一本ずつ、くっきりとわかるのだ。

暗い片隅から久六の眼が自分を凝視しているのを知って、お静はちぢみあがった。

「お静……お静……どうした、こねえのか。」

そうか、おめえは、柱に縛りつけられているんだっけな……それじゃ、こっちへ寄れねえのも当たり前だ。よし、おれのほうから、おめえのそばまで這っていくぜ。待ってろよ」

久六は、妙にやさしい声でいいながら、肩と背中をカタツムリのようにまるくすると、じわり、じわりと畳の上を這いだした。

お静は、思わず眼をそむけたが、自分にむかって進んでくるおそろしい敵の姿を、見ないわけにはいかない。

全身の筋肉をすくませ、お静は本能的に尻ごみした。しかし、背中はずぐに柱にぶつかって、逃げるどころか、一步も後退することはない。恐怖のために、乳首までが青ざめた。

骨と皮と筋だけになった男が、臭気を発し

ながら、ぞろり、ぞろりと畳の上を這ってくるさまは、幽霊というよりも、なにか死にかけた虫の姿に似ていた。

皮膚の色も、濃い茶褐色になっている。お静の鼻のさきに、久六の発散する臭気がとどいた。

もう幾日も湯に入っていないために、久六の全身は、汗と垢のにおいでおおわれ、強烈な臭気を放っているのだ。

「お静……いままで、おれはずいぶんおめえを苦しめたが、本当は、憎くておめえを責めたんじゃないねえ……かわいくて、かわいくて、たまらねえから責めたんだ。わかるか、おれの気持ち……」

のろのろと這いくねりながら、久六は老人の愚痴のように、低い声音でつぶやいた。

わずか三尺の距離を進むのに、三度も突んのめって、畳に頭をぶつけている久六だ。

「久六さん、もう、やめて……やめてください……」

「おい、お静……おれのこの右の眼をみる。」

おめえのかんざしに突かれて、つぶれた目玉だ。まだ痛くて痛くてたまらねえ。頭のしんまで、ずきずきしやがるんだ。この眼を、おめえの口でなめてくれ。おめえのかわいい舌

でなめてくれれば、きつと、痛みもとれるにちげえねえんだ」

お静の膝の前までにじり寄った久六は、下からなめに顔をあげて、血がどす黒くこびりついた右の眼を、お静の乳房の前あたりへ突きだすようにした。

その容貌の醜怪さに、お静は思わず息をのんで顔をそむけた。

「ふふふ……嘘だ、嘘だよ、お静。いまさらおめえの舌でなめてもらったって、このつぶれた眼が、もと通りになるはずはねえ。なめるのは、おれのほうだ。おれが、おめえの肌をなめてやる。いままで、さんざん痛い目に会わせた罪ほろぼしに、おれが、おめえのからだの隅から隅までを、たっぷりなめてやる。うふふふ……どうだ、うれしいか、うふふふふ……」

この数日間の高熱に肉体が衰えたせい、久六の歯は、ほとんど抜け落ちていた。そのために、よだれがひっきりなしに、唇の外へ流れでている。

「うれしいか、お静。ひひひひ……」

久六の左手が、お静の膝の上にかかる。まゐる、すべすべした裸の膝である。

お静は悲鳴を噛み殺し、両眼をとじた。そ

のおぞましい接触に、腰から下の筋肉が、きゅっと緊張した。

久六の手は、異様な熱を帯びていた。右腕のつけねの傷口がふたたび化膿し、熱を発しているのだ。その熱が、手の指さきに集中しているような熱さだった。

その熱い指が、お静の白い膝の上を、もぞもぞと這いのぼっていく。お静は戦慄した。

耐えきれずに、悲鳴をあげかけたとき、久六は左腕を折って、お静の足首の上に、顔を突っ伏した。半身を起こしつづけている体力が、もう久六にはなかった。

お静は畳の上に乗ったり尻を落として、横坐りに坐っていた。両足はそろえて、左のほうへ投げだしている。

上半身は柱を背にして縛りつけられ、棒のようになっているので、足を投げだしているのが、せめてもの慰めなのだった。

その足首のところへ顔を伏せた久六は、すぐにぬらぬらした唇で吸いついてきたのだ。

べちゃりッという不気味な感触に、お静はふるえあがった。久六の唇の内側には濁ったよだれが溜まっていて、それが、べちゃりッという音をたてたのだ。

「ううッ、くうッ！」

お静は上下の歯を必死に噛み合わせて声をだすことを耐えた。

久六は一度、唇を離し、うわ眼づかいにお静の反応をうかがうと、その歯のぬけた唇をさらに強く、お静の足首に押しつけた。

お静は顔をのけぞらせ、ひいッと息を吸いこむと、両足を縮めた。皮膚のすべてが青ざめ、鳥肌になった。

久六の舌と唇は、縮めたお静の足の指を、ぺろぺろとなめはじめたのだ。唇も舌も、指のさきと同じように、異様な熱気を持っていた。

その動きは、まぎれもなく愛撫であった。半死半生の化け物が、愛と憎しみをこめて入念になめまわすのだ。

いまはこうするよりほかに、お静に対する久六の感情をたたきつける方法はないのだ。

「ああ、ああ、お静、お静。おれのお静……おれだけのお静……」

熱い息を吐きだしながら、久六の舌はながながとのびて、お静の左足の五本の指のあいだまでを、ぺろぺろとなめた。

そのおぞましい舌の動きに、お静は髪の毛を逆立ててもだえた。

しかし、久六は左腕でしっかりとお静の足

首をかかえ、犬のように、いや、犬よりも執拗に、ぐちゃぐちゃと舌を鳴らしながら、足の指を口のなかにふくみ、なめつくすのだ。

「うひひひ……いい女ってものは、足の裏まで、こ、こんなにやわらけえのか、ひひ、ひひひひ……」

「ああ、そ、そんな、やめてッ！」

歯のない口で、つよく足の裏の土踏まずのところを吸われ、お静は尻を宙に浮かせて悲鳴をあげた。

「お静、お静。うう、うう……」

久六は、唾とよだれでべとべとに濡れた口を半びらきにして、うわごとのような声をあげた。

「もう、やめて……かんにんして……」

さらけだしている乳房を夢中でふるわせ、お静は歯をくいしばったまま泣いた。

久六の舌と唇が、次第に上のほうへ這いのぼってきたのだ。お静は泣きながらも渾身の力をだして、膝と膝の間をとり合わせた。

久六のからだは、さらに熱を帯びて、その舌も唇も、火のように熱くなっていた。お静の白いふくらはぎのあたりを、その唇で粘つくく吸い、なめつづけるのだ。

いくらかがいても駄目だった。久六の唇は

蛭のように吸いついて離れなかった。

お静の胸は、おそろしい予感に高鳴った。

久六の舌は、同じところにとまっていけないのだ。徐々に移動している。いまはまだ、ふくらはぎのあたりだが、かならず、もっと上へ這いあがってくるにちがいない。

そして、その予感は適中した。

一念のこもった久六の吸引力に、膝の力がなされないほどゆるんだ。膝ばかりでなく、力をいれていたからだの急所のあちこちが、意志とは逆に、骨がはずれたかと思うくらいにゆるみはじめた。

お静は、固く両眼をとじ、齒を噛み、眉の根を寄せた。これは自分の肉体との闘いだっ

た。しかし、いくら眼をとじても、ゆるめてはいけな

いところ、意気地なくゆるんだ。熱いものが背筋をつらぬき、嫌悪とはちがう感覚が、急速にお静を襲った。疼痛に似ていたが疼痛ではなく、骨の髄までを吸いつくされて、お静はうめいた。

久六のよだれと唾液で、お静の足の細いところから太い部分までが、隙間なく濡れて光った。なめくじが這いまわったあとを思わせる、にぶい光りかたであった。

お静の額から、あぶら汗が流れていた。久六もまた眼をとじ、痴呆のようにあえいでいた。

屍 臭 の 庭

「くそッ、そうか。ここが立花屋久六の別宅になっていたのか。おそろしくだっぴろい屋敷なんで、おれはいままで、どこかの旗本かお大名の下屋敷だとはかり思いこんでいたんだ。久六の野郎、いつのまにか、こんなところに隠れ家をつくりやがって！」

いまいましように大きな舌打ちをすると、黒縄の五郎蔵は、その屋敷の門をみあげた。門といっても、二本の柱の間にかんたんな扉がはまっているだけの目立たないもので、うっかり前を通ると、どこかの古寺と錯覚しそうな造りである。

屋敷の周囲には、これもごく平凡な土塀がさりげなくめぐらしてある。

「なにしろ、久六は掏摸の親分なんですからね。ひとさまが一生けんめい働いてふくらました財布を、だまって横から頂く商売なんだから、儲からないはずはありませんよ。その掏摸だって、自分じゃ手をださずに、子分が

掏りとってきたものを、みんな巻きあげちゃうんですから、こんな結構な商売はありやしない」

と、お京がふてくされた笑いをうかべながらいった。

隅田川にほど近い石浜神社裏の、ひっそりとした草深い場所に建てられた立花屋久六の屋敷は、死んだように静まりかえっている。今戸で瓦を焼く煙が、遠くの空にたちのぼっているのが見える。

五郎蔵とお京は、あたりに目をくぼりながら、門の脇の通用口をくぐった。

雑草の生い茂った、荒れ果てた庭が、視界いっぱいにあらわれた。

「こっちですよ、親分」

お京は、草を踏みながら裏庭の方角へ五郎蔵を案内する。

久六が隠れている場所を教えれば、これまでの罪はすべて見逃がす、という五郎蔵との約束のもとに、ここまで案内してきたお京であった。

お京には自信があった。岩松の家を脱出した久六にとって、あと安全に身を隠すことのできる場所は、この花屋敷とよばれる別宅の地下部屋しかないはずだ。

久六は、かならずもう一度、ここへもどってくる。女の人質を二人もかかえて、ほかに身をひそめる場所はない。

この地下部屋には、大津屋のお静もお雪も当然いるはずである。その確信のもとに、お京は五郎蔵を案内してきたのだ。

「もし久六の野郎がこの屋敷の中にいなかったら、またおめえを裸にして縛りあげ、本当のことを吐くまでは折檻をつづけてやるから覚悟しろよ」

裏庭へ通ずる離れの横を歩きながら、五郎蔵がおどした。

「わかってますよ。あたしだって、そのくらの覚悟はできてますよ」

ここまでくる間に、なんとか逃げてやろうと思って機会をねらったが、さすがに五郎蔵は岡ツ引きだけあって、容易に隙はみせなかった。お京はいまのところ、目にみえない縄で縛られているようなものである。

こうなったら、久六に五郎蔵をぶつけて、そのどさくさまぎれに逃げるよりほかに、手がない。お京は、五郎蔵から逃げることはかり考えている。

「庭は広いが、建て物は意外にちいせえんだな」

五郎蔵が、きよろきよろ見まわしながらいった。

「母屋の中に、いまはだれもいませんよ。前は、めかけのお仙が住んでいたんです。この裏庭に土蔵がいくつか建っていて、その土蔵の床下に、広い地下部屋ができていますんですよ」

お京は説明した。

裏庭へまわると、すぐにその土蔵が現われた。手前の左側に、井戸がある。この井戸の中には、新助、銀三、源次、そして町奉行所の同心八木沢左内の死体が折り重なって眠っている。

土蔵の屋根に、十数羽のカラスがとまって鳴いていた。

「ちえッ、いやな鳴き声だ。へどがでる」

五郎蔵は井戸の横に立ちどまり、おびえたように周囲をみまわした。

不気味な静寂があたりを包んで、背中や肩のあたりに、つめたい殺気がひしひしと感じられるのだ。どこからか風によって、屍臭がただよってくる。

「さあ、つきましたよ。この土蔵の床下に、地下部屋があるんです。うまく出来ているんですよ。お役人がいくら探したって、ここに

隠れていれば、絶対にみつかりません」

お京は、土蔵の扉を指さした。

しかし五郎蔵は、その金網扉の前に凝然と突っ立ったきり、踏みこもうとしない。

「どうしたんです、親分」

お京は、いぶかってきいた。

「なんだか、妙に血のにおいがしやがる。前から、うしろからも、地面からも空からもにおってきやがるんだ」

五郎蔵は、不安をおし隠すようにして、顔をしかめた。

「そうですねえ。そう言われてみれば、ひどくいやなおいが、しますねえ……」

お京は、井戸からやや離れた場所ですづやいた。この井戸の底に、数人の男が投げこまれていることを、お京は知っている。

「おれは岡ツ引きだから、このにおいは前にいくどか嗅いだことがあるんだ。そうだ、思いだした。これは人が死んで、その死骸が腐ったときのおいだ」

五郎蔵は、日頃のこの男に似合わず、うす気味悪そうに肩をすくめ、地面の上へやたらに唾を吐いた。

「さあ、親分。その土蔵の扉をあけて中へ入り、突き当たりの奥の床板を剥がせば、そこ

がもう、地下部屋へおりる階段ですよ」

お京はせかして、自分から扉に手をかけようとした。

「待て、お京」

五郎蔵は、あわててとめた。

「どうしたんです、親分」

お京は、五郎蔵の顔をみた。

「久六には、なんとかいう用心棒がついていたな？」

「ええ、寺尾半九郎っていう浪人です。強い上におそろしく短気な侍で、いきなりパッサリきますから、用心してくださいよ」

お京は、べつに五郎蔵をおどすつもりで言ったのではなかった。

半九郎が強いことも、短気なことも、居合抜きの名人であることも、すべて事実であった。

「そいつは、まずいな」

五郎蔵は、お京の言葉に、いっそうためらった。うっかり踏みこんで、そんな凄腕の用心棒に斬られたら、元も子も無くなる。

勝ち目のない勝負に命を賭けるほど、五郎蔵は無謀な男ではない。

五郎蔵は考えた。そして、結論がでた。

この土蔵の下には、たしかに怪しい気配が

ある。久六と、大津屋の女房と娘が、地下部屋にいることは、もう間違いのねえところだろう。これは、岡ッ引きとしての、おれのカンだ。

だからこのことを、ひとまず大津屋彦兵衛に報告するのだ。そして、たとえ五両でも十両でもいいから、とりあえず礼金をもらうことだ。

その上で、お静とお雪を無事に助けだし、褒美の金をせしめよう。そして最後に、オランダ歌留多の半片を大津屋彦兵衛に突きつけて、千両とまとまった金を巻きあげてやるのだ。

いまあわてて地下部屋へ踏みこむのは、あんまり利口なやつのことじゃねえ。

君子危きに近寄らず、という諺がある。命あつての物種だ……五郎蔵は腹の中で、自分が絶対、損をしないように計算した。

いまは、ひとまず退散したほうが得策だ。

五郎蔵は、決心した。

「おい、お京、引き返すんだ。今戸へ帰るんだ」

いいながら、五郎蔵はお京の片腕をつかんだ。

「どうしたんですよ、親分。せっかくここま

で来て……。もうひと足じゃありませんか。久六のところへ親分をご案内したら、すぐにもあたしを、かんにんしてくれる約束なんですよ」

「うるせえ！」

と、空気を裂くような激しさで、五郎蔵はいった。

「おれのすることに、口をだすな。つべこべ言やがると、また縄をかけるぞ！」

お京は唇を噛んで、だまった。

ちくしょう、まただまされた。なんという卑怯な男なんだろう。

胸が煮えくりかえる思いだ。

どうするか、おぼえていやがれ。一寸の虫にも、五分の魂だ。いくら女掏摸だって、意地というものがある。

いつかは、思い知らせてやる。この仇は、いつか、かならず、とってやる！

お京は五郎蔵に腕をとられ、いま来たばかりの道を、無理やりに引きずられた。

土蔵の屋根の上のカラスが、いつのまにか数十羽に増え、不吉な声をだして鳴いた。五郎蔵の足が、その鳴き声に追われるようになった。

二人の背中に、血なまぐさい風が吹いた。

絶望の底

はじめ、お雪の血は凍りつき、そしてつぎに、炎に包まれたように熱くなった。

久六の醜悪きわまる痴態を、お雪は板戸の隙間から、全部のぞき見たのである。いや、政のために、無理やりにのぞき見をさせられたのである。

久六の痴態の相手は、うしろ手に縛られて身動きのできないお静であった。

若く美しい母が、苦しみもだえる姿を、お雪は死ぬよりもつらい思いで見た。娘のお雪が見てはいけないうものだった。

目をつぶることは、ゆるされなかった。目をとじると、背後から政が、微妙なところへ腕をまわして、指で卑劣な悪戯をするのである。

お雪の羞恥心をえぐり、最後の自尊心をつらぬく指であった。その忌わしさに、お雪はあわてて目をひらいて、久六の舌にのたうつお静をみつめるのだった。

金網行燈のにぶいあかりの下で、それは不気味な生き物の、奇怪なもつれあいだった。暗いせまい廊下で、中腰になってのぞき見

を強制されているお雪の目から、涙があふれ落ちた。

久六に責められてうめくお静の姿が、涙のためにぼうつと白くかすんで、はっきり見えなくなった。

それがお雪にとって、唯一の救いだった。しかし、その涙は、すぐに政に発見され、汚れた手拭いでふきとられた。

「なにも泣くことあねえやな。あれがお前、男と女ってえものさ。まあ、久六親分は、世間並みな男とはすこしばかり交っているけどな。それにしても、はじめはあんなに嫌がっていたお静が、いまはもう、親分にされるがままだ。もっとも、柱に縛りつけられていてどこへも逃げる事ができねえんだから仕方なのね話だけだよ」

政はお雪の耳に口を寄せて、ぼそぼそとささやく。政の顔も、上気して赤くなり、目の色が変わっている。自分も舌をだして、しきりに上唇をなめている。

お雪をうしろ手に縛ったその縄尻を、左手に汗ばむほど握りしめ、いつのまにかそれを強くねじりあげているのだ。

「おれもお前に、あんなことをしてみたくなつたぜ。ええ、おい、お雪。ああいうふうに

足の指からなめてやろうか。おれはまだ、足なんかなめたことは一度もねえんだが、久六親分が、あんなによだれを流して、ヒイヒイよろこんでいるところを見ると、よっぽど味のいいものなんだろうなあ……」

ささやきながら、政は舌をだして、お雪の耳の穴のなかを、べろりとなめた。

お雪は、ぞおつとして、ふるえあがった。首をふって、思わず両眼をとじた。しかしすぐに政の指に尻の肉をつねられ、また目をひらいた。

目をひらけば、醜怪な虫のような久六と、その久六に責められるお静の姿を、いやでも見なければならぬ。

お雪は地獄だった。気持ちがいにならないのが不思議だった。

「考えてみりゃ、久六親分だって、不自由な恰好をして、あんな真似をしたくはねえだろうなあ。なにしろ片腕しかなくて、からだですっかり弱っちゃったから、しょうがねえから、あんな真似をしているんだろうな。しかし、幽霊みてえにやせ細っていながら、よくあれだけの根気があるもんだ。たまげたぜ」

政は、しきりに首をひねって感心したり、不思議がったりしている。そして、飽きもせ

ず、板戸の隙間からのぞきこんでいるのだ。
「もう、見るのはいやです。おねがいですから、あっちのお部屋へつれて行って！」
耐えきれなくなって、お雪は哀願した。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。
○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。
○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替(大阪四二

もう、とても見つづけることはできない。
政は、その言葉をきくと、隙間から目を離して、にたりと笑った。

「そうかい、そうかい。お前もやっとその気

七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

になったかい。おれはそいつを待っていたのさ。おれも親分に負けぬくらいに、かわいがってやるぜ。へへ、へへ……」

政は、お雪の肩に、片腕をまわした。

お雪は、せまい廊下を歩きだす。といつても、三步も行ったら、もうとなりの部屋の板戸の前につく。

政は、久六に気づかれぬように、そろそろと板戸をあけた。

「さあ、入れよ、おれのかわいい花嫁さん」
政は、縄尻を放して、お雪の背中を軽く突いた。

お雪は、なんの抵抗もできずに、みじめに前へつんのめり、そのまま畳の上にころがった。政は手さぐりで金網行燈に火をつけた。あられもなく膝をひらいて必死に起きようとうごめくお雪をみおろしながら、政はいった。

「どこからなめてやろうか。やっぱり久六親分みてえに、足のさきから、なめるとしようか。へへ、へへ……」

お雪は全身を海老のように折って縮めた。政の言葉が、単なる脅しとは思えない。この男は、かならず、やるだろう。久六よりももっとひどいことを自分のからだに加えるだ

ろう。

お雪に、絶望感が襲った。もうお雪の目の前には、なにもなかった。

二度と這いあがれない絶望のどん底に、お雪は落ちこんだ。まっ暗闇だった。

救いだされる望みも、生きていく気力も、もうお雪にはなかった。

政がなにか笑い声をあげて、お雪にのしかかってきた。両手でしっかりとお雪の肩を抱きしめ、はじめに、むさぼるように唇を吸った。

かじりつきながら夢中で吸いあげ、それから自分の舌を強引にねじこんできた。

お雪は、最後に残った気力を必死に結集して、自分の歯のあいだにうごめく政の舌を噛んだ。

「むうッ！」

とうめき、あわてて引きぬこうとする舌を満身の力をこめて噛み切った。

政は、お雪を突きとばして離れた。そして畳の上で七転八倒をはじめた。

政の口から、おびただしい血糊が、泡のようになびきだした。ころげまわりながら、のどをかきむしった。が、やがてその動きもにぶくなった。

「ぐ、ぐ、ぐ……」

という、うめき声も、虫の息になった。

お雪は、自分の口のなかに残った政の舌を吐きだした。お雪の口からも、血があふれた。

お雪は、すでに死を覚悟していた。

こんな裸のまま、しかも、うしろ手に縛られたままで死ぬのは嫌だな、とお雪は思った。しかし、それは一瞬の間だった。

お雪は、死への誘惑にとり憑かれていた。もう、生きていくのは嫌だった。あまりにも、つらかった。なにもかも放棄して、楽になりたかった。

お雪は、ついに、自分で自分の舌を噛み切った。

それは思ったよりも容易にできた。こんなにかんたんに死ぬるものなら、もっと早く死ねばよかった、とお雪は、うすれゆく意識の底で思った。

痛みも、あまり感じなかった。

自分で自分の舌を噛み切ることを、やさしいと思うほど、それまでに受けた心身の苦痛は強烈だったのだ。

血がのどに流れこみ、瞬時、激しくむせて咳こんだ。のどがふさがれて、わずかに苦痛

の感覚があった。その苦痛も、しかしいまのお雪には、甘美なものに思われた。

父親の彦兵衛の顔と、死んだ実母の顔が、並んで脳裡に浮かんだ。

姉のお絹や、継母のお静の顔が、重なって浮かんだ。

それから、この数日間、飽きもせず自分を責めさいなんだ男たちや、お仙の顔も、瞬間的に、脳裡によぎった。

そして、お雪の意識は、急速にうすれた。

十六歳の不運な娘の呼吸は絶えた。

その死顔は、不思議なほど美しかった。長い苦しみから解放されて、ようやく安らぎを得た娘の、微笑すらただよわせていた。

縄に巻かれている全裸の肌も、神々しいほど白く冴えていた。

壁際には、政が両手で虚空をかきむしった形のまま、硬直して死んでいる。その足もとには、お雪に噛み切られた舌の切れはしが、赤い痰のように光っていた。

となりの部屋では、久六がお静の肌へ、まだピチャピチャと舌を鳴らしていた。

——(未完)——

懸賞〔告白、手記、体験〕入選作品発表

異常者のカルテ

いいたい放題

暗 闇 太 郎

(カットも)



1 縄

私を感じ得る女性の女性としての魅力は、二〇才代の若い女性についてである。二〇才の女子大生、二十三、四才のOL、二十七、八才の若奥さん―又三〇才の婦人も魅力的に感じられる。

私は女性に対して、あまりにも強度なサディズムの持ち主なのだろう。清潔なるセーラー服や、中年の色気というものにはひかれな

い。若い女性が大好きなのである。

好きで好きでしようがないから、私は女性を自分の思うままに縄で縛りあげ、責めつけてやりたい、と思う。ただ「きれいな女性だな」と思い、見とれているだけでは、私のサディズムは満たされないのだ。私は確かに異常者の一人なのである。

女性の裸体―世間の多くの一般誌にヌード写真として堂々と載っていて、多くの者がそれを見ている。しかしそれを見てヨダレを流しても、自分は女性のヌードが好きだから異常だなどと思っている者はいないだろう。

女性の裸姿は芸術だとも評され、絵画や彫刻にまでなっているのである。いわば女性の裸体は自然美であり、それにひかれることも又自然なのだろう。

事実、独身者の部屋の壁にヌード写真がはってあっても、今やそれをどうこういう人はいないようだ。しかし、同じヌード写真でも、縄というものが加わった緊縛写真がはってあったとなると、何か冷たい疑惑の眼で見られるのに違いないのだ。ただ縄というアクセサリ―？ が含まれただけなのに―である。

私は単なる女のヌードなどには、何の興味も感じない。少数派と同じく、私にとっては女性美の観賞には絶対に縄が必要なのだ。縄で女性を縛りあげてこそ、はじめて女性の美が表現されるのだ、と自分では想っている。女性には縄で緊縛されてこそ体内に潜んでいる羞恥心・官能美というものがひき出されて、女性美の味を漂わせるのである。としか考えられないのだ。

縄の緊縛に、ある女性はあるがききしみ、身体をくねらせて抵抗を試み、又、ある女性は陶酔し、全身に喜びを表現する——ここに私は女というものの持つ味、美しさを感じる。ゆえに緊縛女体の美は、女性の自然美ではなく、強要されてしみ出す、内奥に潜む女性の真の美——異常な美の迫及であろうが——と言えると思う。私にとっては、ただの女のヌードなど、単なる冷たいわら人形でしかないのだ。縄によってひき出された女体の生々とした官能、羞恥の躍動の美が、私に女性の美を訴えてくれるのである。

しかし世間ではこの縄を「アクセサリー」とは認めないで——私にとっても縄は責具であり、アクセサリーとは感じないが——縄の愛好を非難するのである。縛りというものが犯罪の象徴の一つだからであらうか。事実、縄は相手の自由を奪うという能力を持ち、犯罪には大きな力を発揮するものの一つには違

いないのである。特に犯罪の面について言えば、女性を緊縛してしまつたら、もうそれだけで犯罪は成立し、女性の自由・抵抗は、失われてしまい、後は賊のなすがままにされてしまう——こんな縄を世間が許す道理がないのは当然といえば当然のことであらうか。考えてみれば縄というのは本来、物を固定するためのものであり、決して人——ましてや女性を縛るためのものではないのである。だがしかし「女体緊縛——緊縛女体」という言葉の響きは、私にとっては犯罪とは別の憧れを以て迫ってくるのだ。そしてそれが私は好きである。縄+女=縛り、これが私の方程式なのだ。

テレビ番組に「スパイ大作戦」というのがある。私は新聞に「女スパイ捕まる云々」という解説を見つけ、女スパイの縄による緊縛シーンを期待して見ていたのだが、何とものがかりした。科学ものとして名声を博すこの番組——女スパイを捕えたはいいが、緊縛も何もあつたものではない。最新機械を駆使して女スパイの弱点をさぐり出し、脳波の変化で判定するのだが、そこには拷問シーンは全く見られなかった——あくまでも科学に徹して責めつけるのである。この中には古めかしい縄などは見あたりもしなかった。

私の頭では、女が捕まつたと言え、女は

必ず縛られ、拷問といえ、また然り、であつて、これにはがっかりした。と同時に、何十年かたてば、科学の進歩によって本当に縄という物は世間からは忘れ去られてしまい、ただ少数愛好派の間でのみ根強く存続していく、というような世の中になっていくのではないか——と驚きとも不安ともつかない気持ちになつてしまった。

科学の時代——そこでは「縄」という古典的な嗜好品は、本当に異常者のものとなつてしまふであらう。時代は変るのである。私は自分を異常者と呼ぶ。そしてSMプレイ愛好者、奇ク愛読者、女体緊縛愛好者をもそう呼んだら——私は非難されるだらうか。それとも「もっともだ」と同意を得るであらうか。

奇クを読んでいると、どうも女体緊縛を好み、揮をしめ、浣腸を自らに施する人達は、性的欲求というものが満たされるために自分に満足しきつていて、自分の外から自分を見つめるもう一つの眼がないように思える。私は「縄」の愛好はやはり異常なのであり、それを正常だとする人は更に異常であり、もう一度自分というものを考えてみる必要があると思う。この問題は又後で述べたいと思う。

2 ああ、女性上位時代

最近女性上位時代といわれている。日常生活ではそれはあまり感じられないが、目に

見えてその傾向ができてきているのがテレビである。昔のアクション物といえば、時代劇にしろスパイ・探偵物にしろ、主人公は強く、たくましい男達であった。そして数々の美女達が脇役として登場し、そのあまりのか弱さのため悪人に捕えられてしまう。そして終末で主人公の男性に助けられて、めでたしめでたしとなったものであろう。

それが今では、どうだ。

女性がアクションの主人公となり、あるいは恐ろしく強い美人助手となって悪玉をなぎ倒すのである。そこには昔の緊縛美人の像などありはしない。

女性上位時代——完全なるSである私にとっては、いつ誰がどこで唱え出したものか知らないが、なげかわしい言葉ではある。やはり女性はしとやかで、か弱くあってほしいものだ。

テレビで、女性緊縛シーンがよく出るものとして奇ク読者の注目をあびたものは「ザ・ガードマン」が第一にあげられるだろう。この「ガードマン」でさえ「縄」の緊縛は影をひそめているこのごろである。以前は数多くの緊縛名作？があつたものだ。私の印象に強く残っているのが三つ程ある。

まず一つは「鍵の中の死刑台」である。これは催眠術を使う老婆が、自分の息子を殺した犯人として三人の女性を古びた洋館に監禁

し、話が発展していくというものだが、スリラー風の中に浮き出された三人の緊縛女性が印象的で、それも和服姿で縛られた女性には、空腹に耐えかねて、後手に縛られたまま床におかれた皿の食事にむさぼりつく、というメス犬そのものの演技を見せてくれたのには驚いた。そして確かに縛りあげられた背中の両手と、犬のように舌で食物をあさる顔のアップとを胸をわくわくさせて楽しんだものだ。又、別の女性は同じように緊縛されるのだがあくまで老婆の差し出す食事に手をつけずに抵抗し、おこった老婆に責めつけられる、というもので、この二人の女性の対照は実に味があつた。この作品は緊縛場面の点でも、SM的ストーリーの面でも「緊縛作品」中第一のものだろうと思う。

二つ目は「阿蘇のシンデレラ」という作品で、莫大な遺産を横取りしようと、悪女が相続人である女性を緊縛して山小屋に閉じこめてしまうもので、これは実に頻繁に緊縛シーンがでてきた。そして緊縛された女性が、柱にくくりつけられた縄をとき、後手に縛られたまま山野を逃げ、ついに悪女に再び捕えられて責めつけられる。——数分にも満たないシーンではあるが、必死に逃げようとする緊縛女性が、何度もつんのめってころぶ場面があり、これは本当に後手に縛られたままで、大地に転倒していた。後手に縛られたままで

転倒するのはちょっとやそっとではできないことで、身体をはって転倒シーンを演じた女優に驚いたものだ。

そして三つ目は、題は忘れてしまったがネグリジェ姿で緊縛され、男の手によって長い豊かな髪をバシバシ切り落とされて、女性が泣き叫ぶシーンである。切り落とした髪がかつらかどうかは知らないが、地の髪であつたら驚くべきことだろう。もっとも尼僧を演じるのに丸ぼうずにした女性まで後に現われているが——。

「ガードマン」のよさの一つは、何と云っても、テレビでは珍しいリアルな緊縛だろう。おし気もなく確かに後手の緊縛を、女性の後姿をとらえて見せてくれる。他の番組はだめだ。二、三筋の縄を胸の上にかけて、ただ手を後にまわし前面だけしか映さない。実際に緊縛していないからだろう。私は「ガードマン」だけは末長く続いてもいいと願う。別に番組を宣伝する訳ではないが、他番組ではあまり望めないからである。いつだったか「女の戦争」で女性同志の緊縛を混じえたりンチ合戦を演じ、新聞で賛否話題をまいたのも、もう昔の話となつてしまった。

「ガードマン」よ、再び以前のような緊縛の名作を見せてはくれまいか。

私はアクション物では女性上位になつてもいいとは思わない。女性はいくまでか弱く、悪

玉に捕えられ、主役男性をひきたててもらいたいのだ。「平四郎危機一発」の夏佳子が、宝田明のアシスタントとしてよく緊縛シーンを演じてくれたのも、もう昔の話となつてしまったが。今や「プレイガール」「キイ・ハント」などのスーパレディが、テレビにあふれている時世——私には何とも味気ないテレビ界である。

その点、女体緊縛を充分楽しませてくれる物の筆頭は映画であろう。最近は大五社もピンク映画もどきの緊縛映画をつくるに至ってしまった。しかし私にとっては大手五社の緊縛映画は好きになれない。緊縛映画といえ、やはり何と言っても小プロのピンク映画である。五社の緊縛映画——何か遠い、あまりにも大きなものに感じられて、親近感が湧いてこないのだ。

私は映画を見ているうちに、私自身が映画の登場人物になりきって冥想にふけるたちなので、それには何といつてもピンク映画がよいのである。小プロのピンク映画の緊縛舞台は売春宿の一室、畳の四畳半、とある地下室で、そこに限られた少数の者がいれればいいのだ。そしてこの少数でこじんまりした所が、私に親近感を与えてくれる。大がかりなセツト、多勢の出演者——私にはあわない。多数の緊縛女体をわずかずつ見るよりは、数人の緊縛女体をじっくり責めつける方が私にあう

のだ。

しかし私がいつも驚くのは、五社作品に登場する縛られ役女性の多いことである。ピンク映画の道に入つて緊縛をうけるならまだしも、演技を売りものの五社に入つた女優達がよくもまああんな緊縛を許すものだ、と驚かすにはいられない。何が何でも名を売りたいのか、ドライに割り切っているのかは知らないが、以前は女体緊縛といえ、きまつてピンク映画だったものが、ここにも強くなつた女性の一面がうかがえるような気がする。

五社がこれから先も緊縛映画に走るのかどうか知らないが、私としては、緊縛ものはピンクにまかせてもらいたいと思う。そしてピンク映画は、もっとふんだんに、完全な緊縛場面を盛りこんでもらいたいと思う。最近はストーリーを重視し、雑で何とも緊縛感のない縛りが多すぎるように思えてならない。こう言つては語弊があり、又非難されるかもしれないが、私はストーリーはどうあれ、より多く、より長く、そしてより完全な女体緊縛を見せてもらいたい、とお願ひする。

3 異常者とその実態

異常者——とは何であろう。そしてどんな人間であろう。私は今、私自身について考えている。そして前述のように、私は自分を異常者だと自認することは、度々あげてきたあ

まりの若い女性へのあこがれのために、縄による女体緊縛を好み、そしてSM夜尿症、オシメへのあこがれ、女体への羞恥責め——あげればきりが無い程の性癖を、私は持っているのだ。今の私としては、できることならばこれら総ての性癖を一切、私の心から消し去ってしまいたいと思つてやまない。しかし、それもはやできなくなつてしまった。

私は時々ふと考えることなのだが、世の中には、色々な事情で表面には現われずにいるが、いわゆる強盗事件的な、緊縛だけを目的としたような犯罪が起こっているのではないかと。と思うことがあるのだ。SMプレイや女体緊縛をしたい欲求にかられ、ついには犯罪をおこしてしまう。こんな人間がいないとは言えない。女体緊縛を自分の手で本当に楽しんでる人は、奇ク愛読者多しといえどほんのわずかの数%の人達でしかないだろう。奇クを愛読する者の殆どは、女体緊縛へのあこがれを持つが、緊縛を許してくれる女性がその者達全てにいるはずがない。ということとは、世の中には緊縛だけを目的とした犯罪者になりうる人々が数限りなくいる。ということではないだろうか。私自身もまかりまちがえば、その一人となりうる身だ。

私自身の経験から言つと、一度、心の中に女体緊縛のサディズムを感じとつたならば、それはもう自分の心からは消し去る、または

縮小せしめることはできない性質のものではないかと思う。無限に拡大発展するのだ。始めはただ女体緊縛というものに、理由も知らず感動を覚え震えていた者が、やがて人の記したものをみているだけでは物足らなくなり自分で文を書き、緊縛女体を自分の思うように絵に描くようになるだろう。そして又一步進んで、緊縛写真を求めるようになる。

緊縛写真はあくまで真実であり、生々しさを秘めている。そしてどんな巧みな文章であっても、緊縛写真はそれを蹴おとす実感と真実味を持って見る者の心に迫ってくるのだ。

「百聞は一見にしかず」なのだ。しかし、緊縛写真はやはり写真でしかなく、躍動がないのだ。そこに、またもや不満を見い出すであろう。そして緊縛写真の持つ真実がそれに拍車をかけるのだ。そう、この写真の緊縛された女性に偽りではない。実際に何者かによって縛りあげられているのだ。世の中には本当に緊縛されうる女性がいる。自分にそれがない訳はない——と。

女体緊縛の味は、例えば悪いが麻薬の味と同じもののように思えてならない。共に一度知ったらやめることはできずどんどん進展していく。そして行きつく所は——麻薬は死である。女体緊縛は——変態者と呼ばれる。

ただ女体緊縛と麻薬との相違は、女体緊縛の方は意志抑制がきくということだ。奇クを

手にしても、女体緊縛を知っても「ほう」という感嘆だけで済む人は別であり、「これだ私の求めていたのは！」と、女体緊縛に特殊の感動を感じる人へのみ前述の進展がおこりうるのだろう。私は女体緊縛を麻薬に例えたが、これが善か悪かについてはわからない。麻薬は社会的にはあきらかに悪だが、常用者としてみれば、そこにはバラ色の世界があるかもしれない。女体緊縛についても、犯罪として現われてしまえばそれは悪だ。しかし私は「常用者」であるからかもしれないが、女体緊縛が悪だとは思わないし、思いたくない。——異常という問題からそれてしまったようだ。

自分は異常だ、と自認の上で、私は自分を制御しているつもりである。前述のように私は二重人格であり、女体緊縛に走りそれを追い求める眼と、それにストップをかけ、冷静に自分を見つめる二つの眼を持っていると自負している。

最近の奇クでは、SMの正道化をうたう人が現われてきている。しかし私はSMが正道化されるためには、SM愛好者のより強い自覚と、意志抑制が必要だと思う。今のままでもし、フリーになったとしたら、そこには欲求の余り犯罪をも正当化しかねない男達がいらんするにちがいない。

私に言わせればSMはあくまでも「異常」

であり枠の中に入れて置くべきものと思う。告白に数々の奇行を載せ、それに自らが満足しきり、それでいいのだ、俺のたった行動は正常なんだ、といわんばかりの人があまりにも多すぎるように思う。「夜尿症、オシメはすばらしい」「あなたも痺をどうぞ」「流腸はいい気持です」等——色々あった。しかし私はこれらの人に、声を大にしたいののだ。もう一度自分というものを、別の眼で見てごらんさない。社会人としての眼で見てごらんさない。縄による女体緊縛は勿論、それらは全てみな「異常行為」に他ならないのではないだろうか——と。

* * *

まとまりのないものになってしまった。

「異常者のカルテ」私はこれを奇クの同好者に読んでもらいたい。そして私のことを疑惑と軽蔑の眼でみつめ、何と異常な奴だとけなしてもらいたいのだ。まちがっても私の「告白」に対して同調してはもらいたくない。

「オシメ」を愛用している人も、もう一度、自分の気持を正当化したいという甘い気持というものを考え直してもらいたい。

私は異常者である。そして私を見つめる冷静な眼が抑制力を失った時——私は変態者となり、犯罪者と化すだろう。女体を狙う緊縛魔となりかねないのだ。

——完——

人間の牝・恵子さんに捧げる



恵子

生贄の

臨月夢

高野原美

中河恵子は、臨月になった大きなお腹をもて余すように突き出して、肩で喘ぐように息をついていた。

今夜は、仕事の都合で夫が帰宅しないのでガランとして静かな家の一室で、何の刺激もない淋しさをまぎらわすため、恵子はアルバムを開いて見ていたのである。

アルバムは、恵子のマゾ女性としての大切な記録、恵子被虐羞恥責めの数々のシーンが生き生きと撮られた、貴重なフォート集でも

あった。もう十数冊にも及んでいる。

先程から、恵子は、それらの生贄としての姿を見ながら陶醉し、妖しい興奮を覚えていた。「花と蛇」の主人公である静子夫人の極端な羞恥責めを徹底的に味わってみたいと願い、急にそれが現実の姿となって自分が演じる破目になった時、余りの人間否定と動物の牝としての扱いに、みじめな気持ちを感じたものであった。

しかし、二度、三度と羞恥責めに痛めつけ

られるに従ってマゾ本能はかき立てられ、両足を吊られ、女性として最も羞恥心をかり立てられる姿で縛りつけられた時、激しい満足感に恍惚となってくるのであった。この死ぬ程恥かしい責めのポーズを、冷酷にも鮮明に映しとろうとして、カメラを保持する男の姿を見た時、無防備に内臓まで曝しているように感じ、激しい羞恥心とともに快い恍惚感で全身が緊張を感じたものであった。

私のこの数々の羞恥緊縛フォートが、全国

の愛好者の手元にあり、私と同様に見ておられるだろう。私のこれらのポーズから写真では見えない部分、角度からの私の肉体を想像し、残酷な視線が私のフォートを透視せんばかりに走っていることであろう。何百何千の好色な「花と蛇」のズベ公のような視線が……。こういう空想が次々と浮かんで、恵子は一人で自分のフォートに酔い、陶然となってきた。

「ああ、誰でもいい。わたしを徹底的に恥かしめてほしい」

と叫ぶと、大きな全身を映す鏡台の前に立って服を脱ぎはじめた。

恵子の夜の衣裳は異常なものであった。それは、マタニティの上からでも充分に、恵子の妊娠によって大きく膨れた腹が、一見して鑑賞できるようになっていた。今年の流行の先端を行く「スケスケモード」即ち透明なのである。

妊婦のヌードを愛好する方のために、恵子の衣裳を紹介しておこう。

普通のマタニティドレスの胸元の下から下腹部までを大きくくり抜いて、その部分に透明ナイロンを裏から縫いつけてあり、さらに乳房の下と下腹部に絹紐が通っていて、それ

を着衣後に締めつける。そのために、ゆったりしたマタニティドレスは妊娠腹の上下で緊縛されるので、臨月腹の膨らみにピッタリと服が貼りついたようになり、膨らみの輪廓がクッキリとでてくる。そのうえ、腹の部分に透明ナイロンを縫い付けてあるので、妊娠腹の変化が、裸同様に着衣の上からでも見えるというものである。

勿論、腹帯を取りっぱなしでいるわけにはいかなないので、この点についても彼女は工夫をしている。即ち腹帯は、透明で強靱さが要求されるため、先の透明ナイロンとガラス製ファイバーを織り合わせた布を使用しているのだ。パンティはビキニの極端なものを常に着用している。

恵子は、この服を脱ぎ、腹帯をとるとわずかにスガリつくようにまといっているパンティも脱ぎ捨てて、臨月腹の異常な女体の全裸の姿を鏡に映しだしていた。

二十二才の若々しい恵子の裸身は、適度の脂肪をつけて豊かな量感が、分娩を目前にした母体の妖しい艶めきと、美しさを発揮していた。

やや軽く両脚を左右に開き正面を向いて立

っている恵子は、充実した腹部の重力感にバランスを取るように、腹を突き出し、喘ぐ肩をそらせているので、横から見ると身体全体はS字状を描いている。

娘の頃は、固く充実した小さな半球の乳房であったが、ポツテリした豊かさに変わって充実した臨月腹にのしかかるように突出している。一寸でも触れれば、乳汁がとび散るのではないかと思われるような張りを持った柔軟な乳房は、青い静脈をクッキリと浮き出させていた。もともと、可愛いかった乳暈や乳首も黒く色付き、乳首は太さを増して突出している。

被虐と露出を好んで、男性の前に羞恥のポーズを捧げ尽して恍惚の境地を楽しんできた裸身は、女の宿命的な生理的变化をとげ、腹部を胎児の安住の住家として与える生理を、女の動物的な牝の根源的な姿として満足し、更にその妊娠的变化をマゾの対象として被虐の世界に生きて来たのである。

中川恵子という人間は、人間としての喜びに生きるよりも、自らの信念のもとに、動物の牝、男性の動物的本能の欲望を満足させ、生贄として肉体を捧げることに生甲斐を感じてきたのである。



それだけに女性の持つ固有の肉体、生理、心理を百%利用して、自らが被虐に狂うことにより、男を狂わせ羨望させることに喜びを感じる。男女両性のもつ本能を、神聖なもの絶対に犯し得ない尊厳なものとし、その障碍をのり越えて、サドとマゾの世界を切り拓めようと努めてきた。

その彼女にとって、妊娠という現象は、これ程の最大の武器はないとの確信をもたせたのである。

毎月、誌上に登場する女性の責めを読み、必ず自分のものとせずにおかない熱心さがあつた。

恵子は妊娠による自分のお腹の膨らみを、

驚きとともに好奇の目で眺め、一日とせり出して来る腹部の変化に期待し、異常なほどの愛情を感じていた。所謂、腹部ナルシズムである。

今、裸身を鏡に映しながら臨月腹を恍惚として見惚れていた。

グッと充実して前に突きだした臨月腹は、成熟した果実を思わすように膨れ上って固く張り切っている。

もう人間の皮膚の弾力の限界を越えて膨れ上っているため、下腹には赤い妊娠線が痛々しく走り、臍を中心とする正中線には黒線が見られる。八カ月頃には、まだ美しい小さな窪みを見せていた臍窩も、今はもう跡もなく、逆にむくれ上ったお臍がその全容を見せている。

偉大な円みを持った臨月腹である。それを両手でマッサージするように撫で、充実して張り切った皮膚の触感を味わいながら考えていた。

(もし高圧空気浣腸や高量浣腸等で、この位の大ききまでお腹を膨らせるとしたらどうだろう?)

恵子は、マゾ女性らしい考え方を始めた。

臨月の大ききまで浣腸して、人間の内臓や腹壁が果たして耐えるだろうか。

奇ク誌上でも、東浦ひかるの強制空気浣腸や大量注入による蛙腹実験の記事があり、大量注入では、嫌がるひかるをなだめすかして千五百ccの液を注入したら、ひかるのお腹は妊娠七カ月位に膨脹したとある。また、エネマシリンジを用いてお腹の中に空気を入れ最大限に膨満したという腹部の膨らみを見ても決して妊娠腹までは行かない。勿論、両者とも最大の極限まで注入していかないのだから、結論はでないが……。

恵子は、じっとしていても耐え難いほどの圧迫を覚える身体を、いろいろのポーズを取って鏡に映しては、ナルシズムに耽り陶然となっていた。

(もう、あと一週間か十日の臨月腹だわ。このまま一夜でも無為に過ごすのは勿体ない。誰でもいい、私を虐めて欲しい……)

と両手でグイッと乳房を握りしめて身悶えするのであった。

恵子は、頭の中がモウロウとしていた。しかし、恵子の周囲には多くの男性がいるらしい、話声が聞こえてくる。

(私、一体どうしたのかしら……)

恵子は、自分自身にいい聞かすように口の中でつぶやくと、恐る恐る目をあけた。

恵子を取り囲むようにして多数の男女が酒宴を開いていた。しかも男たちは大分、酒も入っているのであろうか。酔いも混じっての仕草で、それぞれが傍らの美しい裸女に抱きつき、乱痴気騒ぎを演じている。

(こんなところで私は、一体どうしたのですよう?)

恵子は、訳も判らぬままに起き上ろうとしたが縄目は、しっかりと恵子の裸身を仰向けにベッドに縛りつけていた。両手を伸ばして夫々の手首が縛られて吊られ、大きな乳房の上下に荒縄が喰い込むように通って、両足首は別々に縛られ、引き伸ばされた姿勢でベッドの足に縛りつけられていた。

不思議なことに周囲の男たちは、恵子の姿が見えないのか、この捕われの美女に少しも注目していなかった。

ただ、ベッドの傍らに立っていた蝶ネクタイの男だけが、恵子が目をあけると、待っていたように恵子に向かって言った。

「貴女は、分娩を目前にして残る貴重な時間を、妊娠という女特有の生理的变化をとげた

人間の牝として、思いきりいためつけ恥かshめて欲しいと念願しておられました。われわれは、貴女の欲望を充分に遂げさせてあげるため、今夜の会をもちました。マゾ女性としての恵子さんを、限らない陶酔の世界にお連れ致します。私の奴隷として、命ずるままに行動されることをお願いします。ただし、貴女の生命と貞操だけは保証します」

「そうだったの。それで、ここはどこなんですか?」

「それは聞かないで下さい。今夜明ければ直ちに、恵子さんの家にお連れしますから」

「判ったわ。貴方がたのご期待に充分に応えたいと思います」

「ありがとうございます」

蝶ネクタイ氏は、両手をグルグルと廻し、

「エイ」と叫ぶと、客席に向かって言った。

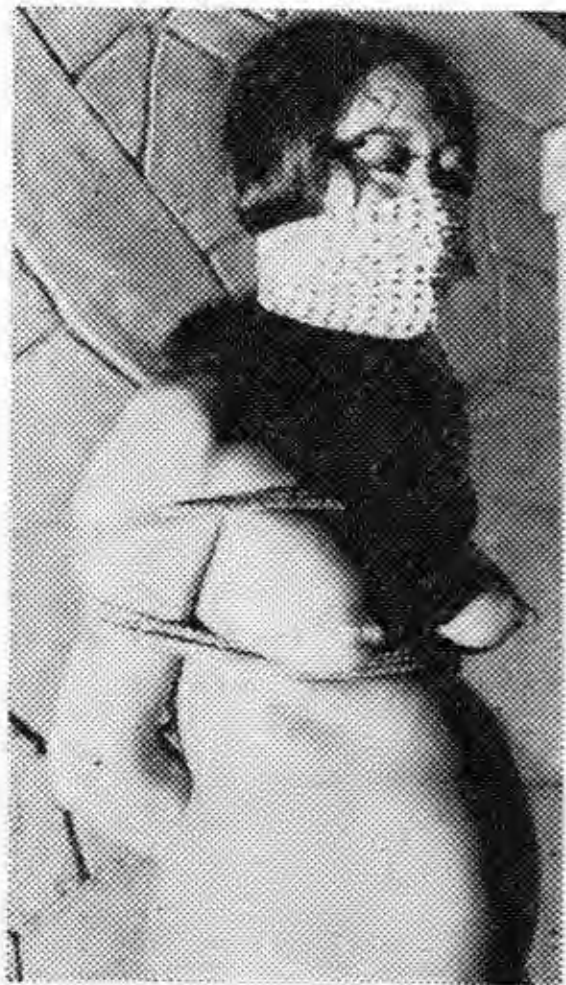
「お楽しみのところですが、只今から妊婦被虐ショウを演じますので、この舞台を中心にお集まり願います」

不思議なことに、今まで恵子の存在も判らなかった客たちが、裸

の臨月妊婦が仰向きに緊縛されているのに初めて気づき、歓喜の声を上げて集まってきたのである。

とに角、訳の判らぬことばかりである。そんなことよりも、酔客たちが恵子の緊縛姿に鋭い目を走らせているのを痛く感じ、激しい羞恥に思わず身体を緊張させていた。そればかりか、恵子の膨れ上った臨月腹の感触を楽しみ、乳房をキュッと握っては乳汁を奔出させたり、生贄としての恵子の異常な牝の動物的な肉体を興味深く、好色的な視線で眺め触れ廻っていた。

多くの女体を泣かせ、身悶えさせ、失神させた男性の手が、所かまわず触れるので、恵子は羞恥に身悶えしていたが、やがて鋭い陶



酔が頭を痺れさせる程に感じ、自由になる限りの体を揺り動かし、ムッチリとした太腿を滑り動かして、

「嫌、もう許して。アアッ……」

と悲鳴を上げ始めた。

こうなると淫らな目で、妊婦の裸身を眺めていた男たちも、大きな臨月腹を波打たせて激しく身悶えする異常な女体の変化に、更に好奇心を湧かせ責めの手をゆるめなかった。

「ああ」

と恵子は、額にシワを寄せ、脂汗までにじませて身体をのけぞり、巨大な腹を突き出し揺すぶり、激しく悶えていた。もう恵子は、火のように燃え、精神を被虐の一点に集中さ

せ、陶然として、のた打ち廻っていた。

その臨月妊婦の全裸の妖艶な姿に、女たちは心を締めつけられ、自らが責められてでもいるように身悶えして、呻き声まで立てる者まででてきた。

会場全体は、恵子のベッドの上で身悶えする異常な雰囲気と、女たちの耐え切れぬような、切なげな溜息や呻き声に満ち、妖しくも異様な空気に包まれていた。

一層、狂おしく悲鳴を上げていた恵子は、全身に脂汗が流れ、円い充実した臨月腹は大きく揺れ、肩で大きく喘ぎ、甘味な陶酔を楽しむようであった。

最初から激しく羞恥責めをうけた恵子は、縄を解かれてもグッタリとして動く気力もなく、横たわっていた。

暫く休んでいた恵子は、やがてノロノロと起き上ろうとしたが、それは許されず、そのままの姿でいることを強要された。

命じられてベッドを降りて立った恵子は、まだ気だるさの残る身体を、臨月腹を突き出すよ

うにして立ち、両手を下腹に当てていた。

縄が用意されると、恵子は両手を背中に廻されて両手首を縛られ、その縄は左右に別れて乳房の上下を通して、再び手首の縄に結えられた。この後手縛りのまま、天井から吊らなれた鉤に、手首の縄がかけられ、爪先立ちになる位に固定された。

「誰でも、希望者は鞭打ちをしてあげて下さい。決して遠慮はいりませんから」

客の一人は、蝶ネクタイ氏から鞭を受けると、大きく振った。鞭は空間を切ってピシッと豊満な白い臀部に喰い込むように当る。さらに唸りを上げた鞭の音は、女体を責める歓びにのたうつように、柔肌に赤い跡をのこしていった。

忽ち、恵子の豊満な臀部に、赤い筋が何条もつき、色どりを加えて行った。

恵子は、始めは歯を喰い縛って耐えていたが、次第に呻きが洩れ、遂に

「あっ、うーん」

「痛い、ああ、やめて……」

と悲鳴を上げる。

鞭の先が、そのべんべんと膨れ上った臨月腹の横腹にとんだ時、

「あっ、い、いたい。うーん」



と失神しそうになった。

客は、この鞭打ちの苦痛に悲鳴と苦痛の叫びを上げる女体のマゾの極致を、息をつめて眺めていた。

前屈みに吊られた恵子の腹は、普通以上に丸く突出して膨隆感を増しているが、その巨大な蛙腹が大きく波打ち揺れ動いていた。

恵子の疲労と苦痛が余りにも激しいようなので、男たちは鞭うちを止めて床に坐らせると、恍惚感と疲労で吐く息も荒々しく、グッタリとなっていた。

疲労回復のため、ドリンク剤とビールが飲まされる。ビールは嫌がる恵子に無理に流し込むように、二本たて続けに吞まされ、恵子は酔いが廻ってきた。

暫く休ませると、客の希望もあって奇巧誌に発表された羞恥責めの緊縛がなされる。

丸い柱の前にテーブルがおかれ、その上に足を投げだして坐らされた。再び両手首を縛ると、上に吊り上げて柱に縛りつける。足を左右にグッと引っぱられると下半身が移動し腰がテーブルについた。そのままの姿勢で膝の内側に縄をかけられ、身体を二つ折れにして縄は柱の方に引きつけられて行く。大きく張られた太腿の間から、臨月腹がグッと大き

さを増して姿を見せる。膝頭が極端に身体の方に引きつけられて、縄は柱に固定された。

辻村・山本両氏は、極端な前屈の姿が好きなので、屢々撮っている。これ程、女の羞恥心を冒し、動物的本能をむきだしにしたものはないからであろう。太腿も豊かな臀部の膨らみも全てが白日のもとに露呈するからである。

恵子は、痛いほどの男の視線を全身で感じていた。灼けつくような、ギラギラ輝く本能むき出しの目を。恵子という人間としての女性性は存在していなかった。そこにあるのは店頭のショウウインドウに飾られた珍しい品物であった。男たちは、白くムッチリした両腿の間から異様に丸く突出した臨月腹の偉容と、その牝の被虐の歓喜を飽くことなく眺めていた。

恵子は、二つ折れにされた体が息苦しく喘いで脂汗を流し、男の前に陳列された見世物としての生贅の我身に恍惚としていたが、突然、激しく湧き起こってきた生理現象に身震いした。

始めは羞しさのために下腹部の力をぬいて耐えていたが、益々激しさが鋭くなり、もうどうにもならないところまで追いこまれた。

客たちは、先程から恵子の羞恥の姿を目近かに見ているので、体の動きでそれと察し、ビールの効果が現われて来たのを喜んで、今か今かと待っていたのであった。

「お願い、トイレに……」

蝶ネクタイ氏は、わざととぼけて

「恵子さん、どうしたの。トイレ？ 大きい方、小さい方、どちらですか」

と嫌な聞き方をする。

「ああ、そんな羞かしいこと。どちらでもいいじゃないの。早く」

と腰を揺り、身悶えしながら懇願する。

「ははは……恵子さん、このままで願いますよ。皆様、お楽しみなのだから」

「嫌、そんなの」

と恵子は、嫌々をしながらも、「花と蛇」の静子夫人を思い浮かべていた。静子夫人以上だわ。……でも、私は被虐に狂った女。よし、この男たちに、牝の噴水を鑑賞させてやろう。そう覚悟を決めると、

「いいわ。その代り顔を近づけてよく見ていのよ。それから、可愛い生贅の女のネックタールを、そまつにしないでね」

と言うと軽く目を閉じた……。

普通の、女性の人格を尊重する人間なら、

誰しもが顔をそむけ、そこまで動物的なショウを追及しようとしないうるが、彼らは違っていた。

甘美な臨月妊婦の体内を通過したものを確認し、口づけして咽喉をうるおす男たち。

華麗なショウが終ったあと、臨月腹で課せられた責めの身体を休めるため、休憩の時間がとられた。

恵子は、裸の姿のまま別室のベッドに、クタクタになった綿のような身体を横たえ、強烈な羞恥責めの数々を甘く思い返していた。

暫くすると蝶ネクタイ氏が現われ「絞首刑になって貰うよ」と云った。

「え、私が、絞首刑に」

「お客様のためへの懇望もあり、仕方がないのだよ。」

多くの男の前で臨月腹を晒して縄にぶら下るというのも面白くないかね」

「私は、責めならどんなことでも受けるわ。しかし、死ぬのは嫌よ」

男は笑いながら言った。

「死んで貰うとは言っていないよ。絞首刑になって吊

られるんだと言っているだけだ。さあ、腕を出してご覧、この注射を打っておけば二十分後に息を吹き返すことになる。安心しなさい」

恵子は、注射をされながら生命が保証される絞首刑なら、是非、私自身も体験してみたいわ。男たちも喜ぶことだろう。と思った。

「それで観客は、それを知っているの」

「知らされていないから、真実感があるのだよ。それでは行こう」

恵子は、客席の中央に設営された絞首台に足を運んだ。丈夫な柱に横木が掛けられ、その中央に首縄が輪をつくって下っている。



恵子の白い豊満な裸身は、後手に荒縄で縛られ、首縄の垂れている下に用意されている踏み台に立った。明るい照明を受けて、異様に大きく膨んだ恵子の臨月腹が、適度についた全身の豊かな官能美を描いている皮下脂肪によって、より美しさを増していた。豊かな臀部から太腿への弾力を秘めた線は腹部の膨らみから続いて官能的な曲線を見せていた。

この巨大な張り切った膨らみをもった臨月腹の女体が、首を吊られて宙で悶え苦しむ演技を生唾を飲み込んで待っていた。

しかし、見世物になった分娩前の若い女性が、男達のSの犠牲として、今若い花の生命を散らそうとしていると思うと、哀れでもあった。しかし、ヤジ馬的根性になっていた観客は、世紀の処刑を待つばかりであった。

蝶ネクタイ氏は、

「それでは、皆様方の御期待に応え、恵子さんの臨月腹、全裸姿の絞首刑に入ります」

と言うと、首縄を取って恵子の白い豊かな首にかけた。

「皆さんに、お別れのご挨拶を」

と言われ、恵子は羞恥責め地獄で陶醉するマゾ女性の最後の言葉に適した言葉とを考え「私は、花と蛇の主人公である静子夫人が好

きでした。羨しくもあったのです。そのため静子夫人の羞恥責めを、現実に私自身の肉体に与えてくれる男性を求め、被虐と責めの恍惚感に陶然として生きる歓びを味わってききました」

ここまで言うとは、客席を見廻し、自分の太鼓腹を目で撫で廻して注意を臨月腹にむけ、「私は、妊娠した時、これ程嬉しかったことはありません。私自身のお腹が別の生命の容器、住家として提供される。これ程、女としての特有の肉体、生理、運命的なものはありません。妊娠は、生命の誕生という神聖な現象ではありません。しかし、これ程、動物的な生臭いものはありません。妊娠したお腹は、生殖行為を暗示させるものです。その結果の具体的な表現として妊娠があるのです。原因が人に見られて恥かしいものである限り、その結果としての現われである妊娠も恥かしいものです。非常に恥を感じさせます」

ここまで言うとは顔をしかめてモジモジしていたが、両脚を開いて腹を突き出すようにした。その時、放物線を描いて銀線が落下するのを見た。

何という光景であろう。死を前にしてか、恵子は何ら悪びれもみせず、思いきったこと

を演じたのである。

「私は今最も恥かしい姿をお見せしました。しかし、この恥かしさは、妊娠した臨月腹を見せるのと、女の羞恥には大して差がありません。私は、男性が牡として牝に興味もたれることに、この肉体で応えてあげたいと思つて来ました。男の徹底的な女体追求は、学者が学問追求するのと同じ位に尊いものです。女は、肉体構造から、裸身から、精神的から全ての面で男性のこよなき探究の素材となるべきものでしょう。私は、M的女性として、羞恥をのり越えて協力して来ました。どうぞこの私の心情を理解され、臨月腹を晒し、この綱に首を吊られる最期の姿を充分に鑑賞して下さい」

男たちは、シーンとなって臨月妊婦の首吊りという地獄図を想像しながら、恵子の話を聞いていた。舞台面から恵子に照明があてられた。吊り下った恵子の姿を見上げる観客へのサービスであった。

「では、さようなら。私のこの臨月腹の肉体が躍り、身悶えする様子を確認して下さい。では皆様の期待に添った最期の演技が出来ますように……」

こう言い終ると足台がサッと下に降り、恵

子の裸身は宙に躍った。

豊かな白い肉体は弓のように反って宙に浮いた。たるんでいた縄は、ピーンと張り、豊かな恵子の首に喰い込んで「グァッ」と声にもならぬ悲鳴を上げた。

窒息の苦悶とたたかっているであろう、白いムッチリした足がむなしく空を蹴り、身体が大きく揺れる。顔が蒼白になり脂汗がにじみでて、身体が小刻みに痙攣している。

死と生との斗いが必死に演じられているのであろう。とその時、ばたつかせていた白い足が、ピーンと伸び、全身を反らせて二、三度、大きい痙攣が襲い、臨月腹がブルンと揺れると、全身の力をなくしてダランと垂れ下った。その時、水沫きが床に走った。

顔面は蒼白になり、半開きの口から赤い舌がのぞき、苦悶に顔は引きつっていた。

観客たちは、今まで可愛い肉体をさらけ出して官能美を漂わせていた恵子が、時間にして数分たらずにして、首に縄を喰い込ませて物言わぬ物体となってしまうのに、さすがに感傷的になってしまっていた。

人間の生命のあつけなさ、今先きまで身を震わせ恍惚に陶醉して、S族の男の心を妖しく揺さぶっていた女が、もう冷たい物言わぬ

物体となってしまうていた。それも二十二才という若い花が。……羞恥の姿を晒して屍は観客の前で揺れている。

恵子の死体は、舞台に降ろされるとタンカで奥に運ばれ、何か特別の薬を飲まされるとみるみる血色が良くなり、蘇生した。

恵子は

「意識はすぐになくなったが、それまでの間は耐え難い程の苦しみだったわ。ずい分、暴れたことでしょうね」

と満足気であった。

絞首刑で死ななかったことに勇気づけられた恵子は、切腹にも同意した。

恵子は、用意された白装束に身をかため、客席の正面に準備されてある切腹の座についた。背後には白無地の逆屏風をひきまわし、前に畳二枚敷き、それを白絹布で覆い、恵子の切腹の座の前には、三宝に短刀が奉書紙に乗せられて置かれていた。

屏風の外には、切腹死した恵子の亡骸を納める壺が用意され、屏風の裾に三宝にのせた黒塗りの首桶があった。それらを見廻した恵子は、本式の切腹だわ、と思いながら席に就いたのである。

照明が明るく恵子を照らすと、舞台正面の幕が上った。観客たちの驚きが面白ほど感じられる。

蝶ネクタイ氏は、恵子が息を吹き返したので今更おめおめ生きても居れない、腹を切って観客の前で潔く死んで行きたと言ったので、と説明している。

観客は、死んだ筈の恵子が生きていて再び臨月妊婦腹切りを演ずると言うのであるから、喜んでザワメイている。

恵子は、観客に言った。

「私は、皆様の楽しみのために首を吊られました。しかし、生命力があったためか生命をとり止めました。そのため幸運にも、もう一度、死ぬ機会を与えられました。私は、この若い花の生命を、自らの手で切り裂き、女の最も神秘的なお腹の内部を究めつつ死んで行きたいと思うのです。先程からお見せしました臨月の大きなこのお腹を、思う存分に切り裂いて、苦痛に悶え死ぬつもりです。女性では、余程の豪の者でなければ出来ないと言われている残酷で苦痛の多い切腹です。私は、自らの手で切り裂き、介錯をうけずに切腹の苦痛に悶えつつ、その恍惚とする苦悶に身をゆだねて死を待つ



のです」

恵子は、切腹による苦痛を楽しみ、もう早くも自らの手で自らの臨月腹に加える被虐に陶然となっていた。

恵子は、胸高に締めた帯をとき、臨月腹の上下を締めつけていた細紐をとった。そこで着物をゆるめると、一寸躊躇するように気をもたせ、ぱっと白装束を脱ぎ捨てて後に投げ



た。恵子は全裸の姿で切腹の座に端座した。

白屏風に、白絹布の敷物、亡骸をいれる壺と首桶が、この異常に大きく膨れた臨月腹を晒して端座している若い女性には、余りにも痛々しく悲愴なものがあつた。

恵子は、じっと臨月腹の充実した膨らみを両膝に手を置いて見ていたが、右手で如何にも愛するものを撫でさするように、愛撫して張り切った柔肌の感触を楽しんでいた。このお腹を、この手で思い切り裂いて、赤ちゃんも神秘的な内臓も、この目で確認するなんて、

その苦痛に悶える自分の姿を想像するだけで頭にカッと血が上り目くらめく程の興奮を感じ、思わず左手で豊かな乳房をキュッと握りしめていた。

恵子は、覚悟を決めると三宝の短刀を取って奉書紙を、冷たく冷酷な光を放っている白刃に二センチ程刃先を残して巻きつけた。

この短刀は、昔、聚楽第で関白豊臣秀次が妊婦を引っ捕えてきては全裸に剥ぎ、ゆで玉子のように滑らかで充実した妊娠腹を露出させ、その哀れな女体を大きな俎に縛りつけて妊婦腹裂きを行なった、秀次の妊婦腹裂き刀として伝えられたものだという。

何人かの哀れな生贄としての妊婦の小山のように盛り上った腹を、魚の腹でも断ち割るように真二つに切り裂いて来た、女のうらみの凝集した血塗られた白刃である。その白刃が再び、二十二才の若き中河恵子の臨月腹を無惨に断ち切り、内臓を露出し、神秘的な女の胎内の秘密を観衆の眼前で晒けだそうとしているのであった。

恵子は、その短刀を右手で逆手に

握りしめると、大きく充実した膨らみをもって、半球の突出を見せている臨月腹の左下腹にあてがった。左手を左下腹に添えると、大きく肩で喘いで深呼吸をした。

どれ程の激しい疼痛と苦悶に襲われることであろうと思うと、マゾ女性としての期待に妖しい興奮を覚えるとともに、胸がキュッと締めつけられる不安が感じられた。

(見事に大きく切り裂くのよ。これ位のことができなくて……。それに、この刀は多くの妊婦の腹を裂き、女の内臓を晒けだしたという刀なのだよ。もう一度、妊婦の血を充分に吸わせなければ……)

恵子は、メロンのような固く張り切って膨れ上った臨月腹の頂上で、形よく丸い窪みの影をみせていた臍が、その全容を見せて色どりを添えているのを見ながら、切り裂く下腹部をもう一度、愛するように目で追うと、覚悟を決めた。

右手に力をこめると、左下腹にグッと刃先を突き立てた。皮膚も破けんばかりに張り切って充実している臨月腹に、刃先は若い恵子の白い柔肌を破り、適度な皮下脂肪と筋肉を刺し貫いてブスッと鈍い手応えを残して簡単に突き立った。

惠子は、激しい痛みにも思わず、「ウーン」

と口の内で呻き声を洩らしたが、思ったより容易に刀が突き刺ったのに安心した。

白い下腹に一筋二筋と血が細い糸を描いて流れるのを確認すると、右手に力をこめて、グッと右に引廻していった。

頭の芯まで激しい痛みが走り、目がくらみそうになるのに耐えて、切って行った。

全精神力は切り口に集中し、グッと腹部に力をこめているため、胎内で胎児がグググッと動き、半球の臨月腹が歪みを見せて、切り口がパツクリと口を開いてきた。白く充実した膨らみを見せていた下腹は、溢れてくる血汐で赤く染まり、柘榴のように開いた切り口から、黄色い脂肪がはじけ出して、女の官能的な曲線と量感を見せていた皮下脂肪の正体が観客の方に姿を見せる。

惠子は、端座したまま臍下まで切った。そこで喘ぎ一息つくのだった。

最初は切り開かれている下腹を見ていたが次第に切り口が拡大されて行くにつれて激しい痛み、身をよじり顔を上げて、

「ウ、ウーッ。ウッ、ウッ……」

と呻き、顔面に苦痛の深いしわを寄せてい

た。やっと半ばまで切り進んで大きく喘いだ惠子は、襲いくる激痛に耐えながら自虐のあとを恍惚とした目で眺め、臨月腹切腹を確認していた。

暫く、息をととのえるように手を休めたあと、再び刀を引廻し初めた。

激しい痛みは、腹部全体に拡がり、苦痛のため歯を喰いしぼり、悲痛な呻きを洩らしていた。激しい息使いのために、黒ずんだ乳暈と大きく突出した乳首をした豊満な乳房は、半球の臨月腹の上で激しく揺れ動いていた。

惠子は、もう耐え切れぬように上体をグッと前に倒したり、後に大きくのけ反ったりして、ただ右手を引廻すことのみ考えていた。目はすわり、歯を喰いしぼった顔には、じつとりと脂汗がにじみ出て、顔面は蒼白になっている。

鮮血は溢れるように流れて、真白な太腿まで染め、若い女の生臭い血汐の匂いが、あたりに漂いはじめている。

惠子の下腹部を、殆ど一文字に左から右まで切り裂いたと思った時、惠子は大きくのけ反り、血にまみれた左手を乳房にあてがって「アア、ウウン……」

と激しい身悶えをした。その時、惠子の裸

身の前面は伸びきり、大きく下腹部の切り口が拡がり、胎児を入れた子宮と腸が溢れるようにガバツととび出し、惠子は右脇腹に刀を当てたまま仰向けに倒れ、凄烈な姿のまま激しく喘ぎ、身悶えていた。

惠子はグッタリとなっていたが、「誰れか、こ、この刀で子宮を……。子供を取り上げて……」

と頼んだ。

この見事な臨月腹切腹に生唾をのんで見とれていた観客は、この声を聞いてザワメキだした。

客席から中年の男がでてくると、惠子の刀を受けとり血汐に汚れた床に膝をつけると、偉大な女の容器、神聖な子宮の大きな膨らみを驚異の眼で眺めていたが、グサツと刀をつきたてた。

子宮壁は破れ、ドツと羊水が流れでる。刀は、縦にグイグイと切り裂き、簡単に真二つにしてしまった。

胎児は、その間に準備された産湯をつかわされて、生命誕生の——母体の異常な臨月腹切腹という帝王切開による——力強い声をあげて泣いた。

切腹した惠子は、適度にのった豊満な裸身

を血で染め、グッタリと横たわっている。もう見事な膨らみを見せていた臨月腹の威容も影をひそめて、豊かな稔りの乳房だけが突出していた。

恵子は、多くの異性の前で臨月腹を露呈して切腹を行ない、女の神秘的胎内の臓器まで晒した喜びに陶然となって、全身に痺れるように襲う疼痛を快く感じていた。

恵子の体力回復のために輸液注射が、その場所で行なわれた。

そのあと、消毒液で切り開かれた恵子の子宮の内外や身体を洗われて、新しい台に横たえられた。観客たちは、思わぬ生体解剖による神秘の臓器の内部まで確認できた喜びに湧いていた。

特に、ホステスたちは、自分と同性の恵子の身体を通じて、自分の腹の中の構造を知り得る機会に恵まれ、恥かしさも忘れて妊娠子宮の神秘的な生理的变化を観察していた。

これは、男だけでなく女も知りたい秘密なのである。特にマゾ女性にとっては、腹を切り裂き、自分の腹の中の特異な構造を確かめたいと願い、充されぬ欲求に悶々としているのであるから殊更である。



観客たちが、恵子の胎内の神秘を充分に鑑賞し終ると、蝶ネクタイ氏は

「切角、恵子さんの内臓が、こうして皆様方の前に姿を現わしているのですから、浣腸責めのマニアの方々のために、大量浣腸した時の腸の変化と限度量を実験してみましよう」と言う、ムッチリした尻を露出するよう

に両足首を縛ると吊り上げた。

天井からは、十リットルは入ると思われるイルガートルに一杯の浣腸液が吊られて、黒いゴム管の先についた嘴管が光った。

観客たちは、羞恥と屈辱の姿勢をとらされて、浣腸液を注入された裸女たちが、襲いくる激しい便意に豊満な白い臀部を振って、便器を、トイレにとせがむ女の腹の中で、腸が蠕動しゴロゴロ鳴っている姿を思い浮かべていた。

ホステス達も、それぞれ憶えのあるあの激しい便意。悶々として身悶えながら耐えた恍惚の気持を思い出し、浣腸の激しい刺戟と腸の動きが今、目の前で確認できる思いに、胸をしめつけられるような興奮を感じていた。

恵子は、自らの手で切腹という生体解剖を行ない、内臓を露出した陶酔のあとで、異性の目の前で腸を、なぶりものにされながら浣腸されることに、もうろうとした意識の中で羞恥と屈辱を感じつつも、自分も見たい、この目で確かめたいと思っていた。

浣腸液が注入される。体内——今は体内とはいえないだろう。腸は切腹の切り口を大きく拡張られて体外に姿を見せているのであるから——に吸い込まれて行く。

直腸から結腸を通った液はドンドン小腸に流入し、灰白色の鈍い光沢を放っている腸は恰度チューブに空気を入れるように膨らんでくる。腸の容積が、だんだん増してくる。

液がどこまで流入するのか。腸がどれ程耐えるか。観客は楽しみながら生き物のように動く腸を見凝めていた。

腸は次第に緊張を増し、膨れた腸は動きをはやめゴロゴロと鳴っている。

嘴管は特別な操作がしてあり、周囲に丸く吸盤がついているので、少々の内圧でも抜けないようになっていた。

激しい便意、その内圧に勝って液が流入するように圧力がかけられた。

恵子は、露出された腸に加わる液の圧力に痛みを感じ、更にやる瀬ない便意に身悶えして手を固く握りしめて耐えていた。腸は見事に緊張してコロコロと転がるような充実感を見せて目の前にある。

二リットルをこえ、三リットルに近づいている。腸壁が裂けそうに痛むのであろう。歯を喰いしばり、額に脂汗を浮かべて耐え、身悶えしている。

「ああ、もう許して、腸が裂けそうよ……」と叫ぶと恵子は、自分の腸をかき抱いて失

神してしまった。

恵子は、余りの息苦しさに

「ウーン」

と呻くと、目を覚ました。

（あれ、どうしたのでしょうか）

恵子は見なれた自分の部屋に寝ているのを怪しんだ。

（たしかに切腹したはずよ、私は……）

と思つて、自分のお腹に目を向けると、臨月の妊娠腹は充実した偉大な膨らみを見せて盛り上っていた。

（あつ、夢だったのね。なあんだあ……。それでも楽しかったわ）

恵子は、裸のままで寝てしまっていたのであった。それも充実したドッシリした臨月腹を、小山のようにそびえさせ仰向きで……。

分娩前の妊婦は、腹の圧迫のため息苦しくなるのでたいていは横臥するのであるが、仰向きのため全身が圧迫され、マゾの夢を見たようである。

（私って、ホント、真底からのマゾ女ね）

恵子は、そのまま再び眼を閉じ、夢の残像を追いつながら、しみじみそう思った。

顔は思い出せないが、自分の周囲をとり巻

いて、みじめに縛り上げられている素肌に、刺すように注がれていた数多くの男女の視線の痛さだけは、奇妙にもハッキリと再現される想いがするのだった。

（あれが本当だったら……）

そう思うだけで、何か陶然となるような、心のうづきが突き上げてくる。

（こうして縛られていたわ、たしか）

恵子は、仰向けの背中へ両腕を回してこじ入れてみた。

張りきった腹部がさらに伸張した感じで、ズッシリと重さが、背の両手首に掛った。

ビクッと、お腹の中で生命が動いた。

「アッ！」

夢の中の自分の縛られ姿を追って、吊り上げられたつもり足の足を上げかけた恵子は、少さく叫んで静止した。

「赤ちゃん、……私の分身がここに居る！」

恵子は、起き上ると鏡に臨月腹を映し、愛するように眺めた。

（了）

最後の方は、麒麟児氏の「文代嬢夢魔」にヒントを頂戴したので、この点、お礼とお詫びをする。

告白手記

紀子との切腹プレイ



西条 夏

うっとうしかった梅雨も、ようやく終りを告げた頃でした。私は久しぶりに山へでも登ってみようかと仕度をしているところに、友人のSから電話があつて、

——お前のところに手紙が二通、届いているぞ。明日から少し用事があつて家を離れるので、今日のうちに取りに来いよ——

と言うのです。私宛の郵便物は大部分、Sの元へ届くようにしてあるため、山行きの仕

度を止め、私は中古車に鞭打ってF町まで走ったのでした。

受けとった手紙は二通共、女ものの封筒でした。一通の方は事務的な書類で少々気落ちがしたのですが、もう一通を手にとった時、私の目に、野本紀子という名がとび込んできたのでした。しばし手を止めて、頭の奥から、この野本紀子なる女性に関する知識を引き出そうとしました。

丁度三年前、私が大学に入った頃のこと、現在のようにはSという友人もおらず、私の耽奇癖も単調で、奇クに投稿しようにも、家族の者の目を気にかけて、その勇気もなかったのですが、学校の先輩達とグループを組んで出していた同人雑誌があつて、そこに、奇クへ投稿できなかった欲求不満が一度に出たのでしようか、私は三島氏の「憂国」をモチーフにしたような小説を発表したのです。と言いましても、内容はむしろ奇ク誌に発表されました飯森潔氏の女体切腹小説の亜流になっていたようです。

私は奇クに寄せられた数々の切腹に関する記事を読み出してみにつけ、常々一つの疑問を持ち続けていました。それは、旧号をふり返ってみても、女性の切腹愛好者は、ごく少数のように思われ、それも最近はやど見当たらないのです。あの藤山女史も亡くなられたという話を聞きましたし、非常に淋しい限りです。

元来、腹部に対する刺激は、女性の方が強いのでしようし、肉体的快感も大きいと思われます。その女性から切腹に関しての投稿や告白が見あたらないということは、もう現代の如き露出過度時代には、女性の恥じらい多き腹部をくつろげての切腹など、興味が薄れてしまっているのでしょうか。それとも愛好家の少なきをもって、編集部で、切腹に関す

る記事を制限しているのでしょうか。そんなこともありません。

思うに、切腹には、単に腹部に対する刺激のみではもの足りないもの、むしろ、精神的な場面設定の重要性があつて、ともすれば、その場面設定が面倒になり勝ちで、愛好家を少なきにとどめている障害になっているのではありますまいか。

エロスが死と隣り合わせているとすれば、「切腹」程それに近いものはありますまい。

旧号に、新妻が切腹願望の持ち主で、結婚後、夫に貞節の誓いのため、黒紋付をくつろげて下腹部を切つて見せたとの女性からの通信があつたように覚えていますが、そんな場面設定など素晴らしいのではないのでしょうか。

それと、どうしても切腹の場合、肌に傷がついてしまうという難点があるわけですが、これもプレイの段階にとどめておけば問題はないわけでしょう。

さて、野本紀子の手紙を開くと、私の記憶は一度に蘇ってきました。

私の書いたその切腹小説を読んだ彼女は、三年前にも一通の手紙を私に送っていたのです。その時は住所も記されていないので返事のしようもなく、そのまま終わってしまつたのですが、彼女は人妻であり、幼い時から切腹への憧れのようなものが、結婚した今でもつづいており、ご主人にはどうして理解

してもらえずにいたところ、私の小説に出合ったというのです。私はその、彼女からの三年ぶりの便りに胸を踊らせながら読み耽りました。手紙には、彼女は今年、二十九才であること、せめて自分の肌に自信のあるうちに一度思いきって人前で切腹の真似事でもしてみたいこと、それについて私という人間が信用するに足る人物であるか否かを心配していることなどが綿々として綴ってありました。

私はその時、どれほど胸を高鳴らせたことでしょう。私は彼女が納得のいくように、秘密は必ず守ること、一度の機会を大切にすること、以後、絶対に連絡をとらぬことなどを書いた手紙を、その日のうちに投函すると、彼女からの場処と時間の指定を待ちました。

夢のような話です。私が体験できないだろうと思つていた女性との切腹プレイが現実に起ころうとは。私はそれから数日間、まさに夢うつつの間に過ごしていたようです。

七月も中旬、暑い千葉のS公園附近にあるレストランの二階で私は待ちました。客は私一人。落着かない気持で階段の方を見ていた私の目に、和服の、女性としては背の高い、肉付きもよく、それでいてどこことなく優雅な感じのする、どうみても二十四、五にしか見えない女性が映りました。実際私は、姿、形には全く期待していなかっただけに意外でした。薄くルージュをひいた唇が妙になまめか

しく、私の顔を見ると、にわかに緊張した様子で、——あの、西条さん——と短く問いかけてきました。

私達はレストランを出るとS公園を歩きながら、かれこれ三十分も話したでしょうか。

——本当に二十九なの——

——ええ、どうして。若くみてくれたの。だったら、うれしいわ——

彼女は話している最中も、私がどれだけ信用のおける人間かを断えず観察しているようでした。余り事がスムーズに、性急なくらいに運ばれ過ぎてしまったようでした。

彼女は私に、くどいくらい、今日起こるところは、みんな幻なんだから忘れて欲しいと念を押していました。

老婆に案内されて、奥の一室に通されるまで、無言が続いていました。彼女は私に一枚の便箋を取り出し手渡すと、シャワールームへ足を運びます。その便箋には、彼女が望んでいるプレイの様式といったものが記されていました。身体を清める段階での浣腸。そして介添え切腹によるプレイ。自分一人での十文字切腹。そして、私の胸を高まらせたことには、さらに……。

快い水の跳ねる音がしました。

彼女はハンドバックの他に小さな風呂敷包みを持っていました。

——ねえ、その包み取ってくれない——

バスタオルを胸に巻きつけ、シャワールームのドアを半開きにして顔をのぞかせます。

——あちらのお部屋へ行って——

私は、蒲団の敷いてある部屋へ入り、襖を閉めました。暗く、赤い豆電球にピンクのカバーがしてあるスタンドが、それでも部屋の側面に装置してある鏡を浮き出して、私の高ぶりは一層、度を増していきました。

襖が静かに開かれると、白いものがポーとかすんだように思われました。

彼女は用意してきた白い木綿の小袖に着換えています。胸高にしめた白の帯がひときわ胸の隆起をしめつけているように、まるで処女の清楚さを感じさせているのです。

——素敵だな——

思わず声をあげて、つぶやいてしまった。私は、魔力に引きつけられたように彼女の傍に寄り、静かに肩に手をまわしてしまったのです。思いきって力を込めると、少しためらったようにしながら私にもたれてきます。

——悪い女——

甘い香りが鼻に快く、一瞬、倒れ込みそうになるのを感じましたが、彼女は私からスーと離れ、私に熱い視線を送りながら、

——だめよ。それは許してね——

と懇願するように念を押して、私に小さな箱をさし出したのです。

——恥かしいわ。でも約束してね。それ、私

にするだけよ。あとは、私をもどってくるまでこの部屋から出ないでね——

私は浣腸そのものには、さして興味がなかったから、黙って頷きました。

——そのスタンド、消して——

言われるままにスタンドのスイッチをひねると、ようやく顔の輪郭が判る程度です。

彼女は、蒲団に横になり、帯を解いて、私を促すようにして俯伏せになるのです。

背中から拭い取るように着ているものを脱がせようと、両の乳房を掌で押えるようにしながら、顔は私の方を凝視しています。

——眼を閉じていて下さい。私も恥かしいから。いいですか——

これから始まろうとする儀式に、私は唇を静かに彼女の肩に這わせました。

その唇が這っていくにつれ、彼女は声にならない声を上げるだけでしたが、突然、

——いや。許して、それ以上は——

私は、今にも爆発しそうな胸の高ぶりを押さえるのに必死でした。

——何も望みません。せめて口吻だけ許して下さい——

彼女はそれ以上何も言わなかったのです。私はあとになって、そのことが、アニリン

ガスと呼ばれるものだということを知ったのでした。

——あなたが他人の奥さんでなかったら、み

んな私のものにしてしまいたい——

熱に浮かされたように、私の手にはイチジクが握られていました。

彼女は実に美しかったと今でも思います。あの時、二つを矢継ぎ早に施すと、彼女は横に置いてあった着物を羽織り、襖を開け出ていったのですが、私は彼女の苦悶の表情が見られないことを少し残念に思いながらも、目的は別のところにあることを意識して思いとどまっていました。

隣室で必死に耐えているような彼女の声が聞こえている。しばらくして、トイレの水が激しく流れる音。風呂場のドアの開く音。

——ねえ。きて下さらない——

彼女の声に、私はあたふたとドアを開けました。

——これから水で^{みそぎ}禊をするのよ。あなたこれで、これで、私に肩から水をかけて——

さっきの部屋よりも少し明るい浴室で、彼女はタオルを腰にあてただけの姿で私に背を向けています。私はブリーフ一枚になると、手桶に水を汲み、二度、三度と彼女の肩へ落とししました。たちまち鳥肌がたちます。

——大丈夫かい。冷たすぎない？——

——いいの。このくらい冷たい方が身がひきしまるのよ——

終わると彼女は私に、仕度があるから部屋で待つように言いました。私は、ホテルの浴

衣に着換えると蒲団を横に押しやって、シーツのみを取り、畳の上へ敷いて待ちました。ややあって彼女は、元通りの白の小袖に白帯のスタイルで、手には木製の刀を持って入ってきました。

——ね。まずあなたがお手本、見せて——

私は自分では「切腹」の真似事もしたことがないため、少しとまどいましたが、型通りに済ませて、彼女に微笑みかけると、

——まず、最初はあなたに介添してもらいたいわ。いいでしょ——

甘えるような口調で言って、私を自分の後に半身になって身がまえさせるのでした。

白帯を解き、腰の下辺りに下げて締め直すと私を見返ります。

私は、木の小刀を構える。左手に持ち直して彼女の肩越しに見下ろす恰好になります。

おもむろに胸元を開いた彼女の胸から腹にかけて、自分で巻いたにしてはしっかりと巻けている晒が、痛いくらいの白さで私の目にとび込んで来ました。大きく開いた腹部も、私の目に入ってくる限りの部位までは晒で被われています。彼女の薄くピンクに染まった肌が晒の中で、息づいていたようです。

彼女は、両の手を後で、掌を結ぶように組み合わせると、

——さあ、いいわ、遠慮しないで思いきり切ってみて——

木製とはいえ、先端は鋭く、力を込めれば肌を刺すことも可能なように思えます。

白い晒で被われた下腹へ、私は左手で、充分には力の入らない小刀を突き立てました。

それでも——あ——という声が耳にとび込んで来ました。

——いたかった？——

——もっと痛くしてみても——

私は左手のふるえを押えながら、無理な姿勢で切り進んでいきます。心なしか、白い晒の下が薄い桃色の線を引いた思いでした。

姿勢を彼女の右側に移し、刀を右手に持ちかえ、臍下を切り進み、丁度、開いたUの字型に、右の脇腹のあたりまで一文字に切り進んだ私は、一瞬、彼女の顔を見ると、目を閉じて、口を半ば開いて耐えている表情がそこにありました。その美しさに、しばし手はおろそかになったのでしょう。彼女は私の手をさぐり、自分の掌を持ち添えると、晒の上から乳房のあたりを強く突き、

——今度は十文字によ——

私は、彼女の鳩尾のあたりに、刃を下向きに押し込むように切り下げていきました。

丁度、臍のあたりにまで進んだ時、晒の上から刃が深く窪んだようになって、巻き目を縫うようにして肌に進んでいったのです。

先端が臍にふれたような感覚が私の手に伝わった時、彼女は全身を震わせました。私は

しばらくはそのまま切っ先を動かさずにいたのですが、思い直して切っ先を離し、少しまくれ上った晒を無理に押し下げて、切り進んでいたのです。

だが、臍下に進んだ処で切っ先を止め、押えるようにしていると、私の右手に彼女の手がかかって、もっと下へと切り下げようと力を添えてくるのでした。私はそれ以上は、晒のない部分であり少しためらいましたが、彼女は切っ先を立てて強く突き刺すようにしています。

私はその激しい彼女の自虐ぶりに感嘆すると同時に、夢中で彼女の膝に倒れかかったのですが、とたんに彼女は、私を突き飛ばすようにして、さっと後へ退いていました。私は改めて彼女の意志に恐れをなした感じで、自分の軽率を恥じて詫言いました。

——今度は私一人でするわ。手を出さずによく見てね。私が考えたやり方なのよ——

彼女は双肌脱ぎになり、白い晒を胸のあたりから解き始めました。全て解き終わった彼女の肌には巻き締めていた跡が鮮かに浮き出しています。

——まずね、こうするの——

彼女は乳房の先端に刃を当てて、

——切り落とすのよ——

私は黙って正面から見詰めています。あとは型通りの十文字に切り、最後に臍高

に先端を突きたてて、——うーむ——という吐息を洩らしながらも、その周りが赤くなるまで止めないのです。

——あなたのお望みのことをするわ——
後を向くと、腰をしめていた帯を解き、白い小袖を落とすと、そこには妖精のような白い裸身が出現しました。後を向いたままの姿で、腰を高くしながら、小刀を後手に廻すのです。

私は生唾を呑み込むと、身動きすら忘れて見入りました。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規 定☆

- 一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。
- 一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。
- 一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

私は彼女に対する手紙に、切腹以外に非常に興味を覚えている「レダ」のことを書きそえていたのです。それを覚えていてくれたのでしょうか。

そこには私の夢の実現がありありと展開されていました。私はむしろ呆然となりました。

刀を身体から離すと、彼女は

——さあ、最後の儀式よ。いらっしやい。さあ早く——

と私の手を引いて、シャワールームへ連れ

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。
一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

ていくのです。

——さあ、あなたのお好きなように責めてもいいのよ。やって頂戴——

私は狂態の限りを尽すように、水道ホースのようなゴム管、そして石けん、タオルを使って責めましたが、具体的には書けないのが残念です。

そんな狂態がどれほど続いたでしょうか、私達は疲れ切った身体を休めていました。

私は放心したような意識の中で、この紀子という女性の美しさを素直に認めました。

私達は別々にホテルを出ました。遅れて出た私は、夕闇が待っているだけの利根川の下流を歩いたのです。

彼女は別れ際、主人の転勤で広島へ移ると言っていました。それが私を遠ざけるための手段であったかどうか知らないが、私は何も聞かないことにしました。しかし、一日の幻としては、余りに激しい陶醉であったことは事実でした。

私はこの体験によって、私の中にある二つの性癖が、ますます強大に成長していることを改めて知らされました。その一つの「切腹」については、現在の奇々誌では同好の士が少ないように思われます。きつとどこかに少なからざる愛好者がいられるに違いないと思うのですが、なんとか姿を見せて欲しいものです。

男性虐待快樂術



フレンチ・キッス劇場

(第十話)

(中 篇)

馬 族 保

(六) 石川隆作、雨の日鳳マヤを博多駅に迎えホテルで奇妙な体験をすること

東京発特別急行人はやぶさVが博多駅に滑り込んだのは、六月二十四日の午前十時三十分きっかりだった。

石川隆作は、四番ホームに出迎えた。四十歳の胸が、二十代の若者のように弾んだ。羞かしい、とおもうほどところが躍った。

二等寝台車が長蛇のように車輻の胴体を延ばして連なっていた。隆作は一号車のあたまであるき、それから、二号車、三号車の順で、車内を確かめながら移動した。六号車をすりぬけようとしたときである。八号車の後部から降り立った女があった。夏の草花模様をあしらった派手なワンピースを着て、リボンの長く垂れ下った夏帽を冠り、レンズの色のうすいサングラスをかけている。

踵の丸い中ヒールを履いているが、それでも、立て横ともに均整の取れている容貌・肢態の秀麗さは群をぬいているので、向日葵のように強烈な印象が目立った。

眼と眼が合った。

「おじさま！」

「マヤさん！」

隆作は鳳マヤの位置まで一気に寄った。白と黒の大型のトランクが二つ。

隆作は両手にトランクを提げると階段を昇り出した。

「あいにくの雨で……すぐホテルに行きましょう。四、五日、ホテル住まいで我慢して下さい。マンションを探しているところです。昼食は？」

「まだ。ホテルで摂るわ。おじさま、マヤの家、建ててくれないの」

「建ててあげるよ。しばらくマンション生活で、辛抱して下さい」

「ふうむ。でも、マンションでは人目もあるでしょ。マヤ、おじさまと二人っ切りで優雅な生活がしたいの。これからパパと呼ぶわ」階段を降りて、一番ホームの出札口を出ると駅前のタクシーに乗った。とにかく、マヤが巨大な花弁のように目立つものだから、さすがに隆作は気がひけた。誰か知人が見えないかと気を揉んだ。

車が駛り出すとホッとして、

「マヤさん、お疲れさま。ホテルについてよく相談しようよ」

「どちら？」

と運転手が、ハンドルを動かしながら訊いた。

た。

「赤坂門ホテル」

答えた隆作は、もう横のクッションに坐っているマヤの柔らかい手を求めた。

隆作の把握から、するりとのがれたマヤは「ねえ、パパ。わたくしね、東洋映画を、まだやめてないのよ。監視がきびしくて、やっ」と脱け出して来たの。ヤキモキしたでしょ

「うん。ごらんのとおり寝たよ」

「あら、ほんと。ずいぶん老けたわよ」

その言葉で、隆作はシュンとなった。

車は十五分も駛ると、噴水の前がっている

赤坂門ホテルの車寄せに停まった。

「いらっしゃいませ」

黒のダブルの背広を着た支配人が、フロントの中で、いんぎんなお辞儀をして迎えた。

「二二二号室へ、ご案内して」

青藍色のホテルの制服を着た少女が案内する。エレベーターで二階に昇ると二二二号室は廊下の曲り角の一つ手前の部屋であった。

和洋折衷の部屋である。案内の少女はドアを開けて、鍵を渡すと「ご用のときは、お電話下さい」といい遣し、引き返した。

日本茶と紅茶のセット、砂糖、ポットなどが卓台の上に用意してある。

「マヤさん、すぐ風呂にしたら。さっぱりするよ」

「うん、そうするわ。すぐバスの用意して頂戴」

ああ、疲れた。——マヤは洋間の長椅子へドシンと身体を投げ出した。

「パパ！ 何か注文してよ。お腹すいたわ」バスの湯水を調節している隆作にいう。

「何かいったの？」

湯殿から出て来た隆作は、お茶のセットに手をふれながら、訊く。

「お腹がペコペコよ。すぐ何か注文して」

「ランチでいいの」

「一品料理を三品とライス。特別に沢庵の漬物を副えるようにいって」

「よし、わかった。——日本茶と紅茶、どちらにする？」

「紅茶、淹れて」

「一服したら、すぐ入浴しようね。その間に昼食は見つくるっとくから」

マヤは身体を起こし、淹れて貰った紅茶を啜りはじめた。

「パパ、服脱ぐの手伝ってね。それから、入浴のとき、マヤの身体、洗って頂戴」

「よっしゃ」

服を脱がせ、下着を取ってやると、マヤの雪白の裸身は悠々とバスルームへ這入ってゆく。隆作は電話でマヤの食事を注文した。

「パパ！」

湯殿からマヤの呼ぶ声。とにかく人使いの荒い女である。

「パパ、たばこ」

「マヤは風呂で、たばこ吸うの」

たばこケースからフィルターつきを一本ひき出して、マヤの口に啣えさせ、ライターをつける。

「パパ、裸になって、すぐ来てよ」

言葉の調子に釣られ、急いで裸になってバスルームに這入ると、マヤは湯槽にあたまを凭せて悠々とたばこを吹かしている。腕を伸ばし、持ったたばこを拇指で軽く弾いて灰を落としながら、

「パパ、モサツとしてないで、そのタオルをよく洗い、石鹸の泡を立てておくのよ。昨夜、風呂を使っていないから、身体中ベトベトする感じで、気持ちわるいわ」

たばこの吸殻がチュンと音を立てた。

ザーツと湯水を切ってマヤの身体が浴槽を跨ぎ、タイル張りの流し台に腰をおろした。背中から洗いはじめる。キメの細かい白磁

の膚が、湯に温められて、珊瑚色にかがやいてみえた。みごとなウエストのくびれ、お臀の豊かな山脈。

くるりと向きを変えて、さあ洗って、といわんばかりに、両膝を揃えられると、隆作の眼さきは、ボーッとかすんだ。

マヤ恋しさに気もくるうほどだった隆作の目と鼻のさきに、そのマヤの全裸の肉体が、腋の下を抜けるように筋肉をほぐして、鎮座していた。夢ではない。

「あらっ」

マヤは大きな声をたてて笑い出した。

「パパ、もう昂奮してるの。ばかね、しっかり洗ってよ。ほら、ここ」

双つのおっぱいから洗えと指で示すのだ。お腕を伏せたように隆く盛りあがった乳房にタオルをふれると、ブルン、ブルンと音を発しそうな弾力があつた。

お臍から太腿へタオルは降りる。

マヤは両腿をゆっくりひろげた。分水嶺の丘は、なだらかであった。

「掌にいっぱいシャボンの泡を立てるのよ」

脚は、坐った隆作の膝の上に片方ずつ交互に伸ばして洗わせる。指の股は手の指で万遍なくつまみ洗いするように命じるのだった。

仕上げは、シャワーで牀中の石鹸の泡を洗いおとし、バスタオルを取って、隈なく水滴を拭かせる。

「パパも一と浴びなさいな」

バスタオルを腰に巻きつけて、マヤは浴室を出ていった。五分も経たぬうちに

「パパ、まだ？ 早く来てよ」

マヤは、洋間の寝台に灰皿とハイライトを枕もとにおき、バスタオルを腰に巻いた姿勢で、俯伏せに横たわっていた。

「ほら、その鏡台の上に化粧瓶が三つあるでしょ。そのみどり色の細長い、そう、それ。ヘチマコロンよ。わたしの全身にのばして、マツサージするの」

全身美容のマツサージである。慣れぬ手付の隆作をマヤは叱咤し、細部にわたって、指の使い方、強弱を指示する。

とにかく、東京の一夜のマヤとはガラリと一変し、言動の端々に一年以上も同棲したものの同士のような押れなれしさがあつた。これはどうしたことか。隆作は内心舌を巻いた。と同時に、マヤがこのような贅沢な生活の卒業生であることに気付いた。生意気な奴だ、と思ひながらも、一方には、そんな命令的な口調のマヤが、その価値のある豪華な女性に

思えてくるのだった。

マヤは、身体をくるりと仰向けに返した。

「たばこ」

なれぬ作業なので、隆作は額にいっぱい汗を掻いた。それを拭うひまもないのだ。ハイライトを箱ごと差し出すと、歯で一本をくわえ、あごをしゃくって、火を催促した。

「灰皿をここへ」

その姿勢で、マヤの手の届く位置へ灰皿を置くと、すぐ作業にかかれと眼で合図する。

みごとに形で据わっている乳房から、お腹へ。バスタオルの地帯をとり越えて、太腿からふくら腔、足首、足の裏まで時間をかけて磨きあげる。途中、汗が落ちはじめたので、隆作はマヤの腰のタオルのはしを借りて、拭く。

「パパ、まだ終ってないわ。鏡台の上の小さな瓶、それ持って来てよ。香水のジャスミンだから。胸と腰と足の甲に噴いてよ」

マヤはタオルをどけた。隆作は一瞬、目の置き場に困ったが、マヤに少しの悪びれたところもないので、救われた。

ふたたび、バスタオルで腰部を掩うと、

「腰をマッサージして。パパ憶えといてね。」

マッサージで最も快的なのは腰とふくら腔だ

から。さあ、やって」

分水嶺の丘にふれたときから、隆作の男性本能の怒張は最高に達した。

「マヤ、僕はもう——」

「しーっ」

唇に指を当てて、隆作の声を制した。電話が鳴った。

「もし、もし。お食事の仕度が出来ました。」

食堂までおいで下さい」

案内の少女の声だった。

「マヤ、食事どうする？」

「あとでゆくといって」

電話を切ると、マヤは、うるんだ眸を細めながら待ちかまえていた。

「パパ、続けて」

「マヤ、僕はもう死にそうだよ」

「しーっ。黙って続けるの」

隆作の奉仕に、うっとり眼を閉じたマヤは

「パパ、わたしこのまま眠るわ。眠ったら、マヤの身体に夏ふとん掛けてやってね」

「食事は？」

「もう要らないわ。ああ、眠い。パパ、続けてね。最高に気分いいわ」

マヤは欠伸を一つすると、ほんとうに軽いいびきを立てて眠ってしまった。

石川隆作は、おいてけぼりを喰った犬のように、しばらく腑抜けた顔でマヤの寝顔を眺めていたが、脱ぎ捨てたままのマヤの下着や靴下を浴室に運び、石鹸で揉み洗いをし、何回もすすぎ洗いをし、鏡台の横のタオル掛に干した。

女の下穿を洗濯するなんて、これも隆作に取っては、生まれて始めての作業だった。

雨は、あいかわらず降りつづいている。どうやら豪雨になりそうな空模様であった。

(七) 立花紅子、赤坂九十九のたのみを諾くこと並に新曲の歌えぬ太宰港二をしごくこと

全国的な豪雨は、地域によって二週間以上も断続しながら、梅雨前線は一向に霽れぬまま続いた。七月に入って、十日を過ぎた頃ようやく梅雨はあがった。とたんに、灼けつくような本格的な猛暑の夏が訪れた。

その夜、「クラブ・紅子」は、満員の盛況だった。

季節のせいもあって、客席の大半がビールを注文した。クラブ・紅子は季節の感覚を出すために逸早く水着まつりのサーブス旬間を催した。金と銀の、踵の高いサンダル・ヒールをホステスに履かせ、照明を海底に見たて

て暗青色に絞り、人魚たちの皮膚のいろを鮮かに真白く浮きたたせようという企画であった。

五番のテーブル、赤坂九十九が、ホステスの洋子相手にビールを飲んでいた。

「洋子、ママさん東京から昨日、帰ったのだろう」

「ええ。帰ってるわ。もう顔を出す時刻だけど」

「どうしたんだろう」

「さあ。……社長さん、そんなにヤキモキすることないわ。間もなく現われるわよ。それとも、洋子では、おいや」

「いや、いや。そんなことはないよ。洋ちゃんも知ってるとおり、僕は彼女のファンだしそれに、僕の会社のことで相談したい用件があるんだよ」

「それよりも、洋子のこの脚線美でも観賞しながら、ビール召上れ。ママより、わたしのほうが若いのよ」

赤坂は洋子の膝を掌で愛撫した。

「ママは気位が高いわよ。洋子に乗り替えたほうが、万事、手取り早いわよ。社長さんの嗜み、いってごらんないな。諾いてあげるから」

拍手とともに、ざわめきが起った。立花紅子の出現である。

「紅ちゃん、新作を東京で発表したそうじゃないか。怪しからん」

「あら。もうご存じ。ご免なさい」

「おいおい。ママさん、こちらをお酌願いたいな」

「はい、はい。ただ今」

声帯を痛めたという理由で、紅子はその夜ステージに立たなかった。

だいたい一テーブルに十分のわりで一巡するのが紅子のコースであった。今晚は疲れているから、ご免なさいね、という断りを一こと、いい残し、五分ぐらいで席を立った。

五番のテーブルに廻って来たとき、

「社長さん、いらっしゃい。お久しぶりね」と眉一つ動かさなかった。

「立花紅子ファンも、ここまでくると重症だわ。洋子なんか見向きもしてくれないんですもの。ママさん、お願いします」

「洋ちゃん、ちょっと待って。わたし疲れてるから、すぐ帰るの。ここ、お願いするわ」

「ママに、会社のご用があるそうですから。」

……社長さん、およろしいの」

赤坂九十九は訝えぬ顔色だった。

「立花紅子ショー、大成功で、おめでとう。……この間お願いした件で、お待ちしておりました」

「わかってるわ。顧問の話、条件次第では、お引受けしてもいいわよ。じゃ、また」

紅子は、さっさと席を起っていった。その背ろ姿を、赤坂は燃えるような眼で見おかつた。カーリーヘアの紅子の面輪が、いつまでも臉の裏にのこった。

赤坂のこのころのうちは、さくばくとしてビールの味になじめなかった。洋子相手に、その場を繕う、ようやく平静をとり戻した。帰りかけたところへ、蝶ネクタイの唇の色の苺のように紅い美少年が、彼のテーブルに近づいた。

「赤坂さまですか」

「僕、赤坂だが――」

「立花紅子からの使いのものです。これを赤坂さまにお渡しするようにとの言伝ことづてでございました。お受取り下さい」

絵模様の入ったハトロン紙の小さな包紙を差出し、赤坂の耳に唇を寄せて低い声でささやいた。

「そう。ありがとう」

赤坂の耳みみが、みるみるうちに真赤に染ま

った。太宰港二は、あわれな獲物の表情の、一とかけらも見落とすまいとして赤坂の挙動の変化を視守っていたが、やがて、美しい唇の端に冷たい嘲笑の翳をうかべ、一礼した。

太宰港二は、気取ったポーズで赤坂に背を向け、そのまま絨緞の上を滑るようにあるきクラブ・紅子の出口から、外へ姿を消した。

あなたのしもべ

僕はもうあなたのしもべ 恋のしもべ
あなたの言葉一つで コマのように廻るの
です

あなたの悪魔が たましいを奪いました
赤い唇のつめたさに いじめられたい
あなたのためなら くるい死にしてみたい
ああ僕の太陽 恋の女王さま

摩耶山麓の立花紅子の家である。

ピアノを弾いているのは紅子自身、歌っているのは、太宰港二。港二のために作詩作曲した紅子の新曲だった。

立花紅子のレッスンのきびしさは、いま始まったことではなかったが、激すると手当りしだい物を投げたり、港二の頬を撲りつけた。あるときは、スリッパで連打された

こともある。

そのかわり、巧く歌えたときは、たいへんなご機嫌で、車を大阪までとばし、ご馳走を食べに遠出することも屢々であった。

「だめ、だめ。もう一度。——赤い唇のつめたさに、いじめられたい——もう一度、歌ってごらん。——だめったら。そうじゃないったら。お前、それでも歌手になるつもり」

「先生、この歌むつかしくて」

「あはやねえ。そないなことで、歌手になれると思うとるの」

紅子の掌がピシリと港二の頬にはじけた。

「すいません」

「お前なんか、歌手を諦めて、郷里へおかえり！ いもでも作ってるほうがお似合だよ」

「紅子先生。もう一度、お願いします」

「港二、この人あなたのしもべVはシャンソン風に歌うだけでは、だめ。歌の感情がすこしも出ていないわよ。これはお前の歌だよ。恋の女王はわたしなのよ。さあ、もう一度」

紅子の指が、ピアノのキイを、歌の途中から弾く。

「赤い唇のつめたさに、いじめられたい」

紅子の両掌が、強く鍵盤を押えつけるとダーンという痞癢の音色は、そのまま余韻を曳

く。

「ばかっ！ ばかっ！」

紅子の平手打ちが、港二の美しい頬にピシリ、ピシリと鳴った。

「すいません、先生」

絨緞の上に坐りこむと両手をついて、額をゆかに擦りつけた。

「すいませんで、すむと思うとるの。甘ったれるんじゃないわ。ほんとうにどうしたら、お前に歌のこころをわからせることができるのかしら。——ようし、教えてあげるわ。こちへおいで」

紅子は安楽椅子に掛けた。

「わたしの足下へお坐り」

港二はいわれるとおり床に跪ずいた。紅子はサンダルを爪先で少年のあごを掬いあげて仰向かせた。うっすらと涙を浮かべている。

「ああ、いい気持！ V」

ムラムラとあたまをもたげた嗜虐の悪魔が北叟笑むのだ。

「顔をあげるの」

サンダルを脱いだ紅子の片方の裸の足が港二の顔にぴたっとくっつく、足の指の間に格好のいい鼻をはさみ込む。呼吸を塞がれて港二の顔は真赤になった。

「港二、わたしが可愛がってあげるからってのぼせるんじゃないよ。△あなたのしもべ▽はむつかしいかもしれないわ。でも、それを歌いこなして、始めて歌手になれるんじゃないか。△あなたのしもべ▽の歌のところがわかるまで、一切お前をかまいつけないことにするわ。わたしの身のまわりの世話は、礼子にさせる。わかったな。お前は自分の部屋に閉じこもって、じっくり勉強しな。——これっきりかもしれないから、わたしの足の指をしゃぶらせてあげる。さあ、しゃぶれ。はじめてだからって、下手だと許さないわよ。蹴とばしてやる。指の一本、一本を真心こめて舐玉をしゃぶるようにしゃぶるのよ。港二は今晚から、わたしの奴隷やし」

清純な美少年を誘導する愉しみには、もう飽いた。いま、わたしの足の指をふくんでいゝる朱い唇で、これからは、わたしの肉体の汚れを清めさせてやるわ。

その柔らかな、朱い唇は、紅子にとって最高の果実にちがいはなかった。

△フレンチ・キス▽

立花紅子の頬に、とろけるような悪魔のえくぼが、夢みる紅となって、彫まれるのだった。

(八) 工良房、福岡の鳳マヤ邸を訪ね、石川隆作に覗き見られること

福岡市が西に延びたところに姪ノ浜の町がある。市内電車の西鉄線の終点でもあるが、停留所からさらに西へ徒歩で約十分、山林の中に最近、原色のいらかの文化住宅が建ちこんでいたが、その色彩感の強い中の一つに、瓦を朱色に吹きつけた瀟洒な一軒の構えがあった。

ゆるやかに傾斜した高台の中腹に建っている、ことに目立つ。

門札に『鳳寓』の表示がしてある。

鳳マヤの寓居だ。

ホテル住まいの意外に物入りで不経済なのに僻居した石川隆作は、都市の中心部を離れた姪ノ浜に、マヤのため土地つきの家を買った。

不動産屋にたのんで三日目だった。不動産屋は声をひそめて、隆作に耳うちした。

「まったくご希望どおりの家ですよ。これは内緒ですがね、ある一流会社の支社長さんが二号さんのために建てたものです。まだ半歳も経っていませんよ」

建面積は五五平方メートルだが、バスルームの湯

槽がホーロー引きの柔らかな光沢であることと湯沸し器の設備が完備していたこと。洋室と和室とが一段違いの高低をつけた設計であること。部屋の構造にも、内装にも——例えば孟宗竹を使った和室の凝りよう。天蓋のついた洋室の寝台、ルームクーラーなど、隆作は勿論、始め不平たらただったマヤも一目見ただけで、ぐっと気に入ってしまった。

三〇〇平方メートルの敷地がついて、六百万で買った。不動産屋のいうように、たしかに掘出しものであった。

「突然、本社に復ることになりましたね。二号さんも東京に随いてゆくことに決まり、とにかく買手を急いでいるんです。何しろ調度品つきですからね。大変な格安にはちがいないが、六百万というと、誰でも、おいそれと手の出る代物ではありません。旦那は運がいいですよ」

不潔感のつき纏う消耗品は全部、新品と取り換えた。その夜、マヤはすこぶるご機嫌であった。

「パパ、今夜泊っていいわ。マヤ、サービスするわよ」

ほんとうに、その夜のマヤは、猛烈であった。四十八歳の隆作の精力では、とてもかな

うものではなかった。

「マヤ、もう寝ろうよ」

隆作は降参した。

「パパ、堪能した？」

「うん。もう、くたくただ」

「パパ、マヤを満足させるには、もっともつと精力絶倫になってね。でないと、マヤは浮気するわよ」

「浮気でもしてみろ、承知しないから」

「ねえパパ、この家はわたしの名儀でしょ」

「勿論そうだよ。どうしたの」

「うれしいわ。マヤ、夢見てるような気がするの」

マヤは、隆作の顔の上に彼女の顔を重ねて舌を差し込んで来た。隆作は高価な洋酒でも吸るように舌を吸い、滾々と湧出してくるマヤのつばきを、咽喉を鳴らしながら飲み取った。

マヤは独り寝を怖がった。そこで近くの農家の身体の頑丈な女子高校生をたのみ、泊りに来て貰うことにした。

十日ばかり経った日の夕刻、隆作が電話するとマヤは待ち兼ねていたといわんばかりに電話口に出た。

「パパ、すぐ来てよ。ご相談したいことが起

きたから」

「水着のことか？」

「ちがうの。東京から、ある男がマヤを訪ねてくるのよ。どうしましょ」

隆作の声が急にとがり出した。

「おとこ？ それや、何者だ。マヤの恋人か？」

「ううん、ちがうの。マヤの猛烈な崇拜者で工良房っていうの。とにかく、すぐ来てよ。」

電話では、とても説明できないわ」

マヤの語勢に釣られて、隆作はクラウンデラックスを駛らせて駆けつけた。マヤはルームクーラーのある部屋で、ゆうゆうと寛ろいでいた。うすい布地の黄いろの上着と銀色のショートパンツのスタイルだった。

「電報よ」

隆作は、渡された電報を読んだ。

「ヨシフサソチラニユク」マユミ

「マヤ、これは何だ。僕にもよくわかるように説明してくれ。どうして、ここの住所がわかったんだ」

隆作の顔は蒼白に変わった。嫉妬のいろが、ありありと浮かんでいる。

「あらっ、パパが妬いてるわ。ばかね」

長椅子の肘つきにあたまを凭せ、長身を横

たえながら、たばこを吹かせていたマヤが、突っ立っている隆作を人差し指で招いた。

「パパ、脚を揉んで」

長椅子の下ゆかにあぐらをかいて、マヤの脚をふくら脛から、揉みはじめる。

「眉美がしゃべったらしいの。ひょっとしたら、買収されたのかもしれないわ。眉美だとその匂いは大いにするわ。工良房というのは同郷の、わたしより十四も年上の男で、マヤが東京に出たばかりの頃、わたしのおしゃれ一切の面倒を見てくれたの。本職は理髪師。給料の大半をわたしのおしゃれのため注ぎ込んでくれたの。ただ、それだけよ。わたしには何の代償も求めなかったわ。パパ、信じて頂戴。良房はマヤの奴隷なのよ。本当に、肉体的関係は何もないの。パパ、わかってくれる？」

「一つ部屋に、若い男と女がいて、それで潔白を信じろといっても、無理だな」

「ふうん。じゃ、どう説明すればいいのよ」マヤの言葉は、少しむくれ気味になった。

「訪ねて来ても、その男とは会わないで貰いたいな。マヤ、出来る？」

「出来ないわ」

「どうしてだ」

「パパは、いやらしいわ。マヤがそんなに信用できないの。良房とは、ほんとうに何でもないので。彼はわたしの崇拝者で、わたしの全身美容とわたしだけの快樂には、奉仕するけど、対等には何も求めない人物だと、先刻からいってるでしょ。わかんないの」

「わたしだけの快樂って、何だい」

「う、ふ、ふ」

「ほら。そのふくみ笑いが、おかしい。はっきり、いえ」

「いうわよ。それはね、——やっぱり、やめるわ。それよりも、パパの眼ではっきり確かめて貰うわよ。わたしが女王さまで、良房は奴隷——そういえば、だいたい想像ぐらいはつきそうなものね。パパのこと、ちゃんと良房に因果をいふくめておくわ。どうせ、明日あたり、ここへ現われるでしょうから」

「迎えに、駅まで出ておやりよ」

隆作の声が急にやさしくなった。

「マヤのプライバシーでしょ。パパの指図は受けないわ」

「失礼をば、いたしました」

隆作はおどけてみせ、揉んでいるマヤの足の甲に接吻した。すると突如、三角関係という、なまなましい別の情感が放埒な版図を拡

げ出した。

「マヤ！」

隆作は感情のくるめきとともにマヤの腰に抱きついて、熱い息を吐いた。

「だめよ」

マヤは脚を曲げて、隆作の肩に踵を当てがい、突き放した。

「マヤ、パパは昂奮して来た」

「やきもちで、昂奮したの」

「そうらしい」

「ふん。マヤは知らない。それとも、良房のようにわたしの奴隷にして、奉仕だけさせたげようか」

「マヤ！」

「ふん。そのうち、ほんとうにそうさせてやるわよ。そのたびに、パパの財産は、わたしのものになるの。働き蜂は、きゅうきゅうと働くのよ。そして、わたしの前に捧げものをしなきゃ」

マヤは肚の中で台詞の一つ一つを吟味するようにつぶやく。すると不意に、マヤも燃ゆるような昂奮で熱くなった。

「パパ、揉んで！」

その翌日の午後三時頃、工良房がマヤの家

の玄関に立った。駅からタクシーで、姪の浜へ直行し、あちらこちらと随分、尋ね廻ったという。交番もマヤの家を知らなかったそうである。

「マヤさん、久しぶりですね。ああ、なつかしいなあ」

工はこみあげてくる感情をそのまま言葉に出した。しかしマヤは、ブスツとした面持でニコリともしなかった。

「良房、すぐ帰ってよ」

「エッ。どうしてですか」

「わたしにはパトロンがいるわ。ご存じ？」

「眉美に聞いて知ってるよ。石川っていう人でしょう。僕のこと、よく話して理解して貰って下さい。マヤさん、僕はもう帰るところはないんです。貴女の下男に使って下さい。寝起きする部屋は、物置でも、廊下の隅でも構いません。貴女の傍にさえおれたら、他に望むことはありませんから」

「ふうん。じゃ、本当にわたしの奴隷になる覚悟ができたわけね」

「勿論、そのつもりです」

「石川に話してみるわ。とにかくお上り」

その石川隆作は、ようやく発足した暖冷房設備の新会社の仕事で不在だった。六時過ぎ

隆作から電話がかかった。やはり気懸りなのだ。

「奴、来たか」

「来たわよ」

「いま、どこにいるの？」

「ここにいますわよ」

「エッ！」

隆作の声が途断れた。さすがに慌てている気配だった。

「食事は外で召上ってね。七時半かきり帰って頂戴。証拠、見せたげるわよ」

電話を切るとマヤは、妖しく輝く眸を、良房の顔へ向けた。

「もう一度風呂に這入るわ。良房もおいで。」

お前、ちゃんとヒゲを剃って、歯を磨くの」

七時半、石川隆作は自動車を車庫に入れると裏口へ廻った。台所の出入口から上り、厨を通じて和室に這入ると、洋室のステレオの音楽が聴こえて来た。

お伽の国を覗き見るように、不思議な好奇心で身をふるわせながら、鍵孔に眼をあて、内部の光景に視線を凝らした。

隆作の視界に映ったのは、寝台のマヤの上半身であった。マヤのご自慢の双つの乳房と顔が見えた。マヤは陶醉した眼をうっとり

閉じている。隆作は眼の位置を動かして、マヤの下半身へ流した。

「うーむ」

隆作は思わずうめいた。紅い絨緞のゆかに伸びたマヤの白磁の脚線の太腿が見え、男の頭がうつ伏せになっていた。

石川隆作は、とたんにマヤに対する嫉妬心をうしなった。そのかわり、ぞくぞくと抬げてくる亢奮に身内が沸騰した。

眼を閉じたままの姿勢で、マヤはしきりに何かを命じている。奴隷に対する注文のようであった。男のあたまが、物を掬いあげるように下から上へと振り上げられると、「そうそう」というように、マヤの唇が、甘く動いた。

新鮮な風俗画を観るように、素晴らしい男女のもう一つの世界を、隆作は目撃した。彼の下着は、彼の身内の激情そのままを、形の上で現わしているのだった。

(九) 立花紅子、赤坂九十九を自宅に呼んでフェチストの実演を見物すること

赤坂九十九が、立花紅子から直接電話を貰ったのは、クラブ・紅子で会った日から十五日目だった。夜の八時過ぎであった。丁度そ

のとき、九十九は交通事故を起こした運転手の一人を社長室に呼びつけて、現場報告を聞いていたところであった。

「顧問を引受けて下さるというのですか。いやあ、それはありがとうございます。はい。すぐお伺いいたします。あと二十分ほどお待ち下さい」

電話を切った赤坂の顔色は晴々と明るく、もう事故などどうでもよかった。

あとの処置を営業部長に一任し、彼自身は愛用車を運転しながら、摩耶山麓の立花紅子の邸宅に向かった。口笛を吹き鳴らすほど上機嫌であった。

玄関のベルを押した。

「どなた」

「赤坂です」

「来たわ。——ちょっとお待ちになって」しばらくすると廊下に人の気配がした。

「どうぞ」

透きとおるような紅子の声音が聴こえた。赤坂は何気なく扉を引いた。「あっ」と彼はその場に棒立ちになってしまった。

「いらっしやい」

緋色のネグリジェ姿の紅子がこぼれるような笑顔で迎えた。紅子は人間馬に騎乗してい

た。外人プロレスラーの覆面のように、目と鼻と口の箇所は穴を明けた覆面だ。人間馬には手綱を噛ませている。

「お上りになって。さあ、どうぞ」

手綱を捌いて廻れ右をさせると、馬は紅子のお臀の下でカパカパと応接間へ案内する。

朱色の部屋であった。絨緞も窓のカーテンも、椅子のモケットまでが、同じ朱いろ一色である。

「社長さん、お掛けになって」

赤坂九十九は、人間馬で、まず度胆をぬかれた形だ。落ちつかない表情だった。第一、長椅子の紅子の足もとのゆかに踞まっている覆面の男のことが妙に気になった。

紅子は慣れたもので、男のあたまを足の下に強くふみ敷くと、高々と膝を組んだ。

「顧問を引受けてもいいわ。で、条件はどういうの」

「月十万でしょう。月に二回ぐらい、夜の車に乗ってエントツを取締って頂きたいのですが、おいやでしょうね。あとは営業上の社長相談役になって頂くこと」

「エントツ取締りはお断りするわ。社長相談役は面白そうだから、お引受けしてもいいわよ。それと、月二十万出して頂きたいわ」

「十万でも、僕はふんばつしたつもりですが……」

「あら、そうお。立花紅子が、あなたの会社の顧問だと広告するのだから、むしろ安いみたいなものよ。おやめになる？」

赤坂の視線は、紅子が「豚」と呼びつけて荒々しく足台を蹴返し、今度は足の指を大きな口の中へ突っ込んだときから、もう血相が変り、釘づけされていた。

「吸えっ！」

紅子は豚に命じる。チュウ、チュウと音を立てながら吸う。

「社長さん！どこを見ているのよ。わたしの条件、諾くわね」

「はい。結構です」

九十九は、うわの空だ。

「このあいだ社長さんに上げたパンティ、そこへ出してごらん下さい」

「いや。それは困ります」

「何が困るのさ。男という男が、あなたのようになるのはちょっと不思議じゃないわ。あなたは、フェチスト。立花紅子のパンティの蒐集家でしょ。あなたの持っているのと交換してあげるわ。わたしの移り香が消えた時分だし、もう一つ欲しいでしょ」

赤坂九十九は呼吸が詰って、真赤になりながら、紅子の顔を眺めた。

「豚、わたしのパンティをお脱ぎっ！」

豚は太った身体を起こし、ネグリジェをたくしあげた紅子の脂肪の載った円柱の奥に両手を差し入れて、パンティを脱がせた。

覆面はそれを捧げ持つようにして紅子の指示をおおぐ。紅子は、じろりと赤坂に流し目をくると、あごをしゃくった。

「古いのを、そこへ出して」

赤坂は上着の内かくしから、紙包を出し、覆面の持った品と交換する。

紙包から、古いパンティを取り出したとき紅子は撥けるように笑い出した。

「まあ、ボロボロだわ。社長さん、咬み破ったのね」

「——」

「社長さん、うれしい？ 立花紅子の猛烈な崇拜者、赤坂九十九。あなたは幸運な男よ。全国の紅子ファンがわたしの膚につけたものを欲しがっているというのに、あなたはわたしの身近かにいて、その望みが叶えられるのだから、幸福で泣き出したくらいでしょ。わかるわ。さあ、遠慮はいらないわ。あなたの惚れた立花紅子の前で、そのパンティ愛撫し

S.C.R.(性問題相談室)案内

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

「——」
「おいや」
「うふ、ふ、ふ」

紅子は椅子から立上った。つかつかと赤坂の傍へ歩み寄り彼の首筋に手をかけて四つ這いにし彼女の太腿の間に頭を挟みこんだ。

「うふ、ふ、ふ」

得意の絶頂にある女の美しい笑い声であった。そのままの姿勢で約三分間、紅子の円柱は九十九の顔をようやく解き放した。

「椅子に掛けて。さあもういいわ。ちゃんとわたしの目の前で咬み破ってごらんさないな。きつとジャスミンの匂いが素晴らしいわよ」

羞恥心は去った。

目の前の美しい妖花の刺激に溺れてしまった赤坂九十九は、紅子のパンティに顔を埋めて、思うさま呼吸を深く吸いこんだ。

まことに馥郁とした香ぐわしさであった。

立花紅子は、フェチストの実態を彼女の眼で、じっくりたしかめようとし、瞬き一つしなかった。

紅子に見られているという恍惚感が赤坂の全身をしびれさせた。九十九はパンティを口の中にふくみ、齒を軽くたてながら、モグモグと口を動かしてはじめた。



奇ク誌についての

○と×の対話

— わが悪書論 —

新宿町人

×「この本も、文献誌なんて、もっともらしいタイトルだが、やっぱり売りものだろう。興味中心なんだよ」

○「それはちがう。とてもマジメすぎるくらいに編集されてるんだ。テーマがテーマだから、誤解されてるんだ」

×「それならききたくなるが、きみは、この本を、ムキだしのまま持ち歩いたり、電車のなかで読めるかい」

○「おれは平気だよ。いつだって、カバンの中に入れて持ち歩いてるよ。しかしねえ、問

題はそこなんだ。自分は恥ずかしくなくとも世間の常識というものがあるね。ことさら、人目にふれさすことはない。みたまえ。きみ車内には、未成年者だっておおぜいいる。そんなのに強いて興味をおこさせるような行為をするのは、社会人としてさけるべきことだよ」

……ある日の午さがり、私は、友人のHと、喫茶店のボックスで、奇ク誌をまん中に、論争をつづけていた。

Hは、自動車ディーラーの営業部長で、アブ

のケすらない、ガリガリおとこ。たまたま私のもっていた奇ク誌に目がいき、そこから、是非論がはじまったのだった。

以下、×はHの発言である。

×「おんなをしばったりたたいたり、また男の顔の上にでかい尻をのせたり、こんな行為が、文献とどうつながるのかな」

○「そうだったら、ミもフタもないよ。しばるのには、それだけのわけがあるのさ。顔を踏まれるにも、それなりの意味がある。きみの住む世界とは、ちょっとちがうのだ。ちがうからといって、いけないという理由にはなるまい」

×「どうも、わからんな。他人の肌にムチをあてるのは、非常識だ」

○「きみ、トルコが栄え、ストリップが相も変わらず、たくさんのお客を惹くのは、なんのためだと思っかね。おんなの裸を鑑賞するのはそんなに非常識かな」

×「ときと場合によるさ。宴会なんぞにストリップを呼ぶのは、アイキョーさ」

○「アイキョーけっこう。アイキョーにしるおつきあいにしろ、おんなのコのはだかが、ときによって人の心にうるおいを与えることはみとめるね」

×「そうたたみこまれちゃ困るが、しかし、それは良いことかな」

○「良いこと、わるいこと、とわりきってモノを考えるのは危険だ。世の中には、人それぞれのモノのみかたがある。千差万別だ。さっき、きみは、電車のなかで、この奇クという雑誌が開けるか、といったね。女のはだが、アイキョーなら、きみは、そのアイキョーを口絵にした一般の雑誌を、同様、人目の前で開くことができるかね」

×「それはできないな」

○「なぜ、それができないか、考えてみようじゃないか。きみの表現でいえば、ときに、はだかは許されるが、ムチでたたいたり顔を踏んだフオトは、いけないというのかな」

×「いや、そうじゃない。左様な人世の秘事は、すべてものかげで、こっそりやるべきものなのだ」

○「もうひとつ訊く。縛ったり、たたいたりも、形を変えた鑑賞なのだ。と、きみは思わないかね。ここに出てくる辻村隆という作家は、そうしたことで、前人の見出しえなかった美を必死に追求してるのだ。美をもとめるのは人間の本能だ。その本能は、誰にもとがめる権利はない。と、きみは思わないか」

×「おかしいな。きみの設問は。叩いたり、しばったりして、本当の美が発見できるのかね」

○「できる。ただし、そのばあい、叩き、しる側の姿勢が問題なのだ。面白がってやるのは、美の探究者じゃない。たんなる助平にすぎないだろう。みたまえ、この辻村という作家の態度を。美というもの、人間というものをなんとか引っぱりだそうと、いのちがけの血のにじむ苦勞をしている」

×「きみが、そう思ってみるからだよ。おれなんか凡人のせいかな、この縛ったフオトは、グロとか思えない」

○「そういうものさ。タデく虫もすきずきで、凡人だから、でないからという問題とはちがうのさ」

×「サカサにしてみても、どうみ直しても美なんてもんじゃないがなあ」

○「サケをまったくのめないヤツに一万円のジョニクロ贈ったって、それほど喜ばない。ことし八十すぎのヨボヨボのじいさんにオーバイ買ってやっても、ちっとも喜ばないだろう（マゴにでもやるならべつだが、本人には、もはや用のないモノだ）それもおなじだよ」

×「トルコへ行って、ぜんぜん洗わずに、おんなのコにスリッパの底ナメさせられて、喜ぶ客というのも、おれには、わからんなあ」

○「スリッパなんか、軽いほうさ。このまえ『平凡パンチ』にや、トルコ嬢に、風呂場の排水口にくっついた湯アカを、こすりとって食べさせて、と哀願した粹人の話があった」

×「きたねえ趣味だなア」

○「第三者は、バッチイと目をしかめても、本人には、これが、美味なんだな」

×「おれには、わからんことだらけだよ」

○「それでいいのさ。きみ、牛乳五〇〇円という相場しってるか。いまは、もっと値上げになったはずだが」

×「なんだい、五〇〇円の牛乳てのは」

○「おしっこさ。おしっこを、牛乳びん一本ぶん五〇〇円で買ったがる紳士だってあるんだぜ」

×「何につかうのかな。クスリにもなるまいに」

○「おしえてやろうか。それを買いたがる人にとってはそれさえ、とおとい神酒なんだ。クスリ以上のものさ」

×「のむのか」

○「まあね。きみみたいなノーマル人種にや

想像もつかんことだろう。でも常識からいえば、とんでもない、不潔なものでも、ときには、神薬と化す、ということだけは知っておいてもいいだろうな」

×「ますます、わからなくなったよ。実際にそんなもの呑むやつがいるのか」

○「いないとはいわん。しかし、けっしてすすめるわけではない。が、本人が承知のうえでやることまで、とがめだてはできないだろうな」

×「それも、文献なのか？」

○「皮肉な質問だね。答えよう。そういう人間が、いることを、具体的に書きのこすことも、りっぱな文献活動さ。ただ問題は、これを下卑な、変態行為とみるか、あるいは病的嗜好ととるか、あるいは高度文明下の一風俗ととるか、みかたは、いろいろあるだろう」

×「呑んだりすることを、きみは是認するのかい？」

○「是認も否定もしないよ。そんなこと、いちいち第三者が干渉することはないのだ。話題が外れたようだな。きみは、この本を目的のカキにするね。なぜだか、その理由をいつてくれないか」

×「甘美とか、陶醉とかいうけど、けっきょ

くは、みにくい人間の裏面をえぐるだけではないか」

○「それでいいのだよ。みたまえ、この読者通信の一般読者の、歓喜の声を。うめきを。

友を求める切実な声を。これは氷山の一角でしかないんだ。この通信に登場した読者のかげに、何百、何千の、沈黙を守る読者の存在があるところべきだ。この活字は、そうしたいへんな数の読者の、きもちのはけ口なんだ」

×「そういわれりゃ、そうだなあ」

○「そうなんだよ」

×「きびしいね、追撃が」

○「この、声なき民衆の声を無視してはいかん、おれは、こうした発言の場をもってるだけでも、この雑誌は貴重だと思ってるのだ」

×「どれ、ちょっと、一つ二つ、読ませてくれよ」

○「多くとはいわん。たったひとつか、ふたつ読んでみるよ。人のところがわかるだろう」

×「うーむ。だんだんわかるような気がしてきた」

○「あまり、深いりするのとは、きみのような熱しやすい男は考えものだが、理解してくれ

れば、うれしいな」

×「なんだか次元のちがう世界へとびこんだみたいだが、おれもべんきょうしようかな」

○「ムリにはすすめんが、知らないでいるより知ったほうがいいだろう。おれも、読みつけて十七年たつが、ずいぶんと、あたらしい世界を知ったきもちだよ」

×「もうひとつ、訊いていいかな」

○「なんだい？」

×「叩かれたり、ウマのりされる人間は、実際にいるのか。活字だけのアソビじゃないのかな」

○「いる、いないは、深い問題じゃない。観念的なアソビも、もちろんけっこうだ。問題の通信にだって、そんな気風があることは意外に感ぜられるのだ」

×「わかった。実行にうつらないまでも、そんな空想におぼれる楽しみかたもあるんだな」

○「ものは、どうともとれるさ。しかし、じっさいにおれの知る紳士は、ひるまはまじめなつとめ人や、お医者、商人で、夜はガラリと変って、馬のりを楽しみ、五〇〇円の牛乳に随喜の涙をこぼす人だってあるんだ」

×「そういうものかね」

〇「空想をとうとぶか、実行でゆくかは、その人の自由。第三者に危害さえ加えなけりやそれでいいのさ。おしっこだって、うんこだって、味わうのは、人間にゆるされた自由というものだよ」

×「この雑誌の文献としての価値はわかったが、ほかにもなにか価値はあるのかな」

〇「おれの体験をいおうか。もともと、おれはこんな種類の出版物は、キライではない。ずいぶん、本や雑誌もよみあさった。だが、

きみがさっきいったとおり、その多くは、ホリの浅い、下品な興味本位のものばかりだった。だが、この雑誌のムードは、まったくちがうのだ。おなじモノを扱っても、角度がまったく一八〇度もちがう。そこが、この雑誌

〔伝言板〕

〇分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚 フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛願います。〇御送金は、現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。〇既

のネウチだと思ふな」

×「けれど、たったひとつ、ひっかかるのがこの本は、そのミチでは悪書扱いだそうだね。本屋のおやじが、だからウチにはおいてない」と、いったよ」

〇「そこだ。我々がみて良書でも、世間からみれば悪書としか、うつらない。これは宿命だな。よく出版元が、悪評に耐えて、二十年以上も、刊行しつづけたものだ、つくづく思うよ」

×「世間の目からみて悪書なら、やっぱり悪書なのじゃないかな」

〇「そういう意味では、そうなるだろうな。

たとえば、スイミン薬がそうだ。本来は、病人を静めるための良薬だ。だが、意識して量

刊の臨時増刊号〈花と蛇〉第一回分（前篇

写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画

特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）

のいずれも売切れにて在庫がありません。

〇旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがあり

ますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。

〇雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱

第四十一号暁出版株式会社へ願います。

をすぐすと、一命までうばわれる。良いか良くないかは紙一重だ」

×「そうだな。害虫をころし、作物のイノチを救う農薬が、用いかにたよっては、人のいのちをうばう、とんでもない毒薬だもん」

〇「良と悪とは紙一重。みたまえ、この本のトップの『本誌自粛の徹底』という文章を」

×「オレも、それが気になってるのだ。自分で、自分の首をしめるみたいな文章だね」

〇「しかし、編集者の姿勢としては、りっぱだよ。有名な出版社の週刊誌なんかには、この雑誌より、もっともっとひでえのを、のつけて、自粛どころか口をつぐんで、知らん顔

てえのも少なくないが、本誌は、この声明文では、自ら悪書をうたい、読者に取扱いかた

の注意をうながしてる」

×「取扱注意というわけだな」

〇「いろいろのイミで、存在価値があり、社会に有用だからこそ、二十年以上もつづいたのだ。バックナンバーが、一冊何千円という

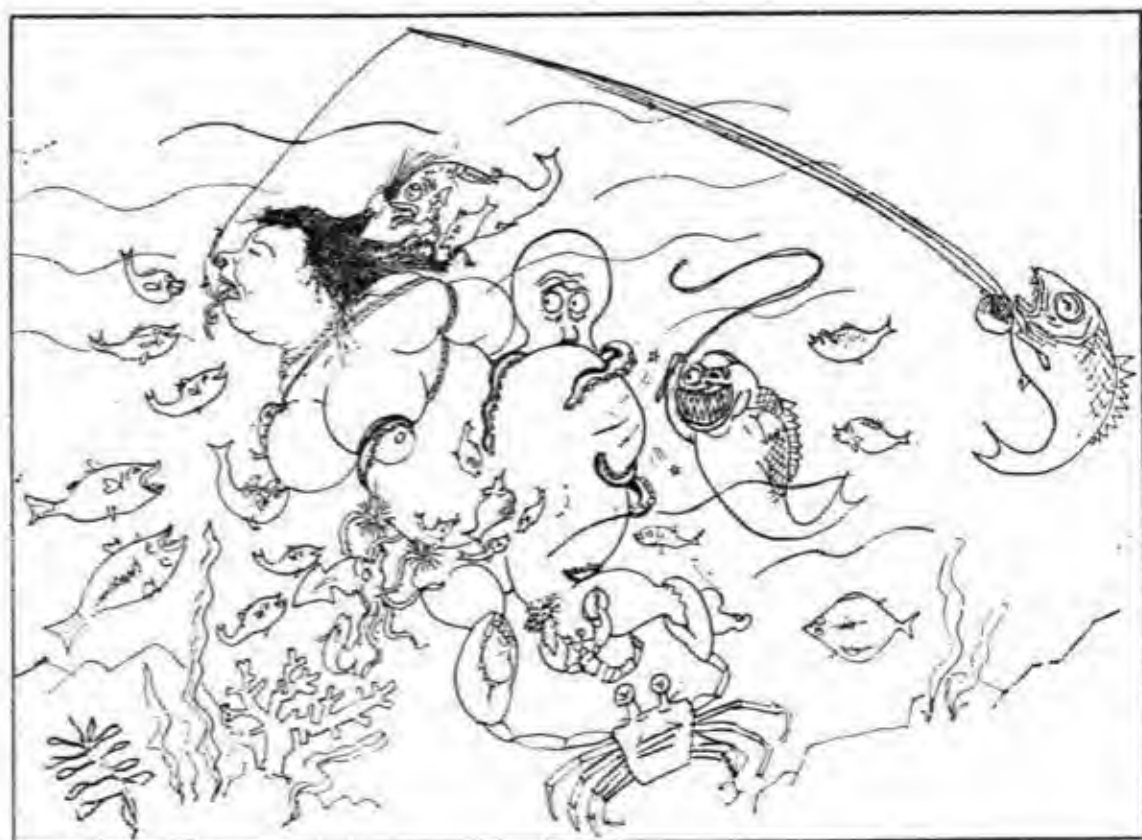
のも、文献価値を物語る一面じゃないかな」

×「わかったよ。人世をべんきょうしなす

ために、おれも、きみのマネして、みかたを

変えて、よく読んでみよう」

漫画をかきました。私好みの鳥獣戯曲とい
うつもりですが、今更ながらもう少し絵の勉
強をしていたら、と悔まれます。しかし、困
ったことに、絵は拙くてもこのアイデアは、
この四枚に限らずいけると自画自讃していま



告

白

私の鳥獣戯曲

文 と 絵

高 浜 満 六

容赦、願いたいものです。

万物の霊長として、文字通り君臨していた人類のために、生命を捧げて奉仕させられて来た数々の動物が、逆に人間を捕えて支配するとき、先祖代々から積りに積った怨恨は凄まじく、彼等はきつと一思いに料理してしまふにあきたらず、利用するだけ利用して、苦しめるだけ苦しめて、思い知ったかと溜飲を下げるのではないかと思うのです。

これは、私のSよりもM的要素の究極の表現といえましょう。誇り高き強者として君臨していたものが、被圧迫者であったとるに足りぬ存在であったもの（それが下等であればある程）に征服され、酷使される対照。映画『猿の惑星』のように完全に隷属化した哀れな人間に陥っては面白くなく、そこまでに至る間の心の苦悶、葛藤の最中であることも、一つの要素なのです。

釣人に釣られる魚。鳥かごの九官鳥。くさりにつながれた犬。ひねり潰される蟻などを私が眺めるとき、次から次へと、こうした幻想が浮かんでくるのです。動物の単純なる脳細胞が考えるように、私にも人間の中でも見事に肥え太った、柔らかい肉づきの豊かで美味そうな牝の姿が、実に素晴らしい獲物とし

すが、この被虐者たる人間という家畜の牝が容姿端麗の若き美女ならば、まず歓迎されるのではないかということは十分承知しているのですけれど、何しろ中年の肥満体の婦人であれば、気に入らない私のことですから御

て喜びに溢れてくるのです。

1、魚

ガバツと、水面からおどり上る釣糸の先の魚。ひらめく銀鱗と、ピチピチとはね廻る苦悶の白い腹。釣人の醍醐味は、ここにあるということ、中にはこの感覚を楽しむだけのために、別に食用にするのでもないのに釣糸をたれるという、Sもいいとこの残酷なる人もいるそうですが、魚にとって、これ程に辛い瞬間はないでしょう。たぐりよせられて、口をパクパクさせるだけになるまでの懸命のものがき、死の舞踏は、それを美女（私は肥満体の美女）におきかえると、Sの醍醐味の満喫ということになるのかも知れません。

美しい真白の大きい腹をくねらせてもがく美女の手ごたえは、重量級だけに正に十二分という処。陸から海へとつりこまれて、悶えながら手繰りよせられた肥満婦人を、多くの小魚や水棲動物がワンサと押しよせて、いじめにかかるといふ図。魚共は寄ってたかって婦人を丸裸にむいて後手に縛り上げ、丁度陸揚げされた鮪のようなという、縛られた人の形容そのままの姿にして、釣針を身体中にひっかけて、ひきずり廻すのです。

ごかいや、みみず、鯖の虫という蛆虫等の餌を口にねじこまれた彼女は、魚共の嘲笑と恥ずかしめに悲鳴をあげつつ、水の底に真白い裸体がころげ廻るのです。カニは、はさみで婦人の柔らかい太ももをはさんで、うにはその鋭い棘で婦人の柔らかい尻を刺し、好色なたこ坊主はヌルヌルとした足をからませて吸盤で肉体を吸いあげるのです。それにしても八本の足を一ぺんに使えるたこの羨ましいことよ。

こうして肥満体の美女は、次から次と魚の部落をたらい廻しにされて、ひきずり廻されるのです。美しい珊瑚樹や海藻の森の中で、あるいは荒々しい岩の陰で、時には砂浜の渚で、又、沈められた船の中で、貪欲な魚どもに弄ばれつづけるのです。

魚を主題としたものの中では、この他に丸裸の美女がガラス張りの水族館の中で、見物の魚共に嘲けられながら白い肉体をくねらせて泳ぎ廻る図。養殖場の生簀の中で丸々と肥らされた婦人。やどかりのように肉体の一部に、かにを寄生させられるために飼われている肥満女体。丸裸の肉体から分泌する、かぐわしいものを、小魚につつかれてのたうって苦しむ肥満婦人。ねぐらを求める鰻に、さい

なまれる縛られた美女。等々がありますが、あくまでも優雅な嘲弄と、長い間、苦しめて利用するSの真髓のために、鯛の生つくりのように肥った肉体を半分そがれて、刺身として大きな皿に片身をピクピク動かしながら盛られた姿や、海老の残酷焼のように、丸縛の生身を後手に縛られて金網？にのせられて焼かれ、ヒイヒイ悲鳴をあげるのを楽しみながら、塩をまぶして賞味するといった図は、アイデアだけで、私としては敬遠した次第です。

2、鳥

ヒッチコックの映画『鳥』を見ましたが、突然に鳥が人間を襲う恐怖。まさかといったことが実現して狼狽し逃げまどう人間……。

丸裸の肥満美女を縛りつけて、鳥にその肥った肉体をついばませる責め。私は前述の如く他の動物を使った責めに大いに効果があると思っているし、特に興味があります。それは、とりもなおさず、虫、鳥、魚、獣のいずれを問わず、彼等に苦しめられ、はづかしめられる辛さは、人間による作為であっても、その小動物のたぐいに責められる苦しみは、人という誇りを無惨にはぎとって、それらの



動物と同等より以下に引きずりおろすという心理効果があるのではないかと思うのです。しかし、鳥類には意外と私の幻想は数多くは浮かび上らないのです。いいアイデアがあったら教えて貰いたいほどですが、まず、考えられたのは汚い鶏小屋の巢で、丸裸の肥った腹の下に卵を入れられて、かえさせられている図。縛られて木の上の巢に捕虜となった美女が、鳥がくわえて来た虫やその他の汚物を、口うつしに餌として与えられている図。それから、この絵のように九官鳥に芸をしまれてる肥満体の中年婦人……。

どれもこれも、全くお愛嬌の域を出ない姿で、S画としての迫力に乏しいのは何故でしょうか。この絵は、止り木に鳥のように縛りつけられた丸裸の肥満婦人が鳥どもの調練をうけているのを描いたつもりですが、もともと歌を唄える人間であってみれば、すこしもむづかしい芸ではない。唯、不安定な止り木を、縛られた裸体でささえて懸命にこらえることを強制され、その唄う文句が誇り高き貴婦人の口にすべきでない言葉を並べているのだと思うだけです。鳥達は夫人の裸体を抜けた落ちた羽根でくすぐりながら、ここは何ここは何という具合に大きな声で啼かせているという想定なのです。いやがるのを無理矢理に大きな声で何回も何回も繰返して啼き叫ぶことを調練している図という注釈が必要です。赤い羽根、緑の羽根をふくよかな乳房にプスリとつきさした処なども、御愛嬌というより他仕方のないところと

思います。

3、虫

単に昆虫だけでなく、むかでや蛙、蛇等も含めて、この種類の人間に対する恨みは大きく、又千変万化であり、その構想には枚挙にいとまがない位に豊富です。

蛇のしつような執念。蟻や蜂のように組織だった生活。縄やごきぶりの様な旺盛さ。蚊や蛇の如く、そうでなくとも人間を襲う物。かまきりの残酷。あぶら虫や青虫のように、人間の生活に害を与えるもの等々……。人間にとって彼等こそ全く脅威であり怖いのであるだけに、他のものよりも始末が悪く、それだけに私の漫画の種にはことかないのです。

奇クにも、かつて丸裸の美女の身体にやもりを這わせて苦しめるのがありましたが、昔から伝えられている蛇責め。蚊蚊に血を吸わせるために縛りつけられた犠牲者。丸裸の美女の肉体に蜜をぬりこんで、蟻がたかりついてそれをかむ苦しさを味あわせるもの。木に縛りつけられた紳士・婦人の丸裸のしりや太ももや腹に、まるで牛や馬にたかるようにして満腹するまで血を吸う蛇。等の絵は私の最も好むたぐいの図柄ですが、ここでは、あく

までも漫画らしく、虫自身が肥満体の人をさ
いなむものでなければならぬのです。

私は夏の炎天の下で、無数の蟻にかみつ
かれて転げ廻っている蟻の何十倍も大きく肥え
た芋虫を見たとき、持ち前の異常の血は昂奮
して、この絵の案を考えたのでした。ここ
ろと転げ廻って、必死に抵抗する肥った芋虫
は、蟻にかみつかれて、ズルズルと巣の方へ
とひきずってゆかれる。両手両足を縛られた
肥満体の婦人は、丁度その芋虫のように転が
されて、蟻の巣はもう間近かに迫っている。
それもう一息と、このまあ肥え太った柔らか
い肉づきのいい婦人を捕えた蟻達は喜び勇ん
で、暑さを忘れて引きずってゆく。

やがて巣の中へ連れこまれた彼女は、生き
たまま、いつまでも縛り上げられて、蟻を養
うにたる肉と血を少しづつかみきられ、吸わ
れても、又新しく芽生える肉は蟻達には実に
貴重な永遠の餌となるわけです。それでは、
この肥った婦人の餌はどうするのかという野
暮な質問は、なしにして貰いたいものです。
私は、暗い穴の中で見事に肥え太った丸縛の
肉体をかがめてうずくまり、無数の蟻に豊満
な肉をかまれて苦しみ悶える婦人の姿を想像
して、悦にいいればよいからなのです。

蟻ではないが、蜂の一種に、捕えて巣に運
び入れた虫を、動けぬようにしびれさせてお
いて、その肉に卵をうみつけ、幼虫は卵から
かえるとその虫を食って大きくなる、という
のがあるらしいのですが、これなどは私の夢
を、わくわくさせるのに十分で、私のこの絵
は蟻ではあるが、そういうことを目的として
この蟻達は肥え太った婦人を汗を流して運ぶ
のでもあるのです。婦人の肥え太った尻や下
腹部に産みつけられた卵からかえった幼虫が
モゾモゾと這い廻って、実にな上等な柔らかい
肥えた豊満な肉を餌にして成長するまで、彼
女は身動き出来ぬ肥った肉体をちぢめ苦痛と
悲嘆の涙にくれながら、その肉を虫のために
提供するその姿こそ、正に私に最高の嗜虐感
を与えてくれるのです。

その他には、これは一コマでは表現出来か
ねますが、蜘蛛の巣にひっかかった肥満体の
貴婦人というのがあり、八本足のいやらしい
毛だらけの大蜘蛛が、ねばりつく糸に自由を
奪われた貴婦人の廻りをグルグルと廻りなが
ら、一枚一枚その衣服をはぎとって丸裸にむ
き、手足を縛り上げて巣の奥にひきずり（袋
ぐもの一種である）こみ、獣慾ならぬ虫欲を
ほしいままに、貴婦人に対して向けるとい

動画風のもの。

漫画風で面白いと思うのは、蛙にとつつか
まった美女が丸裸にされて、空気をふきこま
れて便々たる太鼓腹になって水にういて（こ
れは羽村京子さん始め妊婦好みの絵と思う）
いる図。軍隊のリンチにもこれに類したのが
あったが、木を抱いて縛りつけられ、蟬に鞭
うたれながら肥った豊満な尻をゆすぶって、
カナカナとかミンミンとかツクツクボーシと
か、なくことを強制されている裸女の図。変
った処では、電気じかけの虫かごの中に入れ
られて、ピリピリと電流に責められながら、
（ハテ虫が電気責めを扱うものかと迷うが）
お尻にとりつけられた赤や青や黄、その他の
電球を、ともす裸の肥満美人を眺める蟻。蟻
地獄の、すりばちの中で砂まみれになって這
い上ろうと泣き叫ぶ裸女。蚤や虱や蚊や蠅、
南京虫、ダニ類が共同で血を吸うために、縛
り上げて飼っている肥満体の婦人。等々……
いずれ又、お目にかけるときもあることと思
っています。

4、獣

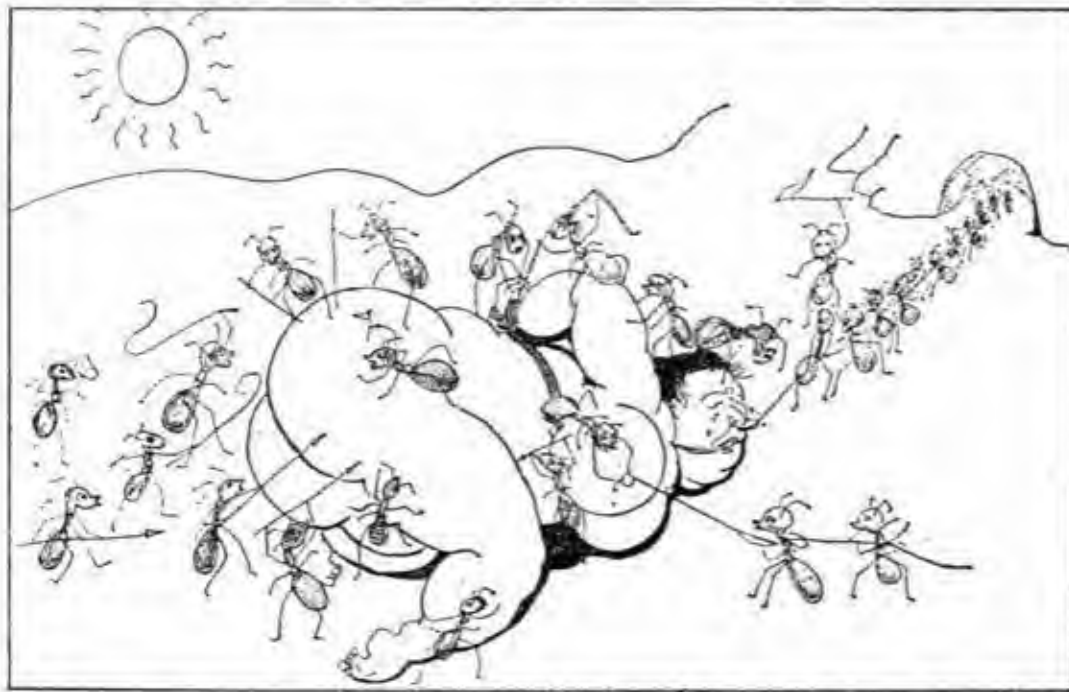
ペットとか家畜類が最も人間に近く、人間
に対しては全く隷従させられている動物だけ

に、主客顛倒の世界に於いては、一番はりきって人間の扱いを色々の形で考えられるのはいうまでもないでしょう。虫は、その五分の魂で、人間社会に対して堂々と、対等の闘いを挑むものが多いのに反して、獣というのははるかに身体が大きいのに卑屈であり、人間の姿を見ると恐れおののいて逃げ廻る弱さをもっているために、一旦、逆の立場になった場合の光景こそ、みものであるうと思われま

す。
私は、この獣の絵について、犬、猿、馬、鼠、豚の四種の内どれを選ぼうかと迷いました。牛に去勢をされている肥満紳士。両手両足を一緒にくくられて天井から吊されている肥満婦人。責め手は狸です。鍋島でおなじみの猫に弄ばれている丸裸の美女。全身に美しい刺青を施されて、死してその皮をはぎとられるために飼われている女。かごの中で車輪を廻させられている（これだけは私でも肥満体に固執しない）美女。モルモットの学校で研究用におりに入れられている婦人。鹿が猟銃をもって、林の中を逃げまどう女を追っかけ廻す図。二匹の熊が、丸太棒に両手両足を縛りつけた肥満体の裸女をかついでゆく図。狐のしかけた罠に両手両足をはさまれてもが

く半裸の女。山羊のために杭につながれた丸裸の、これこそ肥満体の年増女が、素晴らしき豊かな乳房をしばられている姿。動物園のおりの中へ、つがいのでいれられている丸裸の紳士と貴婦人。等々きりがなくいろいろです。

前述の五種について、もう少し詳しく説明しますと、馬については御存知競馬用、労働用、耕作用に、たくましく盛上った豊臀に鞭をあてられて調教されている図だが、坂道を重い荷を積んだ車を汗を垂らして引っ張る肥満美人の尻にさく烈する鞭。泥の中で、かすきを肉体にくくりつけられて、這い廻る肥え太った婦人の尻に容赦なく食い入る鞭。満場の観衆の熱狂する昂奮の中での栄光を目指して、激しい訓練をうける美女。しかし、この優秀なるサラブレ



ッドに相当する美人が肥満体ではどうかと、私にも思われるのですが……。唯一つ、私の飽くまで趣味に合わないのは、馬でも牛でもその他、人間より巨大なものが、人間に馬乗りになり乱暴する姿です。どういうものか、あまり気に入らない構図に思えて仕方ありません。

猿は狒々親爺といわれる如く、好色の対象として特に人間の牝を喜ぶのが当然で、大ボス猿が、両手を後に縛り上げた丸裸の肥満美人を自分の傍に据えて、配下の大小の猿に見せびらかしている図です。得意満面、喜びに益々顔や尻を真赤にさせた、いやらしいボス猿が、そびえる婦人の豊かな乳房などをいじりつつ自分の小ボス猿もそれにお追従して、美しい婦人の肉体のおすそわけを貰いたくてウズウズし、三下猿は美しい婦人の肌

みとれて、よだれを垂らしているという配置だけれど、これは猿公を沢山書くのが臆却となって失脚させたアイデアです。

豚……これは私も一寸、戸惑うのですが、よく子供の漫画に、動物達の世界に出てくる豚氏は必ずといっていい程、肉屋です。しかし、考えてみると、豚が自分の肉を売っているなんて言語道断であり、ふさわしくないと思うのですが、漫画の世界にそんなむづかしいことはいわないことにして、肉屋の豚氏の倉庫に他の肉の大きな塊が吊るされている中に、見事に肥え太った丸裸の婦人が逆さに吊られて、まじっているという図。これは、かつて奇クにも出ていたことがあり、まだ印象に残っているのですが、私の描くその裸女は絶対的に二十貫を超えるような肥満体の婦人でなければならぬのです。

漢和辞典に、肥豚（私はもう狂的なくらい肥という字を好むので、時々その肥のつく字を見て心を慰める）とは、肥った豚のこと。美肉をいう。とある位だから、ここは絶対、誰が何といおうと肥満体の婦人でないとおさまらないのです。

鼠……最後まで、犬と決定するまで書いては消し、消しては書いたのがこの鼠でした。

中々うまく書けないので、ついに犬に譲ったのですが、鼠が数ひき、巨大な鼠捕りのかごの中につめこんだ丸裸の肥った婦人を、クレインかなんかで吊り下げて、大きな水槽の中へつけたり出したりして苦しめている画でした。水の中へ漬けられて、窮屈なかごの中で手足を縛られた婦人は顔だけを水面に出し、わずかの空間に鼻をおしつけて苦悶し、水責めから逃れるべく懸命の努力をしているのが何とも浅間しく、人間の体裁も羞恥も忘れ果てて、苦しまぎれに肥った顔をゆがめ、身体をねじ向けて、鼻先を水の上に出すべく歯をむき出して苦しんでいるのを、かごの上ののった鼠が嘲り笑って、足でその鼻をけりつけているのです。

尚、鼠についてはこの他に、食物や水を目の前に置かれて、かごの中で空腹と渇きに苦しめられている裸体の人間や、私の知っている熔接工が、鉄板の上に鼠の足をくくりつけて、その鉄板を電気熔接棒でパチパチとやると鼠はとび上って苦しみ、丁度踊りを踊るようになると喜んでいたのを聞いたが、それを逆にやられて、丸裸で鉄板の上で裸踊りを死にも狂いで踊らされる肥った美女の姿などを思い浮かぶのです。

5、犬

犬と人間は古来から密接な関係にあるだけに、ここに展開される復讐も実に多彩なものになりました。その性格といい、種類といい、用途などの数々のエピソードが私の夢の中で生き生きとよみ返って、これだけで一つの物語となり得るのです。犬が、万物を支配する世界となったとき、哀れをとどめる人間の数々の姿の中の 하나가、この絵なのです。

犬が進化して人間に迫いつき、その勢いと権力が人間を凌駕して、地球上の一角を犬が占領に成功し、人間をこらしめ、訓練し、利用することを考えたとき、まず、人間の牡を追放してしまふのです。牡もある程度、必要を認めるが反抗心が強く、力も智慧もあるために直ぐ野性？にかえり、犬の生活を脅かす危険があるからで、思い切って牡を最少限に撲滅し、残った人間の牝を色々と利用することにしたのです。婦人と呼ばれる牝は美しい従順です。犬の世界に害を与えるような大それた野心をもつものも少数で、耐久力も強く、中には牡以上の体力のあるもの、プロレスや女相撲の雄の如き勇猛な婦人もあるが、大概、昔からの毒婦や悪婦にしても、所詮そ

の背後や、関係の深い男というのがあっての話。牡を遠ざけて馴らせば、これ以上、便利なものはない。牡のやることは大抵やれるし独特の器用さ便利さもあって、この世界に於いては牡の必要を認めないという結論に達したものです。種族の保存という点で、最小限の厳選された紳士のみを残しておくだけでよい。その紳士は好色という点だけが大切で、要するに智能が低く馬鹿力だけが強く、食うことと寝ることと女としか頭にないような紳士がいいのであって、中にチョッピリと、名門の血統書つきの天然記念物的の存在の子孫をつくるための、品位風格のある紳士を捕えておけばいいのです。牝は、これらの牡のタネを人工でない犬工授精？により、又は、はるばると鎖につないで牡のところへ連れて来てタネ付けをする。子を産ませた後は、犬のため忠実な家畜になるように育てながら仕込まれた、所謂、完全に家畜化した人間が出来上ってしまうのであって……そうなるまでの時代のことではなければ、私は面白くないのです。

図の肥満夫人もその一人、いや一匹です。名門の血統の中年の美貌を誇った彼女も、良人は種つけ用に残されたものの勿論ひき離さ

れて、元自分の飼っていた犬の下に払下げられて首環をはめられ、鎖でつながれる哀れな姿を浅間しく、羞恥と苦痛にさいなまれながら、飼われる身の上となったのです。

散歩に連れ出された肥満夫人の盛上った豊かな肉づきの尻に鞭をあてながら……まだ、十分に馴れていない夫人を調教するには、裸の尻に鞭を食わせる方法が用いられている……お犬さまは友達と逢って、そこは犬でも人間でも変らぬ長話。

「アラ、ブチ奥様、散歩ザアますの」

「ええ……これが（と肥満夫人の盛上った豊かな尻を鞭で軽く叩きながら）大分馴れたものザマスから。ホホホ、運動をさせているのザマスよ」

「ホホホ。いつみても、本当に見事な人間ザマスねえ。よう肥って、肌のつやといい（肥満夫人の柔らかい尻や下腹部を撫ぜながら）毛並みといい、こんな立派なものは、ここらにはいませんことよ。ホホホ」

「（自慢げに）ホホホ。何といっても、チャンと血統書がついているのザマスものね。この人間を払下げてもらうのに大分、当局に頼みこんだものザマスよ」

「ほんとに、この白豚さんも昔お邸で一緒だ

った貴女に、こうして飼われるなんて、しあわせでザマスよね。……ホホホ、気心も性格も、ようく分かっておりますものね」

「ホホホ。私も、あの時分からこの白豚さんのよう肥った身体に惚れ惚れとしてたものザマスからね。でもそれだけに、馴らすのが大変ザアしたのよ。いうことを聞かなくなっかねえ。昔のことをいつまでも忘れられないらしく、こうなっても私の命令がきけるものかというようなフトい態度でザアましてね。憎らしいので、調教師を雇って仕込みましたのよ。ホホホ。一寸、可哀想だったけど、おかげでこんなに温和しくなったものね」

「そうそう、そういえば、この前におたくへ伺ったときは大変ザアしましたね。この人間、顔も乳房もお尻まで真赤にして暴れていましたものねえ。ホホ、獣医のシロさんが足をひらかせるのに汗かいておりましたもの」

「そうザアすのよ。あの時は丁度、裸にむいて身体検査をする所だったんですもの。人間のクセして検査を嫌ってね。ホホホ、とうとう四つ足をひろげて縛りつけて貰いましたものね。だけど、調教師てのは矢張りうまいこと馴らすものでザマスわねえ。いろいろ責め道具を使って、いやという程、痛い目にあわ

しながら、仕込んでゆくんですってよ。もっとも、人間どもが以前、私達仲間にしたのと変らないらしいんザマすけど。ホホホ。このホラ大きな尻に、まだ鞭の跡が一ぱいついてるザマしよう。それに、蛇の道は蛇といふけど、人間の中で最低の雑種の醜業婦とかいう仕事をしていた中年の牝を助手に使ってんのザマすのよ。それが又、矢張り人間といふだけに弱味をよく知っていてね。責め所、泣き所を徹底的に責めて、ヒイヒイいわせてはいうことを諾かすように仕込むのですけれど頼んだ私もチョッピリ可哀想な位いザマしたわ」

『この後足のところに挟んでるこれは、なんなの』

『これも外出用装具の一つザマすのよね。ホラこうしてひっぱると、ね、尻をモグモグさせて痛がるでしょう。まだ十分、馴れていないから、こうして外へ出すと逃げ出そうとすることがありますのよ。そんな時に叱るかわりにぐいと引いてやると、飛び上る位痛いらしいけどすぐおとなしくなるんザマすの』
『マアいやだ。こんなところに仕掛がありますのねえー。ヘエー。そりゃ痛いし、人間でも恥かしいでしょうね、ホホホ』



『けれど、おかげでこの頃は、よくいうことをきくし、芸もするのよ。チンチンやお廻りおあずけなど、犬族なみにチャンと出来るようになってしましてよ。ホホホ、でも、そりゃ面白い恰好ザマすの』

『けど、ここまでになったら、本当に素直でいいですわねえ。元々上品ない育ちの血統だったらしいから、これからが本当にお楽し

みですよねえ』

『ホホホ。うんと仕込んで、いろいろな芸が出来るようになれば、皆さんにお見せしよう』と大はりきりザマすのよ。人間の芸って花電車とかいうのもあるそうで、仲々面白いそうザンスの』

『でも、こうして散歩に連れて出ても便利なものザマすね。自分のものはチャンと自分で始末出来るのですものね』

『ええ。家でも随分と重宝しているのザマすよ。何といっても元は高等な人間だったでしょう。何でも器用にさせることが出来るの。ホホ。散々に弄りものになったり、子供の玩具や乗物にしたり、お掃除をさせたり、洗濯をさせたり。そりゃ便利ザマすわ』

『ホホホ。ね、そういえば、あの角のシロ奥様なんか、ご自分の舌のかわりに人間の牝に身体中なめさせているっていう噂ですわ』
『まあそんな……。いやねえ（といいながらも、彼女も経験のあることとて満更でもない様子である）』

『けれど奥様。この前、ここでお会いしたとき、この白豚さん、ふんどしをまかせてあったでしょ。あれ、どうしてなの』

『ホホホ。あれね……。ホレ飼いたてで馴れて

なかったザマしよう。あまり恰好がつかないし、それでなくても恥かしがって中々這わないものザマすから、外へ出すときだけ、ふんどしを巻かせてやりましたの」

『ホホホ、それで。……でも、やはり生物はふんどしなんかつかないで丸裸の方が自然ですわねえ』

『裸にむいて飼っていけば、だんだんと私たちのように、見事に長い毛並みになるだろうって獣医さんも言ってましたわ。けど私は、身体中毛で覆われているより、こんなにスベスベした肌の方が、人間らしくていいと思うのザマスのよ』

『ほんとですわ。こんな肌を玉の肌というらしいわね。この大きなお腹なんか、ほんとに白くてきれいなこと』

『ふんどしといえば、初め頃ね。まだ野良の牡がウロウロしていて、これのにおいをかきつけて集ってきたものザマスのよ。夜なんか外へくさりでつないでおくと、そりゃあうるさいんですの。だから妾、鍵をかけるようにした、ふんどしを巻かせておきましたの。今は野良どもも退治されたし、人間の牡がウロウロすることもないので安心ザマすわ』

『そうですわね。役所の人も、牡を懸賞つき

で狩り集めたり、收容所を増やしたりしたので、見掛けなくなつて助かりましたわね』

『お隣のクロさんなんか、これと同じような肥った牡を飼ってましたけど、ある晩に鎖つきのまま、裏の林へ多勢の牡に連れてゆかれて、取り戻すのに大変だったそうで、ザマスのよ』

『そうそう。クロさん、いつてましたっけ。それからあの牡、砂で臭いどめをさせてるんですってよ。ホホホ、いやねえ。けど、痛がるし、後が大へんですってねえ』

『そりゃそうザマすわ。自分で掃除をするくらいいいけど、肥っているのは大きな腹が邪魔になるらしくってねえ。毎朝、大仕事らしザマスの、ホホホ』

『そうそう。ねえ奥様。ホラ、この白豚さんと友達だったとかの、人間時代のお花の先生とかいう牡があつたでしょ』

『ええ、あの高慢ちきな牡ね。私たちを嫌いだとかいって邪魔にするものだから、あの頃私、よく吼えついてやりましたのザマすわ』

『あれね、初めはどこかへ払下げられたんだけど、あまりいうことをきかないとかで、よそへ売られたのはいいんですが、又そこでも馴れないものですから、S町……ご存知？』

ホラ非常にガラの悪い処。あそこの市場に丸裸で縛りつけられて、せり市に出されたらしいんですのよ』

『マア、いい気味ザマすこと。ホホホ。あの高慢ちきな肥ったお師匠メス。さぞ、泣きべそをかいてたザマしようね。ホホホ』

『何でも、ホラ、S町には、いかがわしい裏町があるでしょ。あそこへ安く買われて……人間の牡がいろいろという男犬達の相手をやらされてるそうですの。いやねえ』

『マア。男ってゲテものを好くのザマすのねえ。人間の牡なんかと……。けど人間の牡っていじめる分には面白いから、物好きな方は結構いらっしゃるんでしょね。でも早くなんとかして、そのような獣類相手なんて悪習はやめてもらいたいものザマすわねえ……』

『その点、この白豚さんは幸福ねえ。昔馴染の奥様に飼われて……。これ、おとなしくいうことをきいて、いろいろ芸を教えてもらって、犬のためにならなければ、罰が当たるわよ（と夫人の白い柔らかな、豊満な臀部をつねる）』

『サア、それじゃあ帰って、餌でもやりましょか。これねえ、肥った大きな腹の割に食べないんザマすのよ。残飯に汁をかけてやって

▽賞金△

入選作品	一席	1篇	五万円	10篇
入選作品	二席	1篇	三万円	10篇
入選作品	三席	1篇	一万円	10篇
入選作品	四席	1篇	五千円	20篇

▽内 容 △

一、特異な風俗文獻誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェイッシュ一般、女性切腹、男性切腹、男女性、禪美、女相撲、女斗美、生首狂崇、変装、妊婦嗜好、見世物奇態珍聞、奇習珍奇風俗、風俗文獻紹介、他古今東西に亘る特異風俗に関する題材を広くとりあげて下さい。

一、題材を広くとりあげて下さい。

一、歡迎します。特に従前本誌にて余り扱って

い、ない分野の傑作をお待ちします。

▽規定△

一、形式は創作、小説、読物などのフィクションも結構です。し、又自らの体験による告白や手記、見聞記、実見談でも結構です。更に論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲など、如何なる形式でも最もお得意のものをを選び下さい。

いるんだけど、昔ゼいたくしたものだから、

の。だから、お腹をすかせて、一しきり責

めたり、芸を仕込んだりしながら、わざと汚い餌を口へねじこんで馴らしているところザマズの。そう毎度、毎度、肉や魚じゃ、たまりませんものねえ。私達の食べ残した残りも

のを処理して貰わなくちゃ。ホホホ……』

『口にサルグツワをはめているのは、やはり
喧しく泣いたりするからですか？』

『いえ、これは飼主のもので汚した布で猿がつわにしたら、早く馴れると教えてくれるお方があったもののザマすから。ホホホ』

「アア。なにかこの白豚さんお尻をモゾモゾ

片足を上げてするんでしょ」

『ええ、でもそれが、仲々うまく出来ないん
ザマすの。……ホホホ見ていると余計に出な
いらしくって……』

『ホホホ、奥様も骨の折れることですね。まあ、氣長くお仕込みなさいよ。今度その芸を見せて貰いに伺いますわ』

『ええ。是非どうぞ。そのときには奥さまの
においをかいただけで、この大きな白いおし
りを振ってお愛想をするようにしつけておき
ますわ』

というような調子……。まだまだとめどもなくこの幻想はつづき、おしゃべりもつきる処を知らないのですが、いつまでもつき合っ
てはいられないから、今回はこのぐらいで止めておきたいと思います。

文

芸

切

腹

史

— 烈

女

篇

—

中 康 弘 通

池波正太郎氏

烈女切腹

名作「錯乱」で直木賞を受けた池波正太郎氏は、人も知る長谷川伸門下の俊秀、新国劇のために幾多の脚本も書きおろしていることは周知の事実である。

その道のベテランだけに、小説の世界でもセリフの効果的で適確なこと、また小説のなかでの人間批判を、理屈でなく説明描写でうかびあがらせるテクニクの巧みさ、更には小説のプロットにおける起伏の配置など全く「安心して読める」といわれる作家群の一人であろう。

その意味で、川口松太郎氏を第一回受賞者とする直木賞の性格には全くピッタリの作家魂の持主と云える。

その池波氏が、めずらしく烈女ものを書いた。オール読物38年5月、珠玉短篇20人集所載の「烈女切腹」がそれである。

素材となったのは、恐らくは、すでに何人もの作家により伝記ないし小説化されて来た吉村れつのデフォルメであるけれども、実は吉村れつの挿話に材を得て池波氏が一つの時代批判を行なったものと見ていいであろう。

ストーリーは——（八内は原文のまま）

武州岩槻藩の江戸邸内、お長屋をりつは出



た。十五日前病死した父吉村嘉六の遺品の鎖かたびらを、純白の衣裳の下に着こみ、細目の帯に助直作一尺七寸の脇差をさし、襦袢うちかけをまとうていた。すぐ近くの側用人渡辺家の若党は、りつの訪問に目を見はった。

八化粧もしていないが、八かつて藩中一の美貌をうたわれた女、八二十三才になったいまも、その美しさはそこなわれてはいない。そのりつが襦袢姿で訪問をして来た、八からである。

渡辺茂太夫は、相役の嘉六を陰謀で君側か

らしりぞけていた。だからりつの訪問をいぶかしみ、へみずから玄関口へ出て、

「何用か？」

と、冷やかな声をかけた。りつが桶櫓をはねのけ、腰の脇差をぬきはなったのはこの瞬間である。

「おぼえたるか！」

軀と共に刀をぶつけていったりつの、すさまじい突進に、渡辺茂太夫は絶叫をあげて転倒した。▽

こうして茂太夫は刺殺され、その長男権之丞も、りつに組みつくところをふり放され、一刀で頭を割りつけられて果てた。すぐ捕えられたりつは、目附役の調べに対し、

「渡辺茂太夫を生かしおきましては、御家のためにならずと考え、女ながら出すぎたことをいたしました。この上は、殿さまにおおせあげ下されたく、その上でのお仕置をおまじいたしまする」▽

さらに悪びれるところはなかった。若い藩主阿部対馬守正重は、茂太夫でなくては夜も日もあけぬ、というような、ありさまゆえ、激怒した。

「憎いやつめ、女とは思わぬ。切腹させよ」と命じた。男にとっては名誉の切腹だが、

女にとってみれば、むしろ打首の方がよい。しかも無惨なことに、介錯なしの切腹をさせると命じた。

翌朝りつは本所の下屋敷に押しこめられ、お長屋に残された彼女の遺書が、目附役の手になた。それは茂太夫の汚職と専横、重税政策などを批判していた。しかも、心ある家臣は誰もが気づいていたことであつた。彼らは主君や茂太夫を恐れ、保身とあきらめから何もしなかった。それを、父親ゆずりの温和なりつが、斬奸の挙に出たのである。

国家老も江戸家老も動き出した。しかし茂太夫のむすめである愛妾お登代の方の希望もあり、五日後と、りつ切腹の日どりは定められた。

とうとうりつ切腹の前夜になった。国老のひとり勝田頼母が、本所の下屋敷へ面会に来た。

「あっぱれ忠義のふるまい」

彼が七十をこえた老眼をうるませたとき、りつはかすかに笑いをうかべた。その笑いを「何をいまさら……」と解して頼母は目をそむけ、

「何か願いごとはないか？」

ときいた。しばらく考えてからりつは、大

須賀七十郎に会わせてほしい、と云った。頼母は五年前のことを思い出した。そのとき嘉六はりつの婿養子縁組を願い出た。しかし吉村家の断絶を願っている茂太夫は、再三にぎりつぶした。一年後に七十郎は江戸留守居役瀬沼主計の養子となったが、これも茂太夫の策であつた。藩内では吉村父娘に同情し、茂太夫や大須賀・瀬沼両家を憎み嘲ける声はあつたが、何もかも表には出なかった。

まもなくりつは下総の佐倉家に仕える義叔父を頼って他行した。こんなことくらいは茂太夫もみとめた。一年後、戻って来たりつはふっくりした美貌にやささかのやつれを見せたが、まだ二十才であつた。三年経って嘉六が死んだのである。

りつの願いを瀬沼家では拒んだが、頼母に睨みつけられ、七十郎はいいや下屋敷へ足を運んだ。りつは格子の中から七十郎を見つめ、

「このたびのふるまい、何とごらんなされましたな？」

ときいた。

「あっぱれ忠義のふるまい……」

云いかけた七十郎の声を、りつは笑い消した。

△「女には忠義も何もございませぬ、女には夫と子があればよろしいのでございます」▽
りつは言葉を続けた。四年前、りつは叔母のもとに七十郎の子を生みに行ったのであった。

△「私が渡辺茂太夫を斬った理由は只一つ。あなたさまの妻になりあなたさまの子を生むことを理不尽にしりぞけられたからでございます。その恨みあればこそ茂太夫を殺しました。立派な御家来衆が、何百人もおられながら、八年にわたって茂太夫の悪業を放り捨てておかれるほど、男の方々の世界は生ぬるうございます」▽

りつの鋭い言葉に七十郎は蒼白になった。
「なれど……」

りつは身をのり出した。

△茂太夫よりも、あなたさまを憎んでおります。縁組を願ひ出たときには……すでに……すでに私とあなたさまは、心もからだも、むすび合わせておりました」▽

だから嘉六は七十郎を婿に願ひ出た。しかし茂太夫の命のままに七十郎は、さっさと瀬沼家へ養子に行った――

△「おうらみ申します。あなたさまを生かしておくは、ただ、生きてある我子の父親であ

るということによって……がまんをいたしたのでございます」▽

その子は、いまどこに？ という七十郎に冷笑を浴びせたのみで、りつは七十郎を追いつ返した。

いよいよりつ切腹の日、頼母は正重にりつの助命を乞い、正重が、

「ゆるさぬ？」

と怒鳴ったとたん、短刀を己が腹へ突き立てた。

これをきっかけに、忠義派の重臣らがりつの助命を迫り、りつの遺書がはじめて正重に示された。

江戸家老高山儀右衛門は、みずから馬で本所の下屋敷へりつの切腹をとめに走った。しかし下屋敷庭上に切腹の用意をしていたりつは、

△「いったん御仕置の命をうけた私を、いまさらお助けになるなどとは御名をまげることになりましょう。殿さまはじめ御重役方のおめがね違いのようにもきこえます。法と申すものは、そのようなものであつてはなりませうまい」▽

きびしい声で拒んだ。

茂太夫を刺したときは、七十郎との婚儀を

無理無体に妨げられた恨みひとつを、大刀先にこめていた。彼の悪業を遺書にしたのは、少しでも無駄に死にたくなかったからだ。

もしも七十郎と夫婦になったら、亡父の恨みをこらえ、夫と子への愛にひたり切つていたに違いない。しかし、茂太夫を殺したのちりつの心は違って来た。

△これは、まもられるべくしてまもられなかった女ひとりの、ささやかな幸福を、多くの男たちが見て見ぬふりをしたことへの怒りであった。自分が生みおとした子でさえ、いまはもうりつのものではなくなっている。▽
△澄みきった秋空の下で、りつは、白装束の腹をくつろげ、しずかに短刀をとった。

「あ！ 待て」

高山儀右衛門が叫ぶ間もなく、りつは力をこめて短刀を腹に突き刺し、きりきりと引きまわした。

見るも凄惨な光景となった。

声もないどよめきが、庭に立ちこめた。

りつは駆け寄った高山儀右衛門に言った。

「法には道義がふくまれてのうてはなりませぬ。人……人の道義あればこそ、人は法を、信ずるのでござります」

「待て！」

手をさしのべる、高山家老を左手で突きつけ、りつは短刀を喉に突き通し、血しぶきと共に伏し倒れた。V

池波正太郎氏

寛政女武道

「烈女切腹」で、いわゆる「ますらおぶり」を喪失した武士の腑甲斐なさと、捨身の女の勁烈さを描き出した池波氏は、烈女ものの系列として、今度は別冊小説新潮新秋特別号に「寛政女武道」を執筆した。

題名からも察せられるように、やはり女の「ますらおぶり」である。そして、何ゆえ女がそんなに勁つよくなれるか、を、この小説でも男の優柔さ、虫の好きさ、卑劣さを女の純粋な直情ぶりと対照的に描き出している。

まず例によって原文を引用しつつ、ストーリーから紹介して行こう。

晩夏の大川ばた、船宿つたやの二階、密会している一双の、男は旗本の次男坊松岡弥太郎、浅草元鳥越町にある剣術道場主牛堀九万之助が門弟である。女は道場の女中お久であった。帰り仕度を終わったとき、
「お久は、化粧の気もない少年のような面だ

ちへ、みちたりた微笑をうかべながら、松岡弥太郎へ、こういった。

「これきり……今日かぎりのことといたしましようね」V

ばかな、と否む弥太郎へ、お久は、身分の違いを申し立て、更には、五年前に夫を亡くしたことで、こうして弥太郎のさそいをうけたのも……と、男の肌恋しさに耐えられなくなった……とまでは云わなかったが、
「弥太郎さま……」

急に、きびしい眼の色となって近寄るや、
「男女が情事は、二人のみのこと。他言は無用にござります」

と、いったものである。

女の威厳がこもった声であった。

「むろん……むろんのことだ」

気圧されて、弥太郎は何度もうなづくV

しかし、お久が去った座敷へ、夕闇が濃くなったころ、坂口兵馬が来た。

二人とも二十五才で、同じ身分の若もの。

気楽で遊び好き、剣術は好きだから道場では神妙だが、かくれて「飲む、打つ、買う」の道楽もの。お久をどちらが先にものにするかを競うていたのである。兵馬が、
「今度はおれが……」

と云うと、弥太郎は一応とめた。お久は彼らより一つ上の二十六才であった。

数日後、兵馬は台所で働くお久に船宿の名を告げ、

「待っている」

と、返事も聞かずに去った。お久は弥太郎を探したが、弥太郎は道場へ来なかった。

三日目、夕暮が近く買物に出た帰途のお久は、寺の裏門で兵馬と行き会った。

「おれのさそいは受けられぬか」

兵馬が云ったときお久の顔色は変わった。

「松岡弥太郎さまが、そのようなことをあなたさまに申されましたのか？」

しかし兵馬は、来い、と云いすてて寺の境内へ入った。木立のなかで、待ちうける兵馬に、間隔をおきお久は、

「何用でござります」

「こ、来い、ここへ来い」

「なぜに？」

つけこむ隙がなかった。

「弥太めになぶられたくせに……」

兵馬の下劣な言葉に取り合わず、

「そのようなこと、だれが申しました？」

お久は毅然としていた。

いきなりとびかかった兵馬は、体をかわさ

れ泳ぐところを突きとばされた。立ち直ってお久を追うと、いつの間に拾ったか、お久の投げた石は適確に兵馬の鼻柱を打った。

屈辱に兵馬が震えたとき、お久はいつものように夕餉をととのえ、九万之助にすすめていた。

牛堀九万之助はこの寛政元年で五十二才であつた。めとらずに剣に没頭していた。食膳を終え、お久に

「何かお前の身に異変でもあつたか」

と問うた。

「味噌汁の味が、この二日ほど変っていたのでな」

と淡々と云うのだった。

「いえ、別に」

答えたものの、お久は愕然とした。

三年前彼女は、九万之助の俳友である書物問屋の主の世話で道場へ来た。九万之助は彼女を武家の出と見てとったが、彼女自身さえ意識していなかった女ざかりの情欲の眠りには、考えおよばなかった。

弥太郎との情事をなぜ兵馬が知ったのか、お久には解せない。男らしく引きしまった顔つき、すっきり細身だがたくましい筋骨、青葉の樹林を吹きぬけてくる風のようになまな

ましい体臭、そして、だれにも知れず会ってくれぬか、と低くまじめな口調でささやきかけてくる弥太郎を、彼女は、好ましく思い、床の中で彼の愛撫を思つて口中のかわいてくることもあつた。

彼女は、もと郡山藩士塚本左内のひとりむすめ久江。十七才の春には手裏剣の名手であつた。しかし、事情あつて脱落した父も、もう病死した。母は早く亡くなつていた。

九万之助を父のように思い、彼女は懸命に仕えた。しかし、たまたまあの日……道で行き遇つた弥太郎は、

「お久どの、抱いて……抱いて下さい」

と甘えた。ひたむきなささやきを、お久の耳へ投げかけて歩み去つた。その転瞬……彼女是我にもなく弥太郎の跡を追つたのだった……。

弥太郎が道場へ来なくなつて十日すぎた雨の日、九万之助は高弟山城一平を伴れ、出がい古に行つた。老僕も目黒村へ泊りがけで姫の病氣見舞に行つた。珍しく兵馬が門人に稽古をつけた。妙な笑ひを見せる兵馬へ、
「松岡さまは、いかがなされておいででございます」

お久は訊ねた。

「お久がお訊き申しあげたいことがございますゆえ、そのことをおつたえ下さいませ」と云つた。

その夜、ひとり留守居して、土砂降りの中を近づく何人かの足音に、お久は気づいた。

兵馬、弥太郎、その他五人の悪友、無頼の浪人などが、土足で道場にあがり込もうとした。

「何用でございます」

切りつけるようにお久は叫んだ。彼女は、
「お立ち去り下さりませ」

きめつけておいてから、松岡弥太郎に呼びかけた。ふてぶてしく弥太郎は近寄つた。

「私とのことを、他言なされましたな」

彼女は、なじつた。

「女ごの体をおなぶりになつたことを……」

自慢気に他人へおもらしなさいますが、江戸の武士のなさいますことか」

弥太郎は冷笑した。

「あのときは、声をからしてよろこび、まるで氣ちがいのような仕ぐさをしたくせに……」

お久が急に沈黙した。一同は我先にとお久になぶりかかろうとした。

△「……お久、いやだとはいわせぬ。裸になれ！」▽

兵馬がお久のいる部屋へふみ込んだとき、「ぎゃあッ」

すさまじい悲鳴をあげた。右の眼にふかぶか何かが突き立っていた。根岸流釘形手裏剣であった。

「おのれ、女め」

いっせいに踏み込んだのと入れ違いにお久は台所へとび出していた。小部屋から出ようとする一人一人へ手裏剣がとんだ。みな、眼鼻へ打ち込まれた。逃げる手負いを追わず、お久は道場の南側へ駆けた。

△その小さな戸口から逃げようとした松岡弥太郎が叫び声をあげた。

「お久、さん、……な、なにをする」

「松岡さま。あなたさまは男と女の条理をわきまえぬお人でござりましたな。たがいに肌をゆるし、しかも夫婦にはなれぬことがわかりきっている男と女の秘密を他人にいいふらすとは、もってのほかにござります」

「む……」

「あれほどに、他言無用と念を入れましたのに……」

「だまれ、うるさい！」▽

お久の手に手裏剣がないと見て弥太郎は威丈高になった。

△「退かぬと斬るぞ！」▽

の語尾が消えぬうちに、お久は男のふところにとび込み、脇差を引きぬきざま、

△「女の恥がどのようなものか、知ったがよい」▽

叫びざま、のしかかるようにして、ぐさとお久の腹へ突き入れた。倒れて苦悶する弥太郎へ、

△「もはや、これまで。御覚悟を……」▽

と、よびかけ、お久は持ち直した脇差でどめを刺した。

兵馬らはその内に逃げて坂口家へ帰った。兵馬の兄宗三郎は、その女成敗してくれる、と牛堀道場へかけつけた。

その前に、九万之助と一平が帰っていた。

△血痕もなまなましい板の間の傍の小部屋には灯がともり、香がたきこめられていた、ここに白布をもって面をおおわれた松岡弥太郎の遺体が横たわっていた。

その真向いに、お久……塚本久江が死んでいる。▽

九万之助がお久をあらためた。

△あらためて見ると、お久は、我が腹を懐剣

で一文字に浅く切りまわし、そうしておいて白布を巻き切口をかくし、衣服を着替え、正坐して頸動脈を切り断ち、息絶えたことがわかった。▽

「みごとな……」と九万之助が嘆じたとき、一平は遺書を見つけ出していた。

彼女は弥太郎との事情を記し、思いがけぬ乱入に道場を血で汚した罪をわびていた。そして過去を打ち明けていた。

藩政についての論議から父左門が同藩の士との果し合いに勝った。仇討に來た人々五名と闘ったとき、父の命に背いて彼女は手裏剣を投げ、父を助けた。やがて近江前原の郷士宅に父子とも世話になったが、その次男と彼女は夫婦になった。しかし夫も父も死に、牛堀道場へ移った。彼女が一眼を失わせた仇討ちの一人が、彼女を探していると知り、お久は素直に首打たれるつもりでいた。しかし思わぬ非命にあうことになった。

△「申せば浅はかな女のうらみ、怒りが原因でござりますが、なれどそれは女の心身にひそみかくれた真実でもござります。なにとぞ……なにとぞ、おゆるし下さいますよう、……海山のご恩報じもかないませず、かく不始末を仕出しました上、ひとり勝手に相果て

ましたること、申しわけもござりませぬ。申しわけもござりませぬ」V

雨がやんだ。弥太郎の父兄にも知らせねばと、九万之助が思ったとき、

「女はどこじゃ」

坂口宗三郎一行が乱入して来た。

お久の自裁を知り、死体をわたせと宗三郎は叫ぶ。九万之助に拒まれると、けしからぬと叫びた。

「けしからぬは、兵馬と弥太郎にござる。

兄である貴公と、師であるそれがしと、共に恥じねばならぬ。左様でござろうが……」V

いいさして口をつぐみ、わめき立てる宗三郎にかまわず九万之助は、お久と弥太郎に向かって経文を誦しはじめるのだった。

○

以上で、二つの作品についての紹介は充分と云えないまでも、一応、原作未読の方にもあらずじは解って頂けると思う。

まず前者から見よう。

八別だん武芸に長じていたわけでもなく、父親ゆずりの温和な性質であったりつVという規定は、ある意味で、この作品のモデル吉村れつとは異人物である。阿部家の奥に仕え、小太刀に堪能であった——、そうれつは伝承

されているのだから——。しかし、それでこそまた、いわゆるパターンの烈女に、生命感のなまなましく溢れている人間像を賦与することが、この作品では出来たのであろう。

無事であっても何かひとかどのことを仕出かしそうな、いわば武士道という「作られた観念」が生み出す一つの女性像。美しく優しいだけでなく、充分に理性的で、しかも文武両道に男まさりな女丈夫というものが、小説の世界でヒロインたり得るような、そういう心理の起伏に乏しい小説には、池波氏は無論あき足りないに違いないのである。小説を、ただの「筋道の読みもの」に終わらせず、と云って、いわゆる「是が文学だ」などという大上段な構えもまた、氏のとらないところではあるまいか。

りつは無事の人である。大須賀七十郎の妻になり、七十郎の子を産み育てることが出来さえすれば、父嘉六の不本意なお役ご免も、渡辺茂太夫の奸曲も、彼女にとって何ほどのこともない。彼女は幸せな武家の妻女として藩中一と云われた美貌をさえ誇ることなく、父親ゆずりの性質どおり温和な平穩な「女」の一生を歩き続けることが出来たし、また、そうあることを希望していたに違いない。

しかし、彼女の希望は理不尽に踏みじられた。己れの奸曲を知っている吉村嘉六の子孫が岩槻藩にあることを、渡辺茂太夫は好まなかったのである。

彼女の悲劇は、彼女の性格からは出なかった。彼女の環境、つまりは彼女の周辺の武士たちがもつ、安易で腑甲斐ない日常がもたらしたものであった。なんびともが茂太夫の奸曲を憎みながら、たれひとりとして彼に抵抗し、りつの幸福のために動くことは出来なかったし、動こうとしなかった。動いた父嘉六は余りにも無力であったし、身も心も許した七十郎は動く気を持たなかった。その無気力さが、妻にならずに母になったりつの悲劇を深いものにした。

りつは、むしろ父の死ぬ日を待っていた、とも云える。父が死んだとき、後顧の憂いなく刃傷に及ぶ。その捨身の刃は見ごとに目的を達した。もはや、彼女の人生は終わった。「女」の怨みの深さを、みずから勇気を以て確認しおおせたとき、彼女の人生は余生に転じた。刃傷は刑死で報いられること必至である。その日までの時日は、長短にかかわらずもはや彼女の残生にすぎなかった。

武士たちは、己れのなし得なかったことを

しとげたりつに感動した。彼らは、りつの勇気をたたえた。それは、彼女自身の意味する「女」としての勇氣ではなく、あくまで岩槻藩士の娘としての勇氣であった。そうした誤解は彼女の苦笑の種でしかなかった。

彼女は「最後の願い」を問われて、七十郎に会わせてもらう。そして彼に云う。

「本当はあなたを斬りたかった。しかし、わたしの子供の父親だからあなたを斬らない」と。彼女のそういう心の傷の深さと痛みとは、七十郎には到底、理解出来ない。その深い傷を身に負い続けて彼女が、突然、変異のように勁烈な女になっていたことを、七十郎は知らなかった。かつて肌を許し合った仲の七十郎でさえが知らなかった。

はじめて動いた重臣どもの言で助命と決まったとき、りつは切腹の座にいた。彼女はもう、しかし、生きる意志を持たなかった。恐らく、腹を切れというなら切って見せよう。

男に出来ることが女に出来ぬはずはない。女に出来ることが、よし男に出来なかつと……、そうした自負と自信とが彼女の心中にはあったであろう。最後に彼女は痛烈な皮肉を云い遺す。

法とは、誤った判断に基づくお仕置を、簡

単に取消せるようなものであってはならぬと。

法を作り權威を作り、そしてそのかげで、弱い女のさやかな幸せを踏みにじって、素知らぬ顔をする男への、烈しい怒りが云寄せた。その日の秋空さながら、りつの心境も、沈んだ怒りをたたえて測のように澄んでいたかも知れない。

彼女は、おろかな藩主が一旦は命じたとおり、腹を切りおおせる決心を、ますます固める。かつて子までなした己が腹を、彼女は諸人の前にくつろげる。そのとき彼女の腹は、怒れる女の勁烈さを示すための、一つの尺度を見せるためのものともなっている。その腹へ、りつは力一杯、短刀を突き刺し、きりきりと引き廻す。彼女の怒りの深さ大きさ直情さほど、彼女の腹もまた深く大きく、真一文字に口をひらいたのではなかったか。

居合せる武士たちの息を呑むなかで、家老ひとりには彼女の手を抑えようと、駆け寄ったのだったが、りつは、

「法には道義がなければならぬ、人の道義あってこそ、人は法を信ずるもの……」

と、道義に裏づけられてはじめて成立つ法治の意義を叫び、腹から抜きとった短刀をみ

ずから咽喉に突き通して絶命して行くのである。

泰平期の武士階級が内包する権力主義と脆弱さ無気力さ、そうした政治的貧困の作ったクレヴァスを警告しながら、りつはあえて切腹する。その切腹は、もと命令によつたものであるけれども、彼女が助命を拒んだ瞬間から彼女の意志に裏打ちされて行く。武家娘といえども女が腹を切るのは、非常のわざである。その非常さの合目的性をプロットの必然的展開によつてこの小説は証しているように思われる。

「烈女切腹」のりつが、烈女と云われながら本当は、烈女に転じた「無事の人」であったのとは対照的に、八白粉気のない少年のようなVという「寛政女武道」のお久は、無口でそつのない挙措に、武家娘の風を宿した女である。

彼女の場合、悲劇は素質的に彼女の内部にあった。隙を見せない女でありながら、死別した夫によって開花した「女」の余韻を忘れ切れない弱さを持っていた。

こうした設定は当然悲劇につながる他はない。

二人の蕩児が、一人は商売女に向かう時の野卑さで、一人は彼女の一つとは云え年長という条件につけ入る甘えで、彼女に迫る。そして逢魔がどき、文字どおり彼女はみずから眠らせていた魔性に逢う。

しかし彼女は、「これきり」ということ、「他言せぬ」ということ、この二つの契約を男に求める。それは、彼女がたとえ己が魔性に負けはしても、武家の娘として武士というものを信じていたからである。

それには彼女の環境のよすぎたのも一因かも知れない。亡父も、主人である道場主も、余りにも謹直な武士でありすぎた。それだけにまた、退魔的な末期的症状を見せかけている、旗本でご家人の次男坊たち、という救いがたい男たちを、知らなすぎたと云えるであろう。

兵馬に弥太郎との秘事をからかわれても、彼女はまた弥太郎を信じている。それはまた彼女自身の誇りを信じていることであつたかも知れない。

彼女の誇りとは、あくまで武士の娘であることだった。

父に代って仇討ちを受け、首を授けて悔いないというほど、彼女は武士の道を信じてい

た。そんなものが神話か伝説になろうとしてゐる、江戸という土地でも、彼女は、独り信じていた。そこに大きな性格の悲劇があつた。

彼女は決して「無事の人」たり得ない「情のもろさ」を勁烈な性格の裏に秘めていた。それは彼女の「アキレス腱」であつた。信じていた弥太郎が、ただの遊治郎にすぎなかつたことを知ったとき、彼女は、自分自身にも絶望したに違いない。

△松岡さま、あなたさまは男と女の条理をわきまえぬお人でござりましたな▽

そう叫んだとき、彼女の絶望と自憤は、すぐ自責、自罰に変容して行つたに違いない。「女の恥」と彼女は自分の秘事を自責する。

しかし本当は、愛なくして女を欺瞞し体を奪い、なかに云い触らす卑劣な行為こそ「男の恥」でなくて何であろう。腹を切るべきは弥太郎であつた。しかし破廉恥の輩に腹が切れるはずはない。破廉恥な行為を破廉恥と感ぜない彼は、もはや武士であること、男であることを放棄したと云つていいのだから、武士として、男らしく死ぬことは許されなかつた。

彼の腹は、みずからの手ではなく、お久の

手によって刺し貫かれねばならなかつた。

万事終わったとき、お久は塚本久江に戻り一切の過去を、亡父に次いで信頼していた道場主に書き遺す。

そして、たとえ「女の恥」を痛いほど思い知らせてくれた憎い男であっても、死者への礼として、安置した弥太郎の亡きがらを前に腹一文字にかき切り、女のたしなみに傷口を巻きしめて衣服を整えた上で、頸動脈を断つて自刃して行く。

その遺書にくり返し書くわび言と、浅はかな女のうらみ、怒りがもとは云え、それは女の真実でもある、という彼女の悲痛な遺言を、生涯妻女をめとらずとも、剣の道を行ききわめた道場主には、よく理解出来たに違いない。

軽薄な青年兵馬の、兄が乗り込んで来て彼女の遺体を要求したとき、「けしからぬ」という罵言に対して、「けしからぬは兵馬と弥太郎」と云い返した道場主の言葉は、一つの救いであろう。

こうした救いは、結局お久の場合には、唯一無二の真実のために生きて死んだ女の、「女」としての進退のあざやかさが、いわば「女」の道を行ききわめたものとして、九万

之助の胸を搏ったからであろう。

お久もりつも美しい女である。美しいということは女にとっては一つの資質であり、武器であり、女の幸福を保証するものでなければならぬ。それは、男が強く烈しく賢しくなければならぬと同じである。

そして強く烈しく賢しい男が常に力を象徴出来るのに美しい女は必ずしも幸せを得るとは限らなかったところに、美人薄命の語が生まれた。

それはまた、往昔の男が作った幾人かの不

幸な、美女への墓碑銘であったかも知れないし、多幸で長命な不美人の、美人へのそねみと勝利の言葉であったかも知れない。

とまれ、女が美しく、しかも女の真実に対して純粋な忠実さを示したとき、彼女は男よりも雄々しく勁烈でさえあった。そしてそれは、男が本当は最も身に備えねばならなかった、忠誠とか信義とか廉恥とかの観念を見失った社会において、愛という、女にとっての唯一無二、絶対の真実を、観念としても正しく守り抜くためにのみ発動された。

そうした純粋さがおのずから形成する心情

の美しさを、幻想でなく、なまなましい感覚で、時には色彩や芳香にもたぐえることの出来そうな鮮やかさで描き出したとき、池波氏のいわゆる「烈女」、いわゆる勇婦らしくはない「烈女」の、愛ゆえに烈女たり得る必然性が、読む者の胸にまるで一つ一つの映像化されたシーンの連鎖のように写し出されるのである。

男が義ゆえの勁さを失っても、女は愛ゆえの勁さを失わない。そうした女の「ますらおぶり」を、江戸初期と末期の二つの時点で捉えたこの作品系列は、おそらく素材ゆえに、一つの読みものとして見すごされる可能性がある。しかし見すごす人は見すごすがよい。心うたれてこの作品の前に立ちどまり、現代のいたずらな女上位時代、いわば痴女猛婦の下剋上の風潮と思いきくらべる人が一人でもあるとしたら、池波氏の制作意図は十分に達せられたと云ってよいのではなからうか。

(付記)

本稿につきましては、ご高作の解説と原文引用をご許容下さいました、池波正太郎氏のご厚意を深謝します。

☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム(筆名)を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しましては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供にしましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。



青春の陥穽

二匹の雄犬

芳野眉美

A

郊外の貸家を土地ごと売り払うので借家人を立ち退かせたそうだ。買手があるまで留守番をするのが勇のアルバイトだった。

郊外といっても県境に近く、私鉄の駅からかなり歩かなければならなかった。

廃墟のような、倒産した工場の長い塀がつきと、同じような二軒の古ぼけた平家が並んでいた。震災にも震災にもあわずに五十余年、生きながらえたという感じであった。

二軒の家の裏手は背の高さほどの雑草が茂った空地であり、前は一面に畠であった。

これでは夜が早すぎる。

二軒の家はそれぞれ小さな庭を持っていたが、庭の境は簡単なものであった。垣根というよりは、竹を適当に切って地面に突きさしたといった無造作なものであった。

前住人がおいていったらしい枯れた植木鉢のほかには、塵を焼いたらしい穴が、同じように二つの庭にあった。

古い家にありがちな狭い家にしては広い玄

関を開けると、四畳半と台所が並び、奥の部屋は八畳で、庭に面して縁側があった。

縁側のつきあたりが便所で、日本建築特有の、床の間と背中合わせに大便所があるというわけであった。

畳と障子は新しくしてあったが、雨滴れか鼠の小便が知らないが天井は染みだらけで、口を開いて寝られないという感じであった。

勇は二軒とも庭の雨戸を開け、外気をいれた。雨戸を開ければ、奥の部屋をさえぎるのは障子だけであり、その障子も中央に細長い

ガラスがはめてあり庭から丸見えであった。

手前の一軒に布団が丸められてあり、勇は布団のあるほうの家にあがりこんだ。二浪の勇は、気がむけばここから予備校に通い、かえれば駅前の食堂にめしを食いにいけばいいわけであった。

部屋の窓を開け、隣りの家を庭ごしに見ながら、こんなボロ家を買う奴がいるものだろうかと勇は思った。買手がつかなければ、勇のアルバイトはそれだけ長く続くわけであった。

家を買うというより、土地を買うわけであろう。誰が買おうと勇には関係のないことであつた。

勇は落着くと便所に入ったが、前任者の忘れ物がまだあったのに気がついて閉口した。水洗便所だと頭からきめていたのは勇のひとりよがり、汲取便所だったのである。

早めに夕めしを食いに、駅前の商店街に出たとき、家主に電話して汲取をたのんだ。気色が悪くて、予備校の便所を使おうと考えたが、生理現象はそれまで待ってはくれない。

あたりが暗くなると、まったく人通りが絶え、夜が長く受験勉強には適したが、あまり静かだと、かえって繁華街の喧噪がなつかし

くなるから不思議であつた。

買手がつかないだろうとタカを括っていたが、意外に早く一軒が売れて勇は失望した。あまり早く決まってしまうてはアルバイトにならない。

買手は個人タクシーの中年の男で、タクシーにつんだわずかばかりの身の回りの品を持ただけであつた。が、二、三日すると、各種電気製品がトラックで運び込まれ、まるで新婚家庭のような派手な夜具までがとどいて勇を驚かせた。

男は留守番の勇にも、ハイライト五個包みをもって挨拶に来た。三田ですという声は、ぼそぼそして聞きづらかつた。

個人営業だから気のむくままに出勤すればいいと思っていたが、三田が庭に置いてある車を発車させるのは、サラリーマンのように正確であつた。

一週間ばかりして、三田は若い女を車に乗せて帰宅した。単衣に半幅帯という軽い装いは水商売の女と見受けられた。厚い草履に細い小柄な体がのっていた。

午前一時を過ぎていたのは、女がつとめている店が終ってから一緒に来たからだろう。

翌日、二人は仲良く車で出掛けていった。

それが二人の新婚旅行だったらしいことは、帰ってから土産をもらって勇ははじめて知つたのである。

夫婦というよりは、父娘のようであつた。新婚家庭を覗くつもりはなかったが、窓から庭越しに、自然と奥の部屋まで見えてしまふのでは、見てはいけないというほうがおかしい。庭に面した縁側の雨戸を閉めない限り勇の眼には新婚家庭の内部が、いやおうなしに飛び込んでくる。

さぞ甲斐々々しい新妻振りを見せつけられると思つたが、勝手が違つて勇は戸惑つた。食事の仕度をするのも、家の掃除をするのも、洗濯までも男の三田が、それこそママメしくしているのである。

雨戸が半分開けられて三田家の朝が来る。台所に主人の姿が現われて朝食の仕度と、天気ならば電気洗濯器がまわる。

障子の四角いガラスの中に、しどけない新妻の寝姿がうつる。成人式を迎えたばかりの勇には少し刺激が強すぎる。

朝食は主人が一人ですべてしているらしい。台所の隣りの四畳半のほうだろう。庭に洗濯物を干すと、三田は車の掃除にかかる。日課は判でおしたように決まっている。

新妻は、主人が車で働きに出掛けても起きて来ない。たまに寝床から手を振るぐらいである。彼女はたいてい昼過ぎまで寝ている。起きると便所に走る。ゆかたのときもあれば長じゅばんのこともある。だて締めも腰紐もして、起きたときに寝巻を羽織ったという感じのだらしない姿が、勇に予備校に行く気をなくさせてしまう。

雨戸が全部開けられることもあるが、三田が半分開けたままになっていることもある。布団もそのまま一日中ごろごろして、週刊誌でも読んでいるのか、テレビでも見ているのか、まるで昼の無い生活であった。

それでも、風呂のあく時間になると、洗面用具をかかえた彼女の姿が見られる。隣りの家に留宅番の男がいるのを知っているせいか雨戸を閉めたり、玄関にカギをかけたりはしない。

駅の近所まで歩かないと風呂はない。風呂帰りに美容院に寄ってくることもあるらしいが、彼女の湯はとにかく長い。

三田の帰宅の時間はまちまちだが、あまり遅くならない。個人タクシーは時間が自由なだけ気が楽なのかもしれない。食べ物の仕入れは、都心のデパートや、下町の安いマーケ

ットから三田がしてくるものと思われる。

帰宅しても三田はいそがしい。たべちらかした台所や、布団もあげていない部屋を掃除したり、とりこむのを忘れたのかほっておいたのか知らないが、朝、干していった洗濯物までしまわなければならないこともある。

そしてまた夕食の仕度がはじまる。

だが、この時間が最も隣家のにぎやかなときである。晩酌が長々と続くのである。夫に見せるためだけに美容院に寄る効果が最大限に発揮される。昼の化粧をおとしたぼんやりした顔が、少し化粧が毒々しいとは思われるが、夜と夫を迎えて精彩を放ってくる。

やがて雨戸が閉められて、勇の視界から新婚家庭が消える。

B

雨戸が閉められると、勇は急に落着きがなくなる。雨戸に近寄りた誘惑が日に日に募って、いらいらしてくる。

それが爆発した。

勇は足音を忍ばせて、隣家の雨戸に近づいた。ゴム草履は足音を消すから都合がいい。雨戸の節穴をさがすのは、この古ぼけた家ではたやすいことだった。節穴からあかりが

もれている。

勇は、やもりのように雨戸に吸いついた。なまめかしい派手な夜具が眼についたが、晩酌の膳は、まだかたづけられてはいなかった。

その大きな膳に長じゅばんの彼女が裾を乱して腰掛けていたのである。ビールの空瓶がかなりあった。

三田は膳に腰掛けた新妻の前にすわり、彼女の膝に挟まれるような形であぐらをかいていた。彼女は夫の口に酒の肴を運び、ビールのコップを夫の口にあてがって飲ませたりしているのである。

小さな雨戸の節穴に眼が慣れるに従って、勇は三田が後手に腰紐のようなもので縛られているのに気がついた。縛られていては、自分から肴に箸をつけることも、ビールを飲むこともできないだろう。

長じゅばんの裾は腰までまくれあがり、白いももが露出されていた。

彼女は三田の髪をつかみ、三田の顔をのけぞらせてビールを浴びせたり、口にふくんだビールをぼとぼとしたらせたりして、かなり乱暴な飲ませかたをしていた。

肴にしても、くちやくちやに噛んだタコを

三田の口にペッと吐き出したり、イカを足の指にはさんで三田の口にあてがったりした。トロをふくよかなものに落として、喰べようとする三田の頭をぐいとかかえたり、押えついたりもした。

勇が雨戸にへばりついたのは、新婚の夫婦が真新しい夜具の上で繰りひろげる悩ましい夫婦生活を期待したからであった。

が、勇は、一度も想像したことすらない光景が、すぐ前で展開しているのを呆然として見守るだけであった。勇の眼は一点に吸いつけられ、わずかな仕草でも見逃がさない執念に全身がこわばっていた。

「どうだい、おいしいかい」

とか、

「今夜は、たっぷりいじめてやるよ」

などという女の声が、笑い声にまじって時折、聞こえてくる。そのたびに三田の口も動くのだが、ぼそぼそと答えていて、勇の耳にまでとどかなかった。

ビールをいちいちコップにつぐのが面倒になったのか、女はビール瓶を膝にはさみ、両手を膳について上体を支えると勢いよく両脚をあげてビール瓶を三田に突きだした。

長じゅばんが彼女の下半身からはがれて、

目映いような丸い尻が露出し、三田の口はビール瓶の口にタコのように吸いついていた。「疲れるから早くお飲み」

ビール瓶をこんな姿勢でおさえるのは、かなり力がいるらしく、彼女の両腕にも力が入っているのが遠くからでもわかった。

そういわれても、一息に飲むのはむづかし、手を縛られていては調整することもできず、ビールは三田の口からあふれて彼のゆかたを濡らしていた。

勇から見ていると、その奇妙な晩酌風景はアクロバットの曲飲みのように、そのくせ、異常に艶かしい風景で、知らず知らず勇も興奮していた。

突然、ビールが落ち畳を濡らしたが、彼女は別にあわてもせず、あげていた足を乱暴に三田の首にまたがる恰好になって降ろした。

あぐらをかいている三田が、両足首をくくられてはいるのに気づき、女に肩車をされて、三田はまるで海老責めにされたように背中が折れているのを見せつけられるにおよんで、勇の常識的な性的道徳が一瞬のうちに消し飛んでしまったのであった。

勇の知らないセックスの世界が、それも夫婦生活の中でおこなわれていたのである。

受験勉強の眼の疲れも忘れて、勇は片眼を酷使し続けた。勇の足がそこに根をはやしてしまったかのように動かないのであった。

三田の肩から再び膳に腰掛けようとした彼女は、わざとそうしたのか勇にはわからなかったが、刺身の皿の中に尻持ちをついてしまったのである。

「おお気持悪い」

中トロや赤ガイが女の尻にくつつき、つぶれてちりぢりになっていた。

彼女は長じゅばんの裾をからげて三田の前に立つと、くると三田に背中をむけ、押し潰された刺身で飾られた丸い尻を、夫の顔の前に突き出した。

「おたべ。齒をたてないように、綺麗にお舐め」

新妻は、夫に尻を舐めさせながら、くすぐったいのか腰をくねらせて笑い転がっていた。

ようやく布団の上で女は長じゅばんを脱いだ。彼女が長じゅばんの下に何も着ていなかった。すべすべの象牙色をした、何やらひんやりしているような女の裸身が勇を魅了した。可愛いふくよかそうな乳房も、くねくねとしなやかな肢体の中にも、よくパネが利いているようなむっちりとした腰のあたり、

華奢で繊細な二つの脚も、すべてが美しくすばらしく見えた。

あぐら縛りの上に後手に縛られた三田が、まるでいもむしのように体をくねらせて、妻に近づいてきた。その夫の顔に女の足の裏がのび、前進をこぼんだ。

「フフ、ほしいかい」

女の足の指が三田の鼻をつまみ、唇をつねり、くねった足の親指が、三田の口に乱暴に押し込まれた。

「タフだね、お前は」

げっと三田は蛙がつぶされたような声をあげ、女の足の先がすっぽりと三田の口の中に入ってしまったようであった。

「スケベオヤジは、あたいの足でも舐めていればいいんだよ」

すっ裸で布団に転がったまま女は、

「ああ、いい気分だわ」

とひとりごとをいうと、夫に足を舐めさせたまま、軽い寝息を立て始めていた。かなり酔っているようであった。

ガラス細工のような小さな妻の足を口にふくんだまま昼の仕事と新妻への変った奉仕に疲れ切ったのか、三田は縛られたまま畳に横に倒れた。

三田の口からあふれた唾液で、女の足が白く輝いているのが妙に印象的であった。

C

白昼、障子の中央のガラス越しに、三田夫人の寝乱れ姿を、軒下に干されていた薄い小さなパンティに、顔を埋めるようにして勇は覗いていた。彼女のパンティがこうして干されるのは珍しく、着物の多い夫人は下穿きをあまり穿くほうではないと思われた。

雨戸の節穴から、三田夫婦の夜の生活を覗いてしまった勇は、三田夫人の裸が見たくてどうにもならないほどのぼせていた。

窓から隣家を見るだけにしようと、心の中では誓うのだが、たった一枚の夫人のパンティに、その誓いはもろくもくずれてしまうのである。

なまかわきの洗濯した夫人のパンティからは、石けんの匂いしかなかったが、勇にはかすかに彼女の秘めやかな香りをかいだように思えるのであった。

そのまま盗んでしまおうと思ったが、それだけはやめにした。犯人があまりにも歴然としてるように思えたからであった。

若い勇の憧れは、ある一点に集中した。

見たい。近くで見たい。

夢にまで全裸の三田夫人があらわれて勇を苦しめた。

受験勉強どころではなかった。三度目の正直で、今度こそT大に入ろうと二年も浪人を続けているのだが、その苦労も水の泡のように消えてしまいそうであった。

彼女が来てから、勇はろくろく予備校にも行っていなかった。現在の勇の願いは勇が留守番をしている一軒の家が絶対売れないことであり、いつまでも三田夫人の側にいたいということであった。

しばらくぶりに汲み取りのじいさんがあらわれ、三田の家の汲み取り口を開けてひしゃくを中に入れたときであった。

起きたてらしく、寝巻のままの彼女が便所に入ったのである。

「ごめんなさいね」

という声がしたから、じいさんが汲み取り口にいることを知っていたらしかった。

その声が終らぬうちに、ひしゃくに女のしぶきが、したたかかった。

かかったのは、そればかりではなかった。

じいさんは汲み取り口にかがんだまま、彼女の用が終るのを待っているのである。

「わしがいくとね、わざと便所に入ってくる女がいる。どういうわけかねえ」

と、じいさんは勇に話しかけた。

「一種の露出癖だろうな。だからわしは、そういう女がいると、わざと覗いてやる。商売柄、少しぐらいしぶきがかかったって平気だからね」

じいさんの話は勇を刺激した。

勇は三田が営業に出掛けると、隣家の便所の汲み取り口をあけるといふ、思いきった手段に出たのである。

倒産した工場と畠、雑草が生い茂る空地に囲まれていては、真昼からこんな愚行にでたとしても発見される心配はなかった。

うしろめたい気持はあったが、慾望をおさえることは出来なかった。だが、便所の前にたたずむ勇は、異常な期待に身体が硬直するほど緊張していた。

三田夫人の前には、排泄物の不快な、不潔な観念は不思議なほど消えていた。

彼女が起きる頃、夏は庭の廊下の見えるところに、彼女が廊下にあられるのを待った。障子が開けられ、彼女が便所のほうに廊下を歩くと、勇はいそいで先まわりするのである。

便所の戸が開く。白い便器から下を見ればいつもは暗いのに明かるく、汲み取り口が開いているのに気がつくはずであったが、彼女は下で何が起ころうとしているのか、まったく無関心でさっさと用をすますのであった。見つかつてはまずいという意識が、遠くから見ることになる。それが慣れるに従って次第に大胆になり、ずうずうしくなる。

勇は、しぶきがかかるぐらい、汲み取り口に顔をだすようになった。一日中彼女のあとを追いついてはいるのである。慣れるのに時間はかからなかった。

夜であった。珍しく、まだ三田は帰宅していなかった。雨戸も閉められていず、寝ころんでテレビを見ている彼女が、勇の部屋の窓からでもわかった。

勇は庭にでた。そう思ったら、もうだめなのである。彼女のことしか考えられない。何も手がつかなくなる。彼女が起き上った。勇ははっとしたが、彼女は、台所に立っていった。水でも飲みに行ったのだろう。

また彼女が起き上った。夫の帰りが遅いのを気にしている風もない。テレビに笑い転げている。コマージュシャルになったのか、つと廊下の障子を開けた。

勇は隣家の便所の前に身体をこごめた。勇が便所の下の小窓を開けなかったのは、彼女に見られているように思えてならなかったからである。薄い板一枚が境であった。が、汲み取り口のほうは妙に自信を持っていた。

便所の灯がつき、戸が開いた。着物の三田夫人の白い素足が見えた。裾をからげる布ずれの音がし、中が暗くなった。

勇が汲み取り口に顔を入れるようにして上を見上げたときであった。急に中が明かるくなり、

「そんなに見たいのなら、もう少し顔をおだしよ。ひっかけてやるから」

中腰になった女が勇を見下ろしていた。知っていたのである。

あっと思う間もなく、勇は上からねらいうちにされ、顔を引くと同時に、うしろに勢いよくひっくり返った。

便所の上の窓が開けられ、三田夫人が勇を見下ろして笑っていた。

「早く顔を洗っていらっしゃい」

さけるひまがなく、ともに彼女の攻撃を浴びてしまったのである。

車の音が近づいた。

D

翌日、不貞寝をしている勇の枕もとに、三田夫人が、ひそと立って勇を驚かせた。窓も雨戸も開けたまま寝ているから、男くさくはない。

「おそばがたべたくなって、電話を試みたの。だけど一つじゃ出前をしてくれないから三つもたのんでしまったの。一緒にたべて下さらないかしら」

顔から布団をかぶってしまった勇にやさしくいった。恥ずかしくて顔を出せるものではない。

「さあ、早く起きて」

布団をはがれて勇は顔を両手でかかえ、背中を丸めて立とうとしなかった。

「ウブねえ」

いきなり背中から抱きしめられて勇は飛び上った。耳を噛まれたのだ。

「ごめんなさい。もう決してしませんから許して下さい」

「あら、そんなこといいのよ」

「でも……」

「うれしかったわ」

「えっ？」

三田夫人が意外なことをいった。

「だって、あんなきたないところに首を突っ込んでまで、葉子を見たいと思うなんてすばらしいわ」

変ないい方だが、三田夫人は勇をかばっているのに違いなかった。

「でも、あまり感心した方法じゃないわね」

「それをいわないで下さい。恥ずかしくて奥さんの顔が見られません」

「そんなことより、早くしないと、せっかくのおそばがのびてしまうわ」

隣家にあがって勇は二度驚いた。昨夜の晩酌のあとがまだそのまま、布団も敷きっぱなしで、汚れほうだいに汚れていたからである。枕もとに丸められた紙が生々しい。

「昨夜は覗かなかったわね」

「それも御存知だったのですか」

「気配でわかったわ」

敏感なのである。視線が合うこともある。

小さな節穴も馬鹿にはならない。

「ごめんなさい。もう二度としませんから。ぼく、家に帰ります。これ以上のごめいわくはかけません」

勇はすっかりしょげて、小さくなった。

「だめよ、おうちに帰ったりしちゃ」

「でも……」

「でも……どうしたの」

葉子は、勇をまないたにのせてじわじわと料理をしているようであった。

「奥さんが……」

「葉子がどうかしたの」

「……好きだから」

「好きだからあんなことをしたというのでしょう。わかっていたわ、はじめから。勇さんでしたわね。勇さんが葉子を好きなこと」

「奥さん」

「葉子のいうことならなんでもきく？」

「ききます。奥さん」

「それじゃ、家に帰るなんていわないで。留守番のアルバイトを続けてちょうだい」

勇はうなずいた。こうなれば勇はまだまだ子供であった。

「命令するわ」

おそばのはしをおいて葉子はいった。

「とにかく部屋の掃除をしてちょうだい。うちのスケベエおやじときたら、今日はいささかグロッキーで、サウナにいったから仕事をするそうよ。掃除は帰ってからですって」

奥さんはしないのですかといおうとして勇はあわてて口をつぐんだ。その点ではこれ以

上だらしのない女はいないだろう。

「布団はいいわよ、あげなくても。使うから

……勇さんと」

くすつと勇を見て笑った。

勇が掃除にとりかかろうとすると、

「ちょっと待って」

と三田夫人は、おしとどめた。

「ほかに何か」

「そうじゃないの。ただ掃除をしてもらうのもつまらないから、たいくつしのぎに遊びながらあとかたづけをしてもらうわ」

「遊びながら」

「そうよ。裸になってちょうだい」

「えっ」

「裸になるのよ。早く」

「でも……」

「命令よ。命令に従えないのなら、便所を覗いたことも、寝室を覗いたことも、駅前の派出所に電話してしまうわよ」

勇は深い嘆息をついた。すべてが三田葉子の毘のような気がしたから不思議だった。

葉子の手がのび、ズボンのベルトがさっと抜き取られた。

「あっ、自分が脱ぎます」

「もたもたしていると、この革のベルトで打

つわよ」

革ベルトがひゅうと空を切り、勇は足をしたたかなぐられて悲鳴をあげた。

丸裸にされた勇は、小さな前掛けをあたえられただけで、掃除にとりかかった。

食器を洗っていると、葉子は手の平で裸の尻を打ったり、包丁の先でちくちくとつついたりした。

「可愛いお尻ね、たべてしまいたいくらい」
部屋に電気掃除器をかける勇に、葉子は汚れたパンティを顔からかぶせた。

「いい匂いでしょう。うちのスケベおやじが洗濯するのを楽しみにしているから、少し汚しすぎたけど」

不意に三田が帰宅したら、勇を見てどう思うだろう。

思い出したように道を人が通るとき、勇はあわてて物陰にかくれ、葉子に笑われた。

「見られたっていいじゃない。見せておやりなさいよ」

玄関から、便所の掃除までやらされて、勇はくるくると珍妙な恰好で動きまわった。

「庭にごみを焼いた穴があるでしょう」
布団に寝そべったまま三田夫人はいった。

「あの穴をもう少し深くほってほしいのよ」

「この恰好じゃ庭にでられません」

「誰も通らないじゃない」

「たまに通りますよ」

「いいことがあるわ」

葉子は箆笥の引き出しを開けて、ゴムバンドを投げてよこした。

「それならサポーターに見えるわ」
何かの跡がこびりついていたが、前掛けよりましであった。

「顔のパンティはたべておしまい」

「えっ？」

と勇はききかえした。

「たべるって？」

「口の中に詰め込んでおしまい」

勇はもぐもぐ口を動かしながら、三田夫人の汚れたパンティをほうばった。

「穴をほったら口からだしてもいいわ」

勇は黙々と穴を掘り始めた。声をだそうにも、パンティがすぐ口からはみでてあわてて押し込む始末であった。

勇に穴を掘らせながら、葉子は着物の裾をはだけて、妙な態度で見詰めていた。

これで、一号二号と二匹の雄犬ができた
葉子にはやにやした。中年の男との生活だけではすぐ退屈してしまう。夜と昼、葉子に奉

仕する雄犬は必要であった。中年男は金をもうけてもらわなければならない。そうそう夜の生活に耽溺するわけにはいかない。

若い男は、奉仕ぶりは未熟だが、飼育する楽しみがあった。中年男と違って、肌もみずみずしく張りがある。若い男だけでは物足りないから、二人持ってちょうどいいと思う。

穴を掘っているうちに夜になった。

「ちょっと、その穴の中に入って坐ってごらんよ」

と葉子が勇にいった。

「ああ、もうパンティを口からだしてもいいわよ」

変な顔をして、おそろおそろ穴に勇が坐ると、首だけが上に出た。

「ちようどいいわね」

荒縄をもった葉子が庭におり、穴の中の勇を立てて後ろ手に縛った。

「お坐り」

穴に勇を坐らせたまま、葉子は土を埋め始めたのである。

「どうするんですか」

勇が悲鳴に近い叫び声をあげた。

「試験をするのよ。お前が本当に葉子の命令をきくかどうか」

「大丈夫でしょうか」

「軽く埋めるだけだから、心配はないわよ」

「早く下さい」

「ええいいわよ。葉子に絶対服従とわかれればすぐ出してあげるわ」

葉子は勇を首だけだして生き埋めにする

と人間植物だね」

と勇の顔を草履で踏んづけた。

古代には主人が死ぬと、その墓のまわりに召使いを生き埋めにして殉死させる風習があったらしい。それが埴輪の起源だというのはフィクションらしいが、これほど残酷な絶対服従を強いるものはない。

「どれ、植物に肥料でもあげようか」

笑いながら葉子は勇の前に立った。

「お前の好きなものを、たっぷりひっかけてあげるよ。気の済むだけお飲み」

「好きなもの？」

おうむ返しに勇は訊いた。

「汲み取り口から顔を突っ込むよりいいでしょう」

「飲みたいわけで見たいのじゃありません」

「見たかったのでしょう、葉子を」

着物の裾をからげた。

「そうなんだろう？ ええ」

勇の眼の前が暗くなった。鼻や口をふさがれて、勇は荒い息を吐いた。

どうしたことか、今夜はいつまでたっても三田は帰宅しなかった。

「もうがまんができないわ」

と葉子がつぶやいた。と同時に、勇の頭に雨が降り始め、それが急に勢いを増して、たたきつけられた。

三田夫人が立ち上って、植物を見降ろして微笑した。

晴天なのに、しとど濡れた痴呆のような顔が、綺麗な星空を見上げていた。

葉子がきつとした顔をして耳をすました。車が近づく音がしたのである。

「主人だわ」

怒ったような顔であった。

「今夜は帰らないはずなのに」

「出して下さい、早く」

勇は土の中でもがいた。

「間に合わないわよ」

勇の顔色が変わった。

—(了)—

カット・春川ナミオ

— 告 — 白 —

「濡れる・洩れる」

の記

並田新二

(カットも)



ぼくは二十八才の独身のサラリーマン。
子供のころ夜尿症がつづいていたせいか、
大人になった今も尚、洩らして濡れることに
とても執着をもっています。そこで、ぼくの
プレイについて少し紹介してみたいと思いま
す。

一、オシッコが洩れる

生暖かいオシッコが、ついに洩れて尻から
腰へ。あるいは太腿から足の方へと伝ってく
る感触をぼくは好むのです。

(1) オムツカバーの中で……ぼくはニシキゴム
のアメ色の大人用のカバー、白のビニール張
りのカバー、黒の綿ゴムズロース、黒の産褥
バンド、そのほか二枚ほど持っています。ふ
つうは、古くなったメリヤスやネルのズロー
ス、ブルマーをはめて、上からオムツカバー
を当てますが、浣腸をとまなうときには、汚
れても仕末しやすいように紙オシメを用いま
す。腰のまわりが丸々とふくれ上るほど完全
にオシメをはめて、念のため女学生の黒か紺

のブルマーを穿き、その上からズボンを穿い
て街に出て電車の停留所に立ったまま、ある
いは晩画館や喫茶店の椅子の上で、少しずつ
洩らします。デパートの満員のエレベーター
の中や、ショッピングをして女店員と話しし
ながら洩らすこともあります。とくに、はじ
め腰に力をいれてチョロチョロと洩れはじめ
るときがすばらしく思われ、もうそのときの
ぼくは、ぼんやりして変な表情をしているに
ちがいありません。でも完全にオムツを当て
ているときは大胆です。さらに力をゆるめると、
生暖かいものが走るのがわかります。思
いきってもっとゆるめると、音でもきこえそ
うな感じがして、みるまに腰のまわりが濡れ
てきます。これまでの経験で、大体これくら
い当てておくと絶対に外に洩れないという見
当がついているので、安心して人々の中で、
たとえば女の人が電車の坐席に坐っている前
などで洩らすこともあるのです。同じように
充分、当てがっておき、ホテルのベッドの上
で思いきり、しかぶってしまうのもプレイの
一つです。

あとでグッシヨリ濡れたズロース類を、わ
ざと洗濯しないで、そのまま干してかわかし
ますと、何ともいえない芳香をはなちます。
その中に顔をうめたり、頭からすっぽりかぶ
ったりして遊ぶこともあります。もう幾度と
なく濡らしたり乾かししたりして色が変わった

メリヤスのズロースが幾枚もありますが、いつかこんな匂いの強い布でサルグツワをされてみたいと思っています。

(2)わざとオムツを当てないで……思いきり洩らしても絶対、大丈夫というのは安心してプレイができますが、一方スリルが乏しいような気がすることもあります。

先日ビヤホールで、大ジョッキを二杯も飲んで友達と別れたあと、アパートへ帰りながら、こみあげてくる尿意を我慢して、そして暗い通りの人影のないところで、チョロチョロと洩らして遊びました。

ズボンの中ではじめはパンティ(ぼくは、いつも婦人用の黒や色物のパンティを穿いています)を濡らしていたのが、次第に勢いを増して、ズボン下から太腿を伝って足へと流れてくるのが、ぼくには何ともいえないのです。代りのズボンを用意しているときは、ズボンに通るくらい派手にやらかします。とくに冬など、ももひきを穿いているときなど、立ったまま、しかぶるのは、いいものです。通りがかりの人が振り向いて、グシヨグシヨのズボンに気づきはしないかと、ヒヤヒヤするものもスリルがあるものです。

そんなとき、もし女の人から「まあ、この人、どうしたのかしら? まあまあ、ズボンまでビシヨビシヨに濡らして! 赤ん坊みたいだわ!」

などと、からかってもらえたら……と望んでいるのですが、残念ながらそんな機会はありません。せいぜい、帰ってから鏡の前で濡れたズボンを眺めたり、一枚ずつ脱ぎながら独りで「まあ、まあ、じゅくじゅくじゅくじゅく」と、つぶやくことしかできません。どんなか、ぼくの粗相の罰に、このぶざまな恰好のままで思いきりいじめて下さることを夢んでいます。

ときには着物を着て、下にはパンティとステテコを穿いて、公園に夜、散歩に行くこともあります。近くのタバコ屋まで出かけることもあります。そして歩いたり立ちどまりたりしながらチョロチョロ洩らします。穿いているつっかけ下駄がビシヨリ濡れて、歩いた跡に、ずっとオシッコの跡がつづくのを眺めるのも好きなプレイです。それほどひどく濡らさないで、会社でトイレに行ったときなど排尿の終わったあと、すぐにパンティにしまいいこみ、そのあとの最後の数滴がこぼれるのを味わうことは、しばしばです。そっとしらべてみると、意外に広く濡れているのに驚くこともあります。

花模様やレースの飾りのついたような、きれいなパンティや純白のズロースを穿いて、姿見の鏡の前で眺めながら、しかぶるものも、たのしいプレイです。あまり早く濡れないように、下にネルのズロースかメンスバンドな

どを一枚、穿いておくこともあります。足を小刻みにふるわせながら、がまんしてしまいたが、やがて、はじめは点からはじまって、みるみる大きく濡れて光って拡がってくる液体! そして裾口のレースの間からゴムのフリルの間からポタポタと少しずつがしたたり、糸をひいて溢れたり……そして最後にはすっかりぐちよぐちよに汚れて、みにくい姿になってしまいうパンティ。

黒や網のタイツやストッキングをつけ、またガーター、コルセットを着け、シユミーズからスカートまでつけて、このプレイをたのしむこともあります。

盛装した婦人が、こみあげてくる尿意に、ついにたえきれず「ああ、もうだめ! 洩れるわ!」と青くなりながら、恥かしい音とともに、みるみる足もとまで一面の洪水に汚れてしまいうシーンを、ぼくは鏡の中に見ることができなのです。

ときには運動服に紺のブルマーという、かわいい女学生が、不良少年に両手両足を縛られて床の上にころがされている……。女学生は身もだえしながらがまんしていて、ついにこらえきれなくなつて、恥かしげにチョロチョロとブルマーの中で洩らしはじめて、いつのまにか腰全体をぐしょぐしょに汚してしまっているシーンも見ることができます。

二、ウンチが洩れる

浣腸遊びがこの頃、若い人たちの間に流行しているようですが、ティーンエイジャーの女の子なんかが友達二、三人とこの浣腸遊びをして、二本、三本とイチジク浣腸をうってがまんしあっているうちに、とうとうこらえられなくなってトイレに走って行く途中で、パンティの中でどっと粗相してしまう、というようなシーンを空想して楽しんでいます。ぼくは仕方がないので、一人で浣腸遊びやウンチプレイを楽しみます。

(1) オムツカバーを当てて……

グリセリン浣腸をして、たっぷりとオシメをはめて、その中でチョロチョロ洩らしたりどっと思いきり汚したりして遊ぶやり方は、さきのオシッコの場合と大差ないのですが、生暖かいものがくすぐるように伝わってくる感じを楽しんでいるわけです。力を抜いて思いきり洩らしてしまうと、急にズシリと重くなってくる。そして、特有のものがゴムカバーの中で肌をくすぐる感触というものは、プレイを理解できる人でなくてはわからないことでしょう。ぼくにとっては天国です。

しかしこのプレイも、臭いのために外ではやりにくいという欠点があります。いつか映画館の中で、浣腸をしてオムツカバーをはめて、椅子の上で、洩らしたことがありました。が、そばの人が明らかに、気づいたように思われて、あわててトイレに走ったことがあり

ます。後仕末も、外のトイレの中では大変です。

そこで、ぼくが工夫したのは人工便です。二、三回、浣腸して、よく腸を洗ったあと、コンニャクを細かく切って便の大きさにしたもの、ソーセージ、棒チーズ、バナナなどを代用にするのです。ある程度、使いますと、ずっしりとした重みが出来ます。そうしておいて浣腸したり、ときにはしないままでオムツを穿いてプレイをします。これとオシッコを組み合わせることもあります。

生ゴムのカバーの中で、布をあてないままでウンチを洩らして、ベッドの上で何時間もあそぶこともあります。

(2) オムツなしに……浣腸をしてから真白いパンティやズロースを穿いて、そのまま洩らすのを見るのも好きです。いつかは風呂場でやはり浣腸をして薄いナイロンのパンティのまま倒立ちをして、洩らしたことがありました。が、これも味がありません。

人工便の代りにピンク色の水（食物につかうエキス）や、黄色の水、ときには牛乳を洗腸器で腸一杯、注入することもあります。これも白いズロースやシュミーズのままで吊るされたり、縛られたりしながら汚れてくるのを想像して、たのしんでいるのです。

ぼくの空想の一つですが、どこかの病院で婦人科の診察台のような、両足を開ける式の

椅子台に寝かされてみたいのです。白い服装の看護婦さんたちが笑ってみている前で、ついにこらえきれなくなって、どっと放出してしまう。黒いレザールの台の上から床の上まで一面に、とびちらしてしまつたら……。

それとも病院で浣腸されて、ベッドの中で看護婦さんに「もう少しよ。もう少しがまんして！」と命令されながら、その間に、わざと力を抜いてベッドの上で洩らしてしまった、それとも「もう少しがまんするのよ」といわれて、がまんし「さあ、トイレにいった方がいいわ」と許可がでたとき、ぼくはベッドを下りてパンティを穿きながら、ついに立ったまま洩らしてしまう。看護婦さんの困ったような目。「だめじゃないの、汚して！」その罰に、そのつぎからは浣腸のあとで、わざと大きな声で「さあ、赤ん坊ちゃん、おしめしましょうね。洩らしていいようにカバーをはめましょうね」と、からかわれる。

浣腸をされて、がまんできなくてひとりで洩れてくる感じのほかに、ぼくは、ふつうの便のまま洩らすプレイにも味わいを覚えます。二日ぐらいトイレをがまんしてこらえておき、夜、アパートの近くの広場のかげやベントの上で、ズボンの中に洩らすのですが、手ごたえのあるのもぼくにとってたのしみの一つになりました。

緊 縛 モ デ ル の 素 顔



狂 乱 の 一 夜

— 関谷富佐子さんを責める —

塚 本 鉄 三

暑い、とにかく暑い。天神祭から月末にかけては一年中で一番暑い時だと諦めてはいたが、八月に入っても、この暑さは中々おさまらない。温度が高いだけなら、まだいいのだが、日本特有の高湿度が伴っているので体温の発散が意のままにならない。体温が昇ってくる、いろいろなしてくる。

こうなると我が家の唯一の冷房装置である裏庭の井戸の水をかぶるより仕方がない。しかし、この井戸も垣根一つ隔てた隣の奥さんが西瓜や麦茶を冷やしにくるので、うっかり素裸になって水をかぶるわけにもいかない。

もっとも八月は我が仕事にとって最も閑な時だから、自分にその気がなければ学校並みに夏休みとしゃれこんでおっても、誰からも文句は出ない。朝寝は最大限に延長して陽が高くなってから起き出して冷たい井戸水で顔を洗う。日中はぶらぶら、ごろごろ。もう身体中のゼンマイがもどけきってしまった、物の役にも立ちそうにない。

こんな時、編集長から電話があった。久方ぶりのお呼びである。何の用かと訊いたが、とにかく来いという。暇をもて余していた時だったので迎えの車に乗ってしまった。

「君に名指しで関谷さんから手紙が来ているんだ。暑い最中でご苦労さんだが、一つ出勤してくれんかね」

そう編集長から言われて、私はとまどってしまった。懐しく忘れ難い関谷富佐子さん、と言いたところだが、実のところ私には既に忘却の彼方に去ってしまった彼女への記憶だった。

確かに何年前か前、私は青春の情熱をこめて彼女の緊縛写真を撮ったことがある。そして記事にしたこともあった。しかし、どうしたことか、彼女は突然、ほんとうに忽然として

私の前から姿を消してしまったのだ。それで不本意ながら私の彼女に関する記事も尻切れトンボのまま中絶してしまったのである。

それが、今、急に手紙で、私に責めてほしいというのである。私は手渡された彼女からの手紙をあわてて開いてみた。

『………本当は貴男様に誰にも知られない場所へ二、三日閉じ込められて、あの事以外は何も考えられない様にして、色々の責めを受けたら、どんなにすばらしいかと一人空想して居ります。そんな時は身体が硬くなり、こわい様な気持で吊り下げてほしい………』

『………吊り下げられた私の身体のところきらず鞭うって、そして頭の中が空っぽになる様にしてほしいと想って居ります』

『………貴男様にお預けした私の身体は、もう貴方様の気のすむままに責め抜いて下さいまして結構でございます。それがM女性としての私の最高のよろこびでございます』

そんな文句が美しい文字で、私の目の中にチカチカと閃光を放ちながら飛び込んでくるのだった。

「それで、いつなんだ」

私はどもるようにして、そう問い返えしていた。八月中はいつでもよいが、時間は午後

八時以降でないといけないことなので結局六日にしてもらった。待ち合せの場所は名神高速道路の尼崎インターチェンジの下り線料金所を出て、左折したところで待ってくれということであった。

軽い夕食をとった私は編集部で借りた車を走らせて阪神高速道路へ入った。ようやく陽の落ちた街のネオンが右に左に美しい彩りを見せている。豊中で名神に入ると尼崎までは五分とはかからない。ランプウェイを下るとすぐ料金所である。百円を払って左折したところに車を停める。あたりは真暗で交通量も殆どないが、それでも追突されては困るので尾灯だけをつけておく。

さすがに夜風が涼しい。左右の窓を開け放っているので、ガード下を通り抜けてきた風が快く頬を撫でてゆく。ラジオのスイッチを入れようとして手を伸したとき右側へすうっとクリーム色の車が来て止まった。「お待ちになりましたか？」左側の窓を開けて白い顔がのぞいた。スリープレス

の豊かな二の腕が目の前にある。冷房していたのか、ひんやりとした冷気がかすかな香水のかおりを混えて漂ってくる。

「いや、今来たところですよ」

「大変御無沙汰しまして。もう何年になりましたかしら」

彼女は懐かしげに語りかけてくる。あの頃と少しも変らぬ若さである。私はこの辺りの地理に精しくないので彼女に案内してもらうことにする。巧みなハンドル捌きで彼女の車は右折した。私はそのあとをついていった。夜中でもあり、どこをどう走っているのか、方角さえ私にはわからない。

時折り賑やかな通りや車の頻繁に走る道路





を横切ったりしたが、二十分ばかりでモーターに着いた。附近は住宅街なので通る人もない淋しさである。赤や青のネオンがそのあたりだけケバケバしい彩りを見せている。

ブロック塀に囲まれた駐車場へ彼女の車を入れ、脇の入口から部屋へ入った。私の車は舗装された路上に停めておいた。入口で鍵を貰うと、あとはもうすべてセルフサービスである。部屋の中へは案内人が入ってくることもない。まだ建って間がないらしく壁や調度品が、ま新しいのが気持がよい。汗が一度に、ひいてしまうくらい冷房がよく効いている。今風呂へ入ってきたばかりだという彼女に私が撮影の準備をする間の閑つぶしに風呂へ

入って貰う。しかし準備といてもストロボ二発を連動して使うだけなのでコードの配線も至って簡単である。一灯をカメラに装着し一灯を側面から照らすように配置する。

彼女は、逆さ吊りのムチ打ちを希望しているようだが、今夜は場所も許さないし、それに体重のある彼女を私一人では吊るのは無理である。午後八時以降であつたら、いつでも身体があいているというので、逆さ吊りは次の機会にやることにして、今夜のところは臀部を中心としたムチ打ちのポーズに対して強烈なムチ打ちを試みようと思っていた。

それともう一つ、私が秘かにやりたいと思っていて、今まで出来なかったテープレコーダーによる録音である。ムチの音、悲鳴、呻き声、そして哀願の言葉など、私一人が聞いていて、なんとも勿体ないようなハーモニーなのだが、それをそのまま空に消してしまうのは如何にも惜しいので、なんとかテープに残しておきたいと思っていたのである。

そのため、テープレコーダーを皮のケースに入れてスイッチを入れさえすれば、すぐ録音できるようにして持参したのであった。録音していることがわかったら、演技に走ってもいけないし殊更控え目になってもいけないと考え本体はテレビの陰へかくしておいた。

簡単に化粧直しをした関谷さんは、ブラジャーと白いパンティだけの清楚な姿であられた。風呂上りの湿った肌からは、ふくよかな女臭が漂っている。何年ぶりの緊縛であるうか。私は彼女の両腕を背後にねじ上げてロープで縛り上げた。

『貴男様に縛り上げられた以上は、もう貴男の思い通りに、どのように扱われようとも、私に異存はございません。その取扱ひようがひどければひどい程、私は嬉しいのでございます。どうか貴男様の思いのままに私をいじめぬいて下さいませ』

彼女からの便りの一節は私の頭の中に電光板のように鮮かに浮かんだ。

上品な物腰、鄭重な言葉、そして何よりも教養のありそうな落着いた態度が私に粗野な言動を慎ませていた。彼女と面と向かって話していると、自分もかしこまって改まった言葉つきになってくるのを、どうしようもなか

った。甘い関西弁が関谷さんの口から出てくると、ロマンチックなムードがかもしだしてきて、どうも荒々しい行動に出るのが、ためらわれるのであった。

彼女のやわらかい両の手首を縄で締め上げながら、私は彼女からの手紙の文句を反芻して嗜虐の心をかりたてていた。

私は縛った両手首をぐいぐいと持ち上げたが彼女は爪先立って耐えるだけで「痛い」という言葉も出さない。胸に二まわり、ブラジャーの紐が浮きあがってしまうくらい、きつく縄を回わして締める。縄尻を竹にくくって爪先立つように引き揚げる。ムチ打ちのポーズとしては序の口であるが、二枚、三枚とシャッターを切ってから臀部目がけて、一打、二打、三打とムチ打ちを加える。軽いウォーミングアップのつもりだが、関谷さんの全身は、その度にピクピクと痙攣する。

顔をのけぞらし爪先立って全身を弓なりに反らして痙攣するさまを眺めていると、俄然私の気持もハッスルしてきた。荒々しくパンティをずり下げると豊かな臀部をむき出しに



晒しておいて、力まかせに皮ムチで叩く。白い肌に一筋、二筋、三筋と赤いムチ痕がついて、やがて、それが一面に広がる。

「ム、ム、ム」

苦悶の呻き声が、噛みしめた口から洩れて弓なりに反った全身が、かすかに震える。私はムチを投げ捨てるとカメラを構える。悦虐の表情が、ストロボの閃光の毎に確実に捉えられてゆく。ムチ打つ度に女体は狂ったように向きを変えて前面を晒し殊更カメラに入ろうとする。十二枚のフィルムは忽ちにして終

りを告げていた。

フィルムの入れ替えは恰好の休憩時間である。プレイオンリーであつたら、このあたりから愈々佳境に入るところであるが、写真撮影が本位となれば中絶もやむを得ない。

縄を解くと、彼女はぐったりと私の両腕の中に倒れ込んできた。冷房がよく効いているのに肌は汗ばんでいる。隣室へ運んで一先ず休憩である。す早くフィルムを入れ替えてからストロボの位置を変える。

今度は彼女は自分でブラジャーもパンティもはずして全裸の上に浴衣を羽織って出てくる。その浴衣をぱっとめくって、す早く両手首を背後で括る。こういう時、素裸のままでもかくさず悠々と出てくる女性も多いが、やはり嗜虐者から脱がされるという余韻を残しておく方が含みがあつてよい。しかし関谷さんの場合は、そんな演技よりも真実恥かしいのだろう。純正Mを自称している彼女であっても異性の前に全裸を晒すのは、やはり心底から羞かしいのに違いない。そしてそれが又異性の手によって無理矢理剥がされることに快い被虐心のうずきを味わっているのに違いない。前はきれいに剃毛されている。ふつくと肉づきのよい白い肌のふくらみは、か

ぶりつきたい程、全く魅力的である。

目の前の白いふくらみの美しさもさることながら、玉の肌に剃毛されてゆく過程に、想像を逞しゅうすると、あくことのない興味が次々と湧いてくる。比較的濃かった叢を、このようにスベスベとした青坊主に変えるには相当の手間がかかる筈だが……そんな妄想をふり払うかのように、私は二本のムチを交互に素振りしてみた。一本はデパートの犬用品売場で求めた鋼線入りのムチでセパードなんかを訓練するときに用いるものだそう。もう一本は、この犬ムチの鋼線を抜いて皮の部分を安全剃刀の刃で細く裂いたもので、これは女体鞭撻には最も適した小道具となっている。細く裂かれた皮は女体の脂を含んで適度に湿りを帯びて軟らかくなっているので打ち心地も決して悪くない。

愈々今回は本格的なムチ打ちを敢行することになった。両足を開かせて棧に括りつけムチ打ちの痛さでカメラの視野から逃げ出すことを防ぐ。両手首を揃えて縛った縄尻は手首が下へ下ってきては臀部に対する打擲の邪魔になるので肩越しに上へ吊り上げておく。

豊かな臀部がまるだしである。先刻のムチ痕は一面に赤く肌が染まっているだけである

が掌を当ててみるとほのかに熱を帯びている。

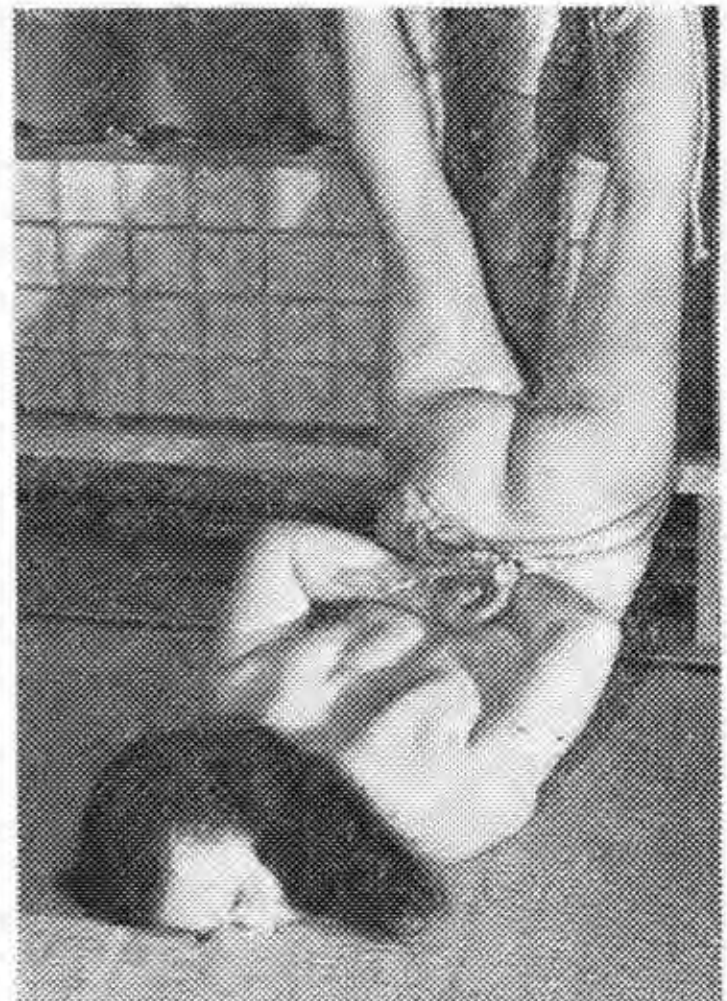
膨らみの頂点めがけて力いっぱいムチを振りおろす。ピシッという快い打音。ピクッと女体がびくつく。ピシッ、ピシッ、続けさまに臀部を打つ。向こうをむいているので顔の表情はわからないが、押し殺したような呻きが、ふり乱した髪の後方にかすかに洩れてくる。括られた両足をにじりつつ、悦虐に身を

よじらしている姿態のあまりの美しさに、思わずムチを捨ててカメラのファインダーをのぞいてしまう私だった。

カメラを手にする時間の空白が彼女にとっては、まことにもどかしいのであろう。ましてやフィルムの入替えは、全身でムチを待っている切ないまでの気持がひしひしとよくわかる。それで一先ずカメラを置いてムチ打ちに専念することにきめる。

臀部のミミズ脹れが一入激しくなったところでムチの矛先を転じて太股から内股へかけて殴りつける。

「ヒィー」という吐息と共に「許して!」と

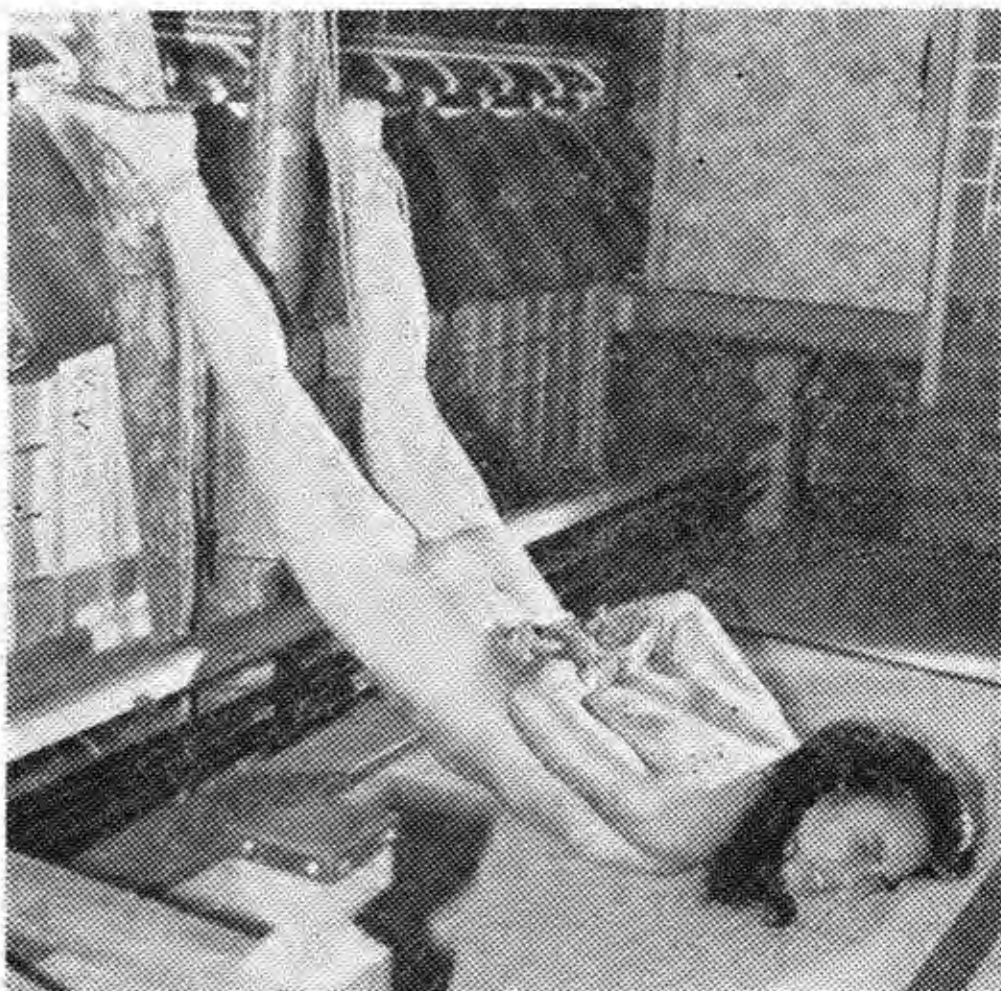


いう彼女の哀願の声が洩れてくる。ピシッ、ピシッという肌に当るムチの音。

私は落着いてテープレコーダーのスイッチを入れた。マイクは彼女の身体から五十糎ばかりのところ吊しておいた。

臀部にムチを当てていた時は、お尻をつきだし胸をそらしていたのが、太股の前や内股にムチが当てられるに至って、自由になる上半身が大きく揺らいできた。両足は左右に振って足首を棧に括られているので股に炸烈するムチは避けることは出来ない。内股の肌がピクピクと痙攣している。

上半身がぐらぐらと揺れて顔面が下になっ



て二つ折れになる。苦痛にゆがむ表情が、はつきり掴みとれるポーズで、再びムチを捨ててカメラを構える。どうもプレイには徹しきれない。力いっぱいムチを当てておいて恍惚の表情が魅惑的に出たところで、アップでシャッターを切る。ストロボだから、きつとよい表情がキャッチされたことだろう。

フィルムの切れたところでムチ打ちに専念

する。ムチの音、哀願の声、吐息、呻き声、すすり泣きなどをマイクに捉えさせるために一時カメラの方は、忘れることにする。

ムチの雨は臀部から内股、そして下腹部へ移行するにつれて悲鳴は益々激しくなり、やがてそれは、かすかなすすり泣きに交っていった。それらの音声は細大もろさず刻々とテープレコーダーに録音されてゆく。

耳で甘美なすすり泣きと悲鳴を聞きながらくの字に裸身をくねらせる優美な肢体を眺めていると、思わずムチを握る手にも力が入って、これでもか、これ

でもかと連打をとろきらわず浴びせる。

どの位の時間が経っただろうか。一打ちごとに、びくっびくっとうるさうした女体の動きが次第に鈍くなって、やがてはたと止まってしまった。

私は夢からさめたように、テープレコーダーのスイッチを切った。白い肌には全身に亘ってドス赤いミミズ脹れが走っている。

両足首に喰い込んである縄を解くと、くずれるように倒れて、うずくまってしまった。汗ばんだ胸が大きく喘いでいる。

後手首の縄を解こうかと尋ねたが、彼女は「そのままにしておいて——」

といって、うっとり目をとじる。

私は浴衣を掛けてやって、フィルムの入れ替えを行う。これで十二枚撮りで二本撮ったことになる。しかし今度は新しくテープに録音したので写真の方が少ないのは仕方ないだろう。引続いてテープの録音を主体にして、その中で絶妙のポーズや表情が出たところだけシャッターを切ることにしてカメラを定位に据えつける。私は右手に皮ムチを、左手にエヤーリリースを握り、テープのスイッチは足で踏むように準備する。

後手首を背後で縛られたままの関谷さんは畳の上に長々とのびている。私は浴衣をはがして尻目がけて一打を加える。両手首は揃えて括ってあるが、両足は自由である。

膝頭、脇腹、脛、足の裏とムチはところかまわずピシッ、ピシッと打ってゆく。一きわ悲鳴が高くなって絹を裂くような響をも伝えてくる。テープレコーダーのスイッチが入ってリールがゆっくり回転をはじめた。

脇腹や胸、下腹部にムチ先が集中しだすと今まで転っていた女体が起き上って、うつむきになろうとする。無意識に体の前面をムチから守ろうとするのか。私はカメラの視野から被写体が逸脱するのを防ぐため、後手首を縛った縄尻を棧の端に固定した。しかし、その範囲内での彼女の動きは自由である。

臀が露出すれば臀を打ち、腹が露出すれば腹を打つ。そして足の裏が目に入ったら、続けさまに足の裏を打つ。しかし彼女は激しく動くので同じ場所ばかりを打つことはない。

息もつかせない連打に、さすがの彼女も転々と裸身をもだえさせて

「許して——、勘忍して——」

と悲鳴を挙げた。それらはすべてテープに入っていく。尚も許さじとムチは執拗に女体を求めて揮われる。

投げだした足を縮め、肩口、二の腕を打たれて前のめりに倒れ込む。臀部にムチがくるので仰向けに倒れると乳房の頂点に痛烈な返礼が叩き込まれる。腹部を襲うムチを避けようと膝を曲げれば、太股や脛、足の甲に連打を浴びる。休むひまもない激しいムチ責め。悲鳴やムチ音は確実にテープが録音しているし、カメラはその時々の変態の変化を狙っ



てストロボの閃光を放っている。

ムチ打つ者も打たれる者も汗みどろのひととき。激情の一瞬が過ぎると、陶酔と恍惚の境が訪れる。これで第三本目の撮影は完了である。これだけ連続してムチを揮うと腕が全くだるくなってしまう。最初のうちは肌にはねかえる快い手ごたえがたまらなかったが、しまいには、右手を左手に替えて打たないことには力が入らなくなってしまう。

ここで小休止をさせてもらう。十二時頃まではよいとのことなのだが、出来たら十一時頃には終わりたいと思って強行軍してきたのだが、疲れが一度に出てきたので彼女をそのま

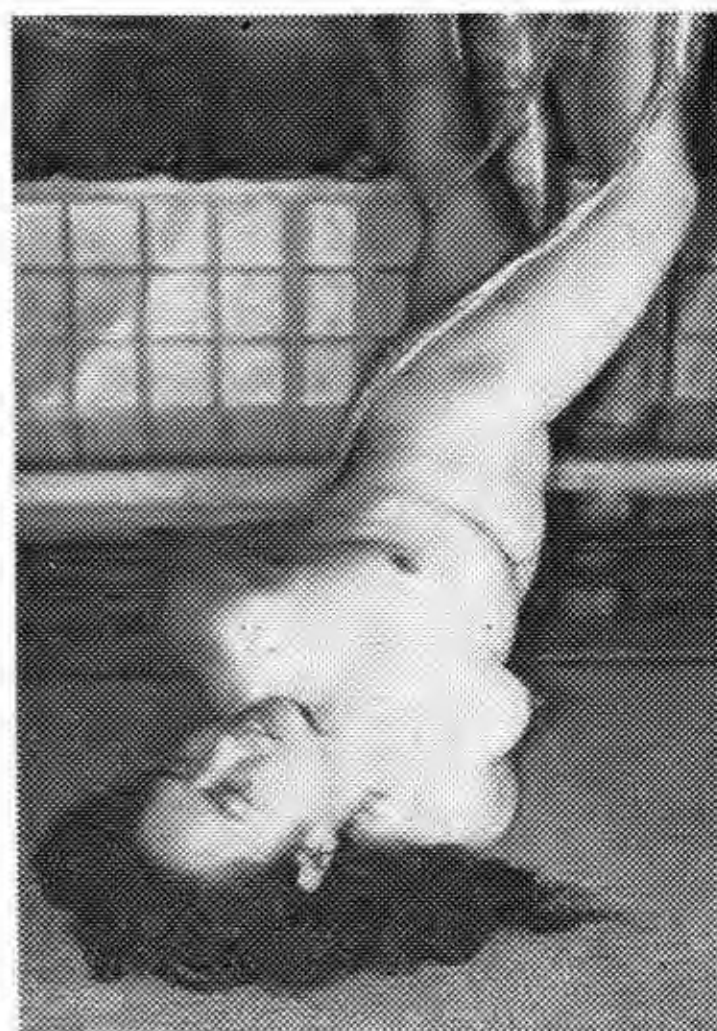
ま畳の上に横にさせたまま、私は風呂へ入った。黒いタイルに緑色を帯びた水がなみなみと溢れている。生ぬるい湯に浸っていると今までの疲れが一度にふっ飛んでしまった。

あとフィルム一本、足を挙げたポーズを撮って今夜の撮影は終わろうと考える。

両足首を別々に縄で括って、左右二本の竹に固定する。先ず最初は両足を開いたままのうつ伏せのポーズである。これは高く盛り上った臀部が恰好の打撃目標になる。すでに尻は真赤に腫れ上って痛々しい。

マイクを彼女の口の近くに置いておいて力まかせのムチ打ちを尻に加える。マイクが近いので吐息や呻き声も細大洩らさず録音されることだろう。膝頭の裏にムチを当てると、相当こたえたのだろう、高い悲鳴と共に身体を捻って仰向けになってしまった。開いた右と左の足が交叉するようになりながら、肩口で体重を支えている女体に更にムチを浴びせる。もうこうなったら情容赦もないムチ責め一本槍である。

悲鳴と哀願。そして、弓なりに反りかえる裸身が電光に映えたと、私のムチを持つ手は一層ハッスルするのだ。



両足が完全に交叉して女体は仰向いた。仰向いたからといってムチの洗礼から逃れることが出来ないのはうつ伏せになっていたときと変りがない。いや背面よりも更に一層ムチによる加虐はひどい。脇腹や下腹、内股などは臀部と違って耐え難い痛さであろう。

顔面だけは避けて皮ムチは女体のあらゆる個所を狙ってゆく。

四本目のフィルムは忽ちのうちに写し終えていた。しかし私はもうフィルムを入れ替える心の余裕は持っていなかった。むんむんする熱気の中で只夢中になってムチを揮っていた。右に転げ左に転げ、女体は転々として捻

じれていた。それはむしろムチを避けるというよりも、自分の好みの個所へムチを当ててもらいたいたために、そうしていると思えない身のこなし方であった。

もうカメラを操作する考えもなかった。テープレコーダーのスイッチを入れることも念頭になく、狂ったように身をよじる女体に只ムチを振り下ろすことに専念していた。

いつまで、このムチの下で耐えていることが出来るだろうか。そういう実験を試みたいという野心がふつふつと湧いてくる。

やはりムチに対する反応は初めの方が大きい。同じ個所を打ち続けていると反応は次第に鈍くなってくる。それが打つ個所を変えろと、再び反応が大きくなるのだ。身体をごろごろ転がすということは自然と打つ個所を変えることになるのだ。

やがて――。

縛られた両の足首にぐうっと力が入って全身が弓なりになった。後頭部が畳への支えとなって反り返えている。愈々彼女の最高潮

が訪れたようだ。私はその恍惚の姿態と陶醉の表情をうっとり眺めながらムチ打つ手も忘れてしまっていた。いな、この甘美な境地をムチの音で破ってしまうのを恐れていたのかもしれない。

突っ張った両足の拇指には力がこもって、反りかえっていた。

それから、どのくらいの時間が経ったであろうか。腕時計は十一時半を指している。

一晩中でも責め抜いてほしいと願っている彼女に僅か三時間余りの責めは物足りないかもしれない。しかし、興奮の連続に推移していた私の方は、ぐったりと疲れきっていた。

夜は更けていた。

真夏とはいえ、外には人通りもなかった。

二台の車のエンジンの音だけが、あたりの静寂を破っている。

つい先刻の狂態は嘘のような淑やかな彼女である。私は何か夢でも見ている気持で別れの挨拶を交していた。しかし、ムチの下で喘ぎもだえた白い女体のイメージは、いつまでも消えない。

闇の中に彼女の白い車体が消えてゆくのを見送りながら、私はアクセルを踏みしめていった。



白 樺 夫 人

フ
ァ
ン
タ
ジ
ー

保 藤 久 人

1

沢井が言ったとおりであった。

「白樺夫人」の家へ行く脇の小道は、容易に車は通れそうもない、相当の勾配を持つ坂になっていた。

（なるほど、これは、ちと不便だ！）

坂下の道でタクシーをとめて、敬介は、にらみつけるようにその坂道を仰いだ。

巧みに地盤を造成し、ずらっと家の建てこんだこのあたりは、古くからの高級住宅地だと聞いている。しかし、それにしては家並みも道路も、お粗末である。坂の小道は、わずかな距離だが、一気に登ると息が乱れた。

（いっそのこと、石段にすればよいのに）

敬介は、不服そうに舌打ちをする。車の運転も仕事のうちだと言われているので、やはり、附近の道筋が気になるのである。

敬介がたずねる「白樺夫人」の家は、その坂道を越えたところにあった。見たところそれほど大きな邸ではないが、高い石垣をめぐらせ、古風な表門がある。

その重厚ないかめしさに威圧され、敬介の胸の中に、ふと微妙なおのきが走った。しばらくためらい、二度三度と深い呼吸をくり

返して気持ちをととのえ、思いきりよく門をくぐり、石畳の道をまっすぐにすすんだ。

ブザーを押すと、遠くのほうでチャイムが鳴った。待つ間もなく、美しく磨き込まれた格子戸が静かに開けられ、かわいい少女が顔を見せた。

「ぼく、原田敬介です。紹介状を持ってきました。奥さまによろしくお伝え下さい」

「ああ、原田さんですか？ どうぞ。——承っています」

少女は、愛想よく彼を迎え入れた。

（沢井が連絡しておいたのだな。だが、白樺夫人って、いったいどんなひとだろう？）

敬介は、白樺夫人のことをよく知らない。

彼の胸のうちには、せつなくうずく妖しい期待と、空恐ろしいような不安感があるのだ。

しばらく応接間で待たされた。ふたたび姿を見せた少女は「どうぞ、こちらへ——」と

にっこり笑って先に立った。

表から見た感じとちがって、白樺夫人の家はずいぶん奥行きがある。騒音につつまれたこの町の中に、こんな静かな住まいがあったのかと、びっくりするほどだ。

途中、ふとかえりみた少女は、意味ありげな、ふしぎなまなざしで彼を見た。

「私、アオ子と言います。どうぞよろしく」

うっすらと頬を染めて、美少女は、ういいういしい含羞をにじませている。

「いやー。ぼくのほうこそ、どうぞ……」

見れば見るほど愛らしい少女にじっと見つめられて、敬介は、少年のように顔を赤くした。なんとも言いようのない妙な心地だ。

「ここですの。奥さまはお待ちかねですわ」

少女は、また彼を見た。キラキラと光る少女の瞳を、敬介は、美しいな！ と思った。

少女に案内されたその座敷には、寂のある奥ゆかしさがただよっていた。

もう秋も深く、そろそろ肌寒さをおぼえるころだというのに、趣向をこらした縁側の障子を明け放って、上品な和服姿の婦人が、庭

に向かってひっそりとすわっている。その後ろ姿は、みやびやかなあたりの静寂に溶けこ

むような、天性の気品が満ち満ちている。

（うむ。このひとが白樺夫人か——？）

しとやかな婦人の容姿に感嘆のまなざしを送り、敬介は思わず腹の中がうなる。はいっ

たところへ、かしこまってすわった。

「お邪魔します。原田敬介です」

しかし婦人は、彼のほうを見向こうともしない。つましくそろえた膝の上には、沢井

からの紹介状が広がっている。婦人は、その書状を念入りに読んでいるふうに見えた。

（沢井のやつ、何を書いたのだろう——？）

この敬介の不審は、沢井にその封書をもらったときからずつつづいている。便箋にしたら優に十枚はあろうか。中身は何だか知らないが、ただの紹介状にしては分厚すぎると思ひ、首をひねらずにはいられない。何度も開いて見たくなるのをこらえ、そのまま持ってきたのだが、どうも気になる。

（どういう文面だろう——？）

熱心に目を通している婦人のようすを、不安を混えた眼差しで見守り、敬介は落ちつけなかった。

原田敬介が、こんどの話を沢井にすすめられたのは、半月ばかり前のことである。

昨年の春、曲がりなりに大学を卒業した彼は、その前の年の暮れから引き続いて某商社

に勤めていたのだが、ふとしたことから上役とのあいだにいさかいが生じ、会社勤めがい

やになって二カ月前に退社してしまった。

これといって身寄もなく、彼は、高校に在

学中からアルバイトに精を出す苦学生であったが、両親が残してくれたわずかばかりの山

林を売って生活費にあてることもできた。そのため、苦勞をした割には案外、気ままな暮らしをしている。こんど会社をやめてからもあわててつぎの就職口を捜すこともなく、好きな絵筆をとったり、ぶらぶらとしていた。

沢井とは同郷だった。年令は敬介のほうが七つか八つ年下だが、ふたりは妙に気が合うのである。沢井の家へもしじゅう出入りをしている。山林を売るときにも沢井の世話になったし、就職のことも依頼してあった。

その沢井が、ある日、にやにやと笑って、「お前、いま遊んでいるのなら、どうだ！ こういうご婦人がいらっしゃるのだ。すこし若返って書生になったつもりで、しばらく婦人の家へ居候する気はないかい？」

と、妙なことを言い出したのである。

(ボディ・ガードを兼ねた貴婦人の書生か) 悪くない話だと、敬介には興味があつた。とくに、沢井がいつも「白樺夫人」と敬称する、その婦人の名前に惹かれた。

「すばらしい女性だぞ！ ま、お前の好みにぴったりだと思う。しかも未亡人だ。もちろん、お前よりは年上のおかただが……」

沢井は「すばらしい貴婦人だぞ！」と、さかんに強調して敬介をさそった。

そんないきさつがあり、敬介も心が動いてきょうの訪問になったのだが、しかし彼は、この典雅な婦人、北里華子のことは、なにもわかっていなかったのである。

沢井の話しぶりから憶測すれば、外交官夫人か、あるいは貿易商社の重役夫人のように思えた。だが、敬介がたずねても、なぜか沢井は「会えばわかるさ！」と、軽く言うだけで、くわしいことは何も教えてくれない。

ただ、婦人はすでに人の妻で、夫と呼ぶ人が外地で客死したのは事実らしい。夫の遺産を受け継いだこの未亡人は、女盛りの若さで子どももなく、ほしいままな、独自の暮しを愉しんでいるという話であった。

2

「きょうは、ずいぶん冷えますこと」

ひとりごとをつぶやき、婦人は、品のよいしぐさで障子をしめた。そのついでに立ちあがって、隣の部屋の襖をひらく。

敬介がすわっている場所から、その部屋のようにがよく見えた。こちらと同じような間取りである。しかし、ゆかしい雅趣をただよわせている奥の座敷とは一変して、いかにも女のすまいらしく、華やいだ気配が充満して

いる。

室内のほぼ中央に、大きな花模様を刺しゅうした美しい掛具におおわれ、ホーム・コタツが置いてあった。

すっぽりとはまりこむように、向こう側のお座敷椅子にすわった婦人は、ようやく顔をあげて敬介を見つめた。男のたましいをこそぐるような、濃艶なまなざしである。

「どうぞ！ こちらへいらっしゃいな」

「いえ、ぼくは、ここで——」

「遠慮なさらなくてもよろしいのよ。ここへはいつて足を伸ばして下さいな。ほんとうに寒くなりましたわねえ」

あでやかな微笑が彼を招いた。そのさまはなまめかしく、実に優雅なおもむきが滲み出していた。

「いいえ。あの、ぼくは……」

ますますあわてて、敬介は声がつれた。

「ホホホホ。それじゃ、あたくしも、そこへ出てゆかねばなりませんわよ」

そうまで言われると断わるのは失礼であるうと、彼は、おそろおそろいざり寄った。

「では、お言葉に甘えて——。失礼します」 そつと足を入れた。とたんに彼はドキンとする。コタツの中の婦人の脚は、こちらに向

かつて、まっすぐに伸びていたのである。

「あら、ごめんなさいね。あたくしって、いつもお行儀が悪くて困りますのよ」

婦人はすぐに脚をのけたらしい。だが敬介は、膝をわずかに入れただけでコチコチになっていた。じわっと全身に汗がにじんだ。

敬介のようすを見て、婦人は、ふうっと笑う。柔和なほほ笑みであった。だが、婦人にじっと見つめられると、その視線の中に不可解な圧迫を感じて、敬介は、身も心もきゅっと引き締まるのを意識する。

「原田……敬介さん！　そうでしたわねえ。あたくしのこと、何かご存じですか？」

「いいえ。べつに——」

しきりに額の汗を拭い、彼は、面映ゆそうに上気した顔を伏せてしまった。

「いろいろと立ち入ってお訊きするようですが、沢井さんとはどういうご関係ですか？」

「沢井さんはぼくの先輩です。ぼくは、高校生のころからいつもお世話になってます」

「ずっと、おつき合いがあったのですね」

「ええ、家へもよく遊びに行きます。なにしろ、生まれ故郷がいっしょなものですから」

「理由はそれだけ？」

「——理由って、言っても……」

敬介は、困惑の表情で言葉尻をにごす。

「さしつかえなければ、もっとくわしく話して下さいな。いけませんかしら」

婦人は、小首をかしげてほほ笑んだ。その風情には言うに言われぬお色気があった。それもふつうの色艶ではなく、すがすがしい気品が満ちあふれているのだ。

優美な笑顔に圧倒されて、敬介はなおさら当惑してしまふ。実を言うと、沢井とのかかわりについては、とても、この婦人の前で説明しにくいことばかりであった。

沢井は、自分の父親が関係している会社に勤めていたが、親の七光を受けずに実力でのしあがった新進気鋭の技術部の課長である。大いに将来を嘱望されている男だが、私生活の面では、あまりおおよけにできない奇妙な性癖があった。

いわば一種の趣味だろうが、いささかアブノーマルな香りがする。そしてふしぎなことに、その怪しげな趣味の面で敬介と共鳴するところが多かったのである。

実は、敬介には絵心がある。加えて、性格の上でも、本質的に同調できるもののあることを、いちはやく嗅ぎ当てた沢井は、個人の秘密を守って共益を得ることのできる利用価値のある相手だと判断したのかもしれない。

しきりに敬介を自分の家へ誘い、やがて、特殊な雑誌や写真集を見せるようになった。国内の出版物に限らず、どこかのルートを経ている洋誌の数も多い。それも、アメリカ版ではなくて欧州からの本格的なものだ。

書斎の片隅に隠し戸棚をつくり、そのなかに秘めてある沢井のコレクションは、大半が祖父の集めたものだという話だったが、その数は実に豊富で、ちょっとした風俗研究家の書庫といった観があった。しかし沢井は、それらの古いものばかりではあきたらなくなつたのか、あらゆる構図を現代風俗に当てはめて再現しようという、いわば冒瀆的な野心にかられて敬介を招き、熱心に自分の意図を告げるのである。

いくら絵筆の才能があるといっても、敬介の技巧は、しろうとにすぎない。だが、しろうとなのでかえって大胆に筆が動く。いかにも個性的な、のびのびとした線描が、沢井の心を大いに愉しませたらしい。便利な男だと敬介は沢井の家では優遇されていた。

いま、白樺夫人から、沢井とのかかわりをくわしく話してほしいと言われても、その実情は、とても口から出せなかった。

それよりも敬介は、逆に、白樺夫人と沢井との関係をたしかめてみたくなった。

「あの……。こんなことをお訊きしては失礼ですが、奥さまは沢井さんと、どういうお知り合いなのでしょう」

「おやまあ、驚いた！ あたくしの質問はうまくはぐらかされてしまいましたわ。原田さんって、油断のできないお人ですこと」

「いえ、そんなつもりでお伺いしたのではありません。すみません」

うろたえて、赤らめた顔を伏せる敬介のようすを見守りながら、婦人は、口もとに手を当ててコロコロと明るい声で笑った。

「あなた、沢井さんのお家へいらっしゃったのなら、美しい奥さまをご存じでしょ」

「はい。よく知っています……」

「由美子さんはね、外地で亡くなったあたくしの夫、北里の遠縁ですよ」

敬介はアツと思う。まったく意外だった。

「由美子さんと、いま、アメリカへ行っているあたくしの妹とは、同級生でした——」

敬介は、まるで家族の一員のように、沢井の家へ入りびたりだった時期もあるのだ。しかし、沢井夫婦とこの貴婦人とのあいだに、そのような深いつながりがあったなど、一度

も、聞いたことがなかった。すぐには信じかねて、敬介はキョトンとしていた。

「あたくしの名前は北里華子。白樺夫人だ！なんて言う人もありますが、あたくしはただの女ですわ。暇を持てあましている未亡人ですのよ。さ、あたくしのほうは全部お答えしました。こんどは原田さん、あなたの番よ」

「困りました。ぼくは——」

「あら、どうして？ なにかありますの？」

「いいえ、べつに。ただ、ぼくは……」

しどろもどろになり、本当に弱った！ という表情で、敬介はしきりに汗を拭う。

華子夫人は、あのふしぎな微笑をたたえてじっと敬介を見つめている。神秘的なそのまなざしに出あうと、敬介の五体は異様な戦慄がつかぬき、締めつけられるように、急に胸が苦しくなってくるのだ。

「実は……」と言いかけて言葉が途切れる。

「すみません。かんべんして下さい！」

敬介は、肩をすくめておじぎをした。どうしても言い出すことができないのである。

3

敬介が、足繁く沢井の家へ出入りをするようになった昨年あたりから、沢井の妻の由美

子も、ときどき書斎へ顔を見せた。

「あなたって、いやな人ね。ねえ原田さん、うちの人の口車に乗っちゃダメよ。この人ったら、とってもエッチなんだから……」

沢井の求めに応じて、スケッチブックに向かって鉛筆を走らせている敬介を見て、歳の若い沢井の妻はそんなことを言って笑う。ふっくらとした頬、丸くくびれた顎、どこことなく子どもっぽい感じのする愛らしい女性だ。

そして、奇妙なことに、敬介に向かってそんなふうには言いながら、由美子は、あまりいやそうな顔をしない。一風変わった沢井の性傾向に慣れっこになったのか、それとも、迎合的に夫の性向に順応しようとするか、由美子の態度は、怪しげな沢井の趣味に同調的に感じられるのである。

とにかくふたりは夫婦だから、他人の敬介は、真実の心を探りだすことはできない。だが、ふたりのようすを見ると、彼は、つくづくとうらやましく思うことが多い。

（この夫婦は、しあわせそうだな）

敬介は、いつも、そんなふう思った。

「奥さん。先輩のような男性を夫に持つと、夫唱婦随も大変でしょうね」

こんな冗談も自然に口から出た。すると、

「なにを言うか、君！ わが家は夫唱ではなく、婦唱夫随なんだぞ。つまり、女上位だ」と、すぐに沢井が横から、まぜっかえす。

由美子は羞ずかしそうに頬を染めた。美しいバラ色の羞恥がまたすばらしくかわいい。それでなおさら、からかいたくなってくる。

沢井の好みを巧みに利用するのだ。あぶな絵的なエロティシズムのうま味に、華麗きわまる残酷ムードを充溢させた絵を描く。

一糸まとわず、まっ白な素肌を荒縄で縛られ、もっとも羞ずかしい姿態を赤裸々にあばかれていた女——。極彩色の妖しい構図だ。しかも、責められてなぶりものにされている女の顔を、まるで由美子をモデルにしたように、わざと似せて描くのである。

出来あがったその絵を見て、沢井は、わが意を得たりとばかりに手を拍って悦ぶ。

由美子は、「いやアね。いやらしいわ」と眉をひそめる。しかし、口ではいやだと言いつつも熱くほてった頬を寄せて、真剣な目色で、無惨に荒されている自分の絵姿を、食い入るように見つめているのである。

そんなことがしばしばあって、いつとはなしに、敬介はひそかに由美子にあこがれ、心の中に彼女の姿を描きはじめていたのだ。

だが、そのような微妙ないきさつを、この麗しい婦人に言えるはずがなかった。

「どうなさったの？ なんだか言いにくそうですね。よろしいのよ。その話は、いずれ折りをみてうかがうことにしましょう」

どうやら話題が変わりそうな気配に、敬介は心底ホッと、安堵の吐息をもらした。

「原田さんは、いま、お暇ですのね」

「はい。目下、失業中で遊んでいます」

「でも、就職なさるおつもりでしょう」

「ええ。先輩に頼んであります。なにしろ貧乏人ですから、働かないと食べられません」

「じゃ、つぎのお勤めが決まるまで、あたくしの家にいて下さるのですね」

「ぼくのような者でもよろしいのでしたら」

「たいそう絵がおじょうずですが、実はあたくしも、ときどきいたずらをします。あたくしに教えていただけますかしら？ その分、べつにお手当を差しあげますわ」

「いいえ、とんでもない。それはダメです。しろうとのぼくなんか、とても……」

恐縮して、彼は耳たぶまで真っ赤になる。「でも、それもお仕事のひとつですよ。あたくし、沢井さんにもお願いしておきました」

「はい。きいています。でも、ぼく、弱っているんです。そのことは抜きにして……というのではいけませんか」

「そうねえ、多分、大丈夫だと思います」

すました顔で、夫人は、まるで人ごとのようないかたをする。

「ご存じだと思いますが、あたくしんちは、ばあやがふたりと、それにアヤさんと、女ばかりの家族で無用心ですの。たとえしばらくでも、あなたに来ていただけたら大助かりです。ごつごうがよろしければ、きょうからずっと居て下さいな」

「では、ぼくは合格したのでしょうか？」

「ええ。まあそういうことになりますわね。あ、なんのお構いもしませんで失礼しましたわ。お茶など差しあげましょう。」

またひとしきり愉しように笑い、深沈としたまなざしを彼に与えて、夫人は気軽に席を立て、そのまま部屋を出ていった。

（わざわざ自分が行かなくてもいいのに。あのお手伝いさんはなにをしているのだろう）

さっき会ったとき、これは——と、目を見はったのをすっかり忘れ、敬介は、気のきかないアヤ子に腹を立てた。そして、そのような自分の思いをほろにがく笑う。苦笑を浮か

べながら、ふいに敬介は、がくっとした。

アヤ子といったあの美少女が、どこことなく由美子に似通っているのに気がついたのだ。

少女に見つめられたとき、思わずドキンとして顔を赤らめたのも、そのためだろう。

(ここで暮らすのは愉しくなりそうだぞ)

ウフツと、彼の心はほくそ笑みをもらす。

あらためて室内を眺めたりして、敬介の眼は、ふと一点に釘づけになった。

小机の上に、沢井にもらった封書が置いてある。彼の手は、無意識のうちに伸びた。

三つか四つにわかれて中身を急いで引き抜き、いちばん上のものを開いた。

アツと思う。自分の戸籍謄本である。

(いつの間に沢井はこんなものを——?)

一瞬の驚きがすぎた。沢井とは本簿地が同じなので、当然考えられることである。

つぎのものをひろげて、一瞥するなり敬介の表情は、にわかにくもった。

かねてよりのお約定の品、本日お届けいたします。内容は次の通りです

- 一、品名—生物 一、性別—おす
- 一、毛並—良好 一、系類—なし
- 一、資性—温順 一、飼育—可

その他、詳細は別紙をご参照下さい十分に、おためし下さいませよう

(なんだい、こりゃあ——?)

とっさには、意味がのみこめなかった。

とにかく、紹介状の中身にしては、あまりにも型破りな書状である。しばし啞然として

何度もくり返して怪しい文字をにらんだ。

(これは、おれのことらしいぞ!)

愕然とする。敬介は血相を変えていた。

(どうなってんだッ!)

詳細は別紙と書いてあるので、その別紙がどれかと探り、不覚にも指さきがふるえた。

廊下に足音がしたのは、そのときである。

「すみません。戸をあけて下さいな」

まぎれもなく夫人の声だ。泡をくった彼は夢中で封筒を元どおりにした。怪しげな文面に秘められた真実を探りだすことができず、

いまいままさに舌打ちをしたが、心の中は、恐怖じみた疑惑の影で暗々としていた。

戸を開くと、夫人は、右と左と、それぞれ

の手にコップを持って立っている。

「ごめんなさいね。お使いだてしちゃって」

あっけにとられて、無作法な夫人の姿を眺め、とたんに敬介は息をつめた。夫人の手も

とを凝視し、ひとりでに身ぶるいが出た。

「お盆もなしの手づかみですよ。ほんとうに、あたくしって、あきれた女でしょ」

夫人は、コップひとつを敬介の前へ置き、もうひとつを自分のほうへ置いた。そして、

元どおりにコタツの中へすべりこみ、青くなつてつっ立っている敬介を仰ぎ見ながら、く

ったくなく笑っているのだ。

「さあ、どうぞ。こんなお茶ですよ」

そう言うってから、敬介の表情を見て首をかしげ「あら、どうしたの? 気分でも……」

と、真顔になって問いかけてくる。

「いいえ。なんでもありません」

おぼつかない足どりで、ふたたび夫人と向かい合つてすわり、瞳をこらして、彼は目の

前にあるコップをにらみつけていた。

かすかに湯気が出ている。淡く色づいたお茶は、意外にすきとおってきれいに見えた。

だが、表面の泡立ちが無気味である。

気のせいかな、妖しい香りがゆらめき、ほのかに匂いだだようかのようには敬介は思った。

つくくり返して彼にささやいた声である。

（白樺夫人のネクタール？——）

その自意識は敬介にとって強烈きわまる。

（これを、おれに飲ませるつもりか！）

白樺夫人ともあろうひとが、どうしてこんなハレンチなことを強いるのだろうか、などと考えるよりさきに、ついさっき盗み見た奇怪な紹介状の文字が目先にちらつき、敬介の心は、おののきふるえる。

「原田さん、なんだか変ね。お顔の色がまっ青だわ。まあ、こわいお顔なこと。あたくしのお行儀が悪いので、きっと、腹を立てていらっしゃるのね」

「い、いいえ。そ、そんな……ことは……」

あとは声も出ずゴクンと生つばを飲む。

「おしゃべりをしたので喉がかわきました。はしたない女だというあたくしの正体を原田さんにお見せしたのだから、いまさらお体裁ぶったってしょうがないわねえ。オホホホ。失礼してお先にいただきますわよ」

アッという間もなかった。目を皿のようにして敬介が凝視するなかで、夫人は、おめず臆せず、自分が排泄したものに口をつけた。

そろえた左手指を底に当てがい、そのしぐさはさすがに堂に入った観がある。だが、コ

ップが傾き、のけぞった白い喉もとが、液体が流れこむのにつれて脈打ち動くのを見て、敬介の総身は粟粒が立った。

にじみ出た冷たい汗が玉となり、腋の下をツーと流れる。寒々としたその感触にゾクツとおびえ、身も心もガタガタとふるえる。

「ああ、おいしい！ さ、あなたも——」

夫人はケロッとしている。うながされて、敬介はせっぱ詰った心地で手を伸ばした。

つかんだコップは妙に生暖かった。

（おれの妄想だ。これはふつうのお茶だ！）
祈るようにそう思う。だが、触れたコップの感触がいっそうなまなましい実感を誘う。

夫人は、さわやかな表情で彼を見ている。

目を閉じて、敬介は一気に飲みほした。そしてキョトンとした。あっけない結末だ。

つきつめた緊迫感は急速にほぐれて、敬介は、半ば放心状態で、ぼう然としていた。

「どうしたのです。妙な顔をなさって！」

「——」

「お茶がまずかったですか？ それは、あたくしのお手製のカクテルですよ」

「……お手製の……カクテル——？」

おおむ返しに彼は小さくつぶやく。

飲むときは夢中だった。だが、そう言われ

ればたしかにアルコール分があったようだ。何のカクテルか知らないが、舌にピリツとくる刺激性が、ほろにがい味わいととも、まだ口の中にとどまっている。

とにかく、白樺夫人のネクタールではないかと妙に感ぐっておじけづいたのは、みな彼の取越し苦労で、感情の遊戯にひとしいひとり相撲だったのである。

「原田さんのいまのお顔、ほんとうに変だったわよ。まるで毒入りのお茶を飲むみたい」

「——」

「そのお茶、なんだとお思になったの？」

「奥さんは、妙ないたずらをなさる！」

ようやく生気を取り戻し、彼は苦笑した。

「いたずらって、それはどういう意味なの」

すぐには答えられない複雑きまる敬介の表情を眺め、夫人は、お茶目にクリクリと瞳を動かし、大きな声を出して笑った。

（よく笑うな。このひとは——）

実際に、白樺夫人はよく笑う。だが、笑う夫人の表情は、時と場合によって、どれもこれもどこか微妙な差異があるのだ。

しかし、あらたまった気持で、夫人の表情を追うと、敬介は不可解なものを感じる。笑いを隠した夫人の素顔は、意外にも、冷然と

したものではないだろうかと思う。すると、その自意識につれて、彼の心は、またまた妖しいおののきに包まれ、いまにもどろどろとくずれてしまいそうになる。敬介は、自分の本質的なものに、おびえつづけるのだった。

「あら、あたくし、肝心のことをすっかり忘れていました。お給料はいかほど差しあげましょう。お入用な額をおっしゃって下さい」

「そんなもの、どうだっていいです」

「そうはいきません。決めるものははっきりと決めて契約をしておかないと、いろんなお仕事をしていたくのに、あたくしのほうで気がねをしますわ。そうでしょ」

「いいえ。ご遠慮なくこき使ってください。ぼくは、なんでも喜んでやります。でも、一応は仕事の内容をくわしくきかせて下さい」

「そうね。でも、お仕事って言うても……いろいろなとありますのよ」

ウフ、ウフと、夫人は声を忍ばせる。

「では、お手当は、あたくしのほうで適当に決めます。それでよろしいかしら」

「結構です。どうせ遊んでいるのですから」

「それでは、これで話は決まりましたわね」

夫人は、きれいな瞳で敬介を見つめた。

その視線を意識すると、なぜか敬介は息苦しいような圧迫をおぼえる。まともに顔を見合えずと、めくるめく思いがするのだ。

その理由は、白樺夫人があまりにも高尚で美しすぎるためだろうか、と彼は思う。

涼しげな目もと、高くはないが形よくととのっている鼻筋、清潔な歯を美しくそろえた唇のあたり……。いや、そのような目鼻立ちよりも、顔全体の輪郭といい、さらに容姿をかたちどっている和らいだ線の起伏が、すぐれた美質を具現しているのかもしれない。しかも、官能をゆさぶる頰靡的な甘い香りが、どことはなしにただよっているのだ。

高雅なおもむきと放縱な色香と、清純な容姿と、みだらっぽい媚態と……。つまり女性全般を象徴するもろもろの要素のなかで、極端に相反するものが渾然一体となり、そこからふしぎなコケットリーがにじみ出ている。

あるいはそれがチャームポイントとなつて、天資の性の気ぐらいを、やわらかくおおい包んでいるのかもしれない。

沢井が名付けたらしい「白樺夫人」という敬称も、たしか、夫人の生まれ故郷が北海道であることに由来しているようだが、真実はもっと深い意味が含まれていそうである。

どこよりも遅く訪れる北国の春、うららかなその日、あたりを冬の眠りから目ざめさせるようにあざやかに萌え初める、あの、白樺の清新な若葉を連想したものであろうか。

楚々として煙ったような白い樹皮は、淡い桃色の色素を秘め、しなやかな枝は、すがすがしく匂う若緑にいろどられている。その妙味豊かなコントラストは、まこと、深山に映える優美な、あで姿だと言えよう。

白樺夫人という名前は、美肌にくるまれた優雅な貴婦人、北里華子という女性にこそ、もっともふさわしい、あだ名だと言える。

しかし、敬介の感覚には先入観もあった。洗脳するように沢井が吹き込んだ「白樺夫人への讃歌」が、彼の心の奥深くへ住みつき、強烈な暗示性を発揮しているのだが、彼は、そのような自分の心理状態については、すこしも気がついていなかったのである。

5

「原田さん。おのぞみなら、さきほどのお茶をもういっぱい……。いかがです？」

なにかを模索するように、敬介のようすを観察しながら、夫人は、さりげなく言った。

「ああ、あの、カクテル——？」

「ええ。なんだったら、まがいものじゃなく純度の高い本物を差しあげますわよ」

「……純度の高い……ほんもの……」

「そうよ。完全なるほんものです」

とらえどころのない茫洋とした顔でつぶやき、敬介の全身は、電撃ショックを受けているようにけいれんが走る。複雑に変化する男の表情を愉しげに見て、夫人はほほ笑む。

ふたりのあいだに寸時の沈黙があった。

「原田さん。あなたって純情ね。ほんとうに正直で心の美しいかたですね。なにかもつとすてきなものがほしいって、ほら、ちゃんとお顔に書いてあるのよ。オッホッホ」

夫人の心は機敏に動く。微妙に移り変わる敬介の心理状態を巧みにとらえ、憎らしいほど余裕を見せてなまめかしく誘うのである。

敬介は、いまにも崩壊しそうな自分の気持ちを、必死になってささえていた。彼には、空恐ろしい思いのする自覚があるのだ。

その自覚は、沢井との密接なつき合いの中から自熱発生的に芽ばえている。それを隠蔽しつづけてきたのだが、その努力も、夫人の前では、むなしいものになってしまう。彼は異様に高ぶりゆく自分の感情におびえた。

「原田さん。ほんものだとか、にせものだと

か、それ、いったいなんのことですか？」

自分から言いだしたことなのに、夫人は平気でしらばっくれて、明るい声で笑った。

ようやく敬介は、自分が夫人にからかわれているのだと悟った。しかし、夫人にからかわれる素因をつくったのは彼自身だろう。

妙におどおどとした自分の態度が、ひとつの隙間になったのだらうと、胸を刺す自覚におののき、深い反省をくり返すのであった。

ふと、脳裏にひらめくものがある。夫人が何か目的を持っているような気がした。夫人の目的は、あるいは蔭で糸を引く沢井の意思につながっているのかもしれないと思う。

またぞろ、沢井の書いた奇怪な紹介状の文句が、まがまがしく胸に突きささってくる。あの紹介状の中には、何か、容易ならぬ重大な意味が秘められているのかもしれない。

これは、敬介にとって新しい疑惑だった。

「ああ、すこし暑くなってきましたわね。きょうはずいぶん冷えますが、それでも、やはりまだ秋ですわ。あたくし、汗が出ました」
奇体な思いにとりつかれて、悩ましそうにあらぬほうを見る敬介の顔色をうかがい、夫人は巧みに話題を変えてゆく。

「あたくし、足がぬれたようです。足袋を脱

がせて下さいまし。——敬介さん」

ドキッと、彼は胸の鼓動を感じた。一つ二つ間を置いてから、急にはげしくトントコと動く自分の心臓の不確かな響きに恐怖し、せわしない呼吸をしてあえいだ。

「きこえませんの？ 敬介さん！」

彼はきいている。妙になれなれしく呼ぶ夫人の声を、はっきりと耳にしている。

「原田さん。あなたとあたくし、ふたりだけの契約は、もう済んだのですわねえ」

はじかれたように、敬介は顔をあげた。

「どうなの。はっきり返事をしなさいな」

「はい。契約を、し、しました」

「こき使って下さい。なんでも喜んでしますって言ったわね。あれは本心でしょうね」

「ええ。ほ、本気です」

「あたくしの聞きがちがいありませんね」

「はあ、はい！」

「では、遠慮せず言うことにします。あたくの足袋を脱がせて下さい！」

低くうめき、彼は、おそろおそろ夫人を見つめた。思わずぐっとしてからだがふるえた。

夫人の顔は、キリッと引き締まっている。

しらじらとした額から、ほのかに色づいた頬のあたりは、さわさわとした輝きがあった。

冷やかな光を放って、瞳は男を見据え、口もとには皮肉な笑みがただよっている。

まさしく豹変した白樺夫人の姿かたちは、

敬介を戦慄させる、きびしさがあった。

放心の目で彼は夫人を見た。ぶるるとふるえ、無意識のうちにホーム・コタツの中へ手を差しのべた。探ってみたが、むっとする暖気ばかりで、手に触れるものはなかった。

真剣に何事かを訴え、彼の目は夫人に向かつてすがりつく。だが、はねかえってくるのは冷やかな無言の微笑ばかりである。

ほどこすすべを失った敬介は、やむにやまねず掛具を持ち上げ、身をかがめて中をのぞきこんだ。

赤外線ヒーターのコタツやぐらの内部は、隅々まで淡い赤色でいろどられていた。向こう側に、器用に足を折り曲げて横ずわりになった夫人の膝が、ちんまりと小山を作り出している。とても、手を伸ばしたところで、とどく場所ではない。

しかし、彼はそのまま動かなかった。

コタツのなかは暖かく蒸れ、白樺夫人の体臭がこもっている。すこぶる刺激的なその香りを胸いっぱい吸いこんだ彼は、軽いめまいが起こり、動けなかったのである。

「なにをしていらっしゃるの！」

がくつとする。まっ赤な顔をあげた彼は、ひそとうなだれた。気まりが悪いのだ。

「もう一度うかがいます。さっきの約束は、あなたのほんとうの気持ちでしょうね」

「は、はい。ぼくは、まじめです。」

「そう。だったら安心しました。でもね、もしもあたくしが、ムチャクチャなことを言いだしたらどうなさいます。たとえば、いま言ったように、タビを脱がせてちょうだい、とか、足を拭いてほしいとか……」

「や、やります。よろこんで……」

「拭うって、タオルじゃダメなのよ。あなたの唇で拭ってほしいの。それでもできる？」

「……で、できます……」

「本気でですね。あたくしは、あなたに足を舐めると言っているんですよ。女のあたくしにこんな屈辱的な命令をされても平気なの？ 黙って、あたくしに従うというの！」

「はあ、……ああ、はい！」

いつの間にか、彼は正しくすわり、畳の上に両手をつかねて叩頭しているのだった。

「あなたって、おもしろい人ねえ」

白樺夫人の声は意識的だ。底意地悪く彼をことんまで追い詰め、がんじがらめに縛り

つけてゆく。しだいしだいに優雅な貴婦人の姿から脱皮し、瞳を光らせ、プライドを誇る驕慢な女性へと変貌してゆくのだ。

そのときどきの夫人の姿かたちは、妖力を発揮する魔性の美神を見る怪しさがある。

しかし、それよりもなお奇怪なのは、こんなにまで愚弄されながら、妖しい女の魔力に魅入られてガタガタとふるえ、上目使いに夫人をうかがう敬介の姿であろう。

戦慄は異様なものだが、嫌悪や屈辱感はなく、もちろん、敗北的な零落感もなかった。

原田敬介という孤独な男にとっては、とうとうくるべきものが来た！ という自然発生的な感慨かもしれない。むしろ興奮を沸きたたせるような、うま味のこもる戦慄だった。

実際に、彼の心は感動裏にあった。精神の高まりにつれて胸がはずみ、肉体もまた、たくましい躍動的なけいれんを起こしていた。

「敬介さん！ そんな気の抜けたような情けない顔をして、どうしました？ さっさとお仕事をはじめてちょうだい」

「仕事って、何をすればいいのでしょうか」
「あら、忘れたの？ いま言ったでしょ」

「アア、タビを……」

「そうよ。汗でぬれて気味が悪いの」

敬介の心のどこかは、しきりに反撥している。その正常な精神の抵抗に悩みながら彼の妖しい欲望は、この刹那に、エネルギーのすべてを結集しようと熱狂しはじめていた。

抑え押し伏せていたものが、自然燃焼して爆発するように、そこには、荒くほとばしり出る華々しい青春の情熱が混入していた。

掛具をはぐった。中へ頭を突っこもうとして、彼は不覚にもうめいた。畳にこすれてギョツと痛みが走る。

夫人のポーズが変わっているのだ。優美な脚線がよっきりと生えて出ている。

不自由な姿勢で無理に伸ばしたためか、あるいは意識的なしぐさかもしれないが、着物の裾ははなやかにまくれ、むき出しの足は、くるぶしを包んだ深い足袋でおおわれているだけだ。しかも、やや斜めに傾いた素肌は、彼の心を誘うようにくねくねと動いている。

敬介は夢中でコタツにもぐりこんだ。

掛具の隙間から射しこんでいたわずかな光が遮断され、赤い微光を吸収した夫人の足は美しく映えた。そのさまは、まさに幻想的な絵画を見ている心地がする。次元の異なる幽

玄界をさ迷い、甘い暖雲に包まれ、妖夢を見つづけているのかと思う。

あまりの麗しさに嘆声をもらし、彼は宇頂天になった。不自由な場所がもどかしい。

頭だけコタツの中へ突っこみ、間の抜けたマンガ的なポーズなのに、自分の姿かたちをかえりみる余裕はなく、そっと手を触れた。

意外にひいやりとしている。しめっぽくて手の平にくっつくようだ。そのくせ妙になめらかであった。とにかくごく魅惑的だ。

半ば夢見心地で、彼はふるえる手指で足袋を脱がせた。いきなり足の甲に唇をつけた。

むせかえる温気の中であった。それでなくても、彼は精力的に燃えているのだから、逆流する血潮はさらに熱気呼び、頭の芯がズキズキと痛んだ。すごく苦しい。だが、その苦しさも忘れて呼吸を乱す。

夫人は、ホーム・コタツのスイッチを切った。しどけなくからだをずらし、いっそう楽なポーズになって足を動かしはじめた。

まっ暗になった暑い空洞の中で息苦しさにあえぎながら、敬介は、移動する夫人の足を追った。腹這いのからだだが蛇行して、ずるずるとコタツの中へのめりこんでゆく。

「ああ、暑いわ。たまらない！」

夫人は、ずっと片足を抜いた。

「出ていらっしゃい。いつまでも中にもぐっていたら、窒息してしまうわよ」

もう片方の足がコタツの中で暴れた。じゃけんな足に追い出されて、敬介は汗びっしょり、ゆだったようにまっ赤な顔をしていた。

「ホホホホ。まるでゆでダコだわ。服をお脱ぎなさい！ 涼しくなるわよ」

瞬間、自分を見失ってぼう然とする敬介の耳に、冷淡な夫人の声がつきささってくる。

「聞こえないの！ 早くお脱ぎなさい！」

夫人の指図は別人のようにきびしい。寸刻の逡巡も与えず頭ごなしにきめつけるのだ。

彼の心は抵抗した。必死になって反撥をする。だが、醜い欲望を充溢させた目は、無造作に投げだされている夫人の足を凝視し、ゆがんだ感覚が彼の行動を支配した。

臆病そうな目で夫人を見た。鋭く見返した夫人の目には、厳然とした意思があった。

喉の奥でうめき、自分の思慮を忘失して、彼は上着に手を掛けていた。ズボンが足もとでくしゃくしゃになり、肌着が飛んだ。

「あら。それでおしまいなの。まだ残っています。全部おとりなさい！」

哀れな姿で、前かがみになった男を見て、

夫人は妖しい微笑をもらした。

「寒くなったら中へおはいりなさい。それまでのあいだ、あたくしの見ているところでお仕事をするのです。さ、おはじめなさい」

むき出された夫人の下肢は、白昼の光を浴びて淡い桜色に映えている。うっすらと浮き出た静脈が幾何模様を描き、見た目にも麗しく鈍い光沢を放って仰々しく動く。

夫人の足が動くにつれて、まだぬれている足の甲が、はしたない男の行為を証拠だてるように、きらりきらりと異様に輝く。

敬介は、油をぬたくったような形跡をぼんやりと見ていた。じかに外気にさらされている皮膚は冷え冷えとして、たえず悪感に身をふるわせているが、からだの中は燃える火の玉がかけめぐり寒いという意識はなかった。「ごらんなさい、ここを——。ほら、このへんまでは何をしていたっていいわよ。お好きなようになさい。でも、その代わり、手を使っちゃダメよ。さわるのは唇だけですよ」

拒もうとする意思を、敬介は忘れた。

嘲弄をこめた夫人の視線を意識し、するとなおさらはげしく興奮するのだ。その姿が、いっそう夫人の心をみたとしいるとも知らずに、畳の上に両手をつき、首を伸ばした。

「奥さま——」

縁側のほうからアヤ子の声がした。

「奥さま、お出掛けになる時間です」

障子をあけたアヤ子は、ふしぎそうに部屋の中を見た。すわったまま夫人を仰いだ。

「奥さま。あの、お客さまは、どこ……」

アッと叫んで、あわてて手で口をおおい、指さきをかんでしーんとした目色になった。

「アヤさん、ちょうどいいところへ来てくれたわね。この中にいる生きものの手足を、コタツの脚にくくりたいの。手伝ってね」

夫人はパツと掛具をまくった。

コタツやぐらを背中に負い、まるで大きな海亀のように、男は、首と足をはみ出してもがいていた。その男が、かねてから話にきいていたあの青年だと知って、度胆を抜かれ、アヤ子は目ばかりパチパチさせる。

「まあ、奥さまとしたことが、はしたない。ああ、ハレンチ！」

「アヤさん。そんな言いかたってないわよ。

言うなれば、アヤさんのお仲間だもの」

男の手足を四つの方向へくくりつけようとして、夫人は身をずらした。惜しげもなく裾を乱したまま、自分のからだを巻き締めている紐をつぎつぎと抜く。

「アヤさん。晩まで自由に遊んでいいわよ」
手首足首をふたりがかりで縛り終えんと、夫人は、アヤ子をかえりみて明るく笑った。

7

今年の春に建て増した北里邸の二階——。

深紅の絨たんを敷きつめ、窓という窓を華麗なカーテンで閉ざし、けばけばしく飾りたてた洋風のその部屋に、女と、男とがいた。

ゴージャスな室内のおもむきと異なり、ふたりのみなりは、人間として見るなら桁はずれにお粗末なものであった。

女には、女性本来の美点であるしとやかな風情がまったく見当たらず、男は男で、男性としての威風を失墜していた。

着ていること自体が羞ずかしいような衣裳をまとい、白樺夫人はしどけなくソファに腰をうずめ、原田敬介は夫人の足もとにうずくまっている。彼は何も着ていなかった。

あの日からすでに十数日たっているが、鎖でつながれ、一匹の家畜に似た彼の姿が、秘められた日々の歴史を明示している。

夫人の美身に眩惑し、妖しい契約を無条件に肯定した彼に、夫人は首輪と鎖を与えた。それが、夫人に忠実な書生の誓いであり、

北里邸に居候する男としての本分であった。

この夜ふけ、四つ這う男に自慢の足をなめさせながら、受話器を片手に、夫人は嬌声をふりまいて、だれかとしやべっていた。

「……久しぶりにかわいい声をきいて、あたくしの胸は、うれしさでいっぱいよ」

「じゃ、近いうちに来て下さるのね。」

「ええ、行きますとも。あなたのきれいな肌が恋しいもの。ちゅっと吸いたいの——」

「いやだわ。からかっちゃ。」

「いいえ、あたくしは本気よ」

「ほんとう？ だったらうれしいわ。」

「約束します。あ、ちょっとだんなさんと代わってよ。話のつづきはまたあと……ねえ」

——ああ、白樺夫人、今晚は！

「いやな人！ そんな呼びかたをされると、くすぐったくて変な気持ちだわ」

「でもないだろうに。いるんだろ？」

「ええ、いるわよ。いま、夢中だわ」

——なんだい！ 白樺夫人ともあろうひとが声まで妙にうわずらせてさ。アハハハ。それでどうなの。変な虫は納まりそうかい。

「うん、いまのところ、まあまあって感じ」

——そんなお遊戯は早く卒業して、ぼくとの約束を守ってくれなきゃダメだぞ！

「もうしばらく！ そのうちになって、いままマイ・シスターに言ったところよ。ウフッ」

——そんなノンキなことを言っちゃ、困るよ。ぼくは、華さんのためにずいぶん苦勞をしているんだぜ。こんどだって……。

「わかっています。あたくしの火遊びのために、無理をして重宝な生きものを手離したって、そう、おっしゃりたいのでしょ」

——そうだ。だから、な、頼むよ。

「考えています。でも、この生きもののことなら心配ないわよ。あたくしから離れないよう、しっかりと飼ひ馴らしていますからね」

——うん。実はその男はね、うちの由美子にも気があるらしいのだ。モーレッツ女性がふたり寄って、うまく教育すればいいさ。

「でもね、正直に言って、あなたのおくどいエゴイストぶりには驚きました。だって、自分の弟のようにかわいがっていた者を、平気でこんなふうにおとしいれるの……」

——それも、華さん、あなたのためだ！

「どうして？ ご自分のためじゃないの？」

——うん、それもあるな。敬介は、すこしばくのことを知りすぎたようだ。野放しにして

おくと危険だ。用心して、当分のあいだ口を封じておく必要があった。

「その目的は達しられたっていうわけなの」

——そうだ。華さんのお見事な腕前でね。

「あたくしのからだだが、さるぐつわなのね」

——ハハハハ。そういうことだな。しかしお膳立をするのが一苦勞だった。白樺夫人という神秘的な女性像を創作し、敬介に信じこませるように細工をする。そして、あいつの本質、性的性格を探り出す努力、どれもこれもいま考えると大変だったよ。

「それでも、成功したじゃないの」

——あんたが敬介に満足するのなら……。

「男ぶりもまずまずだし、まあ、当分のあいだは退屈しなくてもすみそうよ。ウフフ」

——ダメだ。その当分のあいだが、困るんだよ。ぼくはウズウズしているんだぜ。

「まあ、せいぜい胸の中を熱く燃やしておいてちょうだい。どうせあなたに縛られるのだとしたら、そのほうが味わい深いもの」

——こいつ！ そんなことを言っていると、うんときつくいじめてやるぞ！

「かわいらしいあなたの奥さまとごいっしょなら、いくらでも、お好きなように……」

——困ったひとだな。あんたも由美子も、ま

「まったく、扱うのに骨が折れるよ。」

「そうよ。当たり前でしょ。あたくしが何よりも大切にしていた『お由美人形』を、あなたが強引に取りあげてしまったのだから。そしてこんどはまた、ふたりをいっしょに縛りたいなんて、変な野心をおこすから……」

「仕方がなかったんだ。由美子のやつ、華さん以外の女性とプレイをしたら、それは浮気だから絶対に許さないって、妙なことを言いだすのだ。察するところ、由美子に悪知恵を吹きこんだのは、あんただろう？」

「ウフ、……かもしれないよ。あたくしと『お由美人形』とは、むかしから離れられないアツアツの仲だもの」

「チェッ！ あんたたちはエッチだよ。」

「あら、ご自分のことは棚にあげて……」

「アハハ。まあいいよ。だからぼくは一步譲って奔走しているんだ。ぼくは約束を果たしたよ。こんどは華さん、あんたの番だ。あまりじらさずに美肌を拝ましてほしいな。」

「はいはい。生まれたまんまの姿になって、おとなしくあなたに縛っていただきます」

「立派な覚悟だと、ほめておきましょう。」

「それが密約だもの。でもね、美しい奥さんがあるあなたとちがって、あたくしは自由な

女なのよ。だから、また何か、新しい注文を出すかもしれないよ。いかが？」

「——おいおい、冗談を言うな。これ以上は、もうごめんだ。敬介だって、なにしろ男ひとりを生け捕りにするなんて、大変な仕事だ。そんなに要求をされては閉口する。」

「じゃ、あたくしのからだもお預けよ」

「——それでは約束がちがう！ もう、ずいぶんと待たされているんだ。だからさ。」

「オホホホ。ではね、奥さまに平身低頭してお願いなさったらいかが？ 『お由美人形』に誘われると、あたくし、とろけちゃう」

「——そんな話ってないよ。由美子が素直にウンと言え、こんな苦労はしないよ。」

「こんどの品物は、スーッと自然に入りこんじゃって、すこしもスリル感がないの。調教してやりたいのに、あんなようすでは、はり合いのないことおびただしいわよ」

「それは、ぜいたくというものだ。」

「そうよ。あたくしは気ままな女だもの」

「——いじめる方法は、いくらでもあるだろ。」

「あたくしね、鞭でぶって教えこませるっていうのじゃないと、なんだか物たりないわ」

「——一人前に、サジストのようなことを言っでさ。大丈夫かい。敬介が手ごろだよ。」

「大丈夫！ なんだったら試しにもう一匹つごうして下さいな。どうかしら？」

「——いやだ！ もうダメだ。」

「あたくしね、こんどは女がほしいの。山地夫人ね、あのひとに会いたいのよ」

「——ダメだッ。あれは若い難物だ。第一、山地夫人をあなたに紹介したら、うちの由美子が額に角を出すよ。その話はごめんだ。それより、敬介のことをどうするつもりだい。」

「これは、アヤさんに払い下げてやります」

「——ずいぶん思いきりがいいのだね。」

8

「あのコ、満足そうなの。ア、来たわよ。ちよっと、そのまま待っていてね——」

「奥さまア——」

妖しく華やいだムードにめすのけだものが加わり、いっそう清新な明るさが増した。

湯あがりの素肌を美しく匂わせ、あどけない羞恥を見せて、アヤ子は夫人に甘えた。――「あら、アヤさん。今夜はまた一段ときいなお肌なこと。全部お化粧したのね」

自分の声を沢井に聞かせようと、受話器を握ったまま、夫人はアヤ子を招いた。

「このお部屋へはいったら、アヤさんも首輪

のアクセサリーをはめるのよ。いいわね」

コックンと素直にうなずき、夫人の目にながされたアヤ子は、ナイト・テーブルから怪しげなネック・リングを取り出し、自分で自分の首にしっかりとめてぼおとする。

「そう。お利口さん。さ、いらっしゃいな」

夫人は、足もとに這いつくばう男の背中を指さした。男の姿を眺め、アヤ子はちよっとためらう。全身、バラ色に染まった。

「遠慮しなくてもいいの。この人、よろこぶわよ。アヤさんはね、この人のあこがれている女性にそっくりなのよ。だから……」

「私、いやです。代用品なんて、いや！」

「だったら、アヤさんをあこがれるように、

この人に教えてやればいいのだわ」

一瞬、きゅっと唇をかみしめ、上気したアヤ子の頬がゆがんだ。キラキラと光る目で男を見おろし、とたんにからだが跳ねた。

敬介は、奇妙な声でうめいた。

いくら相手が小柄だといっても、跳馬代わりにされてはたまったものではない。

「オッホッホ。弱いお馬だこと！」

上体を反らして高笑する夫人の胸へ、男の背中へ馬乗りになったアヤ子がすがりついた。

豊満な双丘の谷間に顔をうずめ、頬をすり

つけ、母の乳房を慕う赤児のようだ。

「アア、いいコね。アヤ子はすっかりいいコになったわよ。かわいいわ……」

夫人の声は甘やかにうるおい、片方の手はアヤ子の背をいそがしくまさぐる。

——おいおい華さん。いい加減にしろよ。

電話が、じれったそうにキンキン響く。

「ああ、そうだった。忘れていたの……」

ごめんなさいね！ チュッと音をたてて、

「アヤさん。しばらく自分でお遊びなさい。

さあ、この鎖を持って——」

「いかがでした？ すこしは、こちらのようすがわかりましたかしら」

——わかったよ。恐れ入りました。

「こんなぐあいなよ。だから、もっと生きのいいのをつかまえてちょうだい！」

——ダメだったら……ムチャだよ。

「それはそれは、残念でした。もしあなたがウンと言ったら、あたくしの行けないうち、アヤさんをお貸ししようと思ったのに——。

アヤさんだったら奥さまもOKなさるわ」

——うん、そうか！ 由美子とアヤ子！

「ねえ、フレッシュでしょ。お由美人形の代わりに捜し出したんだもの、妹のように

よく似ているわよ。フタゴの姉妹——」

——いいね。魅力的だな。ちよっぴりと悪徳の香りがして。よし、華さんのおのぞみ、もう一度考えてみることにしよう。しかし、由美子がウンと言うだろうか？

「訊いてごらんないな。そばにいるのしよ。きっと承知すると思うわ」

——OKだってさ。目を細くしてニタニタしているよ。ア、ツ、ああ、痛ッ。

「オッホッホ。美しいメス猫が爪を立てたのね。あたくしの話を聞いて興奮したのよ」

——ああ痛い。そうかもしれんね。でも、華さんの依頼は、そう簡単にできることじゃないから暇がかかるよ。

「いいわよ。アブニストとしてのエネルギーシユはあなたの手腕に期待しています」

——それまで華さんのヌードはお預け？

「どうやらそのようね。奥さまのお誕生日といっしょに、クリスマス・パーティを盛大にやりましょうよ。そのときなら、きっと豪華なメンバーがそろうだろうと思います」

——いい計画だ。その中に華さんの妹が加わると、ぐんと輝きが増すのだから。

「いやよ。いくら腹ちがいだといっても、明子はレッキとしたあたくしの妹だもの」

——でも、うちの奥さんがそう言うのだ。

「あのコ、そんなことを言ってるの？ いいわよ。こんど会ったらうんといじめてやる」

——華さん。ぼくは由美子の気持もムチャじゃないと思うよ。だって、ふたりは同級生で、あんなに仲良しだったのだからな。

「おユミにそう言ってるよ。あたくしと明子、ふたりにおネツをあげるなんてもってのほかよ。あたくし、プンプンだからね」

——伝えよう。いや、そばで耳を傾けて華さんの声をきいているよ。笑っている……。

「おユミのバカ！ 承知しないわよ——。あッ。ちょっとお待ち！ アヤさん、笑って見えないで鎖を引いてちょうだい！ あ、ダメだったら、敬介！ そこはもっとあとからよ——。あらごめんなさい。あなたじゃないのよ。こちらのこと……」

——そちらは、そろそろクライマックスって感じだな。では、おやすみ！

延々とつづいた北里華子と沢井夫婦との電話は、ようやく怪しげな会話で終わった。

つぎからつぎへと刺激を求めて、異常なあだ花をわがものにしようとするアブニストたちは、世間の片隅で瞳を光らせ、可能な範囲

で嗜欲をみたそうとして策を練る。われ知らず深淵にのめりてみながら、異常そのものに感溺して悪のムードに酔い、エネルギーに裏面工作をくり返しているのだろう。

だが、彼らのイケニエとなり、感情をもてあそばれている原田敬介こそ哀れである。

沢井が創作した『白樺夫人』という名前が架空のものとは知らず、美しい有閑マダムの妖しさに魅入られ、心の底から畏敬して真情を傾けているのだ。

おまけに、ひそかにあこがれていた先輩沢井の若妻、由美子と瓜二つのアヤ子が加わり、彼の耽溺は深まる。

情熱的な男の奉仕に、はしたなくうごめきほしいままな快楽をむさぼりながら、勝手なことを言っている女主人の声を、敬介は、おぼろげな聴覚で聞いていた。だが、電話の向こうにだれがいるのか、彼は知らない。相手が沢井だと知ったらなんと思うだろう。

すべてのことは、北里華子が未亡人になった機会を狙って、かつて、レスボスの花を咲かせた愛妻由美子との仲を復活させ、新鮮なおのれの欲望をみたそうとする沢井の策謀であった。しかし、仮りにその事実を知ったとしても、敬介は案外、平気かも知れない。

「敬介！ あっちへお行きよ」

けだるそうにからだを投げだし、華子夫人は、ハレンチに縮めた足をぐんと伸ばす。

肩さきをしたたか蹴られて、敬介はぶざまにころんだ。と、そこには、若鹿に似た美身が佇立している。

「敬介さん。すこしお散歩しない？」

アヤ子は、つとかがんで鎖を拾い、かるく引いた。

女の足に口づけし、彼はアヤ子を見た。楚々とした飾りが魅惑的にゆらいでいる。

「ダメよ。あとはお散歩がすんでから……」やさしく言われ、敬介は這いはじめた。

その姿は、外見的には、見るも哀れな浅ましいものだが、敬介の人生のうちでは、無思慮で本能的に没頭できるこの一瞬こそ、もっとも充実したひとときかもしれない。

なぜなら、彼もまた、独善的に自分の孤壘に固執して悔いない、アブニストたちの仲間の一ひとりであるのだから——。

〈終〉

(カット・春川ナミオ)

一八八四年、ドイツの天才発明家のシュルツ氏は、いわゆる二浴法によるクロムナメシを發明し、更に一八九三年には、米人デニス氏が一浴法によりクロムナメシ法を改良し、それにより、以前使われたキノン、ガルゴンミョウバン、或は、燻煙による皮のナメシに代わって、すばらしい銀面を有する牛、馬、鹿等の革を作るのに成功、今日に及び、今では皮革の消費量が文明の一つのパロメータにもなり、特に乗馬女性が使用される馬装に、馬具やハンドバッグや、その他の装飾品に、またプレーをなさる方々には、鞭や貞操帯、パンティ、ベルト、各種のハイヒールのブー



アマゾンと

皮革フェチシズム

佐野 寿

ツやプレー用の轡につける手綱等々、枚挙にいとまない程、広範囲に使用され、将来もその需要が伸びるに違いありません。それでは何が女性の皮革フェチシズムをかり立てているかについて私見を述べましょう。

○

最近、我国でも特に都会に於いて、皮革製品に対する若い女性の関心が深まり、特にブーツ、ハイヒール、ハンドバッグは勿論、スポーツとしての馬装（長靴、キュロットの内股に張られる皮や各種の革製の鞭を含む）に興味をお持ちの方や、プレーとしての、女性の使用する下着、特に薄いクロムなめし皮の

一種のフンドシや、よく外国の女性が、しばしば愛好する豹やトラの皮でできたパンティブラジャー、更に太腿のつけ根までとどく、皮のサイブーツ等々、数え切れない程です。

我々のフェチシズムは非常に、しばしばマゾヒズム、或はサジズムと結合して把握されますが、洋の東西を問わず殊に皮革と云う材料は、その他の絹や木綿、ゴム、麻に比べて一段と強烈な、しかも鮮明なインプレッションを与えること云う事に（色々理由はありますが）関して先ず疑問の余地はありますまい。中でも、特に西洋の婦人が、他のどの材料よりも、好き好んで毛皮や皮革を裸身に直接ま

とって、うっとりとしたフェイッシュな境地にしたる事の多いのは、その方でのポルノグラフ写真に、しばしばお目にかかることからして、理解することができましよう。またサイブーツを彼女等がはく事により、長い引きしまった両脚が一層、引き立ち、美しさと力強さを強調する少なからぬ効果があり、更に乗馬の際に、よく磨かれた光沢のある銀面を有する長靴をはけば、その美しい脚は、そのまま馬に対する責め道具と化し、魅力的な脚の形は、皮革で被われている故に一層、りりしさを増す働きがありましよう。

さて、それでは皮革とそれ以外の材料との根本的な質的相違は、何による物でしょうか。

元来皮革は、どちらかと云うと、北方民族又は牧畜を営む民族によって生み出されたもので、非常に太古から存在するもので、長い間の経験によって動物の皮を上手になめす方法を見出したものでして、その歴史の古さからいって他の追従を許しません。特に必要性から彼等古代人は男女を問わず、特に北方の寒冷地帯では、今のヨーロッパ人種の先祖に相当する人々は、男女共に肌ざわりのまことによい、柔らかい皮のフンドシをまとい、また騎馬民族は有史以前から、ふんだんに、ぜ

いたくな馬具や衣服を作ったのでした。

その毛皮等の裸身に対する肌ざわりの心地良さや、それで作った馬具や鞍の乗り心地は早くから彼等をそのとりこにしたことでしょう。それは中国から伝わった絹にも勝るともおとりません。フェチズムを意識しようがしまいにかかわらず、彼等の生活には、それ程深く浸透して今日に至りました。

大昔の人々は、動物の皮をなめすのに動物の油脂を使いましたが、やがて天然のタンニンによって、うまくなめす方法を知る様になりました。クロムによる皮の処理法は、発明の国ドイツではじめて十九世紀の末に、又合成タンニンは、やはり第一次大戦時にドイツで必要にせまられて発明されたのです。特にクロムによるなめしは、薄く手ざわりのやわらかい、せん細な衣類としての皮の製造には、今日では不可欠です。特に皮の触感に優れている点は、それが天然の動物の皮膚を構成していたものである故、動物蛋白特有な、最適な保温性、吸湿性、気孔通風性、ごく自然な、なめらかさと特有なにおいと、皮特有の或る厚味がフェチシストを、たまらないまでに刺激するのです。

この点、皮革類似品、たとえば合成皮革、

またはゴムラバーでは、どうしてもその触感が著しくおとり、現在の所、人造品では残念ながらその領域には達していません。例えばどんな上質なゴムでも保温性はともかく、防水性が強固なあまり、気孔通風性は殆ど零でいわば「むれる」と云う現象が長時間の着用でおこってきます。もっともゴムマニヤの方々は、それ故に一層、ゴムのシートによってつまれる触感を楽しまれるのでしようが、これは直接、関係ありませんので言及しませんが、弾力性と云う点では優れた材料です。伸縮性、または弾力性に関しては、皮革にもタンパク質の一種のエラスチンやコラーゲンが重要な役目を果たし、自然で適度なエラスティシティを賦与しました水分透過性や吸湿性や収縮性に大いに貢献しています。

西洋の中世で（事によつたら今日でも何処かで）しばしば用いられた皮革を利用した残忍な刑がありますが、つまり、それは皮革の水による強力な収縮性により、罪人又は被拷問者の手足や胴体を巾広い皮革のひもで緊縛し、その上から、ひしゃくで水を注ぎますと数分後に皮は、じわじわと縮み、体の各筋肉を容赦なくしめつけて行き、気が遠くなるまで苦しむそうであります。その残忍さは、例

えば中世の教会に依る異端審問や宗教裁判所が実施したのでした。その際、用いられるものは皮革以外に鉄の鎖や、木の杵も時々併用され、その目もおおいたくなる残酷さは、とても我国で使われた、または現に使われている荒縄のみの緊縛や刑罰の比ではないとされています。

次に皮革のフェチストに及ぼす魅力の特質に、その臭いが上げられましょう。

それは、ちょうどチーズや女性のある種の臭いと同様、いわば動物性蛋白の臭いと云う点で正に同じであります。今日ですら、よく欧米の男性は、しばしば妻に入浴をさしひかえる様に要求し妻の醸成する強烈な臭気が残っているようにさせ、それによって、かえって性的刺激を倍増させようと試みる者は少なくありません。

かの英雄ナポレオンは戦陣の疲れの為に、古チーズの沢山ある小屋で仮眠をとった際も夢うつつに愛妻の体臭を連想して、思わず、「許せよ。余は疲れておる……」と、いわしめたという話があります。それと同様、皮革には何かそういうものを連想せしめる動物的なにおいがあり、フェチストを刺激させそれが更に程度の多少こそあれ、あこがれの女

性のイメージと結びつき、Mまたは時としてSと関連性を具現するに至るのです。特にチーズとか、女性の体臭や皮革ブロースの臭いというものは非常に個性的であり、つまり、ある人には単に不快、もしくはあまり刺激的ではないが、また別のある人々には、強力でこの上もなく魅力的で不可欠な要素になります。我国には、あまり臭気の強烈なチーズはありませんが、西欧には本当に連想させるものが少なくありませんし、その臭いの好き嫌いは彼等でもまちまちです。私も、あの青カビの生えた古チーズの臭いは、くさくてやり切れない思いをした経験がありますし、またある種のブーツは、そのなめし方にもよりますが、強烈なおいがあります。

次に男女を問わず下ばきの材料について考えてみます。我国では元禄時代のぜいたくな武家階級の一部で、男子は絹の六尺フンドシを、また女性は絹の腰巻を用い、そのぜいたくさを、かの細井平州が、とくといましめたくらいでした。平州にいわせれば、いかに絹が、はき心地が良くても、何もフンドシや腰巻にする必要はないだろう。もつたいたいと云うのでした。シルク特有な、すべすべした触感の良さは想像に難くありません。麻や木

綿のフンドシやサポータより、段違いに素敵でしょう。

我国の如く、比較的、高温多湿な所では、皮革は、かびが発生し易いと云う難点がありますが、最近、皮革加工技術進歩により、防黴剤を表面にカゼイン塗料と一緒にしみこませる方法で、その難点を克服できるようになりました。特に上質で柔らかいクロムなめし皮による下ばき類の触感は、あらゆる材料中の王様でしょう。皮革が人体に対する触感の王様にたとえますと、毛皮は、まさに女王様といって良いかと思えます。よく欧米のフット・モデルの女性が、ミンクや黒テン、銀ギツネ、豹等の毛皮で豊かな全裸をつつんだポーズや、更に太腿に毛皮をはさみ込んで、気持よさそうに寝そべっているポーズに、我々はしばしばお目にかかりますし、又、米国の女子プロレスラーによってはかれる豹のパンティーにスエードの長靴や、また毛皮や皮革をふんだんに使ったサーカスの女猛じゅう使いも仲々すばらしいもので、彼女等のたくましさや美しさを強調し、妖しい雰囲気をも出し出させるのです。また劇映画で「毛皮のマリー」と云うのがありましたが、そこでは、ふんだんに皮や毛皮の服装を着た女主人公が

演出し、マゾ性フェチストを大いに堪能せしめ、うっとりさせました。特に私には、この女主人の長靴をはいたすばらしい乗馬服が大変、気に入りました。その手にした答を、しなわせてる女主人は、一種のこわい程の魅力と迫力がありました。彼女の馬に乗る姿を十分、連想せしむるに足る演技力も、ずば抜けていました。

しゃれた皮革を、ふんだんに使った馬装をした美しい女性に関して、私は数年間、カリフォルニア州の州立自然公苑の馬場の付近の森で、女優さんではないかと思われる容姿端麗なアマゾンに偶然、出会った事がありました。その鮮かな胸がきゅっと痛くなる強烈な印象を受け、数十秒その前に立ちつくしました。りりしい、しかも女性らしさが馬上で一層強調された麗姿を前にしては私は一瞬動けなくなってしまうのです。その直後、私は夢ではないかとさえ、思った程です。ただでさえ体格が立派で、脚部の細長く引きしまった、女神を思わせるアマゾンは、そのブーツをはくことにより、ますます引きしまり、それが艶笑と相まって、この世とも思えない妖しいまでの印象を与え、更にバックの森林が、そのフン囲気を、くるおしい迄に助長し

ました。

馬の口は、草をはんだ後らしく淡緑色の泡を含んだ唾液を見せ、そのスマートで立派な馬体は、すでに汗ばんでいました。これは、もう小一時間は馬場でその女の人に充分、乗り込まれ責められた様に見受けました。鞍やその他の馬具も、タンニンなめしの上質の様でしたし、特に光った拍車をつけたブーツがきわ立っており、左手ににぎられた答と同様に對する責め具の役を果たしていました。見ているだけで、彼女のりりしさと高貴さに圧倒され押しつぶされて、思わず土下座したい衝動にかられたのでした。

更に忘れ難いのは、そのアマゾンの脚とブーツ及び、ブーツと馬具との間の運動によって、にぶく発する心地のよい音であり、残雪にくいこむ馬蹄の、キシッキシッという快音であり、また汗くさい馬体とアマゾンの馬装のセクシーなおいででした。彼女が乗っている鞍の真下附近の馬体が、じんわりと汗の為に栗色から光沢ある黒褐色に変わり、馬の毛皮のにおいもアマゾンの長靴の香りも、決して微弱ではありませんでした。時々彼女は脚を蹬からはずし、深々と鞍に跨ると、度々チャリンと拍車とあぶみのぶつかる音を発しま

す。

やがて彼女は身を起こして無造作に手綱をつめ、乱暴なほど拍車をガキッとけりこみますと、馬は森林の道をダッシュして視界から消えましたが、ひずめの音は相当長くテンポを上げつつ、余音を残して行きました。このようにクリテリオンの高い皮革によるアマゾンの馬装は、マゾヒストを一瞬、驚嘆のあまり立ちすくませしめ、魂を宙にうばい去ってしまうほど強力な魅力があることが、わかります。そのように、皮革の摩擦音は仲々さわやかでリズムミカルな快音に相異なるのです。

さて皮革が人体や皮膚に及ぼす特有な快感とフェチストを引きつける要因は、以上の通りですが、更に忘れてはならない事は、毛皮や皮革と云うものは特に乾燥状態では摩擦により、かなり多量の静電気が発生し、それ故、一種のむずがゆい程の触感による快感が得られる事実があります。それは木綿や麻布では、とても得られないものです。

びろうな話で恐縮ですが、女性の大切な体毛には特に摩擦によって発生した静電気を貯えるコンデンサーの働きがある故、一般に、たとえばそり落としてしまつては快感(この場合、乗馬やホースプレイも当然、含められ

る)は多少とも減殺されるとされています。創造主の神は、決して不要なものとは造られないのでしよう。体毛といえど生きた毛皮に違いないのですから、自然のままの状態がのぞましいと西洋の医学が指摘しますのも尤もでありますし、それにより保護、例えば乗馬の際の湿疹や股ずれを防禦する役目があるのです。

もう一つの要因ですが、それは皮革がなめされる時はタンニンを使っても、またクローム処理をしても、いずれもかなり強い酸性溶液に皮を浸漬するので、後で水洗乾燥後もPH3位の微弱酸性を皮革は呈するので、その残留しているタンニン酸やクロム酸のために皮膚には多少、水分がありますので一種の収斂的な触感をおぼえ、皮膚がかすかに引きしまるような、むずがゆいような快感があるという話も聞いたことがあります。

従って、すべての馬具類や革長靴、手袋、皮革の衣類、パンティー、下着等々は、厳密には中性ではなく弱酸性ということになり、ましてや直接それを体に着用すれば、他の材質の製品では得られない、むずがゆい程の収斂感覚を、味わうことができるというわけなのです。

衣類としての革製品は、近ごろは殆ど例外なくクロームなめし法により作られ、屠殺された動物(主として牛ですが、馬の尻の皮でもよいのです。水牛は、ごわごわして不可)の皮革は、すぐに飽和食塩水につけ殺菌防黴剤を添加してから重クロム酸の硫酸々性の赤い液に漬けてから、ハイポやブドウ糖で還元して緑色の液にすると、クロームは三価になって皮革にしっかり吸着して、なめしの工程が完了し、水洗して(酸は完全には、とれませんが)ドラムを使ってのぼして乾かすというのが一番オーソドックスな方法ですが、我国では皮革の大半を主として北米から輸入しますので、原料費が高くついてしまします。(原料費が80%強を占め、加工賃は従って20%にもならないのが実情です)

尚、最近のことは知りませんが、一昔前は皮革業というのは何かいやしい人々の従事するものと見做され、例えば西欧ではジプシーの群れや貧しいユダヤ人の仕事のようでしたし、我国でも現在はどうか知りませんが、昔は第三国人の労働者とか部落民の人々がよく従事する仕事であるといわれたものです。現在是我国でつくられる皮革はJISの規格もあり、ちゃんとした近代化学の設備のある、

なめし工場で大半が作られるものと思いますので、一昔前の、そういう商売の偏見は殆どないのです。特に進歩した皮革のドイツ法には、化学的に見て高級な技術を要求されるのです。例えば一昔前ですと、たまに、それごくたまにですが、皮革アレルギーとかかぶれの起こることがあり、医学的に問題になったことがあります。

特に馬具による、かぶれは皆無ではありませんでしたが、いわゆるドイツの化学者の発明で、皮革をあるアレルギーをおさえる薬品(パテントですが)をカゼイン系塗料に混ぜて処理することにより、カブレの現象を解決したのです。それでこそ安心して女の方は乗馬も出来ますし、衣装や身につける装飾品として皮をひんぱんに使え、更にSMプレイにも不安なく使用できるわけです。彼等ドイツ人科学者グループの貢献を見逃がすことはできません。お蔭で、例えばプレイとして女性の方が皮革をパンティー等下着に使用されても、梅雨期以外は、まずそんなに黴は発生しないし、たまに使用する分には何等、不衛生ではないといわれています。只、時々洗うが必要で、その際、多少とも水による収縮を考慮に入れる必要がありますので、ドライク

リーニング式の洗い方が良いことは申すまでもありません。そこは、化センやナイロンのパンティーやストッキングを洗うようには行かないのが難点です。(例、皮のパンティー貞操帯)

皮革には、尚それ以外に温度により鋭敏ないわゆる熱収縮現象があります。コラゲンがその役割を演じるのです。

先刻は皮革の、はだに対する、むずがゆい接触感覚に、静電気と水素イオンの間接的な作用があることを述べましたが、もっと直接的で大切な要素、つまり皮革特有の柔らか味ふくらみ、すべすべする、せん細な触感と、引き締まった固さというものは、皮革の銀面を仕上げる時の光沢剤や加脂剤、並びに軟化剤の添加によることは間違いありません。

ワニ皮や水牛皮の特殊な例を除けば、牛でも馬でも、羊類の皮はグリセリンやロート油グリコールで軟化させ、又光沢を与えるのにゼラチン、卵白、血清蛋白、ワックス、セラフノスのうちの、いずれかを添加し、同時に染料や色素、並びに防腐剤とカビ止めを加えツヤ出し機にかけるかアイロンプレスにかければ、あのうっとりとする色つやが出るのです。更に強い光沢を出したい時は、ラッカー

を吹きつけるか合成樹脂のエマルジョンの仕上剤を使うわけです。

乗馬靴には黒と赤茶色の二通りしか今の所作られていませんが、それに反しサイブーツやハイヒールブーツは染色技術の進歩により空色、桃色、紫等々、殆ど、どんな好きな色のものも市場に見られますし(大半はパリ、ロンドン等からの輸入品)しゃれたショウウインドーのケースに色とりどりのサイブーツが林立しているのを眺めるのも楽しいものです。最近特に、あちらの女優さんが金や銀色の大胆なサイブーツにミニスカートという姿態で、都会を闊歩しているようです。またあまり強い光沢のを好まない方には落ちついた艶消し仕上げのほどこしてある様々なブーツもあり、珍拍車を型どったアクセサリーのあるもの、そう珍しくありません。

また興味深い物に「再生皮革」と呼ばれるものがアメリカやスウェーデンで試作されています。

これは、いわゆる人工皮革ではなく、両者はしばしば混同されています。つまり人工皮革はポリウレタンの如く人工的な高分子で、その成分は全然、天然の皮とは別ですが、再生皮革は天然皮革を乾燥して、それを一旦、粉末

にして有機溶媒で再生、成形し薄いスキン状にされます。それはソーセージの皮として食品加工に有用で、しかもスキンとしてもゴムより上等なので、コンドームや、いぼつき避妊器として利用するのに有望視されます。しかし、今は未だ費用の関係で試作段階ですが再生皮革は成分は天然のものと違わないし、またいくらかでもシートして薄く成形できる点で期待されています。

それに反し人工皮革は、あたかもゴムと本物の皮の中間的な諸性質を有し、その触感は再生皮革には遠く及ばないとされています。それは伸縮性に乏しく、皮膚になじみにくいからでしょう。避妊具に関してありますが一昔前は魚の皮(フィッシュスキン)が使用されたのですが、その使用感とはかくも強度の点で破れ易く、近頃は使われていませんが、何か技術の進歩で強じん出来るかも知れません。現在の避妊具材料に関しては、ゴムが王者の位置を占めているといっても過言ではないと思います。

一般に欧米人は無器用で、日本人のように女体を縄で上手に緊縛する事は苦手のようですが、それに代わるものとして、柔軟な皮革でこしらえたコルセットを、しばしば使い、

日本のアマゾン・スナップ



体力の貧弱な我国のM男性が人間馬にされたら、ひき蛙のように、べっしやんに乗り潰されるのに数分とはかからないと考えたとしたら、はたして邪推でしょうか。

その女性は、皮革で武装することにより、アマゾンのようにファイトがあふれ、戦闘的攻撃的にM男性を責めて、無条件降伏させてしまうに違いないのです。

ハイヒール付のサイブーツのあみ上げ式と同様に、多数の革ひもで血行が悪くなるほど徹底的にしめ上げ、固く結ぶ仕方を採用しているようですが、そういう一見、売春婦的な妖しさをもつ外国の女性が、肉体美を誇張しつつ、あわれなやせたマゾ男の人間馬に、むんずとばかりに打ち跨るフォトは、ある人には下品でいやらしく感じさせるかも知れませんが、そのクリテリオンによる性的魅力は、ひよっとすると最高であることは大いにあり得ることです。そこでは跨った女は皮革のコルセットやあみ上げのサイブーツの妖しい魅力で百パーセント生かしているからです。若し

やや他人事のような書きっぷりですが一度筆者も、アムステルダムでSM娼婦とプレーをし、何の抵抗も出ないうちに二分以内にライトダウンさせられた悲しい、そして口惜しい経験があります。幸か不幸か、相手の金髪の娼婦は慈悲深く、私に怪我はさせませんでした。その三日程前に、やや下痢で体力がなかったのも完敗の主な原因でしたが、55キロの体格では70キロもある娼婦の馬になりたくても無理だと悲しくもあきらめ、それから殆ど一度もSM娼婦の家へは行きませんでした。今回はこのおはずかしい告白が目的ではありませんし、その後の十行ぐらいは

あまりにも煽情的なので、はぶかなくてはならないと考えたのでした。今考えましても、体力の差は如何ともしがたいし、いまだに自信がもてませんが、とにかくその娼婦の妖しい皮革の姿態には、完全に降参してしまったものです。

以上のように書きますと、あたかも皮革が万能であるかのような錯覚を起こされる読者もおありかと思いますが、必ずしもそうではありません。先刻ちょっとふれましたが、ゴムの持つ魅力も大きなもので、とくに同様な目的での、オムツカバーなどは、どうしても生ゴムでなくてはならないでしょう。上等な肌ざわりの皮革は案外、尿や汗には、それが例え少々防水剤がほどこしてあっても、弱いものです。雨靴にも耐水性の面からゴムに分配が上ります。あまり、しばしば皮革のブーツを水にぬらすと、往々にして、ひび割れや収縮が起こり寿命がへります。せっかく黒く染めた光沢のある乗馬靴でも、高温多湿の所では、つま先にひびが入り、乾くと、かびではありませんが白っぽくなります。

彼地でよく見たのですが、あちらの乗馬をひんぱんにたしなまれる御婦人は、ギャロックスと云うゴム製のカバーのようなものを長

靴の先にとりつけます。ロンドン辺りでも、乗馬靴で歩道に行く女に人はしばしばお目にかかりますが、特にバスや乗物にのるときはいつもエチケットとして拍車ははずしているのは好ましいと思います。故意にしないで刺絡用拍車が他人の足に当たりますと、多少とも怪我して危険であることはいうまでもありません。

刺絡拍車のついでですが、アムステルダム辺りでも、そんなものをサイブーツにとりつけた娼婦等というものは、私の知る限りではお目にかかりませんでした。もし使う娼婦がいたとすれば、ロンドンやパリ辺りのマゾヒストクラブのような所でしょう。先ず刺絡用拍車は、例外的にしか使用されないでしょう。

終りに皮革製の鞭について、考えてみましょう。

本来はSM娼婦が鞭を使うのは、そのムードを高めるためであり、やたらに傷が出来る程の痛さで相手を打つというのは、むしろ下手なやり方なのです。皮革の鞭とか拘束具は特に責めが加えられなくとも、それだけで充分なフェチシスト的效果を発揮し、むしろ下手な責めよりは、はるかにムードを高めるに

違いありません。いわんや、巾広い皮革の女性用フンドシパンツやコルセットの責め衣装に答を加える事により、雰囲気は一層、引立ち、特に汗ばんだ肌は湿気を帯びてピタリとばかり密着して皮革にはりつくように吸いつくその触感、皮革フェチシストにとってこれとてえられないものがあります。殊に各種の皮の答を手にもった女性を見ただけで彼女の乗る馬や人間馬は一種の恐れをいだき、容易に彼女の意志の前に服従してしまうものです。

人間と違い馬の両眼は高く離れた所についてる関係上、真直向いていても、かなり斜め後が見えますので、乗ってる女の人が実際、答で打たなくても、そのゼスチャーをするか又は答で空気をヒューッと鳴らすだけで、馬は驚いて命令に屈服し、駆け出すのです。御記憶と思いますが、例えばジェーフォンダ主演のSF映画バーベラの中に出て来ましたものに三メートルはたっぷりある大蛇の如く太い鈍重な、しかも表面に大豆の粒ほどのイボのついた、てかてか油ぎったような黒褐色のムチがありましたが、見るからにすさまじいもので空恐ろしいばかりでした。人間はおろか牛馬さえも鞭打たれたら、一撃で参って

しまいました。勿論、そんな大きな鞭をふりまわすには、女性でも特に大柄なアマゾンでなくては責める方も大変でしょう。

ついこの間、六時の子供のTV番組でディズニーの「西部の馬」を見ましたが、非常に私にとって意外であった事は、ベアレディという駿馬に跨った、エレナというカウガールが女主人公でしたが、私にとっては、どんなSMフィルムにもおとらないショックを受けました。といいますのは、深夜放送での、「女子プロレス」ならいざ知らず、子供のためのディズニーのものの中に、こういうタイプのアマゾンが出現し、M性の大人の度胆を抜いたからでした。

エレナの役に何という女優さんがふんしてるか知りたいものですが、そのエレナの皮革を大量に取り入れたカウガールの馬装はいうに及ばず、駿馬ベアレディに荒縄をもつて打ち跨り、乱暴な程に、ギャロップを強要せしめ、仔牛をめがけて縄で生捕りにし、女子とも思えぬ精悍さで馬から飛びおけると縄をぐっとたぐり仔牛を捕え、右の前脚をつかみ引っぱり上げると仔牛はおお向けにひっくりかえり、すかさずエレナはむんずとばかり跨って地面に組伏せてしまい、あっとい

う間に左右の仔牛の前脚を縄でからめてしばってしまい、すかさずエレナは逆方向に体をたくみにねじり、しっかりと跨り直してから後脚二本を乱暴にしばりつけ、尚あばれてもがく仔牛を股責めにし、体のパネを利用して、そのあわれな動物を地面にめり込む程責め、抵抗が終る頃、前後つまり四本の脚をまとめて緊縛し、それを勝ちほこったように目下のカウボーイに、引き渡すシーン（これは数十秒でしたが、このシーンが二回ありました）は何物にもまして、しびれる程強く感銘を受けました。

私のそばで見ました妹も、仔牛がエレナに責められてる間中「まあ可哀想に」を連発してましたが、尚、征服者然としたエレナがベアレディーに打跨って、ギャロップで波打ぎわに沿って馬を進めるシーンも、見ていて胸がキューツと、むずがゆい程でした。

何といっても一番残酷でしたのは、エレナが馬乗りでねじ伏せた、あわれな仔牛の尻にカウボーイのさしだした焼きゴテをジュウツと当てるシーンでしたが、これはまるでサディスチンによってM男が荒々しく犯されている連想シーンよりも、ひどいものでした。アメリカの女には本当にああいうタイプのア

マゾンが多いのかしらと思ひ、ショックを受けました。見ていますと、思わず女のムンムンする体臭と皮革の動物的なエロティックで性的な肌ざわりや香りがミックスして鼻を刺激されるかのようなでした。およそ、この世の中のマゾヒストにとり、あこがれの女主人によって馬にされて緊縛され、焼きごてを無残に当てられる程、はずかしくも屈辱的でセクシーなシーンは、あるまいと思われた程でした。その残酷さは、映画の活劇に出る女戦士が、倒した敵に刃や剣でとどめをさすという殺りくシーンと匹敵するでしょう。

最後に強調しなくてはならない事は、スポーツとしての馬装にしる、又SMプレーとしての皮革や毛皮の衣裳や肌着にしる、それを着用する女性が、いかなる場合でも、美しくなければならず、これは暗黙の内とはいえ、絶対必要条件でありましょう。忘れてはならない事は、例えば皮のサイブーツ一つ、又は一枚の皮コルセットを考えてみても、最初からすらりと美しい脚や豊かな胴体に着用するものであり、決して短く太い脚をごまかして美しく見せかけるものでもなければ、体つきの欠点をカバーするためのものであってはならないのです。いや、そんなごまかしは不可

能な事です。あたかもマックスファクタ等の白色クリームは、生まれつき整った色白の美女が塗ってこそ引き立つものであり、色黒い顔をおしろいやクリームでカバーするのが無意味であるのみならず、ナンセンスであるのと類似しています。

M性の皮革フェチシストが強烈に皮革を着用し使用する女主人にあこがれるのは、この故にであり、そのミストレスは元来からして妖しくも美ぼうにかがやいた人であることを暗黙の内に前提とするものなのです。そのミストレスのサジスチンぶりに、M性マゾヒストは永遠の希求と愛を感じるわけです。従って皮革は、そういう内容の充実した、すばらしいサジスチンに対する装飾であり、一段と光輝くようにさせるものなのでしょう。同様にアマゾンの若々しく美しい脚は、乗馬靴をはく事により一層、引きたち、皮革のキューロツトと相まって、女性が馬に乗る際に、ジワリジワリと緩慢ではあるが皮特有の、しびれんばかりの持続性が得られ、従って彼女等にとって、毛皮皮革は強力な武装なのです。

(終り)

×

×

×

×

×

×

連載 M 小説



ピエロ
床屋 (9)

鬼山絢策

世間の噂

毎日、暑い日が続いた。
政吉も恥多い生涯だったが、あの夜ほど、
ひどい屈辱を受けたことはなかった。
夫の目の前で姦通して見せる不貞の妻！
姦夫は店の使用人である。
姦夫姦婦の手によって手足を縛られ、自由

を失った自分にあらん限りの嘲罵を浴びせながら破廉恥な痴態を見せびらかし、
「これでもか、これでもか」と夫を責め辱かしめて、
狂態の限りをつくす妻！
情痴の果てに抱き合って眠る、ふたりを見ながら、
「どうしてくれよう！」
と憤怒に燃え、
「いっそのこと、二人を殺してやろうか！」

前回までのあらすじ

若い頃は女道楽にあけくれた斧田政吉だったが、栄子という最愛の妻を得てからは、まじめ一方になり、家業に精を出した。

栄子は一度結婚に失敗し、バーに勤めていたが政吉に拾われてからは一生懸命政吉につくし、よく働いた。

だが五年経って、経済的にもゆとりが出てくると、十五も年の違う夫が物足らなくなり、店の若い者友市と浮気した。

政吉は年の違いを考えて妻の浮気を大目にみてやっていた。友市とは喧嘩別れした栄子だったが、次に来た善夫という職人が曲者で、栄子は浮気の枠を越えて善夫を真剣に愛した。いまでは夫と別れて善夫と一緒にいるつもりでいる。いまでは、どうにもならぬところまで来ている。

とも考えた。現在の法律では、これほどの大きな罪悪を犯している二人を、どうすることもできないのは矛盾している。法で裁けないなら、自分自身の手で裁くよりほかない。だが、五十にもなって嫉妬に狂った刃傷沙汰も大人気ないと思う。
これほどの屈辱を受け、愛想づかしをされたら、夫として当然、別れるのが至当だ。だが、その別れ方が問題だ。

自分がこの家を出て行けば問題はない。だが営々として築いたこの店を、姦夫姦婦の手に委ねるのは、あまりにも業腹だ。思いきって火でもつけて焼いてしまおうか！

そういう極端な行動は、思いつくだけで、政吉としてはできなかった。

思い惑い、悩みぬいている時に現われたのが清太郎だった。

清太郎が来てくれた時、これで救われると思った政吉だったが、事實は逆の効果が現われた。

栄子と善夫は「厄おとし」をしたように、もう天下に恐いものはないといったように、夫婦気どりを露骨に見せつけた。

政吉の主人としての立場を、一つ一つ、破壊して行った。

善夫が政吉に対しての呼び名が、次々に変わっていった。

最初、店に来た時から三カ月間は「旦那」と呼んでいたが、それからしばらく「政吉さん」と言い、いまでは「おやじさん」と言うようになった。昼間、店で働いている時は、「おやじさん」だが、夜、栄子と三人になると「おやじ」とか「じい」に変わった。

栄子も政吉を「あんた」とか「父さん」と

か言わなくなった。昼間でも「じいさん」と呼び、気嫌の悪い時は、客のいる前でも「じい」と言ったり「政吉い」と呼び捨てにした。

仕事の上でも明らかに政吉は差をつけられた。

善夫が客の顔をタオルで蒸す。石鹸を拭いて栄子にボンと投げる。栄子は受け取って、瀬戸引きの容器の蓋をあけていれる。

政吉は自分で、いちいち始末に行かねばならなかった。

忙しくなると善夫が二台の椅子を受け持つて整髪を済ませると、栄子がひげ剃り専門にまわる。仕事の手ぎわよくはかどった。

政吉は何から何まで一人でやらねばならず全く孤立してしまった。

朝は六時に起きることを命ぜられ、掃除から準備まで一切させられ、朝の早い客を一人でこなした。栄子と善夫が起きてくるのは八時頃で、夜はタオルの洗たくから掃除まで、善夫のやっていたことを全部やらされた。

そうなるやと妙なもので、古い馴染みの客は政吉にワイ談やら、若い女房に対するひやかしの冗談を言わなくなった。最近では学生デモがどうの、政治が悪いのと、硬い話ばかりす

るようになった。

晩飯は、いつも三人で食べていたのが、後かたづけで政吉が遅れるようになると、栄子と善夫はサッサと風呂に行き、二人でビールを飲みながら食べるようになった。膳の上に並ぶおかずまで善夫と政吉では違ってきた。

朝六時から夜八時まで、十四時間の労働は政吉をヘトヘトにさせた。

後かたづけを終わって風呂へ行くのが唯一の楽しみとなった。

風呂屋の親父の徳五郎とは同じ年で、店を開いた時から将棋友達として親しかった。

この夜も政吉が風呂屋の裏口からタオルをブラ下げて入って行くと、釜たき場で徳五郎が湯加減のメーターを見ていたが、政吉を追いかけるようにして浴槽に入ってきた。

「どうだい、久し振りで一番やらねえか」

「いいな」

「飯はまだだろう。たまには俺んとこの飯を食って行けよ」

風呂から上ると徳五郎は政吉を二階の座敷に上げた。冬の間だと、平たく大きな釜の上の厚い板の上で将棋をさすと、下からポカポカして気持がよいのだが、夏になると二階の涼しい部屋に移った。

いつもと違って御馳走が、かなり並んでいた。酒もついている。

「何だいこりゃ。えらくサービスがいいな」

「なに、大したこたあねえ」

「こんなことしたって負けてやらねえぞ」

この頃は冗談口もきいたことのない政吉だが、徳五郎の前では気を許して軽い口が出るのだった。

二人はチビチビやりながら、将棋盤に向かった。

しかし政吉の連戦連敗だった。

「おかしいな。この頃、お前さん疲れてるんじゃないか。サッパリ手応えがねえ」

「よし、も一番、来い」

「やめとこう。いくらやっても、お前さんの負けだよ。そりゃそうと政吉さん、気にさせることを言うが、聞いてくれるか」

「何だい……」

「この頃お前さんの店のことを、世間では何と言ってると思う？」

政吉は折角いい気持ちに酔いがまわってきたのが一ぺんにさめて、酒がまずくなった。

「ピエロ床屋と言ってるぜ。お前さんは女房の尻に敷かれ、いいようにあやつられるピエロだと言ってるぜ」

「何と言おうと人の勝手だ」

「あのまじめな善っちゃんまでこの頃じゃあすっかり人が変わった。一体こりゃ、どう言うことなんだ」

「どう言うことって、見る通りのことさ」

「あまいのもいいが、こちらで手綱を締めねえと、取り返しのつかねえことになるぜ」

「わかった。忠告はありがたく聞いておくがそのことは、ま、そこまでにしておいてもらいたい」

「言い過ぎたかも知れねえが、気を悪くしないでくれ」

政吉の傷に触れられたくない様子に、徳五郎は話をひっこめた。

「永らくつき合ってきた徳五郎との将棋も、今夜でおしまいになるかもしれない」

政吉は淋しかった。時計を見ると十一時になろうとしている。

政吉は家へ帰りたくなかった。帰れば「どこで油を売って遊んでた」と栄子が怒るに相違ない。それを面白そうに眺めている善夫の顔が見たくなかった。

だが徳五郎の所へ泊まるわけにもいかず、コソコソと風呂屋の裏から自分の家の裏口へと路地ひとつまたいで、台所から奥の間を覗

いて見た。

昔、若い頃夜遊びに行って遅くなり、店の裏口からソツと朋輩を起こして開けてもらいおかみさんに怒られはしないかと心配しながら入ったことを思い出した。

いまは、まるで使用人と同じ気持ちになっている自分が情けなくなった。

主権の相違

奥の間は明かりがついていたが誰もいなかった。ビールびんが倒れ、膳の上には喰い散らかした食べ物の皿が一ぱいのっていた。それを洗って片づけるのは、政吉の新しい役目のひとつになっていた。

膳の上のビールびんには、まだ少しビールが残っていた。政吉は、あさましいとは思ったが、コップにあけて飲んだ。

「アハハハハ」

と、かん高い栄子の笑い声が二階から聞こえてきた。

「痛ててえッ、おい、やめてくれ」

と善夫の声もする。

「また二人で、いちゃついているんだな」
皿小鉢を片づけかけた政吉は、聞くまいと

しても二人の声が耳に入ってくる。

だが、その中で善夫の苦しそうなうめき声が気になった。

「ただのふざけようではない。一体どんなことをしてゐるんだろう」

好奇の念がおさえきれず、政吉は階段のきしみを注意しながら上って行き、中途から頭だけ出して部屋の様子を見た。

政吉にとっては意外な光景が目映った。

シュミーズ一枚になった栄子が、善夫を仰向けに倒して、その顔の上に馬乗りに跨っているのである。

丁度こっちは、栄子が後向きになっているので、善夫の顔は見えなかったが、浴衣の前がひろがって長い足が此方に向かって八の字にひろげられていた。そこに政吉は、自分がとうてい及ばない証拠を見た。いくら腹をたてても、この事実はどうしようもない。

善夫は上に乗った栄子を振り落とそうと暴れた。栄子は笑いながら、悍馬を禦すように尻を振って押さえつけている。

だが、ズデンとひっくりかえった。

「ああ、だいぶあいだが空いたからなあ」

また手入れしてやらなければと、政吉はかつての楽しみを想い出した。

ひっくり返った栄子は、寝たまま足を伸ば

して善夫の首へからめた。

「おい、もうよせよ」

栄子は構わず首を太股で締めつける。

「善夫にも、ああいう好みがあったのか？」

政吉にとっては悪魔の化身とも思われる善夫に、こんなM的な素質があったことは意外だった。

しかし――

政吉の見るところでは、栄子が自分に対してやる時とは、一見同じように見えて、根底から違っているのだ。

善夫に対しては、牝犬が牝犬にじゃれついている感じであった。

牝犬がやめると本気で言えば、いつでもやめるのだ。そこに、あくまでもプレーとしての愛情がこもっていた。

政吉に対しては、栄子に憎悪があった。

政吉の意思は全然無視され、好むと好まざるとに関わらず、栄子の思いのままに弄び、栄子が満足するまで責めさいなむのだ。

一言で言えば「主権の相違」であった。

笑いながら善夫の顔を見ていた栄子の視線が、ピタリと政吉に向けられた。

「いままで、どこへ行ってたんだい」

栄子は善夫の首を太股ではさんだまま、どなった。

善夫は栄子の太い足を片手で持ちあげて、起き上った。

「おやじさんも見たいのかい」

その目は陰険にひかり、途端にMからSに変わっていた。

栄子もそれにつれて、同じようにサディステイックな表情になった。

「爺い、此処へおいで！」

栄子という女は、女らしいやさしさの出るときは平凡な魅力のない顔であるが、S的になった時は目尻が釣りあがり、口もともキュッと締まって、凄いくらい美しくなるのである。

「この目、この顔に俺は参っているのだ」

政吉は観念して階段を上って行った。

パンパンパン！

といきなり平手打ちを喰わせた栄子は、その顔の前にシュミーズを捲って突っ立った。

「妾達のことをそんなに見たいか！」

愛のたわむれに上気した女体の香りが悩ましく鼻をうった。

「黙って妾の言うことをきくか。きかなきゃまた縛ってやる。どっちだい」

「いようにしろ！」

「よし、そいじゃ、そこへキチンと坐ってごらん。そして、これから妾達のすることを見つめるんだよ。ちよつとでも目を離さずに、最初から終りまでよく見ているんだよ」

「ばかばかしい。そんなことはできないよ」

「この野郎！」

栄子は政吉の薄い頭髪をひきむしるように掴むと、激しく前後に振った。

政吉の顔は、目の前の栄子の肉体に何度もぶつかった。

「見たくないのかい、妾達の愛し合うところを」

「見たくない。俺は下へ行くよ。まだ片づけものが残ってるから」

「何言ってやがんだい。妾達のこと見たいからコソコソ泥棒猫みたいに覗きに來やがったんだろ。だから特別に見せてやろうって言うんだよ。拝ませてやろうってんだよ。かくれて覗くなんて卑怯だよ」

「おいおい、耳が痛てえな」

善夫が、ひやかした。

「あんたの時は違ふわよ。妾が承知してたんだもん。此奴は妾の許可なしに、盗み見しに來やがったんだから許せないんだよ。こんち

キショウツ」

猫の額を畳にこすりつけるような折かんを加えた。

逆毛立った剛毛のブラシがチクチクと頬にささるような感じだが、善夫さえ意識しなければ、これは政吉にとって快い刺戟なのだがいまの政吉は善夫の存在を消し去ることはできないので、やはり苦痛と屈辱の方が強かった。

「よせよ。汚ねえ」

栄子の身体を突きはなした。

「おや、いまなんて言ったんだい。汚いだった？ お前、まだこの妾に抵抗するつもりかい。よし、思い知らせてやる」

栄子は、政吉の顔のまん中へ足のうらをおしつけて蹴倒した。

「だめよ。やっぱり、縛らなくちゃ。馴らすまでは当分、縛ってしつけてやる。善っちゃん、手を貸してよ」

「手数のかかる爺さんだな」

栄子がおさえつけている間、善夫は面倒くさそうに動いて縄を持ってきた。いつの間にか栄子が政吉を縛るために麻紐を用意していたのだった。

政吉は清太郎の言葉を想い出して、二人の

なすがままにおとなしくしていた。

政吉の両手をひろげ、一方は柱に、一方は階段の手すりに縛られた。部屋の隅に、政吉を中心にして両手をのばして一直線に綱が張られた。

「サアはりつけにしてやった。ざまあ見ろ。これから妾達がどんなことをするか、よくそこで拝みな」

酷い遊び

栄子が政吉の鼻をねじあげた。そして善夫に抱きついて行った。二人は互いに顔中へキスし、栄子は善夫を抱いて仰向けに倒れた。

「どうも調子が悪いな」

善夫は政吉の方をチラと見て、

「いいことがある。奴の目をふさいでしまっんだ」

「え？ 見たいってものの、見せつけてやろうじゃないの」

「いや、見せない方がもっと面白い効果があるんだ」

「じゃあ、やって見ようか」

善夫の意見が通って、栄子は政吉にタオルで目かくしをした。

善夫は俄然、積極的になり、荒々しいまでに栄子に挑んだ。

ふたりは時々政吉を見た。

泣き出しそうに口をゆがめて喘ぐのが二人の情熱をたかめた。

「ね、いいだろう。こっちから爺いの苦しむのを十分眺めることができる。爺いの方は見えないうが、俺達のはしていることは手にとるように分かるはずだ。ね、ほら」

たしかに政吉は、ふたりの呼吸の乱れを聞くだけでも、その進行状態が想像できた。

「ハレンチだなあ、お前って女は」

「何言ってるんだよ。あんただってハレンチな相手をしてるじゃないか。ウフフフ」

歓喜を表現する栄子の叫び声は、政吉との間では、かつて聞かれないものだった。

もちろん栄子が意識して、政吉に聞かせるために出しているのかもしれないにせよ、政吉のはらわたをかきむしるようなひびきをもっていた。

急に、あたりが静寂になった。

胸のあたりを汗がツと流れて行くのを感じたが、拭くこともできず、暑さが急に感ぜられた。

両手の指先がしびれて、感覚がなくなって

きた。

暫くして栄子が起き上って傍へやってくる気配を感じた。

「どうだい、爺い。目は見えなくても耳と鼻でよく分かったろう。お前とはケタ違いだ。てことが分かったろう」

「栄子、もう勘弁してくれ。指がしびれてきた」

「フフフ、ちっとはこたえたようだね。これから妾の言うことを、おとなしくきくか」

「ああ、きくよ」

「どんなことでもするか」

「ああ、する」

「汚いなんて言やがって、この罰当りめ。よし、じゃあね、これ当てたら解いてやる。ホラ、これはなんだ？」

栄子は足をあげて、足の指で政吉の鼻をつまんだ。

「おや指とひとさし指だろ」

向こうの方から善夫が、

「右手か、左手か」

「左手だ」

「アハハハ。ばかやろ、足の指だよ」

栄子は踵で政吉の額を蹴った。

「アハハハ」

「アハハ……」

二人は笑いこぼれた。政吉はいまにも泣き出しそうに顔を歪めた。

それから栄子は、いろいろな肉体の部分を鼻へあてたり、口へ圧しつけたりして、からかった。

中にははっきり分かるのもあった。だが、それはあまりにも口に出して言いにくいのだった。

「言ってごらん。言わなきゃ解いてやらないよ」

政吉ぐらいの年令になれば、恥かしくて言にくい言葉なんてひとつもない。ふだんなら店でワイ談の最中でも客に平気で言える言葉なのだが、いまは羞恥よりも屈辱感のために言えなかった。

政吉が窮すれば窮するほど、栄子と善夫にとっては笑いの種となった。

時にはピタリと言い当てても、

「違うよ。どこまで勘が鈍いんだろうね」

と二人でせせら笑いされるだけだった。

政吉は汗をビッシヨリとかき、胸筋から汗が冷たく流れていた。

善夫も傍へやってきた。

「敵」が目が見えないと言うことは、善夫を

大胆にした。

遠慮なしに好き勝手なところをおしつけて当てさせた。

「これは何だ」

「お尻」

「誰の？」

「……栄子」

「バカ。俺だ」

政吉は善夫らしいと思って、栄子と言った。善夫とは口に出しては言えなかった。

「ほんとに老いぼれると、こうもばかになるもんかねえ」

「じゃあ、これは何だ」

善夫は政吉の顔へくつつくほど尻をもって行くと、片足をあげて

「ヨッ！」

とかけ声をかけた。ブーッ、ピッ！と力をこめた音が二発した。

「アハハハハ」

と栄子は身体をゆすって笑った。

政吉は目をふさがれていても、善夫がどんな恰好をしてやったかよく分かるのだ。

その胸中に、古い昔の小僧時代を思い出した。

政吉が大阪で十五の年の正月に、床屋に小

僧として住み込んだ時、仕事が終わって二階に上ると五つばかりの寝床が並べられて、先輩の店員達が「そこにキチンと坐ってお世話になります、と俺達に挨拶しろ」と言う。その通りにすると「可愛い小僧やな。面倒みてやるで。ホラ、お年玉をくれてやる」と言っている。いま善夫がやったように片足をあげて鼻の先で尻を嗅がされたのだった。四人いた先輩達のうち三人までやった。

彼等は実際よく尻をたれた。出そうと思えばいつでも出るのではないかと思うくらい。何かというと尻を放った。

長じて先輩株になると、こんどは政吉が新参の小僧に同じようなせりふを言い、同じような恰好をして尻をひっかけてやった。

「御年玉やったんやから礼を言え」

と「おおきに」と頭を下げさせた。当時、

「いたちの平蔵」という奴がいて、此奴の尻は臭いので有名だった。これにひっかけられると新参者は目を白黒するので、古い店員達は新参者が来ると平蔵の尻を嗅がせて、小僧の顔を見るのが楽しみだった。

あの頃は野蠻だったが罪がなかったなあ。まわりで笑う声は男の声ばかり。あとあと手をとって技術を教えてくれたから、たいして

腹も立たなかった。

それがいま、栄子の笑い声が混ると、こうも淫靡に、そして堪えがたい屈辱を感じるようになる。

昔の野蠻な習慣は、東京の店でもやっていたのか。現在はもうやっていないだろうが、善夫の奴は知っているんだな。うわべは上品振ってインテリ気取りの善夫も、ひと皮剥けば昔の職人氣質の野卑な言動を露わにしてくるのだ。

政吉は善夫の正体を見すかしたように思った。栄子は口癖のように、

「善っちゃん、あんたとは比べものにならないくらい教養があるわよ。センスだっていいしさ」

と言っていたのだが、それがこんな真似をしても、やはり上品で教養のある男だと思っ

ているのだろうか。もともと栄子自身が教養のない女なのだから、うわべだけの見せかけでしか、ものを判断できないのだ。

「フフフ、善っちゃんのこやしをかけてやったら少しはましになるかもしれないね」などと笑って言うのだった。

もっとひどい事を

二人でかわるがわるの凌辱が一時間以上も続いた。

政吉は、もう屈辱感は麻痺してしまっただが腕の痛みと、疲労は加速度的に激しくなってきた。

「栄子もういい加減にほめてくれないか。指がしびれてしまったよ」

「フン、いい気味だ」

「どう思おうと構わないが、指が使いものにならなくなると、明日働けなくなる」

「お前なんか一日働いたって、いくらも稼げないじゃないか。大きなつらするな」

膝小僧で、あごのあたりをゴツンと突き上げた。

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に氏名を書かれずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメージ画も）毎に、住所氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用縦書きと共にお願い致します。

「だが遊ばしとくのも、もったいないから、このへんで縄だけは勘弁してやろうか」

栄子は別々に縛ったいましめを解いてやった。政吉はグツタリとして、死馬のようにへたばった。その指は血の氣を失って、死人の手みたいになり、しろくなっていた。

栄子が想像していた以上に政吉は参っていた。さすがにその姿をみると、サジステイクな興奮もさめてしまった。

「可哀想に、こんなになって痛かったろう。

ねえ、あんた。こんなめにあわされてもまだこの家にいるつもりなの。妾はこんな女だからもう諦めておくれよ。妾はね、セックスがたかまってくる気狂いみたいになっちゃうんだよ。あんたを責めて責めて、責め抜いてやりたくなるんだよ。もうわかったらう。この先あんたがまだ強情張っていると妾自身が自分で何をやるか分からないのよね。だからあんたもこのへんで見切りをつけ、もっと年とった釣り合いのとれた女房をおもらいよ。あんたが口ぐせによく言ってたじゃないか、この世は男と女の他にいないんだ。女なんか掃いて捨てるほどあるって。妾ばかりが女じゃないんだから。ねえ、その方がお互いのためよ」

「分かっている。分かっているよ」

「だったら、あの七十万を持って、出て行っておくれよ」

政吉は無言で、うなだれた。

「そりゃ、あんたは妾によくしてくれたわ。そりゃ分かっているわよ。でも年の違いってのはどうにもならないのよ。もう愛情が全然わかないんだもん。愛情のない夫婦が一緒にいたって幸福はありえないだろ。いままでのことは悪い夢を見たと思って忘れておくれよ。ね、わかったでしょう」

「うん、よくわかった」

「じゃ出て行くわね」

そこまで行くと政吉は黙ってしまうのだった。栄子は癪癪をおこして

「これだけ言ってもわからねえのか、この馬鹿野郎ッ！」

ピシャピシャと続けざまに殴り

「てめえなんか出て行きやがれッ」

と足をあげて蹴転がし、階段から蹴落とすように下へ追っ払った。

政吉は這いずり下りるように、階段へつかまってノソノソと下りた。その頭の上から、「いいか。いつまでもいると、だんだんひどいめにあわせてやるぞ。お前なんか、くたば

「たつて構やしねえんだから」

ヒステリックな声が降りかかる。

「ほんとにあの間抜け野郎、あれだけやられても図々しく居坐ってやがる」

善夫は吐きすてるように言った。

「でもさ、ああして妾達でおもちゃにしてやるのも面白いじゃないの。妾のいいペットだもん」

「そうは行かねえよ。何といつても、もとはお前の亭主だ。あのショボクレたつらを見てるだけで、吐き気がしてくるんだ。一時も早く追い出してくれ」

栄子としては、必ずしも政吉を早急に追い出さなくてもいいと思っていた。

「どうせ腑抜けのようになつたあの爺いは、妾の言うことなら何でもきくし、置いとけば店の役にも立つし、善夫さえその気になれば一生飼ひ殺しにして奴隷のように扱ってやるのも面白いわ」

ぐらゐに漠然と考えていたのだが、善夫の方が一刻も早く叩き出してしまえと言うので毎日毎夜、いびり抜いているのだった。

善夫の方には、もう少し精密な設計図が描かれているのだった。

まず何よりも先に、この店をはっきり栄子

と自分の二人のものにすることを確認したかったのだ。そのためには政吉の存在が何よりも邪魔であった。

政吉を追い出してからは、どうする？

その先まで、ひそかにプランを立てていたのだが、それは栄子も知らぬことであった。いや栄子には絶対、知らすべき事柄ではないプランだったのだ。

栄子は政吉を頭からなめてかかっていたが善夫にして見れば、つい三カ月前までは「旦那々々」と崇め奉って、彼の言うことをハイハイときいてきたのである。「東京へ帰れ」と短刀で脅かされたこともある。いまはその気力も全くなくなって、一ぺんに年をとった感じに老いぼれてしまったが、やはりけむたい存在であった。

「第一、店で奴と一緒に働いていても都合が悪いやな。今更、俺が主人面するのも世間体が悪いし、若い奴と違って老いぼれは使いにくくしょうがねえ。俺の身にもなって考えてくれよ」

と栄子をくどいた。

「そりゃ分かつてるわよ。だから妾も心を鬼にして奴をいじめてやってるんじゃないのさ」

「へへ、存外あれが生地だつてね」

「イエ、ほんとに妾はやさしい女なのよ。あいつがあんな風だし、あんただってちょっと変態なところがあるもん、だからあんな風になっちゃうんだよ」

「まあ何でもいいや、早くかたをつけてくれよ。頼まっせ、お栄あねご」

「よし、委しとき。こんどは、もっとひどいことをしてやる。こうなりや、意地だよ。野郎、半殺しのめにあわせてやるから」

(続く)

— ○ —

「ピエロ床屋」に対する御声援を、感謝します。

またいろいろストーリーに対する、提案も面白く拝見しましたが、残念ながらこの小説にはモデルがあり、TPOは変えてあります。リアルな作品をモットーとする小生としては、事実に従った結末をつけるつもりであります。

その結末は、M派の皆さまには物足りない結末となるでしょうが、主人公の政吉が、必ずしも真正のMでないの、これもやむをえないと思っております。

(鬼山生)

女とふんどし



文子の場合

海野三津男

(カットも)

亀川文子がふんどしを愛用するようになったのは、就職して二年目の六月であった。

ふとしたことで読んだ或る雑誌の中に、それを愛用しているという女の手記があったのを立ち読みしたのがきっかけであった。

そんなことを想像したこともなかった文子に、それは相当な衝撃と刺激を与えていた。

半月もしないうちに、文子は完全にそのとりこになってしまっていた。

若し、文子が自分の満足できる状態に置かれていたならば、そんな記事などに心惹かれ

ることはなかったかも知れない。

期待に胸をはずませて故郷を離れ、大阪の大会社に就職した彼女を待っていたのは、同じ作業の繰り返しに終る単調そのものの仕事であった。

確かに給料は良かった。それは、郊外ではあったが、炊事場付きの六畳のアパートを借りてなお、故郷の両親に送金できるだけの額であった。

しかし、一日じゅう伝票に数字を記入するだけという仕事は、活動的な文子にとって、精神的にも肉体的にも耐えられるものではな

かった。

かと言って、仕事が終わってからスポーツが何かしようと思っても、名の知れた割に従業員の少ないその会社には、見るべきスポーツクラブもなかった。

同僚は、ボーリングなどによく行ったが、文子は室内のゲームは余り好きでなかった。

彼女は、何でも話せる友達を求めたが、残念ながらピンと心の触れ合う者は見つからなかった。

男の友達もできなかった。ひとつは、同僚には、いわゆるホワイトカラーの、彼女から

見てどこか弱い感じの男しかいなかったためもあった。

高校時代には、何もかも話し合う女友達が四人ほど、気のおけない男友達が三人ほどいたのだから、友達のできないのは自分のせいではないと、彼女は自分を慰めていた。

文子のただひとつの楽しみは山歩きであった。しかし、女ひとりでの登山は味気なく、いつか山に行く回数も減っていた。

文子が、ふんどしを愛用するようになった大きな原因は、そうした生活に変化を求める気持にあった。

要するに、何でもいい、何か変ったことがしたいという状態が、彼女をしてそうさせたのである。

しかし、もうひとつ、彼女がその後は自覚していなかった原因があった。

それは、自分でも気付かない奇妙な欲求であった。

(1)

しかし、その雑誌を目にしてから数日は、文子はそれを締めるということなど考えても

いなかった。

それは、或る蒸し暑い夜であった。

フト、その記事を思い出した時、彼女は、にわかにそれを締めてみたいという衝動に駆られていた。

それまでは、その記事を思い出しても、最初にそれを目にした時と同じように、『女がふんどしを締めるなんて、何だかヘンだなあ』という気持ちにしかならなかったのに、今夜に限ってなぜ？ と、彼女は自分の変化を不思議に思った。

しかも、その時の衝動は、身体の底からつきあがってくるような強いものであった。

文子は、蒸し暑さからくる焦立たしさが、単調な生活への不満を一気に爆発させたのかも知れないと思った。

たしかにそれは事実であり、『思い切ったふんどしでも締めてやろうか』という気持ちになったのは、変化を求める気持が頂点に達したことを示していた。

しかし、蒸し暑さが、もうひとつの要素をふんどしを思うことによって彼女のなかからよび醒ましていたことに……でなければ、それほどの衝動を感じなかっただろうことに、文子はその時、気付かなかった。

文子は、会社では『身体と同じように気持も大きい』と言われていたし、たしかに、小さなことでよくよくよする性格でないように自分でも思っていた。

しかし、本当は短気で、こうと思ったら実行しないでは、いられない性格であり、見境のない面も持っていた。

幼ない頃、二度ほどつかみあいの喧嘩をしたことがあった。一度は、自分をいじめにかかった男の子と、もう一度は、いじわるをした女の子とであった。そのほかにも、カッとなったり、思いどおりにいかずに物を投げたりしたことは何度かあった。

ひとつは親のしつけで、もうひとつは、家が貧しかったために自然と形成されたがまんづよさが、高校にはいる頃には次第に身についていた。

短気さをカバーしていたのは、そのがまんづよさであった。そのカバーされ押えられていた面がムククリ頭をもたげていた。

『どうせ自分だけでやることなんだ』という気持がそれを許していた。

その雑誌の告白記事の女性は、薄いスカートの下にそれが透けて見えるようにしたいと

書き、許婚者にそれを打ち明け、新婚旅行には締めて行くと書いていたが、自分はそんなことはしたくない、絶対に自分だけの秘密にするのだと、そのときは思ったのである。

文子は、気楽なひとり身の有難さで、すぐに上体をふとんの上に起こしていた。

そして、パンティの両側を絞るようにしてつかんでみた。

しかし、雑誌の女性が書いていたように、それは締めるというような感じではなく、やはり穿くという感じを一步も出なかった。

その告白で受けた刺激は、もちろん告白そのものの、女がふんどしを締めるということであつたが、告白の中で一番印象に残っていたのは、『それを身体に思い切り締めあげる感じ』というところであつた。

そして『それには、やはり六尺ふんどしが一番だ』とあつたが、女子が、最も男性的なものと考えていたそれを、その女性が締めているということが、最も大きな刺激となつていたのである。

文子は立ち上って、六尺ふんどしにかわるものを探しにかかった。

しかし、浴衣さえ妹にやってきた文子には

それにかわる帯一本もなかった。

彼女は、乾してあつたタオルをそれに見立てて見た。しかし、別にとりたてて云うほどの感覚はなかった。

ふんどしのつもりで、ぐいと引いた時、物理的に引締まる感覚を覚えはしたが、ばく然と期待していたようなものは何一つ感じ取れなかった。

(2)

翌る日、文子は自分のしようとしていたことが、馬鹿らしく、しかも子供じみていて、恥ずかしいことのように思った。

だが、夜が来て床に着くと、彼女は前の晩以上の衝動を覚えるのだった。

三日目、文子は思い切つて衣料品店を訪れていた。

胸がときめくのを抑えて、文子は白のさらしを一丈、買った。

どうしても、『六尺』とは言えなかった。

文子は、それを六尺に截った。

鉄みを入れた瞬間、彼女は身体が熱くなるのを覚えた。そして、さらしの端を、しばらく、じっと握りしめていた。

運動会するとき百米の競走のスタートについたときの緊張に似て、しかし、それとは異なる、初めて味わう説明のつかない気持であつた。

だがやはり、心の片隅では、バカバカしいという声を聞いた。しかし反面、強い好奇心が働いて、文子は思い切つて立ち上った。

締め方は、見よう見真似で知っていた。

今では違ふが、彼女の幼ない頃は、男の子の半分はふんどしを締めて川に飛び込んでいたからである。

立ち上った文子は、目をつぶって深呼吸をしていた。そして、さらしの布の端を口にくわえると目をつぶったまま、一端を腰から腹に廻しかけたとき、彼女の右手は止まっていた。

自分が今していることの愚かしさをその時改めて自覚したからであつた。

しかし、それで、単調なわびしさが、少しでもやわらぐなら、この愚かしさも無駄ではないと、反撥する気持も強かった。

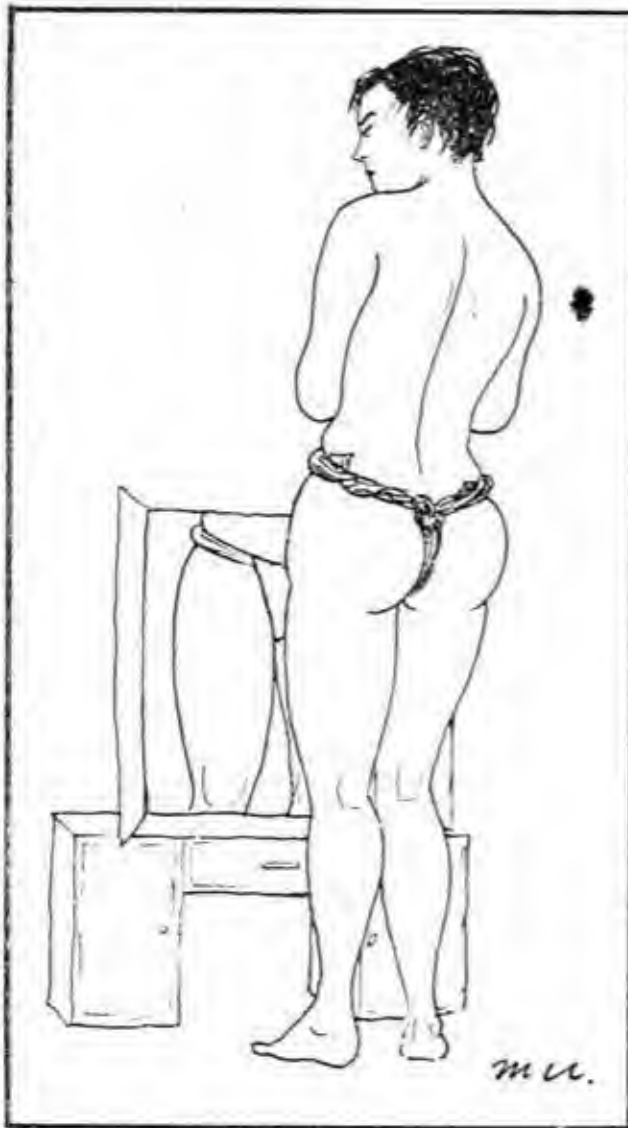
六尺の長さは、文子の身体には少し短いようであつた。

だがそれは、その肉体をしつかりと締め上げていた。文子は、しばらく立ったまま、じつと目をつぶってその締めまり具合をかみしめていた。

きりっとそれを締めあげた感じは、告白記事の女性が言うように、確かに何とも言えないものであった。

その感覚は、ピッチリした水着を着たときと似ていたが、しかし、それとは比べものにならないものであった。

文子は肉体ばかりでなく、気持まで引き締められるような感覚と、女としてそれを締めているのだという気持とを、しばらくそうして味わっていた。



そうしている間、なぜかそれ以外の雑念は起こらなかった。

或る意味では、それを冷静に観察していたのである。

文子が、その冷静さを失ったのは、自分の姿を鏡に写したときであった。

文子は鏡に写し出された自分の姿かたちを見て……ぐいと腰に食い込むように締められたふんどしを写し見て、冷静さを失っていたのである。

彼女は、一瞬、そこに男が立っているのではないかと疑った。

そして、無意識に自分の手を胸に当てていた。

文子は、倒錯していた。それは、かつてない感情であった。

彼女は、夢中でふんどしの結び目を握りしめ、それをぐいと引いていた。

鏡の中の、ふんどしが後ろに絞られるようになっていくのが目に

映った。

鏡の中の誰かが自分の力で引かれているようでもあり、またその逆に、自分が誰かに引かれているようで、目をつぶり、身体をのけぞらせるようにして、結び目を一層強く引き上げていた。

柔肌に食い込むさらしの痛さを感じながら再び自分の姿を鏡に写していた。

三面鏡は、身体の裏側をも写した。

しかしその夜の場合、じつとそれを写し見る余裕はなかった。

ちょっとした間、それを見てはふんどしを握りしめ、そして引いた。鏡の中の自分が、テレビで見た堂々たる力士のようにも思えた。

そんなにいるうち、ふんどしは忽ち弛んでいた。

その夜は、それほど蒸し暑くなかった。しかし、文子の身体は汗でピツシヨリ濡れていた。

だが彼女は、それを拭うことさえ忘れ、ふんどしを締め直しては、鏡の前に立った。

(3)

毎夜のようにそうした動作をくりかえして

いるうち、肌の痛みにも慣れていった。肌そのものもそれに慣れていたらしかった。

また、鏡に写る自分の姿に、直ぐに力士を連想することなくなっていた。

しかし、動作のくりかえしの周期が長くなるのに比例して、それから受ける倒錯感は、一層深く、強くなっていった。

そして、姿勢や動作も変化し激しくなっていた。

坐ったままで、或いはふとんの上に伏せて或いはレスリングのブリッジのような姿勢になつては、文子は我が身を責めた。

いつの間にかひと月が過ぎ、真夏が訪れていた。

文子は、時には自分の行為について変に思わないでもなく、また考えてもみた。

しかし彼女はその度に、最初思ったように『自分だけのことにしておきさえすれば……』と、それを割り切っていた。

ただ、結婚してからもそれを忘れることができなかったらどうなるかという、一抹の不安はあった。

だがそれも、若しそうだったとしても夫のいない時間を利用すればいいんだと割り切っ

た。また、今更やめようと思ってもどうすることもできない状態にもなっていたのである。

文子にとって分からなかったのは、なぜ、ふんどしというものに、あの何とも言えぬ反応を自分が起こすのかということであった。

肌を直接に痛めつけるからかとも思ったがそのくせ、いつも何か満たされぬ気持が残るのも分からなかった。

また、なぜ鏡に写る自分を目にしてから擬斗行為に移るのが分からなかった。

女でありながらふんどしを締めるということから受ける爽快感とも言わべき感情については、自分でも良く分かったし、変わったことをしている一種のスリルも、味わうことができた。そしてそれ自体も魅力ではあった。

文子は、自分のくりかえしている一人相撲動作の説明がつかなかったのである。

文子は、紐などで柔肌を縛りあげられることに快感を覚える女性のいることは知っていた。そして、女にはそうした被虐的な傾向があること、またその逆の傾向を持っている者のいることは人から聞いて知っていた。

文子は、ひとつはそれが自分の中にもある

のではないかと思った。

確かに、ふんどしをきりきりと締めあげ、ぐいぐいと引くとき、慣れたとは言っても柔肌は痛んだ。

そして、そのことに一種の感覚を覚えはした。しかし、自分のその反応は、それだけからくるものでは決してないと文子は思った。他人の場合はいざ知らず、自分の場合には別に何かがあると思うのだった。

だが、なかなかその説明はつかなかった。それが何であるかの見当がついたのは、夏の終りの頃であった。

文子はその前に、今ひとつの新たな発見をしていた。

それも、或る蒸し暑い夜であった。

最初、ふんどしを締めた夜は別として、彼女は激しい擬斗によって噴き出る汗を、拭くのは、また次の動作をくりかえしていた。

しかしその夜は、文子はそれを拭わなかった。

汗の魅力ともいふべきものを見出したからであった。

その夜は、特に蒸し暑かった。気象台は、その夏最高の温度だったと発表している。

郊外の風通しのよい丘の上のアパートとは、
 いうものの昼間勤めの間、閉め切っている文
 子の部屋はまるで蒸し風呂のようであった。

それを、夕食から暫くの間、窓をあけ放っ
 てはいたが、また閉め切ったからどうにもな
 らなかった。

じっとしていても、汗はにじみ出た。

鏡の中の肌を、それが幾筋か流れ落ちてい
 た。

扇風機は無かった。娘が送金するようにな
 って少しは楽にはなっていたが、貧しい中で
 がんばってきた両親を考えると、そんなもの
 を買う気が起こらなかったからだった。

最初のうちは、文子はいちいち汗を拭って
 いた。しかし、だんだんとその余裕はなくな
 っていた。

汗の、というよりはビッシヨリ濡れた自ら
 の肌の感触に魅かれたのは、『こんなに汗が
 出るまで……』という気持であった。それは
 いわば『これほどまでにがんばって……』と
 いう、物事に耐えているときに感じる快よさ
 であった。

しかし、次の瞬間感じたのは、汗に濡れた
 肌の感触であった。

文子は、思わず、汗に濡れた自分の肩に唇

を当てていた。

文子は、それから、余り暑くない夜には自
 分の身体をなるべく激しく動かすことによっ
 て、濡れた肌の感触を味わうようになった。

もちろん、動かすと言っても、それはいろ
 いろな姿勢のふんどし姿の一人相撲で、濡れ
 た肌を、鏡に写し出しては自分の反応を高め
 ていった。

(4)

文子が、自分の場合、想念の中に相手を幻
 想してのものであることに気付いたのは、夏
 の終りの或る夜のことであった。

その日は涼しかった。文子は最初の夜のこ
 とを思い出していた。

鏡の中に自分のふんどし姿を目にした時、
 フト、男がそこに立っているのではないかと
 錯覚したことをであった。

『そう、私は自分の中に男を感じてたんだ』
 文子は思わず声を出していた。

女が、最も男性的なものを着用するという
 ことのスリルと、そのことから受ける倒錯感
 ともいふべきものを、言うまでもなく文子は
 自覚していた。

しかし、自分の場合、ふんどし姿そのもの
 の中に、『男』を感じていたのだということ
 には、その時まで気付かなかったのである。

擬斗動作をくりかえす場合、決して上半身
 を鏡に写さなかったことも、そのためだった
 のだと文子は思った。

「女」を写してはだめなのである。

文子は、くびれた上腹部さえ見ようとしな
 いできたことに思い当たっていた。

なるほど、鏡の中の自分は、じっと見てみ
 れば、どう写してみても確かに「女」ではあ
 った。

だが、きりっと締め込まれた六尺ふんどし
 だけから受けるものの方が、その「女」に勝
 つのである。

自分は、そうして鏡の中に「男」を見、そ
 れから目をつぶって一人相撲をすることによ
 って、相手を感じようとしていたのだと文子
 は思い当った。直接的なものではなく、この
 倒錯的行為自体が意識に与える刺激を追い求
 めていたのであった。

その証拠に、その気持に気付いたその夜か
 ら、文子はいつもの擬斗を長くはくりかえさ
 なくなっていたのである。

文子は、鏡の中のふんどし姿を見るだけのことが多くなっていた。

そんな時、文子は必ず一郎を、想うようになっていた。

幼な馴染みの遅い男であった。

故郷の町に就職していた一郎とは半年に一回くらい便りを出し合う程度の関係で、一度も恋ごころを感じたことはなかった。

それが、にわかに特別の存在として文子の中に現われ始めたのである。

文子の幻想の中では、ふんどしをつかむ手は、いつか一郎の手に変わっていた。そして眼に写る「一郎」もまたふんどし姿であった。

或る夜、文子は、きりきりと締めたふんどし姿では受感できなかった、不思議な気持を発見した。

それは、前後左右を引っ張られたふんどしの結び目がパラッと解けてしまった瞬間であった。或いは無意識的に自分で解いたのかも知れなかった。

厚いふとんの中の身体はビッシヨリ汗に濡れていた。

文子はやがて、想像ではなく実際に、自分

のそうした願いを許し、満たしてくれる男性の出現を望むようになっていた。

一郎が、それまで知っている男の中では、やはり最も理想であった。

例の雑誌の記事の女性が、羨ましくなっていた。自分も、それを許してくれる男性との『ふんどし新婚旅行』がしたいと切実に思え始めたからであった。

ただ自分の場合、違うのは『透けて見えるようなスカートの下にそれを締めていく』ということは到底できないだろうということ、そしてお互いにふんどしを締めて、まるで相撲のようにしてふんどしをつかんで組み合い汗びっしょりになり、それが解けてしまうまで激しく揉み合いたいという願いを持ったことであった。

文子は、思い切って一郎に近づこうかと思った。休みを取ってでも直接会ってみようとも思った。

しかし、それは一郎が婚約したという知らせを田舎の友達からもらったことで、いとも簡単に挫折していた。

たしかに、心に描いていた青写真が消え去った失望感があった。だが、破恋というよう

な大仰なショックは受けなかった。

文子は、一郎に対して淡い恋心を持っていたが、それは本物の恋ではなかったことに気がついた。

文子の恋の対象は、一郎に理想像を見出し、いたようであって、実は、遅い男のふんどし姿であったことを感じた。

文子は、誰でもいい、遅い男性に近づこうかと思った。

だが、自分の周囲にそんな心当りはなかったし、また、あっても自分から近づいていて若し……と考えると恐ろしかった。

一年が過ぎ、二年が過ぎていった。

文子に言い寄る男は二人ほどいたが、それはどちらも願いをかなえてくれるような遅い男性ではなく、また、到底好きになれるようなタイプでもなかった。

文子は二十二になっていた。彼女は焦りを感じた。

しかしやはり、じっとその時を待つことにしたのであった。

(終)

× × × ×

× × × ×

「まだ、逃げられると思ってやがんのか」

吉沢は眼を血走らせて、必死に珠江夫人を追いかける。

「全く手古ずらせやがる。くそっ、もう手加減はしねえぞ」

川田も眼を怒らせて、珠江夫人を追った。

珠江夫人も必死であった。

野卑な男達三人の鬨りものになる位なら、いっそ舌を噛んで、と思うものの、地下牢に閉じこめられている美沙江の事を思うと、なんと少しでもこの地獄屋敷から脱出し、助けを求めて、美沙江を始め静子夫人達を救出しなければ——。血走った気分となり、土壇場へ来て、再度逃亡を計った珠江夫人である。渡り廊下より、も一度、庭園に飛び降りようとした珠江夫人は、あっと小さく叫んだ。廊下の柱より出た釘が、バタフライのビニールの紐をひっかけたのである。

珠江夫人は、狼狽し優美な柳腰をもどかしげに揺さぶって釘をふり切ろうとする。

それを見た吉沢と川田は、声をあげて笑い出した。

「こいつは傑作だ。随分気のきくバタフライじゃないか」

余裕たっぷりニヤニヤしながら、ゆっく

り近づいて来る男達を見て、珠江夫人の顔は口惜しげにひきつる。

「ざまあ見ろ」

川田は、珠江夫人の肩をつかもうと手をのばした。

悪感のようなものを感じて、珠江夫人は狂気したように身を揺さぶった。

「さ、皆んな。この女を担いでくれ」

川田と吉沢、それに鬼源は珠江夫人を寄つてたかって抱き上げる。

「——誰か、誰か、助けてっ」

もう見栄も体裁もなく珠江夫人は、少女のような悲鳴を上げたのである。

「笑わせるな。誰に助けてくれと云ってるんだよ」

川田と吉沢は、珠江夫人の繊細な肩と優美な腰に手をかけ、どっこいしょ、と横抱きにする。

珠江夫人は、遂に三人の男達の肩に高々と担ぎ上げられた。

再び、二階の津村の部屋へ運び込まれた珠江夫人には、もはや、平常の冷たい表情は見られず、美しい細い眼をおびえたように大きく見開いている。

「まだ観念する事が出来ないの」

大塚順子が入って来た。

「いい加減になさいよ」

ヒステリックに叫ぶと順子は、ピシヤリと

珠江夫人の頬を平手打した。

キツとした表情になって珠江夫人は大塚順子に妖しいばかりに鋭い視線を向ける。

「大塚さん。私は、私は貴女を呪います」

「ああ、気のすむまで呪うがいいわ」

大塚順子は声を立てて笑った。

「三日もここで暮しや、そういう生意気な口はきけなくなるさ」

川田と吉沢は、木馬の前に珠江夫人を押し立てる。

「さ、こいつに乗るんだ」

「嫌っ、嫌ですっ」

珠江夫人は、木馬を眼にすると、全身総毛立つ思いで尻ごみするのだ。

鬼源は踏台を持って来て木馬の横へ置き、

川田と一緒に珠江夫人を追いつける。

「さ、大きく足を開いて、しっかり乗っかかりな」

踏台の上に乗せ上げられた夫人の尻を鬼源はピシヤリとたたいた。

珠江夫人の美麗な象牙色の頬は、全く硬化して、死人のように灰白色になっている。

「その穴のあいている所へまたがるんだぜ。下にはそら、バケツが置いてある。大きい方でも小さい方でも、御自由にたれ流す事が出来るってわけさ」

昨夜よりその自由さえ許されず、珠江夫人は生理の苦痛と戦っていることは事実であった。

べっとり脂汗を浮かべた額、時折、ブルブルと慄える腰のあたりがその苦痛を証明している。

「おっと、こりゃ失礼。バタフライをつけたままじゃ出来ねえわけだ」

吉沢と川田は、左右から珠江夫人の腰に手をかけた。

「や、やめて下さい」

珠江夫人は反射的に身をすくませたが、すぐにビニールの紐は吉沢の手で素早く解き放されてしまう。

「——ああ」

と、珠江夫人は、ねじ曲げるように顔をそむけ、真っ赤に上気して、か細いすすり泣きの声を洩らした。

「何も今更、そう羞ずかしがる事はねえじゃねえか」

吉沢の手で、それはズルズルと、ねっとり

光沢を浮かべた太腿から下肢まで引き下げられていく。

「こっちは、やりやすいようにしてやってるんだぜ」

それを足首から外し取った吉沢は、ポイト無難作に床へ投げて洪笑するのだ。

「まあ、折原夫人のお尻って可愛いわ。そら笑くぼがあるじゃないの」

大塚順子が珠江夫人の雪のように白い、練餅のように柔らかな双臀を指ではじいて笑い出した。

「それにこいつときたら、たまらねえな。いい艶を出してやがる」

「な、なにをなさるのっ」

珠江夫人は、吉沢の指先が迫ってくると、電気に触れたように全身を揺さぶらせた。

「——貴方達には人間の血が通っているんですかっ」

キリリと柳眉を上げ、今にも号泣しそうななるのをぐっとこらえて、吉沢と川田を睨みすえた珠江夫人の容貌は、ぞっとする程、美しかった。

「ブツブツ云わず、さっさと木馬にまたがるんだ」

鬼源が、とげとげしい声で叱咤した。

「お前さんがどうしても嫌というなら、地下のお嬢さんをこの場で嬲りものにしてもいいんだぜ」

それとも、乗る気になるまでこうしてやるうか、と川田が奥から皮鞭を持出して来る。

「さ、乗るんだ」

川田は一声大きく叫ぶと、皮鞭を高々と振り上げた。

ピシリッと珠江夫人の尻あたりに、大きく宙に弧を描いた皮鞭が炸裂した。

ヒイツと思わず珠江夫人は悲鳴を上げ、踏台より転倒する。

「しっかりしねえか」

川田と吉沢は、床に跪すく珠江夫人の優雅な肩に手をかけて引き起こすと、再び踏台に乗せ上げる。

「ど、どうして、どうしてこのような仕打ちを受けなければならぬんですっ」

珠江夫人は激しく首を左右に揺さぶって、ほざくように云った。

「うるせえ。乗るか乗らねえかを聞いてるんだ」

川田は、またもや皮鞭を振り上げ、力一杯打ち下ろした。

「あっ」

珠江夫人は、骨まで碎け散るような激痛に顔を歪め、踏台の上へ身をかめこませた。肉体的な苦痛と並列して生理的な苦痛がぐっと急速にこみ上がり、思わず、その場に立膝して腰をかみこませる珠江夫人である。「ホホホ、ね、折原夫人。貴女、もうがまん

団先生へお願い

——香美山 仙逸

圧倒的人気を保ち続けているらしい「花と蛇」……奇ク愛読者の一人として私も、当然読みます。だが、私には物足りない。長い間、何かしら不満のままだったのが、先日やっと気がつきました。よく考えてみると、この小説は「縛りの好きな私」には不向きだったのです。もちろん、この小説が、極めて「正攻法」で女のマゾを引出す小説だということは理解できます。また、ヒロインは登場の際、必ず縛られているのには違いないのですが、読んでいるうちにこれは「オレの読みたいものとは異質のものだ」と気がついたわけです。

「羞恥責め」も、もちろんレパートリーの一つとして重要でしょうから、欠くことは出来ませんが、この小説に「縛りの変化」が加わったら、と残念でなりません。

出来ない程になってるんでしょ」

大塚順子は、あたかも洩れるのを必死にとどめるかのよう両肢をすり合わせている珠江夫人の肩に、そっと手をかけるのだ。

「——お、お願い、お願いです」

珠江夫人は、優雅な肩を揺さぶって、遂に

この強大なシンジゲートに絶世の美人に変化のある縄掛けの妙味を理解し、ボスに進言しようとする男の一人や二人は居ないわけではないだろうと思うのですが……。

こんな素晴らしい肉体の持主を、ただ、単純な「麻縄が乳房の上下に巻きついていて縛り方だけでは、麻縄も「欲求不満」で泣き出すのではないかと思っています。

団先生のネバリのある筆致で、静子夫人はじめ粒選りのヒロインの美肌に、いろいろの形で埋没する縄掛けの変化を描き出して貰えたら……。私の願いは勝手なことでしょうか。なにも「羞恥縛り」に限らなくても、ただ、いろいろ縛り方を変えてみるだけでヒロイン達の羞恥心をアフリ上げてやれるのではないかと思います。団先生、鬼源さん、お願いできませんか。

声を憐れせ、哀泣し始めた。

「させないとは云っちゃいないわよ。ただ、貞淑で美しい博士夫人が、どんな顔してお始めるのか、後学のため一寸拝見させてほしいのよ」

「そ、そんな」

珠江夫人は艶やかな黒髪をゆさゆさと動かして一きわ激しい哀泣を口から発した。

トイレへ行かせて欲しい、という欲求も、羞ずかしく、はしたなく、口に出しては云えない美しい人妻——そう思うと男達は嗜虐の快感を浮き立つ思いで噛みしめながら、またもや夫人の幻想的な程色白の優雅な裸身を引き起こしにかかった。

「ここで洩らしてもらっちゃ困るんだ。さ、いい加減、観念しな」

珠江夫人は、顔をそむけ、シクシクすすり上げながら、遂に川田の手で片肢を抱き取られる。

「そら、元気を出して、まず、こう足をかける」

川田は、胸をときめかしながら、珠江夫人の艶々と脂肪に包まれた大腿を拘い上げ、木馬の背にからませるのだった。



“H”なる人物の白昼夢

演

習

拷

問

風流極道軒

一、

電話のあったのが、午後四時すぎ。

(今夜、九時半、どうしても来て欲しい)というのです。

「予行演習なんです。この八日に、例の会がいよいよ開かれて、女房のやつを連れていくことにきめたのです。女房もそれを納得はしたんですが、その前に、どうしてもあなたに縛られたいと云いだしましてね。女心という

やつなんでしょう。どうせ、多くの男たちのなかで縛られるのなら、そのまえに、ホれた男にとつくりと縛られてみたい……わかってやって下さい。九時半ですよ、九時半……待っています」

Kの声は、ちょっと興奮しています。

Kは、私が、弟のように可愛がっている男で三十四才。こじんまりした呉服店を開いています。女房は三十一歳、美香子といい、小柄ですが、肌がぬけるほど白く、かといって病気ひとつしない健康者で、まめまめしく亭主につくすよい女房で、男の子がひとりあります。

去年の暮、Kと二人で飲んだとき、よい写真が手に入ったからと、家に連れてゆかれたことがあります。Kに「甘い嗜虐癖(スィート・サディズム)」のあることは数年前から知っておりました。私の方は、それとおりこして「辛い嗜虐癖(クール・サディズム)」に傾いており、彼等夫婦の、いとなみを察して、微笑し、読み終った文献などを、まわしてやっていたのです。

(また、同好者から二、三枚でも貰ってきて楽しんでるな)くらいの軽い気持でにかけていった私の目の前へ、Kが持ち出したものは五十枚に及ぶコレクションだったのです。ポ

ラロイドカメラで撮ったもので、驚いたのは、モデルが、ほかならぬ美香子夫人だったことでした。

全裸——。

いずれも、緊縛か、それに至る道程をうつしたものです。

「いくらHさんだといっても、これを見せようか見せまいか、とっても迷ったんですよ。女房のやつに話してみたら一応の反対はするのですが、イヤだとも云わず、ただ、恥かしいな——というだけ。しめた、と思ったのですが、いざ、人の目にさらすとなると、やはりためらいまして」

一枚一枚、丹念にみる私に、しゃべらなければ、やりきれぬというふうに、Kは、しゃべりつづけました。

「どうです、これなどいいでしょう。見なおしましたねえ、女房のやつを。それにこんないじらしいポーズを、今まで私しや、見たことありませんや」

写真の裏には番号がつけられ、さらに、成人映画顔負けの煽情的な題名や、解説までがつけられておりました。

二つ三つ、ここに御紹介しておくのが私のたのしい義務というものでしょう。

五番——「拷問への階段」

廊下から二階に通じる階段に、右足をかけた美香子夫人。カメラは、階段の上から、パンティいちまいで、小腰をかがめて、うつむいている観念した女体をとらえている。

六番——「人妻屈伏」

床の間の柱に、高手小手であぐらを組まされてある。あぐらといっても、両足の裏をあわせて、足首を緊縛してあるので、普通のあぐらとちがいは、はるかに強烈な責めムードがただよっていて、夫人の美しい顔がややうつむき、おくれ毛が五、六本、額にかかり（もう、どうにもならない……）という憂愁の美が、画面一杯にみなぎっている。

九番——「ひきだされた人妻」

双つの豊かな乳房の上下を、太い麻縄がそれぞれ二巻き。腹部を別の縄が三巻き、両膝をたたみについた中腰。いま、廊下を歩かされて、多くの男たちの待っている座敷にひき出された瞬間のポーズ。

十四番——「密室の裸女拷問」

格子戸の前。左右の手を大きくひろげて格子に縛りつけ、首縄、胸を菱形に、縄がしめつけている。左足は斜め上に、右足は画面の左下隅にのびて足首に鎖が巻きついていてる。

手前にあかあかと燃える百奴ローソク。六尺棒が右乳房に喰い込み、夫人は、顔をのけぞらせている。

二十番——「残酷・人妻私刑」

鴨居に、右足をたかだかと吊られ、左足には鎖が三巻き。その先端は画面のそと、誰かがひっぱっているらしい。きびしく縛りあげられた縄目に悶える美香子夫人の、妖しくもなまめく女体。

こうして私は、Kが、スイート・サディストから、クール・サディストに移りつつあることを知らされたことでした。

夫婦で、甘く、夜の緊縛をたのしむうちはまだまだ初歩といえましょう。次第に、写真を最も親しい友に見せるようになり、そして同好の士を集めて、グループ・プレーを楽しもうとする——私の辿った道を、Kもまた辿ろうとするのでしょうか。

私は、電話での依頼を受け入れることにしました。そして、その夜の急行列車で、KのすむT市に向かったのです。

（女房の気持も察してやってくださいよ。あなたに処女を、緊縛の処女を、捧げたいんですってさ）というKの電話での声が、私を踏みきらせたのです。

二、

緊縛されている女は、もっとも親しい人の前で、最も強い羞恥心を覚える——というのが、私の体験から割り出した結論です。

一番いい例は、人妻を、見知らぬ男たちがいくら全裸にしても、さほど羞恥は覚えぬものです。それが、そのままの緊縛されたポーズで、夫の前へひきずり出されようとするとき彼女は、必死になって抵抗します。愛する夫のまえで、惨めな被虐の姿態を曝け出すことに、異常な羞恥を覚えるのです。そして、そのけなげな抵抗に、男達は一層、嗜虐をたのしむことになるのです。

が、そこは「女は魔物」次のようにも申せましょう。

即ち、見知らぬ男たちによって緊縛されても羞恥を覚えなかった人妻は、夫の前へひき出されることによって羞恥をおぼえ、特有の感覚を、心のおくから湧き出てくる快楽を、結構、楽しんでゐるのだと——。

だとすると……どちらが、楽しんでゐるのかわからなくなる。——つまりよく言われますところの、拷問するものと、拷問されるものとの関係、つまり加虐者が、実は被害者で

あり、被虐者が、実は、加害者であるという奇妙な関係——。

閑話休題。あの夜、Kが私に写真を見せた夜、美香子夫人は、最後まで姿を現わさなかったのです。そのことが車中三時間、私をなやませました。

(Kのやつ、まさか、かついでゐるのではあるまいな。あんな調子のいいことを言いやがったが、美香子夫人、ほんとは承知したのであるまい。第一、T市に、同好者の集まりがあるなど、今まできいたことがない。……すると……畏か)

私は空想癖のある自分に苦笑しました。畏をしかけられるほど、私は、大物ではないのです。

T市についた私は、寝静まった町に車をとばして郊外のKの家につき、明りがひとつだけついている二階の窓を見上げながら、玄関のベルを押そうとしました。

玄関が、うち側からひらいて、Kが、顔を見せました。酒くさい息……。

「しずかに。……こどもがおきるとうるさくなりますから」

そっと靴をぬいで、階段を上ると廊下があり、三つの部屋があります。一番おくの部屋

が夫婦の寝室です。

「今夜は、こどもを階下に寝かせましてね。もう大丈夫です、少々ぐらい大きい声を立てても」

といい、

「もう、準備万端ととのっていますよ。いいですね」

念を押したKは、扉を押しました。

美香子夫人——。

まぎれもない美香子夫人が、そこにいたのです。ダブルベッドのした、私たちの足もとに半畳の蓆。そこに、半裸で緊縛され、縄尻は洋服ダンスのかげにかくれて、あたかも女囚が、お白洲にひき出されたようなポーズで、坐っていたのでございました。

まったくの不意打ちです。まさか、最初からこのような場面に出くわそうとは思っていなかったのです。三人で酒をのんで、じわじわと雰囲気をつたのしんで、あと、本番——これが、マニアの緊縛作法というものです。それを——Kのやつ……。

Kは、じっと、美香子夫人を見つめたままなのです。

洋間、厚地のカーテンがふかぶかと西の窓を遮断し、飾燈を消してルーム・ライトがひ

とつ、ほんのりと美香子夫人の裸身を、桃色にうかびあがらせています。

と、Kが、

「いいな、美香、点けるぞ」

答えもまたずに、Kは、撮影用のライトを美香子夫人に向けて照らしました。

かすかに夫人が身をくねらせ、白地に女郎花（おみなえし）をうかした湯文字が割れ、しろい右の膝があらわれて、むっちりとしたふくらはぎと太ももがこぼれました。

写真では知ることのできなかつた、豊かな量感のある肉体。——私は思わず、息をとめたことでございました。

少し黒ずんだ木綿の五分縄（直径一糎五毛の縄）が、水蜜桃のみずみずしさを偲ばせる乳房の上に三本、下に二本、双の高手（二の腕）に喰い込んだ縄が三本、上をはしる縄が二本。思わずたち上った私は背後に回りまわした。きらめくように美しい背なかをゆるやかなVの字型でくぎった縄は、交叉された手首を、整然と縛りあげて居りました。

緊縛初心者が、よくかけるので、私が「初歩縄」と勝手に名付けている縄のかけ方の満点に近い縄捌き。

「どうです、Hさん」

Kが、超・金陵をコップに注ぐと私にさし出しました。その手が小刻みにふるえているのが、誇ったような声と、きわめて対照的でございました。

「さあ。思う存分、この美香を拷問してやって下さい。私たちもそれが、本望なのですから。……私たち、いや、美香が、今夜を待ちのぞんでいたのですから」

と、たちあがり、

「よいな、美香。存分に縛って貰いな」

と、部屋を出ようとするのです。

「おい、待ってくれよ。そりゃあK君、いくらなんでも……」

「私は、あちらで次の拷問部屋の準備をしなくちゃありません。それに、私がここにいるのは、女房が恥かしがるでしょう」

と、さあっと扉のそとへ出て、すぐまた顔を出し、

「最後の一枚、じつは二枚ですが、ぬがすもぬがさぬも、Hさんの心のままですよ。それにカメラは、そこにあります、ポラロイドでもライカでも……」

というなり、そこから鍵をかけてしまったのです。いままで、経験したことのない奇妙なことです。緊縛される妻をじいっと、嫉妬

とも恍惚ともつかない表情で凝視するのが、夫のつねなのです。ところが、いま私は、人妻と二人きりで、寝室に監禁されてしまったのです。ちらっと疑惑が湧きましたが、連中で考えたとおり、私は罠にかけられるような大物ではないのです。（よし、毒喰わば皿までよ）心にきめた私は、

「奥さん。始めますよ」

と、コップの酒を半分のみほして声をかけると、じいっと見守りました。

かるい、うなずきが、かえってきました。

（チェッ。まるで飼いならされた雌じゃあねえか）

少しぐらいの抵抗を期待していた私は、軽い失望をおぼえました。抵抗をあきらめ、ただなすがままに、ひとつの物体となってしまう女を縛るほど、むなしいことはないのです。それでも私の手は、彼女の手首の縄にかかり、解き、左から右へと、のしかかるようにして、胸の縄をといいききました。

（いい匂いしてるな。何という香水……ミツコ……エリコ……クロバラ……）

美香子夫人は、じっと瞑目したままです。縄がとぐるをまいて、裸身のまわりにちらばり、私が、どれにしようかと壁に垂れ下って

いる数条の縄に目をやったとき

「あのう、あの縄で……」

美香子夫人が、消え入るような声でいいました。

「これですか？」

それは、真新しい木綿の三分縄です。

「どうして、これを？」

「あなたのために、買っておきましたの」

ズキンと、くるものがありました。

「私のためにですって」

「ええ。……あの、お酒を、少しお酒をいただきますわ、私」

初めて、美香子夫人は目を開き、私を見上げると、私のさし出したコップを、ぐいっとひといきにのみほしました。

「あなたのために、Hさんに縛られる夜のために、買ってきたのです」

「ひとりで？ あなたひとりで」

「そうですね、妾、ひとりで。今まで、夫にも使わせていない純白の縄ですの。それで、今夜、十分に……」

「十分に？」

「ええ、十分に縛られてから、その縄と、この縄……」

と、今まで自分を縛り上げていた縄を目で

しめして、

「この二本の縄を持って、明後日の会にでます。そうしたいのです。妾、まだ慣れていないので、明後日が心配なのです。夫ひとりでも心もとなくて、どうしてもヴェテランの貴方も一しょに行ってもらいたかったのですがT市と、O市ははなれていますし、第一、今度は、T市だけのごく親密な人々だけの初めての会合で、他の人は出席させないというのでしょう。妾、そこで決めたのです。あなたに縛って頂いて、練習をしておきましょう……と。妾ですかしら、こんな考えかたって」

変もく、そもなかった。緊縛者は、被緊縛者に愛情を覚えてはいけないという自戒を破った私は、思わず彼女を抱きしめようとした。と、

「いけませんわ、まだ」

と、三分縄を目で示して、

「練習がすんでおりませんでしょう。あとであとでたんと、ね」

翻弄されるとはこのことでしょう。いつの間、後輩のKが、女房をこんなに見事に飼育したのか。なかば、あきれながら私は、

（それならよし。今夜は思う存分、縄捌きを楽しんでやるぞ）と、外見からは想像もでき

なかった美香子夫人の、成熟したはちきれそうな裸身を見おろして、舌なめずりをしたことででした。

三、

早縄――。

稚子縄、けん縄と、三つ四つの縛りを、それこそ文字どおり、手とり足とり、解説つきで教え、かつ、楽しんだ私は、次に鉄砲責めにした美香子夫人をベッドの上に追い上げ、そのためにあるものと私自身思っているベツドの手すりに、足首をそれぞれにしばりつけると、すぐそばに腰をおろして一息つきました。

湯文字をとるためでございました。勿論その下に、はでなふち取りのあるパンティをつけていることも判っています。

（さて、どうやって剥いでやるか）

考えをめぐらせているとき、コツコツと扉をたたいたのはKでした。鍵穴から、

「拷問部屋の準備ができました。どうか、ひき出してください。Hさん、女囚をひきずり出すように。おわかりですね」

これでKの意図のひとつがわかりました。彼は、妻の表わす羞恥心に関心を抱いている

のです。妻が、夫以外の男に緊縛されて、その姿を夫の前にさらす時の反応を……。

奇クの名花・安井夫人も、多くの男性に責められることを希望しておられます。また、夫に責められる場面を、他の男たちに眺められたら、快感はいやますだろうと言っておられます。これは、女性の立場からの発言でしょう。男性側から言えば、自分の妻が他の男の騷りものにされている姿をみるのほど刺戟されることはありませんまい。

(よし！)

私は、美香夫人……いや、もう、美香とよび捨てにすることにきめて、

「美香、亭主が、ああ言っているが、拷問部屋に行くか」「……ゆきますわ」

「ハッキリと言いなさい！」

「妾は、Hさんに拷問されるために、拷問倉にいきます」

鉄砲責めの縄をといたあと、かすかに汗ばんでいる上半身に、私は、女縄をかけていきました。むろん、もにも縄をかけて。かたく握りしめている手の指がはいれん、するくらい縛りあげて、縄尻を罔っ引きのようにもった私は、扉をあけ廊下へ。

途端に、フラッシュが、ひかりました。

待ちかまえていたKの手で、シャッターが前後左右からきられました。

「あ、な、た」

そのたびに美香は身悶えして、さきほどは見せなかった妖しい姿態を展開し、とうとうその場に、立て膝をして坐り込んでしまいました。廊下の電燈がつき、Kは、カメラを左手に、自分の妻を喰いいるように眺めています。Kにしてみれば、会心のポーズだったに違いありません。「視姦」と云う言葉がかびます。觸って姦するのを觸姦、以下、臭姦(緊縛された肌をかきまわす)、舌姦(同じく舐める)、耳姦(緊縛された女にいいにくいことを云わせる)とすれば、今の場合、まさしく見ることによって姦する——またそれに足る場面で、私自身、むずがゆくなるのをいなむことができませんでした。

「姦通したな、美香！」

思いがけない言葉でした。が、美香が、「ええ」

と、言ったとき、私は、すべてがのみ込めたのです。お芝居をたのしんでいる。耳に訴えて、たのしんでいる——耳姦なのだ。

「姦通罪は、重罪、どのような苛酷な拷問でもうける用意があるか」

「はい。たとえどのような責苦なりと嫌いなせぬ」

「ひきたてい！」

と、Kが私に向かって言ったとき、つい苦笑した私でしたが、そこはお芝居、

「はい、お役人さま」

といってしまったことでございました。

左右から寄りそうように彼女を抱きおこした私たちは、美香を、拷問部屋へと突き入れました。

四、

そこは、夫婦の居間でございました。が、Kの言うように、壁を思わせる垂幕を下げ、二、三の机や椅子、画架、それに脚立、折りたたみ式の梯子、箒木、一本のやら折りたたみのやら各様の衣桁、いわゆるゲバ棒とよばれる角材などが並べられており、その真中に荒蕙がいます。

太ももをKに蹴られてよろめくように坐り込んだ美香。Kは、縄尻を私にわたすと真正面の椅子に腰をおろし、見おろすように、「美香、姦通の罪を償うには、まず、全裸になること。よいか」

と、いいます。

「はい」

「はいでは、わからぬ。はっきりと申せ」

美香子夫人は、チラッと、私の方を眺めましたがその眼差しは、豊満な乳房と同じように、花のさかりを思わせるなまめいたものでした。

「妾は、夫以外の男に身をまかせました。その罰として、どんなひどい拷問でもおうけます」

「たりないな。素裸でと云え」

「はい。妾は、スハダカで、どんな拷問でもおうけます」

「誰が、湯文字をとるのか！ 云え、美香！ 云うんだ！」

Kの声が急に高くなり、私は、次の美香子夫人の言葉をかたずをのんで待ちました。

「……H、Hさんに……」

夫人が私の名を口にしたとき、私は、さすがに胸が高鳴るのを覚えました。

無言で、二度、三度、うなずいたKは、
「立ちませい！」

と云うと、私の手から縄尻をとり、天井からおりている鎖にそれを結びつけ、ぐいぐいと吊り上げ、夫人の足の下に二尺くらいの踏台を入れて、その上に立たせました。眩しい

ほどのライトが、皎々と、湯文字一枚の女体をうかがひ上らせました。

「さあ、Hさん。女房の指名です。ヒンムイテやってください」

興奮した口調で、Kがいます。

さきほどの部屋で、全裸にしてみたいと云う欲望にかられていた私も、夫の口から、堂々とこう云われると、躊躇の気持がうかびます。

それをよみとったかのように、Kは、

「遠慮するときじゃあないでしょう。さあ」

と云い、愛用のキャノンを手にします。

私のすぐ眼の前で、美香子夫人の白肌がうごめいています。湯文字の一寸ほど上に、形のよい臍が、まるでいきもののように動いています。

私は、美香夫人を見上げました。仰向いている夫人のはそいあごと、白い咽喉が、捕われの女の妖しさをただよわせています。

私の指が、思わず、湯文字の赤い紐の結び目にふれました。

途端、美香夫人の身体は、電流がながれたように硬直しました。

女が、裸にされるとききの羞恥と期待の交錯した興奮の一瞬なのです。

「Hさん……」

見上げる私の目と、美香夫人の見おろす双眸が合いました。

「Hさん……」

再び、眩いた夫人は、ぐったりと肩の力をぬき、私の両腕のなかに、かぐわしい腰をゆだねきました。

フラッシュと、シャッターの音のなかで、いくらかつき出された夫人の腰を、左腕で抱くようにして、私の右手は小刻みにふるえながら、結び目をといていきます。

この瞬間は、まさしく、スイート・サディストの幸福の絶頂と申せましょう。

ときおえた私は、眼をしっかりと閉ざしている夫人の少しのうごきも見逃すまいと、じっと見つめながら、女郎花の模様のある湯文字を宙に舞わせ、つづいてひと思いに、華美な縁どりのあるパンティに手をかけたのでした。

「アッ。……ウウ、あなた！」

美香夫人の口から（あなた！）と云う言葉がとび出したことが、私を、陶酔に導き入れました。美香夫人の心の底を見た思い。（やはり、人妻。夫以外の男の前で全裸にされるとき、思わず口にするのは、夫。頭にうかぶ

のは夫なのだ)……サディストの血をかき立てられた私は、その示された反応の姿態に、時のたつのを忘れたことでございます。

それから、踏台の上で夫人の裸身が、何十回となく回転し、鎖がきしみ、夫人の喘ぎが、呻きがあがり、かぐわしい体臭が、部屋中にたち込めました。

その間、Kが何をしていたのか。多分、撮影に熱中していたか、それとも、自分の妻がよその男に、目の前で罵られるという得難い経験に、我を忘れて眺めていたに違いありません。

「Hさん……では、つぎに、つぎに取りかかりましょう」

Kのうわずった声がして、私は、ホッと、自分もと戻りました。

五、

Kが夫人にちかより、鎖を縄尻からはずすと、踏台から荒庭の上に抱きおろしました。

そのときでした、私が再び陶醉したのは、疲れきって横たわった夫人の右足首がピクツとうごく、たちまちその体は丸く閉じ合わされたことでございます。なみのモデルではこうはいきませぬ。どうせ金で買われた身体

と、拷問したあととはまるで、羞恥心のかけらもないようなハスツパなポーズを見せます。美香子夫人には、女らしさ……責められても疲れはてても、猶、力の及ぶかぎり身を守ろう、恥をさらけだすまいと云う、けなげな心が残っていたのです。

「妾、おふろに入りたいわ」

夫人の口から洩れた最初の言葉でした。

洋酒のグラスを、口にしていたKが、

「なんだって？」

「おふろに入ってからだをきよめたいの。ちよっと、十分間でいいから、ね」

見上げる瞳が、美しくございました。

「だって、すぐまた、拷問されるんだぜ。すぐ、汚れちまうぜ」

「でも……」

「なぜ入りたいのか、わけを云え、わけを、それ次第で、行かせてもいい」

美香夫人は、次のように、はっきりと申しました。

「女って、いつでも美しくしておきたいものなのよ。それにHさんのためにも、綺麗にしてさしあげたいの。拷問される女がよこれていたので、悪いわ。あなた、わかって！お願い。妾、どっちみち拷問されるのなら、

綺麗ならだでされたいのよ！」

自分を責める男たちのために肌を美しくしておきたいと云うこの心を、女の業とだけで片付けることができませんようか。

「Hさん、どうします？」

「せっかくの奥さんの御厚意だ。受けましようよ」

Kは、夫人に、

「じゃあ、十分間だけ。Hさんに洗ってもらうこと」

深くうなずいた夫人をつれて、足音をしのばせながら階下の風呂場にいき、縄をといた私は、夫人を湯舟に入れると、扉をしめてあがり場でまきました。

いっしょに入るよりも、ふろあがりの水玉をはじきかえすほど脂ののった、湯気のたつ女体を縛りあげる値打ちをとろうと思ったからでございます。

ひっそりと、湯をつかう音をききながら、私はウイスキーのポケット瓶をなめつつ、まきました。

(私たちは、ふろに入らなくていいのかい)と訊ねたとき、

(ええ。あなた方は男。妾は女。男の方はきよめなくてもいいの。主人ですもの。綺麗に

しなければいけないのは、縛られる妾だけなのよ」といい、さらに、

（妾が、なぜ綺麗にしていいたいかわかるでしょ）と、恥かしげに笑って答えた夫人。

「あと二分だよ」

と、私がいい、

「すぐ、でますわ」

と、湯舟から返事がかえり、言葉どおり、すぐに夫人がでてきました。

期待どおりの美しさでした。ふっくらと脂ののった肩の肉や、胸乳から、湯気が、たち昇っています。

縄を手にしている私を見ると、媚びるような微笑をうかべ、私の心を見抜いてでもいるように、あがり場の床に正座すると、

「どうぞ、お縄を……」

と両手を、肉付きゆたかな背にまわし、

「かけて、下さいまし」

うなだれて、縛られるのを待つ美香子夫人の美しさは、忘れられない姿態でございました。きちんと揃えられた手首に二巻きしたあと、左の腋の下をかくぐらせた麻縄を、ふくよかな二の腕へ廻して、ぐいっとしめあげた私は、乳房の下へ、肉に喰い込むように、一筋の縄を走らせ、夫人の軽い呻きをかま

わず、二の腕へひとまき。いったん両手首で結びなおして、左の二の腕、乳房の上、そして右の二の腕へと、かたどおりの縄をかける

と、

「きりきり、たちませい！」

と、芝居がかった声をだし、縄尻をとりま

した。

「イヤ……」

私は、耳を疑いました。

「いやよ。……妾、いやです」

まぎれもなく、美香夫人の声でした。

うつぶせた顔を、こちらに向けかえると、

「わかるでしょう、Hさん。明後日は、こんなことでは、すまないことを」

思いがけない言葉に、ためらっている私に

「明後日は、六人もの男のかたが、いらっし

やるのよ。美香、どうしましょう」

くると、私の方に向きをかえた夫人は、

右膝を立てた姿で、にじり寄ってきます。

三十一歳の熟れきった人妻が、艶めく色気を、縛られた肌のすみずみから発散させながら、私にささやくのです。

「Hさん、明後日は、妾、六人もの男のひとたち、賜りものにされるのよ……いま、ここでその練習を……」

わざわざ風呂にはいり、きよめたのは——という夫人の気持は、胸にジーンとくるほど、よく判ります。

しかし、時間は十分。夫であるKが、いつやってくるかわかりません。

（ええいっ。ここまでできたのだ。あとはままよ！）

と、私は、美香夫人の両肩を激しく抱きしめました。まるで、アルコール中毒患者が、酒に出あったときのように、唇を奪うポーズになっていました。ほんの二、三十秒……。夫人が、縛られた不自由な身体を、息苦しげに腕かせかけたとき、

「美香子！」

荒々しく入ってきたのは、Kでした。

「美香子、もう許すわけにはいかん。Hさん！ さあ、ひき出して下さい。責めて責めて責め抜きますから」

それは、うむを云わせぬ語調でした。

（ミイラ取りが、ミイラになったな）と、私は心のうちで思いながら、美香子夫人の縄尻をとり、もとの拷問倉へと、ひきたててゆくほかはありませんでした。

それから、あとのことは、写真で、御説明申し上げましょう。例によって、K、自身が煽情的な、題名をつけております。

五十一番——「私刑される人妻」

美香夫人の両腕をかかしのようひろげて六尺棒に縛りつけ、天井から吊るし、その前面で男（つまり私）が、ローソクを持って迫っている写真

五十四番——「罵られる人妻」

床柱で、夫人が、のどをそらせ、顔をのけぞらせて、悶えており、その前面で、二人の男（つまり私とK）が背を見せて写っている写真。

五十九番——「ひらかれる人妻」

両手両足をベッドの手すりに、大きくひろげてしばりつけようとしている男（私）と、夫人が、懸命にそうはさせまいと耐えている写真。夫人の表情が、何とも言えないムードをかもし出している。

六十二番——「拷問のあと」

放心状態の美香夫人を撮したものの。二人がかりで責めつけたあと、私たちが、のどかわきをうるおそうと、ビールをのんでいる間縄をとき、荒延の上へ放置したとき、Kが、シャッターをきったもの。

六十四番——「痴態」

Kが、縄のかかっている夫人の背後から両腕を羽交いじめにして、私が、鳥の羽根で肌をなで、夫人が遂に、唇を開いて呻き声を立て、熱い息吹きを始めた瞬間をセルフタイマーで、とったもの。

六十五番——「妾を拷問して！」

両手を背後に廻し、右膝を立て、左足を床にのばし、豊かな胸を大きく突き出して、縄をねだる美香子夫人。

六十六番——「妾はKの妻です！」

両膝で立ち、正確な菱縄縛り。全身を曝して男たちの前に屈服。

六十七番——「人妻の危機」

縛られたままで、寝床の上。男（私）の手が迫るのを、どうにかして逃れようとしている夫人。その美香夫人の髪が、もう一人の男（K）に撫えられている。

七、

六月に入ってまもなく私は、Kから、三十数葉の写真を受け取りました。

そのなかに、美香夫人自身の書いた次のような手紙が入っておりました。

「Hさん、いづぞやは、まことにありがたく

存じました。おかげさまで会合の日は、どうにか、ぶじにつとめることができました。妾はやはり、無我夢中でしたけれど、あとで宅が申しますには、九人のみなさま方は御満足下さいましたよし。胸をつきあげるような恥かしさといっしょに、なにか、ほっとしたおちついた気持でございます。これもHさんのおかげと存じます。いつかまた、いらしてください。お宅を、宅ともどもお待ち申し上げます。かしこ。追伸。同封の写真、随分と恥かしいのですけれど、思いきっておおくりします。では、不尽」

字間に見ゆる麗わしの美顔。

行間に想う艶やかなる肢体。

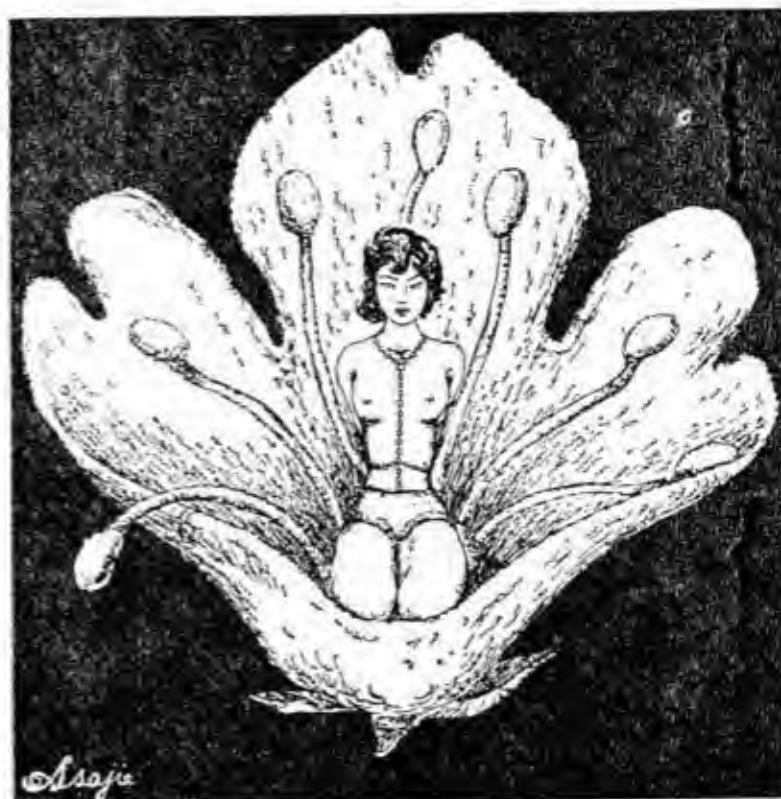
全文に漂う香ぐわしの芳香。

私の手紙持つ手は、あの日の想い出に慄えるのでございました。

六人でなく、九人もの、同好の士が集まったのだと、T市での、スイート・サディスト達の発展に驚異を感じながら、私は、美香子夫人の、さまざま責めに悶える美態を焼きつけた写真を、夜も更けるのも忘れて見つめていたことのでございました。

——（終）——

（カット・辻鼻太郎）



前奏曲

——この広い世界のどこかに
醜怪な微笑を泛かべて
異端の香り撒きちらし
異邦の食を生餌に使い
生きとし生けるものを
暗黒と寂静の奈落から
浮きあがり消えてゆく
夢幻の小さな泡に似た
燦く無数の美に変える

懸賞創作入選作品

愁 鬼 館

(上)

被 験 者 屈 伏

高 杉 愁 郎

瑠璃の悪魔が隠れ棲む

鋭く尖った尾を伸ばし
耽美と猟奇の胸のうち
高貴を逃れ清純を厭い
羞恥と苦悶を糺混ぜに
淫靡の永い歳月をかけ
快楽の美酒を醸造する
幻魔の囿圀が必ずある
この小さな心のどこかに——

三木史郎「苑子の死」より

序 曲

階下から呼ばれた。
「彩子^{さいこ}さん、お電話、女の人から」
下宿の娘の声に
「ありがとうございます。すぐゆきます」
答えて彩子は、小説の残り少いページから
顔をあげた。
(誰かしら、こんな時間に)
軽やかに階段を降りてゆく。夜の電話は奇

妙な不安と期待をもたらすものだ。特に、懶い春の夜のひとときを過ごし兼ねる若い女にとっては……

長い石塀の上に黒々と枝を張りだした桜の古木から、うっすらと白い花びらが舞い散って、行きかう人影もない住宅街の路を、彩子是最寄りの駅に急いだ。早朝の薄明りを縫って、好天を約束する陽光がちらちら踊る。

警笛を鳴らして追い抜いて行った一台の自動車は急停止し、男が降りるのを眼の隅にとらえて彼女は立ち止まった。

「川崎さん、川崎彩子さんじゃないか」

朝日を背に、ほっそり黒い長身の影ばかりが近づいて、

「僕ですよ、杉だ」

「まあ、済みません、先生。急いでおりましたので……」

杉愁鬼を彼女は認めた。特別に親しい間柄ではなかったが、彼女の方はこの小説家をよく識っていた。学生時代に愛読した作品から彼に淡い憧れを抱いており、劇団に這入った時には、杉がその顧問をしていることを知って喜んだものだった。幾度か言葉は交したが、名前まで憶えてくれていたとは意外で、

仲間がいたら得意になる処だった。

「事務所へ行くの？ それにしては早いと思うけど」

「はい。事情でN市まで参ります」

新宿まで送ろう、と云う杉の薦めに、助手席に乗った彩子は、彼の柔らかな口調に不安を解きほぐされ、ポツリポツリと事情を打明けていた。

「昨夜、電話で報らせて寄越したんです。N病院から」

「N病院？ 弟さん、N病院に入院していたの？」

彩子は失言を悟った。秘密ではなかったが矢張り他人に知られたくないことだった。

（判ってしまったかしら）

彼女は、杉がN市の出身だった事を憶い出して考えた。

自動車は新宿駅前に出て、赤信号に停められた。不意に杉が彩子の方に向き直り、眼が合ってしまった彼女は、思わず頬を紅く染めて、どぎまぎした。

「N市へ、このまま送ってあげよう。なに気にすることはないよ。何処へ行く当てもなく出て来たんだから、それが故里であれば都合

が良い訳だ、久し振りだもの。それが良い」

嬉しかった。N市までの数時間を、堅い汽車の座席で一人揺られて過ごすのは、とても耐えられない。

「疲れているんだね、臉が腫れている。後に魔法塚があるだろう、コオヒイが入れてあるから飲みたまえ。落ち着く」

車内に乾いた、苦い芳香が漂った。

「あ——！」

彩子はストッキングに包まれて若々しく輝く脚を見降ろしていた。極端に低いシートでミニ・スカートでは隠しきれないすらりと伸びた太腿の、はち切れそうな量感が気恥かしさを訴えて……丸い膝にこぼれた茶色のしみが見るみる広がってゆく。

（聞いて貰おう）

彼女は不安を、恐れを打ち明けてしまおうと思った。慰めや助言を求める訳ではなく、ただ無性に話してしまいたかった。経験豊かで、優しい独身の叔父に対する親しみを、この小説家に抱いて。

急に襲ってきた睡魔を振り除けるように、堰を切って話し始めた。愛情に充ちた家庭に射す暗い影を、十八歳の青春を精神病院に送る弟のことを、昨夜、下宿で知ったその失踪

を——。

二人を乗せた自動車は、多摩川にかかる長い橋を渡っていた。

独 奏 曲

深い深いもや、白い影が、黒い光が流れ、舞う、伸びる、上がる、倒れる、崩れる、危いっ！

手を差し伸べようとして、彩子は眼を開けた。眩しさに顔をそむけると、空白の頭に徐々に記憶が甦って、思わず起き直るとして、「あ——」

痛みが腕を襲った。両手は組んで頸の後、ちようど腕枕をした恰好で交叉しており、動かないのだ。

(どうしたのかしら……)

状況を判然とさせるため、顔を左右に振って、まわりを見る。

広い部屋だ。レースのカアテンから春がっぱいに射し込む大きなガラス窓、風景画の額が幾つか飾ってある壁と暖炉。応接間らしいわ、と見当をつけた。

彼女は部屋の中央辺り、低い小型のテーブルを囲んだ肘掛椅子の一つに坐っている。杉

の穏やかな笑顔がのぞきこむ。

「気が付いたね」

「ここは、どこ？ あたしは……？」

事故——？ 突然、嫌な予感がして、彼女は咄嗟に心を引き締め、全身に神経を走らせてみる——。

けだるさが残っているのと、両の腕に痺れがある他は異常はないようだ。

「気を楽にして。さあ、これを飲んで御覧」

唇元に差しつけられたグラスの液体を、云われるままに、幼女のようにごくごく咽喉をならしながら飲むと、冷たい爽やかさが口の中に広がり、昂まりが静かに消えてゆく。

うふ——むせてしまった。

溜息をついて杉に尋ねる眼差しを向けた。

「説明しよう。先ずここは、僕の家。東京の郊外とだけ言って置く、誰も識らない所にある別荘だ。君は当然、ここで生活することになる」

「……？」

「皆を紹介してあげよう、一緒に暮らすのだから」

真向いの椅子にゆったりと、長い脚を高く

組んでいる女は二十五、六に見える。

「義理の妹、綾子さんだ」

彩子は彼女の冷たい美しさに気を取られ無意識に微笑みを返した。

綾子の傍らには、美少年とも云える青年が立っており、はにかむような眼で彩子を見、彼女は、もじもじした。

「K坊だ。ケイは、アルファベットのKの字を使う。珍らしい名前だろう。時折、名前が変わるけれども、そのうちに判る。君の身の回りの世話には彼がやってくれるからね。それから——」

杉の手が一人の女を示した。白いケープ風の衣裳を着、長椅子に横たわったその女の、あどけない、整ってはいるが生氣に欠けた投げやりな表情に驚いた。まだ二十歳前（はたち）のようだ。

「君の仲間だ。晴美と云う名だね。仲良くしたまえ」

彩子の心に不審が湧いて来た。

「でも、何故、私がここに？ 仲間と云うのは？」

「車の中で珈琲を飲んだのを覚えてるかね？ 睡眠薬が混ざってあったのさ」

「では……」

「そう。入念に計画してあった事でね、君を罠にかけるために」

「じゃ、じゃあ弟の事は？ 茂行が病院から居なくなったのは……？」

「出鱈目さ。昨夜の電話はね、そこに居る綾子の声なんだ」

「……」

「仲々、芸達者が揃ってるだろう？ 俳優の卵から見ても、どうだい」

彩子は混乱しきった頭を振った。判らないわ——。縫れた毛糸のように、ほぐしてもほぐしても、結び目や輪がからまってくる。

「君はね、小鳥なんだ。捕えられ、籠に入れた可愛い鳥なんだよ」

「鶯さん、紹介してよ——」

綾子が優しく言うのと、近づいて彩子の前に立った。

「僕が云うよ。今日から、愁鬼館の住人になった彩子です、どうかよろしく。彩は彩る。」

二十一歳……」

状態は臆に察したが、依然、疑問と不安に口もきけず、辺りに視線を泳がせるばかり。

（一体、この人達は何をしようと云うのだろうか。何か恐ろしいことが起こるのではないかしら）

「六人目の被験者になるね。処女だ、と僕は思う」

「そりゃ判りませんよ」

傍らから、K坊と呼ばれた青年が、初めて口を開いた。

「先生の、思う、は当てになりませんから。」

晴美の時にしてもそうでしょう。近頃の女は早いんですよ……初体験が十五、六、なんてザラです」

「義兄さんのは、いつも希望が現実と混線するんだからね。身体検査すれば、すぐ判るとだわ」

他人事のように聞いていた彩子は、ギクリとなった。

「貴方がた、何をなさる心算なんですか？」

帰して下さい！」

「身体を少し調べるだけだよ。手を動かして御覧」

いつの間にか、自由になっていたとみえ、彼女は痺れた両手を振っていた。

「服を脱いで裸になる」

咄嗟に、小さく叫んで椅子から飛び上るように遁げようとしたが、いけない——押し戻され、抑えつけられて、K坊が腕を取ると椅子の背に廻して、腰かけた椅子を後手に背負った形になった。

「あ。な、なにを……！」

杉の指が上着のボタンを丁寧に外す。力の限り抵抗はしたが、三人の力にはかなわず、わずかに自由な下肢もスカートを素すのみ、太腿が露わになってゆく。

「やめて、待って下さいっ！」

バタバタと暴れる脚を綾子が抱えこみ、その手がスカートの下でストッキングを奪ろうとうごめく。

「ほらほら、暴れると服が破れてしまうじゃないの」

「いや、いやよ。誰か、助けてエ」

上着が両腕から抜かれ、ブラウスを奪われて、スカートも水色のスリッパもすっぽり脱がされると、純白のブラジャーとパンティーだけの姿で、彩子はまた椅子の中に深く押しつけられた。

伸びやかな四肢は無情な陽光に小麦色に輝き、しみ一つない肌はしっとりとした重みと光沢をもってふるえる。

彩子は大きく喘いだ。

「お願い、お願いです。助けて……」

頬が膝頭に触れるほど強く、上半身が前に屈められ、杉が背中中でブラジャーを外しかかる。

「ああ——」

乳房が現われた。肌の他の部分より幾らか白いそれは、先端の桜桃とともに誇らしげに恥かしげに、ツンと上向いて形良く顫えている。

できるかぎり身を縮めて、脚を胸にひきつけた彩子の身体が羞らいに紅く染まって、呼吸の度に肩が大きく上下する。

「流石、綺麗なものね」

云いながら綾子が抱きつくように彼女の腰に手をかけたので、彩子は身体を硬くして、「お願い、それだけは勘忍して。ね、先生。あ、あっ、困るうっ！」

最後は叫びだった。突然、軀が宙に浮き、肌を隠す唯一の白い薄布は綾子の手に移り、彼女は堅く眼を閉じた。

物心ついてからは、肉親の視線にすら絶えて触れさせなかった肌を、今、何一つ覆うすべもなく、他人の前に晒している――。

K坊の手が裸の両腕を握むと、捻るように頸の後に廻して皮紐で縛り上げ、椅子の背もたれの上端にしっかりと留めた。恥かしさと恐ろしさに慄えて、唇を噛む彼女の足首を椅子の脚にくくりつけてしまう。彼女は今度は全裸の姿を無防備に椅子に――この椅子は床に固定されているらしいのだ――坐らされた

のだ。

「ああ、許して……」

「さあ、こちらを向いて。すぐ済むわ」

「何を、なにをするの？」

正面を正視する勇氣などある筈もなく、僅かに薄眼を使うと、花と散った衣類をK坊が掻き集めている。彩子は裸身に触れられたかのような悪感が全身を襲って怯えた。

その間に綾子の手にした巻尺が豊かな胸に巻かれ、数字が読みとられる。

「85あるわ」

杉は低い卓に腰かけ、手にした書類に次々と書き込んでゆく。

彩子の視線がK坊に戻って、彼女は息を呑んだ。瞳が恐怖に鈴を張る。集めた衣類の前で青年は手早く脱衣しているのだ。

「や、やめて。そんな、そんな……恐ろしいこと！」

杉は不審そうに彼女を見、K坊を見ると、唐突に笑い出した。

色白の、小柄だが均整のとれた後姿を見せてK坊は、彩子の下着を拾い上げると、ためらいもせず脚を入れた。

暫くの間、彩子は屈辱の姿態も忘れて、青年の不思議な行為を凝視していた。

「ははははは、判ったかね？ 彼氏、いい男なんだが、玉に疵だよ、これが」

衣裳はそっくり男の身に移ってしまい、何処にあったものか、ヘヤ・ピースまでつける

と、彼は彩子に向き直った。

「紹介しよう、K子さんという訳だ」
彼、今や彼女は両手をあげ、モデルの如く姿を作ると、その場でクルリと一回転して云った。

「どう、似合うかしら？」

その口調も表情も姿態も、女の妖しい優雅さとしか云えぬ美しい魅力に、心を奪われていた彩子は、鋭敏な乳首を綾子にピン、と弾かれ、悲鳴とともに我に帰った。

「男性経験の方を診るから、K子も手伝ってよ。縛り直さなきゃね」

綾子の言葉の意味を知って、彩子は全身の力を膝に集めた。杉とK子はそれぞれ両脚の可愛い桃色のペディキュアに彩られた指を握ってから、皮紐を解く。

顔が充血する程抵抗を試みたが、所詮空しかった。

「あっ、許してっ、いやあっ！」
肘掛にそれぞれ掛けられた足は、膝から強く折り屈げて固定されてしまった。

絶え入るような気持で、顔を左右に振り続ける。長い自慢の黒髪が流れて、肩に揺れ、乳房に広がった。

慣れた手つきで、綾子が言葉通り調べ始める。

「いやっ、いやよう、許してよう」

もがきながら、声はかすれて泣きになり、溢れる涙が、胸を濡らし、腹に落ち、ももに散った。

「珍しく、義兄さんのご希望通りよ。保証付きだわ」

「だと思ったよ。彩子、暫くの辛抱だ。今度の感覚反応テストで、今日は終りだからね」

どんなことが行われるのか判らないだけに彩子は恐怖に泣き続けた。

「貴方の身体の感覚の鋭い処や、弱い部分を調べるのよ。今後の資料にするためにね」

綾子の言葉と同時に、彩子は不自由な四肢を可能な限り、のけぞって呻いた。激しい、耐え切れない擦ったさが全身を貫いた。

足の裏をK坊が柔い鳥の羽根で撫でたのであった。杉の手にしたそれも、耳から頸筋に微妙な蠢きを加え、反転して晒し出た腋に触手を伸ばす。

「ううっ、あうう……」

足の指が反り返った。

「や、やめ……て、うふう」

「ここはどうだい？」

「うう、くうっ、あはあっ」

二本の羽毛は生命あるものの如く、腰を、胸を、膝を、^{あしうら}臍を、太腿を、踊り、飛び廻った。強く、或は弱く、脂汗と涙に光る彩子の裸身の、至るところに痙攣を残して……。

練習曲

「先生、なぜ、なぜ私はこんな酷い目にあわされなくてはならないのですか」

「さあ、なぜかな……」

「仰言って下さい」

「うむ」

「理由がある筈です。ただ訳もなく連れて来られて、恥かしい目にあうなんて、とても我慢できません」

「理由が判れば我慢するのだね」

「いやです。納得できないわ」

「そうだろう。だが、辛抱して貰うより仕方ない」

「そんな馬鹿な……」

翌日のここは、愁鬼館の地下室であった。

眠られぬ夜を啜り泣きで明かした彩子は、朝食を与えられた後、K坊は導かれて地下に降りて来、小型の体育館に似たこの部屋に入れた。体操競技用の平行棒の間に立たされ、両腕を二本の棒に縛りつけられて、杉と向かい合っていた。

昨夜、椅子から解放されてから、衣裳として渡された白いケープーと云っても、大きな布に過ぎず、肩から羽織って頸で止めるだけの代物だったが——も剥ぎ取られて、電光にその若い肢体が陰翳を形作って、息づいていた。男の視線を逃れようと、腰を引き、片足をくの字に曲げていた。

「覚えもないのに、なぜこんなに苛められるかしら？　なぜなの？」

恥かしさと怒りに頬を染め、彩子は尋ね続けた。質問している間は、僅かながらこの苦しみがまぎれる、そんな気がしたのだ。

「君は、桜と梅と、どっちが好きかね」

「……？」

杉の唐突な質問に、意味を取り兼ねた。

「妙な譬えだがね。現在の君は肉体的にも精神的にも、健康な美しさを持っている。桜のように陽気な美しさ、派手で艶やかだ。……しかし、僕の求めているものは違う。冬の厳

しい寒さに耐えて、悲しみと愁いを装って、ひっそり綻びる白い梅の蕾、雪の中の小さな淋しい美しさだ。彩子の中にそれがある。きっとある。僕はそれを咲かせるのだ。君はいろいろ恥かしい目にあう。羞恥が主なモチーフだ。僕は君が耐えて耐えて、涙と汗で花開くのを期待しているのさ」

彩子には理解できなかったが、K坊の手が足首に縄を括りつけようとする動作の意味は悟った。反抗も果敢なく、たちまち踝に一筋ずつの縄を巻きつけられてしまった。

室内は清潔だったが、異様な雰囲気をもっていた。タイルの床に反射する螢光灯が眩い天井から、滑車や鎖、ロープが太いフックに吊られおり、壁にも金属の環や鉤。……ビニール・レザー張りの寝台とガラス戸棚、病院の一室とも、体操場とも見える調度によって占められている。玩具の木馬状の台、美容用の自転車等。……

怯えて霞みそうになる彩子の脳裏に一つの語が浮かんだ。

「先生！ 先生は、サディストなんだわ」

（判った。この男は、女性を侮辱し、苦痛を与える事に無上の悦びを感じる、また、それだけを快楽の源泉にしている倒錯心理の持主

なのだ……サド侯爵の末裔。私はその犠牲者なんだわ）

「そう思うかね。そうかも知れない、サディストではないと云いもしない。だが、そんなこと、どうしても良くはないか、今の君にとっては。ね？」

杉はK坊に合図し、彩子の身体は宙に浮いた。

「ああっ」

足首にからみついた二筋の縄は、キリキリと軽い音を立てて廻る滑車を通り、K坊の手元近い壁に設置した巻上げ機に連結されていてK坊の持つハンドルの動きに従って、脚が高く挙がってゆく。両腕は付根を平行棒に固定され、50キロの裸身がやがて水平近くまでになった。

「ううっ、い、いたい！」

腋と踝に体重の全てがかかってくる。汗が一刻に吹き出す。

「今日は写真を撮るんだ。新鮮な状態の彩子を記録するためにね。いろいろなポーズで写してあげるよ」

彩子は全身に力を入れてもがいた。が、自由を失った女の力は弱く、無情な縄は自在に伸縮して、彼女の身体を屈辱的な姿態に変え

てしまう。

「いやっ、いやっ！」

平行棒は高さを調節できるらしい。滑車も天井のレールを自由に移動するのだ。杉の指示とK坊の動きに、柔らかな女体は、横に伸び、折れ曲がり、逆立ちした。黒髪が床を掃かんばかり――。

無慈悲な人形つかいに操られるマリオネット。ストロボが閃光を発し、シャッター音が続く。

彩子は悲鳴をあげた。苦痛も羞恥もさることながら、その恥辱の隅々を写真に残されるという行為に、死よりも辛い胸の痛みを覚えた。

地下室の重く澱んだ熱気の中に、女の肌の匂いが充ち、杉は目を細めた。

処女の肉体はくねり、曲げられ、開き、伸び……喘ぎ、泣きながら、海藻に戯れる人魚のように、光と影のコントラストにゆらいで躍った。

滑車が廻る……閃光が走る。光る太腿、杉の眼、縄が伸び髪が散る、揺れる乳房、喘ぐ唇……反り返る裸身、平行棒――。

（いっそ、気が狂った方が楽だわ）
自尊の細い糸にすがって彩子は果てしなく

続く苦しみに耐えていた。自分を失うことな
く――。

いつの間にか運動は終って、彩子は大きく
吐息をつく。疲労と安逸にけだるく、暫くは
恥かしさも忘れ、深い呼吸を続けた。

彼女の身体は平行棒にすっぽりと挟みこま
れていた。脇の間を通る二本のバーに、脚を
かけて跨っていて横から見るとWを逆にした
恰好で、肩と膝小僧だけがバーの上に出てい
た。

K坊が皮紐で素早く膝をバーに縛りつけて
しまう。大きく開かれて汗に光る太腿を見た
彩子は反射的に、堅く眼をつぶった。忘れて
いた恥かしさと口惜しさがオコリのように全
身に拡がり、慄えが後から後から突き上げて
くる。激しい動悸と短い喘ぎの中で、騒ぐ心
を鎮めようと必死になって考えた。

(夢なのだ、これは。今にきつと醒める)

肌を刺す杉の視線に戦きながら、自らを空
白に保とうと、懸命に努力していた思考が、
ある恐ろしい感覚を捕えた。全身に神経を走
らせて緊張した。

明け方から我慢していて長い苦しみに忘れ
かけていた尿意が、気持の最後の張りを衝き

崩すように、刺激となって湧いてきたのだ。

「せ、先生。お願いです」

思わず腰をくねらせて叫ぶ。

「お願い。降ろして、降ろして下さい」

髪を撫でる手を感じて、彩子は悲しく杉を
凝視した。

「どうした、疲れたかね？」

「先生、もう許して……ほどうて下さい。あ
たし……」

「もう少しの辛抱だよ」

「でも、でも……」

「痛くはない筈だがな」

はぐらかす杉に感覚は刺激と変わり、痛み
を伴って――。

「うっ、つうっ！」

毛穴という毛穴から、冷たい汗が流れ出し
て、外科用のメスが体内を切り裂いたような
痛みが駆け抜ける。

「助けてっ」

「だから、どうしたんだね。云わなくては、
判らない」

「……」

(愉しんでいる、私の苦しさを知っていなが
ら、この人は愉しんでいるんだ)

「お、お、お手洗いに……」

「そうか、トイレに行きたいんだね」

夢中で何度もうなずいた。

「早く、早く！」

「ここじゃ、嫌かねエ」

「せ、せんせい！」

彩子は大きく眼を見はった。喘いだ。

(今すぐ、気を失ってしまいたい)

「僕はかまわないよ。いい恰好だ。子供の頃
を憶い出すだろう、おふくろに抱かれてね」

(悪魔だわ、人間じゃない。ああ……)

かつては畏敬すら覚えた、柔らかな真摯に
光るその眼差しが、ひたと彼女の軀に吸いつ
いて――髪を愛撫する手に、場違いな優しさ
すら感じる自分に腹が立つ。

(どうして、この人が……この人が、こんな
ひどいこと、するなんて、信じられない)

僅かに刻が流れた。だが苦しみと闘う女の
心理にとっては、長い長い一秒ずつであった
が、体内から渦巻き、押し上げる欲求の鋭い
悲鳴に、彼女を支える細い糸の最後に残った
一筋が、音高く切れなかった。

「見、見ないで！」

「恥かしいかい」

「灯りを、け、消してっ」

螢光灯が消えた。

「ああ——」

微かな安堵の笑みを唇に、彩子は力を抜いたが——。

一瞬の暗黒を貫いて、四条の強烈なスポット・ライトの光芒が彩子に向かって燦く。

緊張の終りに来る弛緩に身を委ねて彩子は解きはためくような満足に心を泳がせながら闇に白く浮いていた。

綺 想 曲

愁鬼館は東京都心から車で一時間半程の郊外にある。まだ新しい二階建ての洋館で、樹木にかこまれた広い敷地をもっていた。

若葉が緑に萌え盛り、春の陽射しが明かるく窓に映えて、外観は平和で穏やかな午後の暖かさであった。

彩子は椅子に腰かけ、左腕を肘掛に縛りつけられて低い卓に向かって手紙を書く。苦痛と屈辱を代償に与えられた仕事だった。N県の両親や、東京の下宿先、劇団の事務所へ自身の失踪を糊塗するために、杉の口述通りに便箋を埋めてゆく。

初めて気が付いた日、応接間かとも思ったのだが、杉は書斎に使っているらしい。沢山

の書籍の並ぶ本棚が壁の大半を占めて、書き物机が隅に、ステレオ・セットからはバイオリン・コンチェルトが澄んだ音を響かせていた。

もし状況が異なっていたら、彩子はくつろいで、高校生時代に愛読し、現在も読んでいる美しい小説の数々を、その作者と向かい合い反芻する喜びに^{ひた}浸りながら、楽しい会話を弾ませていただろう。

しかし、現実はず々と彼女を締めつけていた。不信と不安が渦混せに荒れ狂って、ややもすれば崩れ行く気弱な心を、女性としての誇りだけで叱咤して、杉と対していた。

（誇りと云っても、私のはもうボロボロになってしまったわ。このまま続けば一体どうなるのかしら）

暖炉のある壁に、晴美が長い鎖でつながれていた。相変わらず諦観と無関心の表情で横坐りになり、ケープの合わせ目から白い太腿の覗くのを隠そうともせず、ぼんやり杉と彩子を見上げていた。

（貴女は自分を放棄したんだわ、晴美さん。誇りも意地も捨てて、感情すら忘れて、ただの獣になってしまったのよ。でも……）

彩子は思った。

（無理もないわ）

何度か、見学と称して、晴美の苛められている地下室へ連れてゆかれ、そのあどけない顔が苦悩に歪み、呻きながら、汚辱の中に陥ちこむ様子を、注視するよう強いられたことがあった。そこには美しさなど少しもなく、眼を覆いたくなる陰惨で醜怪な同性の悲しさがあるだけだ。

逆に、晴美の眼の前で、彩子が様々な苦しみと恥かしさに喘ぐ姿態を耐えた時も幾度となくあった。誰よりも晴美の無表情な眸で眺められるのは辛かった。

不思議なことに、同じ捕われの身でありながら、連帯の気持や憐れみの感情は湧いて来ず、お互いに嫌悪のみ持っているようであった。少なくとも彩子は、そう考えていた。

新記録挑戦——と、綾子が名付けた恐ろしいゲームを二日前に見学させられた時、彩子に嘔吐感に襲われ、全身を総毛立たせて慄えた。

立て膝でうずくまった裸の晴美の前に、パチンコの玉を山盛りにしたボールが置かれてあった。

彩子の驚愕と不気味な嫌悪感は、抵抗する様子もなく晴美の指がその一つを摘み上げた

時、起こった。そして、おどましさに慄える彼女への第二の衝撃は、その鋼球の大半が姿を消し、哀れな女の、苦悶であるべき表情が次第に恍惚とも思われるそれに変わったのを見ての事だった。

彩子の心はつきのめされた。女の躰の悲しさをはつきりと識らされて、自らの性を呪って泣いた。

(いつかはきつと、私自身もこの白い獣のようになってしまう。女の魂までも失って、泥に蠢く、肉の塊に作り変えられてしまうのだわ。いつか……)

明かるい部屋。彩子は仕事を終え、右手を動かぬよう止めつけられた。膝をずらして、露わになる脚をケープに隠す。

(戦い抜いて見せる)

彼女は杉を見た。

(どんなに辛い事をされても、辱かしめられでも……身体は恥辱に踏みにじられ、血と泥にまみれても……決して、心までは、女の魂までは失いはしない)

じっと見詰める杉を、負けずに睨み返す。

男の表情にフツとたじろぎが浮かんだ、と

彩子は思った。杉は瞬き、視線を泳がせた。

(悲しみも、苦しみもきつと堪えて見せる。たとえ死んでも……)

杉は破顔^{わら}った。眼もとに優しい、しわが寄って、彩子は、余計悲しくなる。

「彩子、そんなに恐い顔をして、どうしたんだ。もっと可愛らしく、しなくてはいけない。今日は、嬉しいニュースが二つある。君のために用意したのだが……」

この男の穏やかな調子の裡に、厭うべき心理と行為が秘められているのを、彩子は知り抜いている。

「喜んで呉れるといいがな。……。先ず、彩子は明日、結婚するのだ」

「結婚？」

オウム返しに反問して、顔から血が引いてゆく。

「おや、嬉しくない？ 現代の女性の憧れではないかね、結婚することは」

皮肉とも揶揄とも――。

「ところで、結婚には、相手が必要ではないか。故に、一人だけ花婿を選んで貰う。勿論君に、だ。即ち男女両性の意志を尊重する訳だ、この場合は、君の考えだけで決定することにした」

彼女は呆然と、杉の声を聞いていた。

「さて、愁鬼館には三名の花婿候補がいる。

私、K坊、は君も知っている。それから、後で紹介するが新入り、今日来たばかりだ、その青年とね。誰を選ぶかは、彩子の自由だ」

「いやです。お断わりします」

「そう簡単に云い切るもんじゃない。僕はともかく、あとの二人は立派な青年だ」

「……」

「さあ、一人選びなさい」

「お断わりします」

「おかしいお嬢さんだ。何とか他に云い様はないものかね」

「厭なもの、いやなんです。あたし、愛してもいない人と結婚なんか出来ません」

「なるほど。彩子は愛なんでも、信じているんだね。いまだきロマンチックな言葉を聞いたよ」

はぐらかして云う杉に、彩子の腹は煮え立った。

「あたしは貴方がたの玩具じゃありません。

結婚する時期も相手も自分で決めます。恥知らずや人でなしと一緒にいる位なら、乞食とでも暮らした方がましだわ。殺されたっていやよ。もしも、ここから出られないものなら……どんなに酷い事されても、一生、純潔を

守り抜くわ」

「フッ、フッ、これは手厳しい。だがね、現実にはそんなに甘くない、少女趣味の夢はすぐ壊れてしまうものだ。忠告するんだよ、経験者としてね」

十分余裕をもって、眼を細める杉の自信に満ちた態度に、彩子は畏れを抱いた。

（私は捕えられた弱い女。所詮、果敢ない抵抗かも知れないわ。でも……）

「日取りから云っても、変更は許さない。総て君次第。どうしても……」

「いやっ」

「女の厭は承諾の印とか。……僕を選ぶことにするかい？」

「いやです。恥知らずの悪魔、サディストの変態！」

蒼白の貌をキッと起こし、内心の不安を抑えつけて、きっぱりと云い切った。その後にくるであろう、男の怒りを無視して――。

しかし、杉の表情はこの思い切った面罵にも変化が現われない。

「強制したくはないんだ。フェミニストだからね、こう見えても」

（フェミニストがあきれるわ）

「K坊にするか？」

「誰があんな人でなしと、……おとこ女の色さちがい！ 近くに来たら唾かけちゃう」

「ひどい事を。彩子にはふさわしくない言葉だよ、それは」

「知ってたら、もっと云いたいわ」

「僕は恐ろしい拷問を幾つも知っている。必ず君が首を縦に振って、たとえ犬や猿が相手でも、喜んで心から結婚します、と頼みたくなるヤツを、ね。それとも強引に犯してしまってもいいんだ。しかし、それは最後の手段として取って置く。彩子の可愛い顔が泣き叫ぶのは見たくないし、綺麗な肌に傷をつけたいとも思わない」

（心にもない事を、よくも白々しく――）

「と云えば嘘になる。彩子の言葉によると、僕はサディスティックの性癖の持ち主だそうだから、きっと楽しみは後に残しているんだろうよ」

（鬨っているのだ、私のことを鬨って悦んでいるのだわ。私はいや！）

「どうだろうね、残された青年と結婚したいかね？」

「いやですっ。獣！」

彼女は怯える自分を撥ねつけるように叫んだが、男の端整な貌は微笑んだだけだ。

「けだもの、か。確かに獣かも知れん。ではその獣に逢わせよう」

偶然とは考えられぬタイミングの良さで、扉が開くと颯爽と綾子が登場した。毅然とした姿は女王の如く滑らかに動き、ほっそりした手には金色の一本の細い鎖を引いて、冷たく笑いながら彩子を見た。

鎖が伸びるに従い、その一方の先端が……そこに一糸もまとわぬ若い男がつながれて部屋に姿を現わし……。

「茂行っ」

彩子は瞳を一杯に見開き、喉の奥からぐもった叫びをあげた。

（茂行が、弟がどうしてここに……）

過熱したモーターのように、頭がぶんぶん唸った。跳び立とうとして椅子を床から引きはがさんばかりに暴れる。

皮の頸環をはめられて、犬のように四ツン這いで動き廻る茂行は、血を吐く彩子の叫びに無表情な面を上げ、不思議そうに彼女を見た。焦点を失った目、だらしなく開いた口、生まれたままの姿で、よたよたと鎖に引きずられている。

「茂行っ！」

叫ばずにはいられなかった。

その曇った空白の脳に姉を認めたものか、一瞬、眸に燦きが戻ったが、すぐ消えてしまった。彼女は狂乱しそうになった。

愛する弟、不憫な弟、交通事故で廃人と化した弟、青春と云う言葉も知らず十八歳の春を空しく、精神病院のベッドで送っている筈の弟……

(どうして、ここに……)

恐ろしい愁鬼館の生活に連れ込まれた時、発端は茂行の失踪を告げる電話であった事を憶い出した。

「先生っ！ あたしや弟に何の怨みがあるんですか？ な、なんの怨みが……」

「怨み？ そんなものはない」

「じゃ、なぜ弟までも……」

「彩子が一人では淋しかろうと思ってね。茂行君には決して危害は加えないよ」

「……」

「これが第二のニュースだ。嬉しいだろう、姉弟逢えて。兼ねて、彼が最後に残った花婿候補者になる」

彼女は怒りに慄えた。嘆きとも憎悪ともつかぬ激しい昂奮に苛立ちながら、弟をじっと見守っていた。

「N病院は、もともと死んだ親父の持ち物でね、今は名儀を他人に貸してあるのさ」

それで判った。この男と自分の間には、残酷な運命の絆があったのだ。自分の名前も判らない弟、という絆が。

「さあ、三人の中から一人、結婚相手を決めるんだ。僕か、K坊か、さもなくば、君の弟だ。誰にする……」

淡々とした口調が、かえって恐怖を強いのにする。彼女は絶句した。

「……彩子？」

緊迫した雰囲気を知覚できない弟は、女主人に鎖を握られてその脚元にうずくまり、タイト・スカートの裾に猫のようにじゃれて楽しんでた。鼻をならしながら、綾子のすりと長い脚に顔をすりつけて甘え、自分の仕種に満足の声をもらす、子供の時から男らしく力強かった彼は、かえってあどけなくさえ見える。実際、その精神は子供のそれと等しいのだ。

突然、耳のそばで杉の哄笑が弾け、彩子は云い様の無い辱かしさと、やり場の無い憤りに全身の血が沸き立ち騒ぐのを感じた。

汚れを知らない処女が、自らの肌を自らの手で、野卑な男どもの前に晒け出すような悲

痛で苛酷の苦しみが、彩子の弱り果てた繊細な神経を、さいなみ、傷つけながら、黒雲のように広がって来た。

狂 詩 曲

入浴の度に涙にくれたこの浴室は、実験室——あの地下の部屋を杉はそう呼んだ——の隣りにあり薄暗い電灯の下、物淋しい静寂につつまれて、床に散る水滴の絶え間ない音だけが、空しく響いてくる。

結婚を、無言の反抗で拒否し続けた若い娘は、白いタイルの上に、その疲れた肉体を大の字に伸ばされていた。身動き出来ぬように手首と足首を、床に埋めた鉤に緊く縛りつけられている。

頭を廻らせると、小さな木椅子に腰かけ、足を組んでいる男の姿がぼんやりと影になって見えた。

珍しい標本を、観ているのだ。手足をピンで止められた珍種の蝶か、蛉蜻——。捕えた獲物を仔細に眺めている。美しい女体の標本を——。その屈服を舌舐めずりしながら待っているのだ。

隠すべき術とてない全裸の彫像は、ほんの

り微妙な起伏を見せ、真っ白な床に映えた肌は羞らに染まって燃えた。

チッ！

雫が一滴、乳房に跳ね、波うつ腹部を伝わって流れた。

「……」

声が殺された。しっかりと猿轡をされている。初めての経験だ。

ピチッ、とまた同じ場所に当たって、乳房が揺れた。柔軟な肌に隠された若竹のような弾力をもつ筋肉が自由を求めて、ピクピク動く。

「そうやって、暫く考えるんだな。拷問はあまり好かないが、仕方あるまい、彩子が強情を張るからだよ」

「……」

ピッ！

視線が雫の源を探し求めて、暗い天井をさまよう。乳房の真上に当たる辺りに、細いガラス管がのぞいており、そこから小さな水滴が時をおいて落ちてくるのだ。

「簡単な仕掛だろう？ だけど馬鹿にしてはいけないよ。時間というのは恐ろしい要素なんだ」

ピチッ——チッ！

今度は間隔が短い。

「降参する迄、そのままだ。誰か一人を選ぶということだよ。簡単なことだ。さもないければ、気が狂うまで」

彩子は何か言おうとしたが、猿轡のために小さな呻きにしかならない。

ピッ！

「僕か、K坊か、君の弟だ……」

懸命に頸を振って拒否した。

（まける……）

ピッ！

（……ものか）

杉は立ち上がると、電灯を消した。代わって、彩子の顔のすぐ上にある、青い豆電球が点き、おぼつかないその青い光が、暗闇の中に、仰臥した肢体をぼうっと照らし出す。

ピッ！

娘は多寡をくくっていた。僅かな水の雫ぐらい、肌を傷つけることもない、苦痛すら感じない、ほんのちよっとした刺激に過ぎず、負けることなど、考えられなかったのだ。

ピチ！ ポト！

柔らかな左の乳房をたたき、小さな水音以外は完全な静かさが、暗い浴室を支配して、時がゆっくりと流れて行った——。

ピチッ！

「う、うう」

猿轡の奥の呻きが、もの憂い程の静寂を破り、哀れな娘は今、悟った。気も狂わんばかりの恐怖を——。水の力の強さを——。

当初の微かな刺激はやがて烈しい痛みを伴って責めて来た。乳頭は高く突き出して、水滴の当たる箇所から乳房全体にかけて、千切れるような疼痛が広がってゆく。打撃を受けぬ右の乳がはちきれ程高く盛り上がり、痒みに似た欲求が生じる。

可能なかぎり軀をねじ曲げても、雫は正確に娘の弱い場所に落ちてくるのだ。

本当に恐ろしいのは、それだけではなかった。

不揃いの、予期出来ぬ間隔で加えられる刺激への気持の用意が、たびたびそらされ、はぐらかされ、不意を衝いて痛みが襲いかかって来る。

緊張と安堵の隙間を縫って、心理に対する揺さぶりが、彼女を休む間もなく恐慌に追い上げ、不安に陥し入れるのだ。

生命を持たぬ透明な水の粒。それは技巧に長けた男の指頭のように、敏感な乳房を揉みしだき、囁き、裏切って、身体の外から内か

ら、飽かず攻め寄せた。
ピッ！

小さく聴いていた水音も、今は砲弾の炸烈に似て反響し、間髪を入れず、次の爆発を誘う。仰向けになりながらも、殆ど量感を失わぬ形の良い乳房が、彩子の昂まりにつれ、揺らいで……悪感とも快感とも云えぬ奇妙な感覚に慄えて襲われて、彩子は屈服する我が身を察した。

（お母さん、助けて）

チッ！

濡れた胸が高く盛り上がる。腿の内側がひくひく動く。灯りに青く染まった下腹が波打って……。髪が扇のように広がって、タイルに舞い踊った。

「ううっ」

男の眼も、露わな裸身も念頭にない。ただ苦しい。あらゆる神経を胸に集めて、次の落下に備える。呻きながら待ち続ける。

ピチッ！

（助けて、苦しい、助けてっ）

大声で叫びたい、泣き喚きたい。身体を滅茶滅茶に裂いてしまいたい。

ピシッ！

「くうーっ」

（助けて、やめて……）

不自由な裸身が反り返る。

（もう、かんにん……して）

耳鳴りがし、目の前が霧に溶けてしまいそうだ。

ピチ、

「む、むうっ！」

天星社刊 《限定版グラビア写真集》 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 一部一〇〇〇円（送共）略号「美？」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生感のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

（やめて、やめて、助けて、先生！）

彩子は焦点を失い勝ちの瞳で、必死に杉の姿を探していた。

（早く、早くっ、せんせいっ！）

縋りつく眼が長身の影を捕えた。懸命に首を縦に振る、幾度も振る……。水が止まった。

彩子は失禁していた。

男が手早く口枷を外すと、彩子は唾液を吸

って重い布を、痺れた舌で押し出しながら、むさぼるように空気を求めて喘いだ。胸が大きく上下し、荒い呼吸の音のみが続く。

青く光る杉の眸が、問いかけるように彩子の顔をじっと見つめた。

肺腑を抉られる思いの、かすれ声を喉の奥から絞り出した。

「おっしやる通り、し、します」

失いかける意識をつなぎとめ、繰り返して唾を呑み込みながら、

「結婚します。喜んで……」

彼女は瞼を閉じた。涙も涸れた眼を堅く閉じた。頬が硬張った。

「せんせい。あ、あなた、と……」

（カット・室井亜砂路）

（未完）



偏見に抗議します

藤田千代子

貴誌は古本屋で見つけた去年の五月号からの読者で、それからも時たましか手にしていませんので決して熱心な読者ではございません。私は最初去年の五月号を手にしたとき、人のうわさにより貴誌に対して持っていた偏見は、はやくも六頁目の読者サロンの欄を読んだ、あとかたもなく消えうせました。またこの本が面白半分に、売れば良い主義で編集された物ではなく、何年間も一貫して真面目にやっておられるという事に敬意を表します。

むしろ私達をよく手にする女性週刊誌などのように売らん哉という露骨な商業主義で堂々と売られている方が余程悪質だといえるでしょう。その反面、貴誌のような雑誌がまったく認められていませんが、これは片手落ちという他あ

りません。

その『内容』をくらべてみて、どちらが悪質であるかという判断を公平に下すことは中々容易ではありませんが、少くとも発行部数の点やその売り方の点から見ても女性週刊誌の影響の方が幾倍か大きいということは誰でも認めざるを得ないでしょう。

さて貴誌の内容についてですがいわゆる平均値よりかなりずれた心理を、人々が白眼視したり見世物でも見るような目で見たら迫害したりするのは、平均値の中に自分がつぶりとひたって安定した

いからではないでしょうか？ 疎外することによって自分が安全地帯に入り（或いは築き上げ）また下へつき落とすことによって自分が優位に立つという妙にエゴイズムのものが働いているから

だと思えます。こういう心理は江戸時代に士農工商の下に「非人」という身分がなぜ必要とされたかと考えるとハッキリしてきます。とにかく言いたいことは色々あるのですが文が下手で思ったように書けません。しかし、どうしても今一つ言いたいことがあるので書かせていただきます。

近頃、レスビアンが盛んにマスコミに取沙汰されて、いろんな話題を提供していますが、レスビアンを正当化し公認させるために扱っているのでは全くなく、あくまで「変態」という枠の中で、上つ

「流行」としてではなく、その底に流れている意識を分析し、認め同性愛を定着すべきです。同性愛的傾向は機械文明が発達し、人間同志の精神的なつながりが薄れるにつれて、サディズム、マゾヒズムと共に益々増えるものと思われ

ます。ある心理学者も「人類は両性愛的である」と言っています。神経科へ通って無理やり同性愛的嗜好を治すなど愚かしいことです。それが生まれつきの強い素質である時など、なおさらのこと

「なぜ、そうなのか」という心理ドラマは全く無視され、その内容のほとんどがSEX描写で只単に女性同志の肉体のからみ合いをエロチックに表現しただけにすぎません。映画や小説等、ほんのちょっとしたシーンに、なんの必然性もなく、それらが出てくるのにはその商魂が見えすいているだけに

見ていて吐き気を催す程きたならしく感じられます。最後に貴誌が流行に乗じて下劣にならぬよう、このペースをあくまで続けていって下さるようお願いしておきます。住所氏名は書きすぎます。職場のこともありますが匿名でお願いします。



忘れ得ぬ舞台

「女性切腹」

高野 原美

最近、誌上に「女性切腹」に関するものの影が薄くなって、ファンの一人として、淋しく思っています。

同封のフォトは、今はすでになくなった「OSミュージック」の舞台で、華麗にもまた妖艶に演じられた、想い出の「切腹シーン」の一部です。



一つは「女忠臣蔵」で、有名な浅野長矩の切腹の場面。他は落城の悲劇。

五人のグラマーが上半身をあらわにして、ムッチリした柔肌に刃を擬す場面の、妖しい美しさと悲愴な雰囲気は、思わず身をのり出して生唾をのみこませ、異常な興



奮のるつぼへ、私をひきずりこむに充分なものがありません。

一瞬、場内がザワメキ、直後に



シーンとした静寂が続いたところをみると、その妖美さに打たれたのが私だけでなかったことは確かです。

舞台上の単なる演技といってしまえばそれまでですが、自虐の極致ともいうべき切腹シーンは、見る者に、一種独特の訴えかけを持って迫る何かがあるように思えるのです。更にそれが美女によって行なわれる時、もはや、とかくの言は不要だと思います。



(第六十五回)

辻村 隆

もと東映の宣伝部にいた岸村氏から、箕田氏に連絡があつて、近くサドの原作をもとにした『美德の不幸』という、かなり強烈なSMの映画が入るから、私にも一度試写に招待したいという。精々奇クの誌上でPRして欲しい口吻であつたというが、岸村氏は東映時代、この私という人間をよく理解し、と共に、宣伝にも充分活用されていた。刑罰史と女系図は、彼の宣伝によるもので、私の名も緊縛指導と銘打って、麗々しく広告ポスターに書き出していただいたものである。前作の「責め地獄」が、緊縛という点では一番協力したにもかかわらず、宣伝の係が交って、私も遂々ロクロク挨拶せずじまいに終わったが、この若い男は私を全然無視していたのか、宣伝の相談は一言もいってこず、ポスターにも私の名を抹殺していたが

人間の好き嫌いは別として、宣伝マンとしては下手なやり方であつたように思うし、恐らく、第一作からこの宣伝マン担当なら、或いは私も「11PM」なんかに顔を出さずじまいに終つたことだろうと思う。

東映のスター・カメラ・ハントが、一作ごとに尻すぼみの恰好になり、私としては精一杯緊縛の状況をルポしたつもりだが、一向に反応が少ない。ひとつには又かという飽和状態もあるが、責めとプレイは所詮性格の違うものであることを賢明な読者はお見抜きとみえる。すべてお膳立ての整った豪華な責め場で、フルに知恵を絞って構成した緊縛のフォトにも反響がない。ということは、ひとつはスターが高嶺の花という存在もあるが、スター自身全然SM気

がなく、己むなく演技として行なっているところに問題があるのではないだろうか。狭い、設備のない温泉マークの一室で緊縛したハントの女性には、かなりいろいろと言つてこられるのは、彼女達がそれだけ身近い、何処にでも転がっている存在で、あわよくば自分にも或いはチャンスがあるかも知れぬという、親近感と、モデル女性が大なり小なり、SMのプレイを理解しているということが、その原因ではなからうか。かくいう私自身、そうしたハント女性のフォトは大切にアルバムに保有しているのに、何百枚と撮りまくつた東映のスターさんの緊縛シーンは、キャピネの印画紙箱に、整理もせず、その廃放り込んである。このデリケートさは、奇クファンのみにしか理解出来ない現象ではなからうか。

九月号の本欄で一寸触れた甲子園のO未亡人の件について、Mの希望者から聞き合せや申し込み相次ぎ、編集部もその返事に閉口し箕田氏からも苦情をいわれる程の反響があつて、何の気なしに、『楽我記』の穴埋めのつもりで書いた私自身、驚いている始末であ

る。月十万円の契約も、世の中そう甘いものでなく、週四回完遂の暁に差上げるといふもので、根が真からのM性の箕田氏紹介の人が、どうやら一カ月無事任務を終えたらしいが、数日前、当のO夫人から便りがあつて、どんなにM性があつても、やはり亡夫のような感覚が起らないと記されプレイの模様をセルフタイマーで撮つたフォトを数葉同封してきた。夫人の希望で、彼女と、M男性の



顔はカットしたが、これは未亡人の寝室での、プレイの一コマである。どうやらフォト用にどちらも着衣しているが、実際は、全裸でのプレイだそうで、ここ数カ月は愉しめそうだという彼女の連絡であった。五十四才にしては、肉体的容貌も若々しく、フォトで拝見した感じでは四十五、六才ぐらいにしか見えない。SMのプレイが彼女を年令以上に気分的に若々しくしているらしい。御主人の遺された遺産で悠々自適し、気のむく尽に、甘い生活を送っている彼女に、私は軽い羨望を覚えすにはいられなかった。是非一度遊びに来てほしいという要望に応えて、近々Sの私が、彼女とS談義を交すべく、訪問してみたい気持ちしきりである。

近頃のカメラ・ハントで、いつも一つの矛盾を感じている。プレイが主か、フォトが主か——。数多いフォトを撮ることによって、どうしても盛り上りかけたプレイの雰囲気寸断されて、単なる緊縛フォトの羅列になってしまう、といった、プレイにのみ専念しては、一向にカメラを撮る気になれない。私自身、慢性化した持

病の糖尿病以来、意馬心猿でも気ばかり逸って、どうにもその方が言うことを聞いてくれない。自然女性の恍惚状態のアクメに対し、奉仕みたいに懸命に努力し、女性を最高潮にさせた状態で、わがセックスを昇華させるという、哀れなプレイを繰り返している。カメラ・ハントでいつも思うことは、女性は緊縛でそうした状態に於かれると、蛇の生殺しのようなそうした行為より、結局官能を燃え立たせて、なるようになってほしいと願望する事が多い。貝原益軒の養生訓ではないが、接して洩らさずというプレイが、いかに至難かを、私自身、自分の体がこうなつて、つくづく思い至るのである。私のハントが、典型的であると、近頃よくいわれるが、既にハント以来満五年経てば、小説でもない限り、そうそう変ったネタは転がって、る筈もなく、



どうしても似たりよったりになつてくる。

相手変れど主変らぬ五年間、疲れた時にはもうそろそろ退き時かな、などと考えても、奇クから尻を叩かれると、又ぞろ猥らな虫が蠢めき始める。

果たしてこれから先いつ迄つくくやら、みずから求めた道とはいいながら、まるで宿命のようなものを感じて書きつづけている昨今である。

先日読者通信で知った岡本要子さんから電話があつて帰省がてらドライブに連れて欲しいというので、盆前で混雑する国道を走って

岐阜県下の釜戸温泉で、フォト抜ききのプレイのひとつきを過ごして瑞浪市まで送り、ここまできたついでにと、久し振りに水野弘夫妻を訪問する。

車の奇禍で鞭打ち症になつておられた水野夫人も、その後の回復すっかり順調で、時折、フツと軽いめまいは感じると仰有るが、お見受けした処、常人に戻っておられた。

水野夫妻のたつての要望で一泊させて貰い、家人の寝鎮まった頃、私と加代夫人の緊縛のプレイを水野弘氏が撮ったが、私の訪問にすっかり刺激されてか、彼の注文は相当強烈である。午前四時半頃まで、長々とプレイに時を費やし、夫人を真中に挟んで眠ったのは午前五時。

お蔭で正午前までグッスリと眠りこけ、あわてて出発したが、思いがけないハプニングな一夜を過ごした。

今更ハントでもないでしょうという彼の言葉でカメラ・ハントはあきらめたが、ことのついで一葉だけ発表して、その夜のモーレッツさを偲んでいただくことにする。肥満タイプ好みの方には一興であらう。



△花と蛇△余聞

千原美沙江に

対する

東山 大作

判決

主文 被告人千原美沙江を有罪とし『菊花の刑』に処す。

判決理由 被告は華道をもって生計を立てるものであるにも拘らず平常草木を虐待し、特に昨日は周囲の者の注意を無視して自らの製作にかかる生花に灌水すること拒み遂に枯死に到らしめた。

これは弁護人の主張する過失致死は当らず明らかに殺意を以てしたる行為である。よって被告はその罪のつぐないとして、自らの肉体をもって生花を生育哺育しなければならぬ。量刑として『薔薇花刑』が適当と考えられるが、被

「サディスト」

私見 物知 仙人

およそ性質などと言うものは、一概に「こうだ」とは断定できぬものではあるが、あえて私の考えを述べさせてもらおうと思う。

まず、サディストであることの楽しみは何であらうか。

一つ。被虐者の表情に表われる一種の美を楽しむ。(被虐者はマゾヒストと限定しないでほしい) 二つ。被虐者の苦しみを想像して楽しむ。

三つ。人間本来の嗜虐の性質を満足させる。

四つ。セックスを楽しむ。

サディズムは、最終的にはセックスで終り、三つ目までは性的興奮を得るための過程である。これで分かるように、サディストのセックスは精神的要素が多く介入していて非常に複雑化している。

たとえ最終的にセックスに入れなくても、たとえ、性的不能者がサディストになる場合——最終目的が性的満足にあることだから、四つ目は必要事項である。

さて、一般に「サディストはエゴイストである」と言われているようだが、しかし、私はそれを反対

であると思う。逆であると思う。「サディストがエゴイストではなく、エゴイストがサディストなのだ」と。

昔のサディストは、エゴイストが扮したものであった。金と機会のあるごとに、エゴイストはサディストに変わった。しかし、今のサディストは金もなく機会にも恵まれないので、エゴイストであるだけではサディストにはなれないのである。それに、彼らはわずかに虚勢をはっているが、自分の性癖を正常であるとは認められないので卑屈になっている。

だから、自分から機会を求めることもなく、読んだり書いたりして、わずかに満足するしかないのである。夫婦プレイなどと言う語が出てくることでも分かる。自分の理解者でなければS的行為がおこなえないなどと言うのは、本来のサディズムから言えば異端であるのだが、ただのエゴイズムだけで人を動かさなくなった時代のため、しかたがないのだ。

元来、サディストの人は、自制心が弱く、すぐに調子に乗ってし

まうお人好しだと思う。周り——ほんの自分の周囲——の影響を受けやすく、後で「自分は、これでいいのか!」と考えこむことがある。文学青年タイプである。

どうも、まとまりがないので申し訳けないが、結局サディストと言うのは、ごく平凡なエゴイストで、自分を大事にするから大きな犯罪は出来ないし、売りこみ型ではないので、パツとしない、ごく在りきたりの人なのだろう。しかし、断っておくが、「ごく在りきたりの人」がサディストであると言うのではない。

サディストは好色家でもある。色道を踏みまちがえてサディストになったくらいだから。——セックスがきらいでサディストであると言うのは本来の道から外れていと思うし、私自身はサディストとは考えない。

SMカメラハントも、最終的にはセックスで終わるといいのだ。終ったことにすればいい。サディズムというのは、元来芝居じみていて自分自身のセックスのためのフィクションにすぎないのだから。もっとも脚色をしすぎると、モデルが寄り付かないかもしれない。サディストの幸福を祈る。

告が未だ処女の身であることを情状酌量し主文の判決を行う。また被告は浣腸に依る体内浄化のすすめをも拒否し、その態度が傲慢である点から考えても本刑は妥当である。

刑の執行 直ちに『処刑の室』に於て検事、弁護士、陪審員立ち合いのもとに刑を執行する。

刑執行人に対する注意 本刑を執行するのは被告に肉体的な苦痛を与えることなく、その精神を矯正し悔悟せしむるにある。従って肉体的にはむしろ快感を与えることを必要とする。この法の精神にのっとり左の点に留意する。

一、被告の着衣、体毛等にして刑の執行上妨げとなるものは、これを剥奪、除去すること。

二、刑執行の部位を刑架等を用いて充分に露出すること。尚クリムなどを刑執行部位に用いることは差支えなし。

三、太さ四耗の菊花のついた枝二本を以て、一本は上半身に、一本は下半身に使用するものとする。

四、刑執行時の体位は刑執行部位を充分露出することを目的とし執行人に於て考究すべし。

五、刑執行後は、そのままの状態で一般人の観覧に供すること。

〈花と蛇〉への願望

小杉 千恵

遠山静子という稀有な美女の存在は、読者と作者一体の欲望の象形化された肉の権化で、もはや、静子夫人の行為そのものは作者の思考にのみ、ゆだねられているものではなくて、読者の望む欲望が作者をして、二者一体の筆を運ばせていると私は感じております。又、この作品のエクスタシーの継続の原因は、静子夫人の女盛りに熟れきった肉体に対する憧憬の現われとして反応したことに起因していると思うのです。

作者と読者のラブの象形に間違いない夫人への強要が、その存在をより以上に剥き出しにして、更に、耽美の存在を求めようと願うのは自然の成行です。それが個々の思向に因って異なる極限を示すとしても、その一つ一つを極めて見せるのが夫人の当然の務めであると私は考えます。

このような私の欲望に応えて、夫人は既に、無意識のうちの媚態とは云え情欲の色さえ目に浮かべて淫らな男達の仕事に協調する様

子を見せ始め、「優しくしてね」と口に出すまでに成長して参りました。この調子だと、私の望む通り、夫人が野卑な男女の哄笑の渦の中で、自発的にショーを演じて見せたりするのも時間の問題であると思つて喜んでおります。

自ずからの女体を目覚め、ズベ公達でさえ、呆然とするような痴態を見せるようになった夫人の気持は、女である私にはよく理解出来ますが、この開眼した夫人に残された課題は、まだまだ数知れないと思ひます。黒人と組まされた珠江夫人の傍に添い伏して、彼女のための介添えを行う。又、岩崎親分に貢がれた美沙江のためにも同様に後見役を行なう。果ては自ずからも、男女の見つめる中央で次々と廻わされた挙句、客人達の好奇心を満足させるために、満座の中で人工授精を施される。その上に、別途、私が望むのは夫人が酔った千代によって、みんなの目の前で、千代に奉仕をさせられたり、巨犬と取り組まされたりする責めを受けることなのです。が、私は四つん這いを強いられた夫人が、いまだマゾの悦びに没頭しえず、垣間見せる羞恥の表情の美しさを待ち望んでいるのです。



イメージ画
『なんの手術?』 志羽 利也

或る投稿者からの便り

英 堅 守

編集部各位様

私は小説家ではありません。また、そうなるうとも思っておりません。従って、このようなものを書いたのは初めてであります。ですから原稿用紙の使い方等至らぬ点があり、また読みづらいであろうことをお許し下さい。

この話は、敢えて未完としました。採用されないものなら、原稿用紙を無駄に費すことはないと思っただけです。また売れるものなら、何もあわてて売らないで切り売りしてやれとも考えました。

実際、この話は未完以外の何物でもないつもりです。純文学ならこれで終ってもいいでしょうが、失礼ながら貴誌の場合どうでしょう。前半部を読んで後半部を想像する。普通はここまででしょうが私は後半部を読み、そこに自分の想像の外にあるものを発見し満足するので。他の読者も似たりよったりだと思います。

前説が長くなりました。とにかく私の趣味というのは少々変わっています。描写等不行届きな点もありましようが、よろしく御判断の

上採否決定願います。また出来れば貴誌がどのような作品を望まれるか、お知らせ下さいませれば、ダイレクトメールではございませんが必ず御満足のゆくものをお送り出来ると確信します。

尚、私は少女趣味というのでしょうか（決して美少女趣味ではありません）、一寸特異な傾向であると思っております。これに関する資料、没原稿でも結構です。お送り願えないでしょうか。小生赤貧洗うが如き状態で原稿用紙を買うにも貴重な本を売る有様、金を払えと言われても困るのでありますが、御厚意に甘えたく存じます。（勿論、この作品当選ならば賞金のみでも結構です）もう少し小生の趣味について書きましよう。奇クサロンにでも掲載いただければ幸いです。

ズバリいって小学生の裸が見たい。先日、バスで小生の前に坐った小学生は、つまり小生好みの体つきは四年生位でしょうか。乳房はやっとふくらみかけで、坐っている時、その胸は服のたるみにか



イメージ画 『くやし涙』 小宮伸子

つとやっと数センチの盛り上がり認められ腋の下は勿論なにもありません。もっとも時たま毛が二三本生えているそこを見て、下の方を想像してたまらない気持ちになることもあります。

その少女の場合、坐ったとき短いスカートはまるで意味をなさなくなり、白いパンティが体にきつい込んでぱっきり真ん中に筋が入っていたのですが、それを見て小生恥かしながら目がクラクラしてしまいました。

小生、それに瘦せた女が好きであります。それとても中学生どまり。悲しいかな、小生は完成前の女体にしか興味を持つことが出来ないのです。

小生、読者各位にお願いいたし

ます。文献は多数集めました。絵も沢山持っています。写真がほしいのです。盗み撮りでも結構なのです。小生殊更ワイセツなポーズのものを求めています。もちろん全裸であろうが半裸であろうが、仮に着衣であっても直接その部分をレンズがとらえていけばよいのです。特に望むのはカラーです。性器が写っていないければ街の写真屋に頼んでも平気だと思えますが。

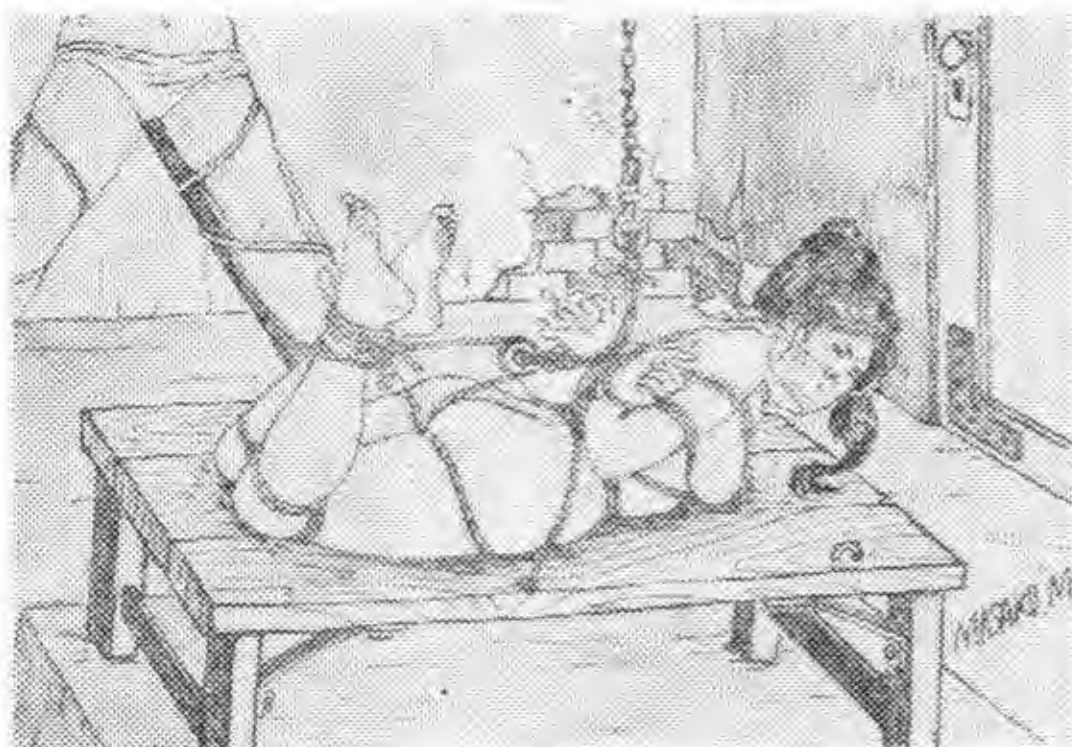
繰り返して申し上げますが、完成前の女体、出来得れば小学生ですが中学生までが限度です。盗み撮りで結構（遠景はちょっとムリ）写真をお持ちで、ご無理を理解していただける方ございませんか。

「独白」 縛りと共に 早木 夢二

「オレは、どうしてこんなに縛りが好きなんだろう」と我ながら呆れ果てる時がある。

慶子との天下晴れて？ のプレ

イの時はもちろん、こっそりとひとり坐した時にも「ひとり縛りで、多少はぶきっちゃでも、とにかく何もつけない上半身に両手こ



イメージ画

「拷問」

宮城 昌子

今想えば、あれが「駿河責め」という拷問だったと思ひ当るけれど、ずいぶん、昔の人は冷酷な責め方を考え出したものだと思うわ。

あの激しい苦痛は、とても形容出来るものじゃないわよ。あんなことを平気でやれた、当時の憲兵なんて人間とはいえないと思う。本物はもうマッピラよ。

そ縛っていいないが菱形の縄をキツチリと喰い込ませ、股間に走る白い縄をつくづく眺めていると、何一つ、人並みの道楽のない私が、これはまあ何と、とんでもない道楽にとりつかれたものかなと、三嘆四嘆したくなるというものだ。

しかし、これは他人さまには、何一つ迷惑をかけるものではないのだから、と自分自身を慰めるようないい訳を考える。

強いていえば、慶子こそ、たった一人の被害者だといえないことはなかるうが、その彼女が、こんな楽しい世界があったのだろうかといわんばかりに、それこそ喜々として私の菱縄がけを受け、いろいろな拷問プレイに打ちこんでいるのだ。

いよいよ、この広い世界に、誰一人にも迷惑をかけたことはないというものだ。

この文章を書いている今、私は腰の辺りの前と後に作った菱形の縄がけを、背中を伸ばしたり倒したりして覗きこんだり、手鏡に写して見たりしては悦に入っているのだから、これはまた、なんと始末の悪いことだろう。

しかし、別に覗きこんだりしなくとも、肌にじかに喰い込んでいく縄の感覚。ちよつと体を動かすと、ギョツ、ギョツと音を立てるよううごめく縄のたたずまい。別に責めを考えてのことではないので強くは縛ってはいないのに、体の動きにつれて菱形がゆがみ、横に長くなったり、縦に伸びたりする。そんな効力がひとりだけでわかって、本当に楽しめるのだ。

こんな恰好で書いている私を、もし誰か見る人があったら何と思うだろう。というようなことはもう考えたこともないこの頃だが、よしそんな人があって、ああ、あの状態が……というに違いないとしても、私は何ともない。

そのとおり、私は事実交態なのだから——。私は、誰が何といおうと縄がけすることが一番好きなのだから——。と心の中でうそぶくと、いとおしく、私の肌をはっている縄をなげるだけである。

一度、すっかり正式の菱縄をかけられ、股間縛りを施されて、どこか盛り場の四ツ辻かなんかに立たされて、晒し者にされてみたいと思ったりすることがある。しかしこうなると、もう邪道に近いようにも思う。

私は、自身の手綱をひきしめなくてはならない。



私の縛った女性

森川 信也

私が時折商用で行く料亭に、垢抜けのした仲居がおった。昨年の暮の忘年会の折に、タクシーに乗る私達一行を見送りにきた中に彼女を発見した私は一目惚れしてしまった。次に行った時、女将にそれとなく聞いたところ、この料亭では一番よく指名のある売れっ娘で圭子というのだとわかった。口説いちゃ駄目だと女将は言っ

すてたものでもない。

トイレに立ったとき、ついてきた圭子に、「一度ドライブに行かないか」と冗談まじりに言ったところ、「今は忙しいけど、休みの日だったら」という返事である。

そのドライブの方は現在に至るまで実行していないが、気の向いた時、その料亭へ出かけては彼女とのプレイを楽しんでいる。ナンパワンの美人だというので誰もが敬遠してクドかないものだから私のような者に福の神がころがり込んできたわけである。

「私、身体に自信がないので裸にはしないでネ」

ていたが、私も五十面をさげてナンパワンを張り合う気持もなかった。それが今年の五月、偶然のチャンスから憧れの彼女を縛ることが出来たのだから世の中は万更

という彼女の希望をいれて仕事着のまま、初めて縛ったときの写真である。圭子のよいところは従順で素直で、すれていないことである。料亭に勤めていないが、チップをねだるといふようなこともない。平常は大人しい娘だが、プレイに没入すると顔に似合わず相当、激しい面を見せるのである。



編集部だより

○本誌のモデル募集に応じて志願される勇気のある女性の方々が次々と出現されるのは心強い限りです。いずれ誌上で皆様方の目を楽しませることでしょう。遠近に拘らずご希望の方は編集部宛お申出下さい。誌上に登場を望まれる方は勿論大歓迎ですが誌上掲載を望まれない方も一応ご照会下さい。住所本名その他プライバシーは厳重に秘匿しますからご安心の上、お便りをお寄せ願います。

○先月号は団鬼六作「花と蛇」の休載でファンの方々に大変失望を与えてしまいました。今月号は長枚数の力作を書いて貰えるという事で大いに期待しておりました。それが悪い事が重なるもので完成した十一月号の原稿が靴ごと盗難にあうという事件が起こってしまいました。それで急拠書き直して貰う事になったのですが締切接近で時間がなく、予想に反して非常に短い作品になってしまいました。読む雑誌として再発足以来、幸いにしてファンの好評を得て漸増

私は暇にまかして、だんだん飼育してゆきたいと楽しみにしている。只縛るだけでなく浣腸なんかもやってみたいと思っているが、今のところ摸索の状態



で、なにかのきっかけ待ちといった按配である。ドライブに彼女を誘ったのだが私は運転免許も車も持っていないので、誰かS趣味の

バラ色の幻想

予世場 良三

彼女が、自らの胸や腕のくびれを、伏眼で追いながら云う。

「ねえ、縛られた姿、私と奥さんどちらがいい？」

俺は、女房とはプレイしないことなどは、勿論いわない。

「判ってるだろ。段違いだよ」
彼女は満足気にニコツとする。

青年で運転免許を持っている人はいないものだろうか。車はレンタカーで郊外へドライブしてSMプレイを楽しみたいと思う。勿論費

「じゃあ、体は？ ハダは？」

俺は当然だという顔をする。

「君のは本当の柔肌だからナ」

彼女は、後手の肩をくねらせて上体をもたせかけてくる。

「やはり縛り具合も違うの？」

俺は、深々と没している二の腕や胸元の紐をさぐりながら云う。

「こんなに山が出来るからナア」
彼女は、頬を寄せて来て囁く。

「もっと紐、沢山使ったら？ 太腿なら相当にくびれてよ」

用の一切は私が負担するから身体一つで来て貰えれば結構である。往復とも車を運転してもらおう都合上、酒は飲ませられないが、そのかわりプレイの方は圭子を相手に存分にやってもらってよい。彼女も若い男から責められる方が嬉しいに違いない。老人の私である

と、どうしても欲求不満を起こしがちな

なりそうである。

ちなみに彼女の休みは毎週火曜日であるが、翌日は夕刻までに出動すればよいので、火曜日の夜の

一泊は可能である。

運転免許を持つS青年の出現を待つ。

俺は、心底から残念に思う。

「用意して来なかったからナア」

彼女は、じれったそうにする。

「そりゃあ私、縛ってもいいってハッキリ云わなかったけど……ダメねえ。いいわ、私が用意する」

俺は……突然、頬杖している目の前に、コーヒータ碗が突き出さ

れ、ハツとなった視界を古女房の顔が占領して、云いやがった。

「何考えてたの？ ボーッとしちゃってサ。フッフ、バカみたい」

ながら月毎部数も増え且つ内容の充実も計ってまいりました。今後は更に重厚味のある異色作品を厳選掲載し、その上各方面に亘る多彩な編集で一層の進展を望んでおりますのでご愛読をお願いします。

○投稿下さる絵や写真が後を断たず大いに感謝しているのですが、鉛筆や色鉛筆描きの原稿或は色のついた紙を用いられた作品が未だに多くあります。これは今まで度々お願いしていますように、用紙は白色のもので筆記用具はスミ又は黒インキ、黒ボールペンの様に黒色のもので描いて頂きたいものです。折角送って下さっても鉛筆や青インキ描きでは製版できません故、お含みおき願います。

○投稿下さる原稿は必ずタテ書きにして下さい。読者通信に特にヨコ書きが多いのですが没になりますので、ご注意ください。原稿料はなるべく早くお送りするように努めていますが架空の住所で返戻になつてくるものがあります。連絡の都合もありますので架空の住所の場合は、その旨附記下さるようお願いいたします。誌上の匿名はご自由ですし又執筆者の住所を他へ承諾なしに洩らすというようなことは絶対に致しません。



妊婦マニアの

事件簿

羽鳥 水江

八月十一日の朝刊で、ハリウッドの美人女優シャロン・テイトが残酷な方法で殺された猟奇事件が報じられました。彼女がたまたま妊娠八カ月の身重の体であったという事なので、そのうち週刊誌などの話題になるだろうと詳細を心待ちにしていましたところ、早くも十六日朝の新聞広告で女性週刊誌「ヤングレディ」と「女性セブン」で取り上げていることが分かりましたので、早速両誌を買い求め、目を通してみました。

「ヤングレディ」8月25日号の新聞広告では「ハリウッド女優（シャロン・テイト）宙づり惨殺事件」その夜の猟奇パーティーの全貌——八カ月の身重でありながら夫の留守中に元恋人たちと乱行このゆがんだハリウッドの惨劇」とありスリッパ一枚のかなり大きなお腹をした彼女の写真が大きく入っています。この新聞広告だけでは大相当刺激ですが、雑誌の方は大体同じ見出しで、同じ写真がうん

と大きく拡大されてのっており、「妊娠6カ月、母となる日待つつシャロン・テイト。この写真が最後のものとなった」という説明がついています。妊娠中の美人女優のスリッパ一枚のあられもない姿を、こんなに堂々と公開したのはこの事件のよほどの異常さを物語るものでしょうか。

「夫妻の居間にシャロンと元恋人の二人が宙づりにされていた。血ぬられたナイトガウンから、妊娠八カ月の彼女のお腹がせり出していた」とあります。もちろんここにはのっている写真よりもずっと大きいお腹をしていたにちがいません。

「女性セブン」8月27日9月3日合併号のほうは、「キヤッツこわい！妊娠8カ月の美人女優シャロン・テイトが裸で天井から吊り下げられ殺されていた！」と、これまたセンセーショナルな見出しです。記事は大同小異で、「ヤングレディ」ではテイトの年齢が26才

「女性セブン」では27才などという、面白い食い違いがあります。が、あらまは次のようです。

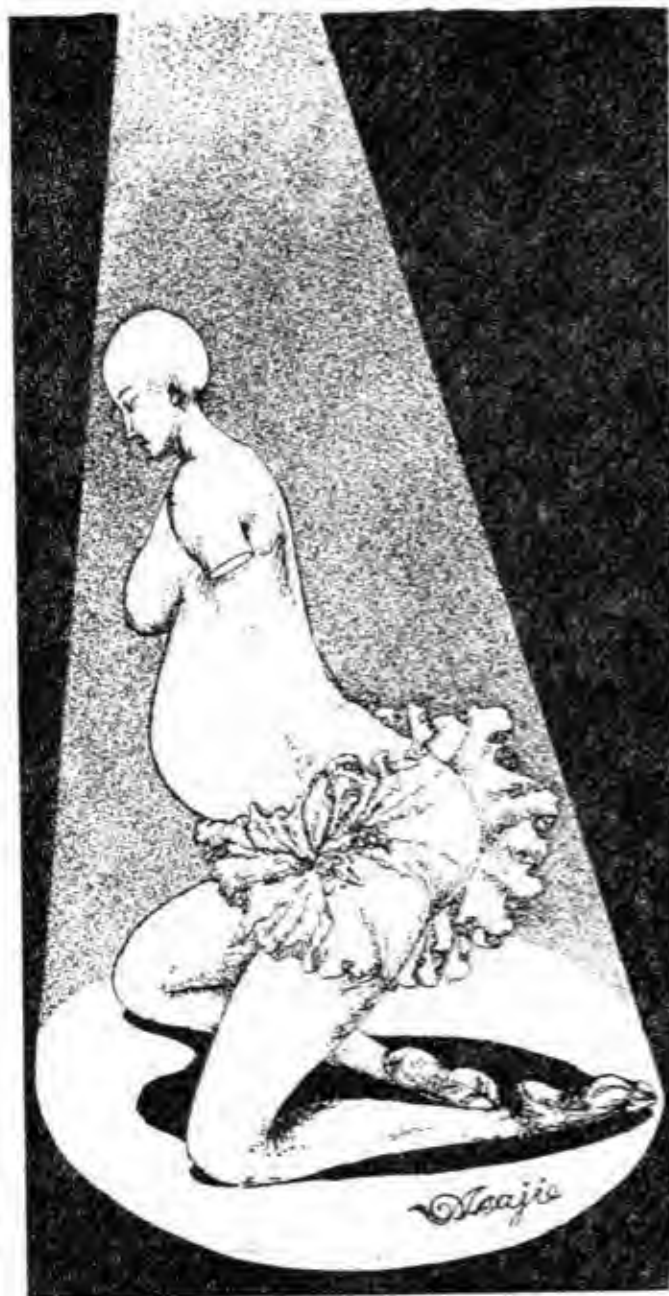
8月9日（日本時間では10日）ハリウッドの高級住宅街で、猟奇的な殺人事件がおこった。殺されたのは有名な映画監督ポランスキーの妻で女優のシャロン・テイトとその元恋人で有名な男性美容師ジェイ・セブリン（35）——この二人はロープで首を巻かれて、天井のハリから、振り分け荷物のように吊るされていた——と、窓の外、芝生の上で殺されていた作家で写真家のフリコウスキー氏

（37）とコーヒー王と言われる金持ちの娘フォルガー嬢（27）、さらに自動車の中にもう一人ペアレントという青年（18）の五人。なかでもテイトとセブリンの殺された方は極めて残酷で、夫のポランスキーの留守中、その家で起こったのですから、どんなに書かれても仕方のないところでしょう。

「……全貌」などと銘うっている割には、犯人もつかまっていず、動機などもいくらかアイマイモコとした書き方ですが、両誌に共通していることは、ポランスキーが日本でも上映されて評判になった



『切ろうかね』 豪 城二



僕のイメージ画集
『身重の白鳥』

室井亜砂路

いいんです。このお腹を強調するためですもの、頭を丸めるぐらゐは耐えますわ。女優さんにもいらしたし、ヴィナスだって腕はないうじゃない。アラ、だって彫刻には無いわ。

「ローズマリーの赤ちゃん」の監督であり、殺され方がそれに出て来る奇妙な儀式に似ており——セブリンは黒いフードをかぶっていた——その日そこで異様なワイルドパーティーが開かれていたらしいこと、ハリウッドの上流階級のゆがんだ生活ぶりなどが指摘されていることです。おまけにこのポランスキーとテイト夫妻が共演した「吸血鬼」という映画が、日本で封切られる矢先だというのですから、何もかも揃っていると言えましょう。殺された人たちには同情しますが……しかし、

「ハリウッドの高級住宅街でLSD、アルコールに狂った乱交パーティーが開かれるニュースは、これまでも、たびたび報道されている。シャロン・テイト邸の虐殺の夜のパーティーも、そんなひとつだったのだろうか」(ヤングレディ)「その夜のパーティーが、かなり乱れたセックス・パーティーだったということは考えられる」(女性セブン)というのですし、テイトの男性関係が非常に複雑だったこと、玄関のドアに、PIG(ぶた)と血文字が書かれていた事などから「暗い文明のヒズミ」

(ヤングレディ)「病めるアメリカの一端」(女性セブン)ということになるようです。

ところで今まで殺人事件の内容を紹介して来ましたが、私はむしろ偶然こんな不幸な事件が起こったために明るみに出た、したがってもしこんなことが起こらなかったら、おそらく知られないでしまったワイルド・パーティーの方に興味があります。妊娠八カ月の大きなお腹をした美人女優が夫の留守中に仲間を集めて主催するパーティー——しかもセックスパーティー

イーとは、一体どういうものなのでしょうか？ パーティーのヒロインが、ほとんどハダカに近い姿で、妊娠八カ月の大きなお腹をしているのです！ そしてその上で、どういうことをしたのでしょう？ 思ってみるだけでも、非常に興味のあることではないでしょうか？ あるいは日本でもそういうことは行なわれているのかも知れませんが、妊婦マニアにとっては見逃せない気がします。

その夜のパーティーでは、ヒロインのお腹が大きくせり出していることが、いやが上にも参会者の興奮を高めたのでしょうか？ それも妊娠三カ月や四カ月ではない大きなお腹です。ヒロインは堂々と腹を突き出して、恥ずかしげもなしにハレンチに振舞ったのでしよう。

その場面がどういうものだったか。私には、その異様さが想像出来ず。

それとも、妊娠中なら、避妊する必要もないので、安心して浮気をするつもりだったのかも知れません。

解剖して取り出された胎児は、男の子だったということです。

ふんどしローザ

鈴木ゆり子

五月下旬の或る晩のことです。ふんどしにエプロンという、いつものスタイルで台所を片づけてから、エプロンをはずして、テレビを見ている夫とならびました。勤め人で日中、ひまのない夫より、私の方がずっと良い色をしています。

「ゆり子より、うわ手だ!」——11PMの画面に出て来た女の子を見て、夫がうめきました。五月というのに、私よりよく灼けた肌。白ふんどし、白ブラジャー。よく見ると、ふんどしではなくて、ビキニでした。これが小川ローザさんでした。それからは、新聞、週刊誌、ローザの記事は残らず集めています。

忘れられないのは七月六日夜の「裏番組をブツ飛ばせ」でした。腰でジャンケンをするあのリズム感。あれは、ふんどし女の身のものな感じです。ブーツをぬがせながら坂上二郎が言います。「ヒヤー、黒い脚だなあ!」私は思わず叫びました。「私だって黒いわよ!」ビキニ姿になっても、少しも悪びれた所がありません。それはそう

でしょう。あれだけ陽にやいた所を包んでおく方が不自然です。脱ぎかたの、いさぎよさ。同性ながら、ローザさんのために乾杯しました。

これが、番組向上委員会や政府の説教新聞「今週の日本」の槍玉にあがったそうで、週刊誌、新聞から共産党の赤旗(八月六日号)までが取り上げました。煮くたれたガンモドキのような尻を、ズロースやサルマタで包んだ婆さんや爺さんが目に浮かぶようです。「風が落とした涙」というレコードを買ったら、白ビキニを締めたローザのポスターをくれましたので、油えのぐでいいねいに修正して、白ふんどしに着せかえてあげました。途中で、「くすぐったいわ!」とハスキーな声が聞こえたような気がしました。お尻が半分こっちを向いているので、スッポリと喰い込んだ所が、とってもよく似合います。

八月十七日、久しぶりにテレビの番組にのったので、楽しみにして見ました。四国放送から歌を流したのですが、何とマア、くるぶ

イメージ画 『わりかしタフネ』

東京・赤ちゃん



しまでかくれるパンタロンをはかされていなのです。

ケネディ夫人ではないが、正に「オー、ノー!」です。私のローザを、けがさないでください。あなたは、風に吹かれたパンテ

イから、晒を思わせる白ビキニへと進歩しました。もう一步、まっすぐ進むこと。それが、あなたの生きる道です。行け! ふんどしローザ。

あかし

ヘンテコリン

な
ヤツ

須 渾 朔



やめときなよ、あの乞食じいさんカラカウのは。……飲み代ぐらいタカラレルのはごあいきょうだけれど、飲めばきつと聞かされるぜ、ヘンテコリンなハナシをサ。いいの？ じゃご勝手に……。

× ×
ワイはな、何ちゅうても大したもんや。そらア今はノンダクレやで。そらそうや、そやけどナ、ワイだけなんや。この広い世界で、たったワイ一人だけやから、大したもんやろ。違うか？

何がやて？……知らんか？ ホンならオセたる、よう聞きや。広い世界にただ一人、ハバカリながらワイだけなんや、永い歴史でオンリー・ワン、括ったことのあるのんは。……それも後手しぱりちゅうのんやから、ごっついやろが。……こらあどうも、済んまへんナア。遠慮なしによばれまひ

よ。ホンマに酒ちゅうもんはウマイもんで……。

どないなオナゴや？ ヘッヘ、わからんやろ。そらのネエチャンやったら当りまえ。それが、宇宙人のオナゴやから、大したもんやちゅうねや。ナ、宇宙人のネエチャンやでえ、ウチュウジン！。どや。エエ、どえらいこっちゃろが。なんやて？ スカタンいうなて？ アホいいな、ホンマや。ホンマに宇宙人のネエチャンを、この手でギュウっと掴まえてな、両手を背中へネジ上げて……。

どこに居た？ 家のウラ手の空地や。フワッと降りてきよった。円盤、知ってはるか空とぶ円盤のこと。そうそう、その円盤から降りたんやいうてた。アホらしい、蛸みたいどころかいな。ベッピンもベッピン、すこぶるつきや。顔ばっかしやない、そのまたハ

ダのきれいなこと。白い底から桜色がポーッと滲みだしとるようだな、それがなんともいえんのや。その上にや、柔らこうてネバリつくみたいで、そのくせ、ピーンとハネ返るようで……。

もうイッパイ、よろしおまっかいナ。ヘエおおきに。

とにかくバーツグン。ポインはええし、おヒップは上々。ニッコリ笑ろうた顔はピカピカ光りよつてな、ほらきれいやった。

時々、アンテナみたいなもの、頭の先から出しよる。アレがチョッコリ気色わるいけどな。

逃げ出したかてか？ ネエチャンがか？ なかなかどうして、向うから寄ってきよったんや、スーッとな。ほいでいいよった。あなた縛れる？ このロープでお願いネ。あたし、一度縛られてみたくて、はるばる来たのよ……って。いや、その声のええこと。

そやそや、ワシが掴えたとちやう。ネエチャンの方から……。ほいでワイは、そのロープでギリギリと後手にして……。

そやかて、縛ったのんはホンマやで。その縛られ姿のキレイなことというたら……。ウッフッフ、思いうただけで、もうゾクゾクしてき

よった。

それからかいな。それからそのロープのかかったきれいなハダをくねらしながらネエチャンが……。もう一杯よろしまっかいな。サヨカ。ヘエ、すまんこつて。グーイッ。フーッ、ホンマに酒ちゅうのはええもんで……。

え？ そらあ、あのネエチャンのハダのほうがよろしましたで、キレイで柔らかいのが、キュッとかう縛られて、それがワイにペツタリと……。あ、このコップ空だんねんけど。あ、こらどうもおおきに。酒の色はよろしなア。

そやけどな。世界にたった一人だけちゅう、大したワイに勲章ぐらいくれるのんが、あたりまえだっしやろ。どっか狂うとんのとちやうか、政府は……。どないに思いま？ ええ。

女はどないした？ 女？ ああ宇宙人のネエチャンだったか。あれはな、スーッと浮き上って帰ったんやけど、この世界にたった一人だけ、縛ったワイに、なんで政府は勲章を……。もし、ちょっと待っとくはなれ。あの、ネエチャンのハダは柔らこ……。もうアカンか、ホナラしないな。ボチボチ帰ろ。

短信往来

私のプレイメイト

浅田 守

辻村 隆様

突然お便りする段失礼いたしました。今月号の『童女受胎譜』の素晴らしさに酔いました。辻村さんの長年のファンですが毎回のカメラハントを楽しみにしております。

小生も以前より責め写真をものにしたいと考えていましたが相手になしでは一人相撲、女房とて今更そんな齡ではなく、半ばあきらめていました所、図らずもチャンスに恵まれ、会社のOLと秘密の交際をもつ様になりました。

彼女は二十一才、中肉中背、均整のとれた美人で新鮮なピチピチとした肢体を持っています。殊にピンク色の肌が綺麗です。

カメラは凄い抵抗を見せましたが顔を写さないという条件でなんとか納得させ、今の所十数枚手元にあります。全部カラーのポロライドで撮ったものです。拙劣なフोटですが一ファンとして送らせ



てもらいます。どうかお目汚しに高覧下さい。

現在までの所、責めとしては見るべきものはありませんが、会社の勤務を終わってから週に一回はホテルで会っていますので、今後徐々に本格的責めに入りたく思っております。股間縛り、浣腸、パイプ責めなどを望んでおります。今、彼女に「花と蛇」を読む様すすめています。いくらかSMに目ざめてきた様で楽しみにしています。その時には又傑作を送りましょう。

マニヤのメモより

九鬼好太郎

私は全裸の女より、白いパンティを、丸い膝小僧のあたりまで、おろした女のフोटが好きだ。丸いお尻の下の方に、ずりおろされたパンティ。カメラ・ハント願いたいね。前からなら、なおいいだろうって？へへへ……、私はフエティなのかな。

◆ ◆ ◆
奇談マガジン七月二十四日号のグラビヤ、アングラ・アナクロ万博粉砕は秀逸だったね。羽のついたヘルメットに白パンツ姿で一列横隊、若い女の子ちゃんまで出演して、パンツやパンティずり下げの丸出しハプニング。私には丸いお尻の下にずり下げられたパンティの香が匂うようだったよ。

◆ ◆ ◆
平凡パンチ八月四日号。ハプニング芸術集団の逮捕劇、アングラグループの「悪しき体制を告発する狂気の儀式」も、猥褻行為と断定されたところ。これにはフोटがなかったの、私はあわてて奇談マガジンをもう一度、開いて、可愛い女の子ちゃんの顔を見直したね、この娘がと、思うとぞくぞくしちゃったよ。

七月二十一日付のある新聞紙上に、映倫が時代に即して規定基準に変更するための研究を始めたと言われていた。お堅い新聞だったので「何も規定をゆるめるためのものではない」という意味のことが、ほんの少し添え書きされていたが、その前後の文章がアメリカの演劇では全裸シーンが珍しくなくなっただけというところが書かれていたので風俗の変遷につれての変更と私が解したのは、私の僻目ばかりでもないと思うが如何。風俗研究誌の奇クよ、アングラや映倫に遅れるな。

◆ ◆ ◆
望遠レンズ付カメラを持って、海へ行っちゃったよ。狙いは「芸術」写真だった。カワイコちゃんの必要とする物蔭が、レンズにとびこんできてネエ。私は済んだ跡へとんで行ったよ。まだ新しい香りの草の露が光ってたよ。ティッシュペーパーも風に吹きとばされる直前だったよ。今年の夏はツイてたよ。

マニア通信

『排泄責め』

讃辞

三木 勇

「流腸責め」「アヌス責め」……なんと魅惑的な言葉でしょう。辻村氏に、又、同好諸姉姉により、繰り広げられる女性の悦び、秘めやかで激しい溜息。数行の行間に

溢れる羞恥のうめきを、息をひそめて感じとうとうとしている愛好者の一人です。

縛られることそれ自体で、女性の胸は不安と恐れで一杯となることとでしょう。そしてそれを押しつけ、自由を放棄し、一步未知の世界に踏みこんで、始めて知った甘美な悦びに、われを忘れる女の美しい表情を、私はその数行に垣間見ることが出来るからです。

私は、男の征服欲を満足させ、女性が赤裸な美しさを見せ、更にそれを最高に昇華させるものが、一連の排泄責めと呼ばれる責めだ

と考えています。全裸の羞恥責めといったもの、まだベール一枚を覆ったものと思います。最後の羞恥をも乗り越えてこそ、本当の美が生まれるのだらうと考えているからなのです。女性も、その責めによって、最大の被虐感を得ることが出来るのではないのでしょうか。

最近のハント記事に於て、私は辻村先生の脳裡に去来するものを感じとれるように思います。又、ハントに登場する女性の方にも、無意識かも知れないが、その期待感？といったものを持っているように思えてならないのです。

幸い、好伴侶を得られている方々は、この真の悦びを感得されていられるのではないのでしょうか。

妊娠すれば必ずといっていいほど受ける流腸。それを秘めたる楽しみとして願望される方も多いようです。が、むべなるかなと、私はひとりでに領けるのです。

勿論、自分自身にても十分に行えることですが、単なる医療行為でも、自由を奪われ、拒否出来ない他動的な条件が加ってこそ、真のうめき、悦びを附加出来るのでしよう。以前ハントに登場された大島さんは、現在どうされているのでしょうか。ハントの経験を告白物に書いて貰えないのでしょうか。

安井さんや増田さん、両ご夫人にもその経験を語って欲しいものです。私は木戸夫人にも、そこはかとなくその願望の内蔵されているのを感じるのですが、辻村先生の名文のせいでしょうか？

通信欄にご登場の小島夫人はじめ、願望を抱いていられる女性の方々、プレイ達成の節には、ぜひその模様を聞かせて下さい。あなたの方の体験談を、首を長くして待ちこがれる愛好者の一人が、ここにも居ることを忘れないよう、心からお願いします。



イメージ画

『嵐の夜に現われるおんな』

野江三郎

〔秘蔵版特選SM資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め
 大手札三枚一組 四〇〇円
 山原 清子 略号△よひV
 全裸入墨女賊拷問折檻
 大手札三枚一組 四〇〇円
 山原 清子 略号△よせV
 女賊笞打ち白洲糾問
 大手札三枚一組 四〇〇円
 山原 清子 略号△よゆV
 入墨女賊ハリツケ拷問
 大手札三枚一組 四〇〇円
 山原 清子 略号△よめV
 入墨女賊海老責め拷問
 大手札三枚一組 四〇〇円
 山原 清子 略号△よすV
 入墨女賊全裸四這い木馬責め
 大手札三枚一組 四〇〇円
 山原 清子 略号△よもV
 入墨女賊逆さ吊り仕置
 大手札三枚一組 四〇〇円
 山原 清子 略号△よきV
 女賊全裸大の字磔処刑
 大手札三枚一組 四〇〇円
 山原 清子 略号△よさV
 女囚拷問木馬責め
 大手札三枚一組 四〇〇円
 美木乃々子 略号△もとV
 女囚石抱き算盤責め
 大手札三枚一組 四〇〇円
 美木乃々子 略号△もへV
 美人女囚海老責め拷問
 大手札三枚一組 四〇〇円
 美木乃々子 略号△もにV

白洲女囚竹棒羞恥責め
 大手札三枚一組 四〇〇円
 美木乃々子 略号△もちV
 美人女囚笞打ち折檻
 大手札三枚一組 四〇〇円
 美木乃々子 略号△もほV
 女囚開股羞恥責め
 大手札三枚一組 四〇〇円
 美木乃々子 略号△もぬV
 美貌女囚土壇で胴斬り
 大手札三枚一組 四〇〇円
 美木乃々子 略号△もりV
 艶美女囚白洲に悶える
 大手札三枚一組 四〇〇円
 美木乃々子 略号△もはV
 全裸強烈羞恥縛り
 大手札三枚一組 四〇〇円
 東浦ひかる 略号△なのV
 猿ぐつわにあえぐ裸女
 大手札三枚一組 四〇〇円
 東浦ひかる 略号△なむV
 女奴隷を弄ぶ二人の女
 大手札八枚一組 一二〇〇円
 大塚・東浦・木村 略号△きあV
 くすくす責め地獄
 大手札三枚一組 四〇〇円
 大塚・東浦 略号△きすV
 灼熱の蠟涙責め
 大手札四枚一組 五〇〇円
 大塚・東浦 略号△きせV
 豊満な乳房を責める女
 大手札五枚一組 七〇〇円
 大塚・東浦 略号△きそV
 女奴隷を飼育する美女
 大手札五枚一組 七〇〇円
 大塚・東浦 略号△きてV

凌辱されるマゾ女
 大手札五枚一組 七〇〇円
 大塚・東浦 略号△きとV
 鼻責め悦楽
 大手札二枚一組 三〇〇円
 大塚・東浦 略号△きなV
 可憐な牝犬の調教
 大手札四枚一組 五〇〇円
 木村 洋子 略号△めあV
 足舐めをたのしむマゾ女
 大手札四枚一組 五〇〇円
 木村 洋子 略号△めくV
 足舐めを強要されたマゾ女
 大手札四枚一組 五〇〇円
 木村 洋子 略号△めゆV
 足舐め訓練を受ける牝犬
 大手札四枚一組 五〇〇円
 木村 洋子 略号△めやV
 愛玩用牝犬の生態
 大手札四枚一組 五〇〇円
 木村 洋子 略号△めえV
 足首縛りの表情美
 大手札三枚一組 四〇〇円
 一宮百合子 略号△あひV
 美しき足首の縛り
 大手札三枚一組 四〇〇円
 一宮百合子 略号△あはV
 素足を縛られる快味
 大手札三枚一組 四〇〇円
 一宮百合子 略号△あふV
 生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ
 大手札四枚一組 五〇〇円
 木村 洋子 略号△むこV
 股間縛り恍惚境場面
 大手札三枚一組 四〇〇円
 一宮百合子 略号△るねV

鼻責めいたぶられ集
 大手札四枚一組 五〇〇円
 一宮百合子 略号△るえV
 首縄股間膝頭縛り
 大手札五枚一組 六〇〇円
 一宮百合子 略号△るそV
 鼻いじめ三態
 大手札三枚一組 四〇〇円
 山原 清子 略号△はねV
 鼻責め万華鏡
 大手札八枚一組 一二〇〇円
 山原清子外一名 略号△はたV
 乳房責め五態
 大手札五枚一組 六〇〇円
 山原 清子 略号△てらV
 全裸女麻縄強烈縛り
 大手札十枚一組 一五〇〇円
 山原 清子 略号△いねV
 刺青裸女を踏みにする
 大手札八枚一組 一〇〇〇円
 山原 清子 略号△いつV
 洋髪全裸刺青強烈縛り
 大手札三枚一組 四〇〇円
 山原 清子 略号△いこV
 可憐島田髻全裸縛り
 大手札三枚一組 四〇〇円
 山原 清子 略号△いみV
 黒フンドシ高小手縛り
 大手札八枚一組 一二〇〇円
 山原 清子 略号△ひろV
 刺青女体エビ責め地獄
 大手札三枚一組 四〇〇円
 山原 清子 略号△ほかV
 文身女体股間縛り
 大手札三枚一組 四〇〇円
 山原 清子 略号△ほきV

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態 大手札型印画紙(9×13)極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇円
十組十枚 一〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
天星社宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴しい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

☆

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛りの全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛を見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高手小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均斉のとれた体(佐々木真弓)
32 蠟涙責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剥く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の敵重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剥がされた布片(金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの操り責(ローズ秋山)
56 高手小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 厳しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむごき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印刷紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

- 大手札四枚一組 略号(むら) 五〇〇円
大塚 啓子
足挙げ開股責め
大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円
梨花悠紀子
猪 吊り三態
大手札三枚一組 略号(いの) 四〇〇円
梨花悠紀子
責め 衣縛り
大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円
大塚 啓子
強烈 エビ責め
大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円
玉田美佐子
後手首の高縛り
大手札三枚一組 略号(ねへ) 四〇〇円
玉田美佐子
椅子またぎの責め
大手札三枚一組 略号(ねと) 四〇〇円
玉田美佐子
全裸 脚挙げ縛り
大手札三枚一組 略号(てい) 四〇〇円
長野 良子
全裸 アグラ縛り
大手札三枚一組 略号(てへ) 四〇〇円
長野 良子
全裸 屈伸縛り
大手札三枚一組 略号(てほ) 四〇〇円
長野 良子
強烈 エビ責め
大手札三枚一組 略号(まと) 四〇〇円
松本アサ子

吊り打ち

- 大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円
関谷富佐子
股間縛り法悦境
大手札三枚一組 略号(ぬこ) 四〇〇円
絹川 文子
踊り子緊縛
大手札三枚一組 略号(りこ) 四〇〇円
絹川 文子
月経帯のまま縛り
大手札三枚一組 略号(ゆす) 四〇〇円
遠藤百合子
縄目に悶える夫人
大手札三枚一組 略号(ほく) 四〇〇円
関谷富佐子
髪を引き回される夫人
大手札三枚一組 略号(ほむ) 四〇〇円
関谷富佐子
膨満正面縛り
大手札三枚一組 略号(へな) 四〇〇円
長野 良子
マニヤ全裸緊縛フオート
大手札三枚一組 略号(いな) 四〇〇円
栗本ミチ子
強烈 エビ縛り
大手札三枚一組 略号(もい) 四〇〇円
関谷富佐子
乳房責めの苦悶
大手札二枚一組 略号(もろ) 三〇〇円
関谷富佐子
全裸 ムチ打ち
大手札四枚一組 略号(もた) 五〇〇円
関谷富佐子
強打に泣く裸身
大手札四枚一組 略号(むち) 五〇〇円
関谷富佐子

裸身の晒し

- 大手札三枚一組 略号(わあ) 四〇〇円
関谷富佐子
全裸 股間縛り
大手札四枚一組 略号(せら) 五〇〇円
関谷富佐子
双胸の強調縛り
大手札三枚一組 略号(そう) 四〇〇円
長野 良子
動感海老責地獄
大手札三枚一組 略号(とう) 四〇〇円
大塚 啓子
色禪の開股縛り
大手札三枚一組 略号(いふ) 四〇〇円
長野 良子
鼻責めのアップ
大手札三枚一組 略号(はす) 四〇〇円
大塚 啓子
乳房しばり
大手札三枚一組 略号(うは) 四〇〇円
長野 良子
鼻責めと緊縛
大手札五枚一組 略号(うい) 六〇〇円
大塚 啓子
木馬責三態
大手札三枚一組 略号(もく) 四〇〇円
大塚 啓子
椅子責めの果て
大手札二枚一組 略号(いす) 四〇〇円
大塚 啓子
檻に入れられた女
大手札三枚一組 略号(もの) 三〇〇円
山原 清子
浴室の全裸刺青
大手札三枚一組 略号(よな) 六〇〇円
山原 清子

鼻いじめ三態

- 大手札三枚一組 略号(はね) 四〇〇円
山原 清子
鼻責め万華鏡
大手札八枚一組 略号(はた) 一二〇〇円
山原・鈴木
碧玉裸身緊縛
大手札三枚一組 略号(のん) 四〇〇円
刑部 典子
くすぐり責め地獄
大手札三枚一組 略号(きす) 四〇〇円
大塚・東浦
灼熱の蠟涙責め
大手札四枚一組 略号(きせ) 五〇〇円
大塚・東浦
豊満な乳房を責める
大手札五枚一組 略号(きて) 七〇〇円
大塚・東浦
女奴隷を飼育する
大手札五枚一組 略号(きと) 七〇〇円
大塚・東浦
凌辱されるマゾ女
大手札五枚一組 略号(きと) 七〇〇円
大塚・東浦
鼻責め悦楽
大手札二枚一組 略号(きな) 三〇〇円
大塚・東浦
全裸 強烈羞恥縛り
大手札三枚一組 略号(なの) 四〇〇円
東浦ひかる
猿ぐつわにあえぐ裸女
大手札三枚一組 略号(なむ) 四〇〇円
東浦ひかる
全裸の緊縛姿態開陳
大手札四枚一組 略号(ゆり) 五〇〇円
遠藤百合子

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

逆ばしる浣腸液

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 一三〇〇円
山原 清子 略号(かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号(かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けか)

いちじく浣腸の実施

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けき)

百CCのポンプ浣腸

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けく)

オマルに排便の姿態

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けし)

浣腸後オシメ着用

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(けこ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むる)

浣腸をする女

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かて)

シリントナーにて浣腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かち)

アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 七〇〇円
山原・東浦 略号(かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 五〇〇円
山原・東浦 略号(うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号(うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬか)

捜入された嘴管

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ると)



昨年暮、上京した際「奇ク」を発見。これまで見たこともない豊富な内容にビックリ。こちらでは書店で購入出来ないのですが、幸い定期購読の便がありましたので早速利用させていただいております。毎月22日頃には確実に手元に届きます。青森市にも愛読していらっしゃる方がおられるようで一度お会いしたいですな。それから全国の奇クファンの皆さんお便り下さい。

(青森県弘前市・牧田静夫)

富山市の曾根葉子さま、神戸市の左根敏子さま。小生四十才を過ぎた年配の者ですが、流腸についてはかなりの経験もあり現在一人でやって楽しんでます。又、羞恥責めもまだプレイしたことはありませんが空想している者です。羞恥責めの文通も面白いと思います。このお二方だけでなく流腸や痛くない羞恥責めなどに興味のある方とも、文通したく思います。尚奇ク旧号もかなりありますので文通の女性に限り差し上げていいと存じます。小生は堅い勤め人です。

(静岡県・藤巻謙作)

貴社いよいよご繁栄のことと存じます。小生、奇クにとりつかれてから早や6年になるSM両方の傾向を持った、26才の独身青年です。今まで何度か投稿しようと思っただけですが、その都度とまどっておりました。しかし今回は小池様、有田久美子さんのお便りを見て、思いきって投稿させていただきます。小生はSMプレー愛好の美女とぜひお逢いしたいと思えます。もう待ち切れません。どうか素晴しい、いや勇気ある女性の快

いお呼びかけをお待ちしております。そして素晴らしい夜をお互に迎えますよう。その時は全て貴女のいうことを忠実に守ります。

(東京都・佐藤一郎)

暑さきびしき折柄、辻村先生、いかがお過ごしですか。私は三十才の未婚の男性です。先日、先生のサロン楽我記の中で、甲子園の女性のことを拝見し、失礼をも返り見ず手紙を書いた次第です。私も彼女の奴隷となりつつ奉仕したいと思えます。私は強度のマゾです。どのようなことでもやれる自信があります。それから身許は絶対確実です。私は現在、会社の寮に住んでおります。先生には大変ご迷惑をおかけして、まことに恐しくですが、どうか私が奉仕を申し出たことをお伝え下さいますよう、宜敷くお願い申し上げます。

(大阪市・馬蘇生)

神戸市の磯部美加様、三月号より奇クを愛読とのことです。そして結婚後は時間を持て余して退屈なさっておられる様子。奇クを愛読するだけでなく、一度小生とプレーしませんか。プレーについては、貴女の希望通りに責めてあ

げます。貴女に条件があれば申し出て下さい。秘密も合わせて守ります。貴女の指定する場所、時間に小生は出向きます。京都の梅川幸子様、希望の品かどうか分かりませんが、子供向の古いのがありますので、お送りいたしたいと思えます。

(岡山・近藤次郎)

横浜のM茂男さん。尼崎の岡田敏夫さん責めてあげましょうか。私は責めのみに生きる女性です。男を奴隷として奉仕させるのが私の趣味。これからは皆様のことを呼び捨てにさせて貰います。奴隷に怒る権利はない筈です。茂男の心意気は大変、気に入ったわ。いい犬になるでしょう。色々な責め場の写真をとって発表しなさい。私は命令します。茂男の裸体写真を誌上に発表しなさい。全裸では可哀そうだから、海水パンツ一枚だけは許してあげる。顔は写さなくてもよろしい。首から下のを、この夏に撮り発表しなさい。もちろん前向き姿勢よ。わかって。待っているわよ。神戸の平河茂、東京の安田待男両氏は、新人なのね。茂男の方は、まだ童貞のよう。感じの人、可愛いでしょう。青臭い男性にお目にかかりたいの。

パンティを嗅がせてあげようかしら。神水なんか直接、口でお受けといたら、逃げ出すことでしょう。坊や、可愛いものの検査してあげましょうか。待男の方は年配者のような感じ。とても二十九才とは思えない。固まるしい誓約書、しかし心中だけは感心なものね。本当かしら。だったら待男も、海水着姿の写真、誌上にて発表してごらんよ。顔は隠しても良いの。誌上にて検査してあげるわ。三角形の小さいフンドシなら、なお、いいのよ。できないでしょうね。春川ナミオさんのイメージ画、とてもすばらしいわ。感心しております。今後とも、もっとすごいものをどしどし発表して下さいね。馬族様の文章も迫力がありますのね。私も勉強いたします。どうかよろしく御指導下さいませ。全国の奴隷志願の者達、どしどし名乗

〓御送金についてのお願〓
現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお申し込みください。他に、小替為、定額小為替、振替等の方法もご利用下さい。封書の場合には切手代用でも結構ですが、なるべく小額切手に願います。

りあげなさいね。最近、少し減ったように思うの。女王様は悲しいのよ。
(大阪東区の女王)

〇 尼崎の高浜満六様。あなた様はよっぽど肥満女がお好きの様子ですね。もしも、あなた様が仙台にでもいらっしゃるときがあるならば、と思います。もし、お会いできたとしても、町を私と並んで歩くのは恥かしがると思いますよ。私は、あなたは非常に痩せた方ではないかと想像しております。私は七十五キロの豚女、特に突き出している太鼓腹を重そうに、そり身にゆったり歩く私では、いやになるのではないかと思います。でもどこかで二人だけになり、私が裸になった姿を見られたおり、きつと満足して頂けるものと、確信しております。私は何といても色白ですし、皮膚だけは、きめ細かいと思っております。あなた様の前で裸になり、ゆっくりと自慢のお腹をつき出して、お見せしたいと思っております。岡山の西田すすむ様。あなた様は、私のように妊娠したような大きなお腹の女性にそこがいていらっしゃる様子ですが、私は嬉しく思っております。もしもお会いできるなら、ゆ

っくりプレーしたいと思えます。そのときには、この巨大なお乳であなたの顔をはさんで苦しめたりこの太鼓腹をマッサージさせたりしたいと思えます。私も、あなたをいじめてやりますが、そのあとは私をいじめるのも忘れないで下さいね。こぶしで私の太鼓腹を強くなぐって下さい。私は苦しきあまり、あお向きにたおれ、巨大な太鼓腹を波うたせて、うなりながら苦しむでしょう。そして、お

乳を思いきり、しばって下さい。強くしぼられると、まだ少しはお乳が出るものですから……。でも痛さに私は悲鳴を上げるでしょうね。それから私のお腹をパンクさせるといって、ビールを何本も無理に飲ませて下さい。四、五本目で私の太鼓腹はパンパンに、はりさけそうになり、私は苦しむでしょう。私は大きく垂れ下がるように重くなったビール腹を、両手で上にかかえるようにして、苦しそ

△飼育の愉しみ▽小池美喜嬢分譲写真

本誌九月号のSMカメラハントで紹介された純情可憐な小池美喜嬢の緊縛姿を好事家に限りごらんに入れませ。女優とかヌードダンサーにない素人じみた初々しさを彼女の中から見つけて下さい。

全裸正面の縄掛け

大手札三枚一組 四〇〇円
小池美喜 略号へれる▽

羞らいた含んだ幼い膨らみに情容赦なく縄目が喰い込んで素肌がわなわなとふるえている。

柔肌の高手小手縛

大手札三枚一組 四〇〇円
小池美喜 略号へれは▽

後手首を縛られて

大手札三枚一組 四〇〇円
小池美喜 略号へれへ▽

生れて初めて縛られる高手小手に後手首を高々と掲げながら、むちむちとした全裸の肌を染めた。

飼育された美少女

大手札一組 四〇〇円
小池美喜 略号へれと▽

自分の裸身を縛られるという好奇心がいつとはなしに興味に変化してきた美喜嬢の縛られ姿。

うに肩で息をしながら、お部屋の
中を歩き廻ります。あなたは私を
たおし、お腹の上に足をのせ、強
くふみつけるのです。私は思わず
口からビールを吐き、苦しさに涙
を流すでしょう。あなたは私に馬
のりになって、さらに二本ほどビ
ールを私の口にジリジリ流し込み
ます。私のお腹は、もう破れさけ
そうに張って、苦しさのため立ち
上がることもできません。あなた
は、こんなに苦しい太鼓腹の脇
を、強く足げりにして私を苦しめ
るのです。ついに私は大きくうな
って、失神してしまいます。では
又、いつかおたより致しますから
あなた方も私とプレーすることを
想像した、お便り下さい。私は、
九月号の肥美好也様の肥満女性愛
好の画に出ております肥満女性に
近い体をしております。この画を
見て私は、自分がそうされてるよ
うな気がして、胸がドキドキしま
した。

(仙台・美川美子)

奇く愛読のM男性共に告ぐ！
私は当年二十八才の一流クラブの
美人ホステスをしている典型的な
S女性よ。今までにも何人かの奴
れい男を飼育してきたが東京に来
てからは、まだ一人もないわ。

(京都から東京に住み移って一カ
月ですからね)それで東京近辺の
男どもを徹底的に恥かshめてやろ
うと思ひ、特に今回は私の専用タ
ンツボ男を募集するわ。私の趣味
は、叩いたりするような非人間的
なプレイは絶対しないわ。もっと
現実的な責めで男どもを恥かしめ
た方が、よっぽど気持がいいの。
たとえば銀座のどまん中で、男の
顔にペツと唾をひっかけたり、レ
ストランで私の食べ残しの料理に
痰、唾を吐きいれてたべさせたり
ウガイ水をスープリ皿で飲ませた
り、人前で男どもを恥かしめるス
リルは格別よ。大の男が顔中に痰
や唾をベツトリつけながら歩く姿
など、想像しただけで胸がスーッ
とするわ。もちろん私は後ろの方
から笑いをこらえながら、男が恥
をかくさまをタツプリ味うの。他
に何かよい方法があれば聞いてあ
げるわ。ただし私の趣味を満足さ
せてくれなければ失格よ。私の痰
唾で汚されてもらいたい男どもよ
どんどん応募していらいっしやい。
途中で逃げ出すようなら最初から
よしなさい。では、応募者を楽し
みに待っています。

(東京・留美子)

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト

開股羞恥責めの姿態

安井喜久子 略号 五〇〇円

髪吊りで強烈ムチ打ち

安井喜久子 略号 五〇〇円

片足首引きつけ縛り

安井喜久子 略号 五〇〇円

尻立て鞭打ち艶姿

安井喜久子 略号 五〇〇円

柔肌に炸裂するムチ

安井喜久子 略号 五〇〇円

エビ縛りの鞭打ち

安井喜久子 略号 五〇〇円

貞操帯着用鞭打ち

安井喜久子 略号 五〇〇円

痛打にもかく美女体

安井喜久子 略号 五〇〇円

あぐら縛りの羞恥責

安井喜久子 略号 五〇〇円

片脚挙げで晒す裸身

中河 恵子 略号 四〇〇円

強烈エビ縛りで苦悶

中河 恵子 略号 四〇〇円

膝頭縛り開股竹棒責め

中河 恵子 略号 四〇〇円

竹棒開股足首縛り

中河 恵子 略号 四〇〇円

股間縛りの裸身表情

中河 恵子 略号 四〇〇円

菱縄縛り猿ぐつわの表情

中河 恵子 略号 四〇〇円

乱痴戯騒ぎの結末

中河 恵子 略号 四〇〇円

菱縄縛りで床に喘ぐ

中河 恵子 略号 四〇〇円

浣腸責めの甘い恐怖

中河 恵子 略号 四〇〇円

浣腸液の注入直後

中河 恵子 略号 四〇〇円

強制浣腸の各姿態

中河 恵子 略号 四〇〇円

浣腸責めの美態開陳

中河 恵子 略号 四〇〇円

浣腸を待つポーズ

中河 恵子 略号 四〇〇円

独立するぞと勇ましく九州宮崎から出て来て二カ月になります。一人生活が淋しくて堪まらないのです。四十才以上の男性の方、ボクの話し相手になって頂けません。奇クは一年ぐらい読んでいます。男性と遊んだことは二、三回あります。ボクの今の夢は、好きな男性と二人で北海道旅行をすることです。まだ外国に行ける身分ではないし、高望みはしません。相手に迷わくをかけないで、自分でできる限り最大限に楽しく生きるボクは二十五才。三十才になったら結婚しようかなあと考えたりにいます。各方面の方との文通を望んでいます。皆様からの、お便りを楽しみに待っています。

(西宮市・山口洋一)

私は夢科高原のおヒザ元の茅野市に住んでいます。昨年はビィナスラインというドライブコースができて、一段と景勝地となりました。皆様をご招待したいと思いますが、皆様を如何ですか。私のわがままですが、そうした折にマゾ女性と親しくなり、プレイできたらこの上なく幸福です。いつも辻村氏の「カメラハント」は楽しく読

ませて頂いていますが、辻村氏に一度お会いしたいと思ひます。しかし私は身障者のため、自力で自由に外出できないので、それもかなわず残念です。どうか今後とも私たちのために活躍して下さい。

(茅野市・松本光二)

有田久美子様へ。私が貴女の、「夢の部門」を担当いたします。貴女は白いビキニパンティとストッキングだけを体につけて、広い部屋の中央に敷かれたマットレスの上に人の字型に足を開いて仰臥するのです。私はパンティの横を引っぱり抜けて、貴女の要所要所を鑑賞します。つぎにゴムをひっぱるようにして、お腹のところから、私の羞恥責めの指先が、貴女の羞恥のポイントを襲うのです。むっちりとした太腿をふるわす貴女にかまわず、何時間も私の指先は貴女をまさぐるのです。私の指先が白くふやけるまで、それは続けられ、貴女の恍惚の姿はセルフタイマーで撮影されるのです。パンティを膝小僧までずらせて洗面器の中へお小水をして頂きます。恥かしさに悶える貴女の正面に、顔をつき出して最後の一滴まで、したたり落ちるのを見せて貰いま

可憐表情の全裸縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆめ

立縛り正面裸晒し
大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆえ

両手吊り全裸晒し
大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆひ

雁字搦目後手縛り
大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆあ

股間縛り柔肌責め
大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆも

猿ぐつわ開股責め
大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆに

豊満な臀部強烈責め
大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆほ

強制全裸開股責め
大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆみ

股間縛りで悶える
大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆる

全裸縛りに羞らう
大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆへ

私の妊娠腹を見てね
大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆわ

縛られた妊婦横臥す
大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆよ

被虐に燃える全裸妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆぬ

尚も見せたい妊婦腹
大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆる

股間縛り首縛正面
大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれ

両手吊り正面晒し
大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よそ

全裸高小手の麗身
大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よの

全裸股間縛りの媚態
大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よや

強烈な変型エビ縛り
大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よい

正座猿ぐつわの仕置
大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よふ

凄絶海老責め地獄
大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よえ

女体二つ折り縛り
大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よぬ

あぐら縛り全裸晒し
大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よあ

イルリの尻腸責め
大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よた

長井葉津子 略号 八よた

す。つぎに貴女の一番に快ぶアヌス責めに入り、四つん這いになつてもらい、パンティをお尻の下まで引き剥きます。ペビーかんちゅう一コだけ施しておいて、ゆっくりと、こよりの先で責めてあげます。やがて、堪まらなくなった貴女の白い豊かな双丘が波を打ち、美しい固型が産み落とされるのです。以上が貴女の夢であり、私の夢なのです。いずれ現実の逢瀬を望みて……。

(神戸市・九鬼好太郎)

茨木の岡本嬰子さん。貴女のような方と一度でもよいからプレーが実現できたら、どんなに楽しいかも知れません。小生は三十過ぎのサラリーマンです。プレー以外のことでは、絶対に迷惑はかけません。温厚なフェミニストです。お便りを、お待ちしております。小生も「花と蛇」が好きで、肉体的な責めよりも、精神的な羞恥責めの方が好きです。面をかくのが好きで自分で色々と空想しながらかいてありますが、もう大分、作品もたまりました。大阪近郊の同好の方、どなたかお友達になつて下さい。

(大阪豊中・谷中治)

筆無精で不言実行型ですが、九月号の「ふんどし物語」に刺戟されてペンをとりました。私の家は西伊豆で民宿をしているのですが去年から「水着の下に乙女ふんどし」というキャッチフレーズで手製の小さなモッコフンドシを売っています。中学生など一人買うと私も私もと、みんな買います。「先生も買いなよ」といわれて先生が真赤になつたりしています。湯加減を見に行くと、風呂場で、ふんどし姿でキャアキャアやっているのも、かわいいものです。夫から「どうだ、お前？」といわれて「バカ」と打つ真似をしていた若い奥さんがあとで、そつと買いに来たりします。その夜の会話を想像すると、ほほえましくなりま

(伊豆松崎町・勝又てるみ)

残暑益々きびしき折柄、奇ク愛読者諸兄姉におかれましては一層のご活躍のことと推察し、お慶び

〔緊縛女体美のシリーズ〕

大手札印画紙焼付

大手札三枚一組 略号△もえ▽ 四〇〇円

両手吊りに悶える女体

大手札三枚一組 略号△もゆ▽ 四〇〇円

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号△もよ▽ 四〇〇円

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号△もす▽ 四〇〇円

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号△もせ▽ 四〇〇円

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号△もれ▽ 四〇〇円

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号△もる▽ 四〇〇円

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号△もて▽ 四〇〇円

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号△もな▽ 四〇〇円

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 略号△もね▽ 四〇〇円

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号△もむ▽ 四〇〇円

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 略号△もう▽ 四〇〇円

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号△もき▽ 四〇〇円

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号△もこ▽ 四〇〇円

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号△もみ▽ 四〇〇円

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 略号△はゆ▽ 四〇〇円

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 略号△はよ▽ 五〇〇円

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 略号△はて▽ 五〇〇円

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号△はお▽ 四〇〇円

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 略号△はの▽ 五〇〇円

神妙なブレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号△はひ▽ 四〇〇円

申し上げます。さて私は現実を余りにも卓越した美の探究者、美の放蕩者であり、サジストでもありません。そして我が心を、つたないながらも文にし絵にし、かつ詩なるものを投稿させて頂き、編集諸氏の絶大なるご慈悲? をもちまして掲載していただきました、当年二十四才の頑強なる男子です。前座が長くなりました。九月号の茨木市・岡本嬰子様。貴女の文を拝読し、長い間待っていた私の相手は貴女だと、インスピレーションめいたものが閃きました。単刀直入に申し上げます。私の愛すべきベツト並びにモデルとなつて下さい。自己を売り込むつもりは毛頭ありませんが、私のS性は七月号の拙文を読んでいただけたら、だいたい分かっていただけたら、と思います。馴れぬ都会の生活で自然とたまりつつあるウサや淋しさを解きほぐして差し上げましょう。やさしくナイトの精神を持ちまして、加えて優しさを込めた責めと素振りでもって調教してあげます。その方法につきましては内緒です。多分、沢山の候補者が貴女の前に出現するでしょうが、でも若し少しでも私の考えに共鳴して下さいましたら、望みある御返

答をお待ちいたしております。

(京都市・葉月由紀夫)

最近、切腹愛好家がめっきり少なくなつたようです。まことに淋しいかぎりです。女性の切腹愛好家の出現を期待しています。私は女性の切腹とアヌ責めに興味を持つ男ですが、同好の女性とお手紙の交換でもできたらと思つています。また最近、東京で奇く買うために相当、苦心されている方が多いと聞きます。そこで、この欄をお借りして私の足で集めた下町方面の本屋さんが奇く置いてくれる店も多いようで、浅草の田原町、西浅草などの店には新刊の本屋でも旧号(二カ月ほど前の号まで)も置いてあるところが多いようです。上野、田端、大塚にも私は、なじみを持っていますが、山の手方面になりますとなかなか見つかりません。玉川通りのF書店などには相当数、置いてあります。ただ山の手方面の方は、毎夜十二時近くまで露店を開いている渋谷などの野外の店をご利用になつては、いかがでしょうか。私のよく買う渋谷のガード下の露店(ただし夜しか開かない)などは

開股縛りに喜ぶする女

大手札四枚一組 略号△はわV
中河 恵子 五〇〇円

悶える猿轡の裸身
大手札三枚一組 略号△へもV
関谷富佐子 四〇〇円

全裸の女体立ち縛り
大手札三枚一組 略号△はふV
中河 恵子 四〇〇円

ムチ打ちの陶酔境
大手札三枚一組 略号△へさV
関谷富佐子 四〇〇円

黒縄は白肌を酷に彩る
大手札三枚一組 略号△はほV
中河 恵子 四〇〇円

両手吊りで痛める女身
大手札四枚一組 略号△へしV
大島 照代 五〇〇円

悦唐に身もだえる美女
大手札四枚一組 略号△はあV
中河 恵子 五〇〇円

後手縛りの竹棒責め
大手札四枚一組 略号△へすV
大島 照代 五〇〇円

菱縄は白肌をくびる
大手札三枚一組 略号△はうV
中河 恵子 四〇〇円

強烈開股強制縛り
大手札三枚一組 略号△へせV
大島 照代 四〇〇円

柱に立縛りでさらす
大手札四枚一組 略号△はさV
中河 恵子 五〇〇円

両手吊りであえぐ女体
大手札四枚一組 略号△へゆV
大島 照代 五〇〇円

卓上の開股羞恥責め
大手札四枚一組 略号△はめV
中河 恵子 五〇〇円

竹棒強烈開股責め
大手札三枚一組 略号△へたV
大島 照代 四〇〇円

無防備の女体を開陳
大手札四枚一組 略号△はしV
中河 恵子 五〇〇円

厳しき緊縛の正坐責め
大手札四枚一組 略号△へちV
大島 照代 五〇〇円

遠山静子夫人の立縛り
大手札四枚一組 略号△はもV
中河 恵子 五〇〇円

責めの魔手に屈伏する
大手札四枚一組 略号△へつV
大島 照代 五〇〇円

若妻の魅力を発散する
大手札三枚一組 略号△へむV
関谷富佐子 四〇〇円

竹棒の胴絞め責め
大手札四枚一組 略号△へてV
大島 照代 五〇〇円

後手縛り全裸身の魅力
大手札三枚一組 略号△へめV
関谷富佐子 四〇〇円

竹棒開股胴絞め縛り
大手札四枚一組 略号△へとV
大島 照代 五〇〇円

か言おうとしてもただフンフンという切ない声がビニールチューブを通して洩れてくるだけです。そこで水平面になっている鼻の両方の穴の上にロウソクを立てて、身体の鋭敏な個所をパイプライターでなでていく。ロウソクが短くなって熱気が鼻に伝わり、パイプライターの快音とともに、何ともいえぬ、ため息が洩れるでしょう。最後に鼻の縛りをするとき、まだ元に戻らない上向きの赤い鼻をやさしく愛撫し、鼻汁をきれいに拭き取り、鼻の穴まできれいにカラー化粧をほどこします。そのような責めをあれやこれや考えるだけでも毎日が楽しく、ましてやプレイができる女性がいたら、本当に幸せです。今後、鼻に関する記事や投書をお待ちしております。

(愛知・中村一喜)

高崎エネマ様。読者通信を拝見しました。貴方のような方が、お隣の都市におられるのを知り大変うれしく思っております。通信によれば、貴方は浣腸に関するベテランと思え、余り浣腸の経験のない私に充分、浣腸の調味料やまたアヌ責めにより恍惚を味わして頂けると思っています。今まで

にやった浣腸は、イチジク浣腸や三〇〇〇シリンドラーによるグリセリン液の注入といった程度のもんです。ただ私としては、浣腸そのものよりも、肛門に器物を挿入することの方が重点になり、浣腸器の細い噴管では物足りなくなり、段々と太い器物を挿入している状態です。それと同時に挿入するときに受ける肛門が張り裂けんばかりの痛み、これも忘れることのできないものです。始め痛みを感じていた器物も、何日かののちには痛みも感じなくなり、更に太いものという具合で、現在では直径約五・五センチぐらいの器物まで挿入できるようになっております。そのため括約筋は、かなり弛緩しており、たまに浣腸をしても時間に耐えることはできません。ぜひ貴方とお会いして一緒にプレイをやりたと思います。

(前橋・アヌス生)

はじめてお便りします。小生は二十二才で会社員です。SMプレイに興味を持っています。私はプレイの経験がありません。女王様私をドレイにして責めて下さい。羞恥責め、ローソク責め、ガンジガラメ責め、恥かしい責め、浣腸

<p>双胎臨月、産前、産後、写真</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>増田みゆき 略号 〇〇〇円</p> <p>双胎臨月、産前、産後、写真</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>増田みゆき 略号 〇〇〇円</p> <p>臨月、産前、産後、写真</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>増田みゆき 略号 〇〇〇円</p> <p>黒縄、産前、産後、写真</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>中河 恵子 略号 〇〇〇円</p> <p>立縛り、産前、産後、写真</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>木村 洋子 略号 〇〇〇円</p> <p>開股された股間縛り</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>木村 洋子 略号 〇〇〇円</p> <p>豆絞りの猿ぐつわ縛り</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>木村 洋子 略号 〇〇〇円</p> <p>柱縛り、産前、産後、写真</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>山原 清子 略号 〇〇〇円</p> <p>高小手に悶える全裸</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>山原 清子 略号 〇〇〇円</p> <p>緊縛に映える入墨の肌</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>山原 清子 略号 〇〇〇円</p> <p>脱がされた緊縛刺青女体</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>山原 清子 略号 〇〇〇円</p> <p>縄にのたうつ入墨裸身</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>山原 清子 略号 〇〇〇円</p>	<p>願書一つで縛られる刺青女</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>山原 清子 略号 〇〇〇円</p> <p>女相撲迫力投業連続動作</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>大塚・東浦 略号 〇〇〇円</p> <p>恵子の妊孕美観賞</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>中河 恵子 略号 〇〇〇円</p> <p>孕み若妻の羞らい</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>中河 恵子 略号 〇〇〇円</p> <p>八の字の開股責め</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>愛知 葉子 略号 〇〇〇円</p> <p>足枷強制開股責め</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>愛知 葉子 略号 〇〇〇円</p> <p>全裸強烈逆エビ責め</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>愛知 葉子 略号 〇〇〇円</p> <p>両手吊り足枷責め</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>愛知 葉子 略号 〇〇〇円</p> <p>両腕逆手吊り責め</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>愛知 葉子 略号 〇〇〇円</p> <p>豊満なる臀部責め</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>愛知 葉子 略号 〇〇〇円</p> <p>大の字縛りと足挙げ責め</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>愛知 葉子 略号 〇〇〇円</p> <p>大手札三枚一組 略号 〇〇〇円</p> <p>愛知 葉子 略号 〇〇〇円</p>
--	--

お申込みは大阪阿倍野局私書箱第14号天星社宛へ願います。

責め、女装下着責めなど、パンテ
イで猿ぐつわをはめられ、オムツ
カバーをつけさせられた私をいじ
めて下さい。その他、どんな責め
も、お受けいたします。私をドレ
イにして下さる女王様はおられま
せんか。神戸の小杉千恵さん、い
つも、お便り拝見させていただ
いております。近頃の方とも、おつ
き合いたいと思います。

(島根県・小村昇三)

九月号にゴム製おしめカバーを
探しておられる男性の投稿があり
ましたが、それについて私の情報
を提供します。まず、宇都宮製作
で「ダンロップ」印の品を作って
います。品物に同封されている説
明書には「大人用オシメカバーは
総ゴムのダンロップ製品に限りま
す」と題して、その理由を記して
います。サイズは大と中で、値段
は昨年、七百元でした。私は大と
中を、それぞれ二枚宛、計四枚買
って交代に使っています。股ぐり
は、ゴム紐を通して腿にピッタリ
するように自分で改造しました。
カバーの洗濯は極めて楽で、直ぐ
乾きます。また洗濯を怠けても不
潔になりません。大量のオシメを
入れても運動が拘束されないので

夜は寝巻の一部として使えます。
問い合わせ先は、大阪市東区淡路
町一丁目十七番地、宇都宮製作株
式会社、または、東京都千代田区
内神田二丁目十六番十三号、神田
ビル二階の東京出張所です。もう
一つは手のこんだ作りのもので糸
や布を使わず貼り合わせて作った
文字通りの総ゴムカバーで、東京
都豊島区要町一丁目三十番地、ニ
ューポート社のカタログ番号二五
二号の品です。これは、妊婦がパ
ンティとして使っても良いよう
にゆったりと作っており、男性が
使っても良く合います。股巾が広
く、底が深く、それでいて腿の締
まりが強いので安心感があります
が、夜間用とすると腿に痕がつく
難があります。昼用としては実に
快適で、走っても粗相しません。
値段は高く、二千三百円でサイ
ズは一種しかありません。ほかに私
がまだ確かめてないところで、大
阪府柏原市五―八―七、大和防水
布株式会社(電話七二・一〇八一
―六)があります。おしめ用の薄
いゴムを作っていると聞きました。
た。お近くの方で調べてみて報告
して下さいを望みます。ゴム
の素材があれば、自作のカバーも
可能ですし、またゴム製のブルマ

全裸後手柔肌縛り 大手札三枚一組 略号△こよ▽ 四〇〇円	乳房強烈膨隆責め 大手札三枚一組 略号△こわ▽ 四〇〇円	海老責めに苦悶する 大手札三枚一組 略号△こお▽ 四〇〇円	全裸の緊縛全身晒し 大手札三枚一組 略号△こる▽ 四〇〇円	煙草責めに喘ぐ女 大手札二枚一組 略号△こぬ▽ 三〇〇円	緊縛麗姿に映えるライト 大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円	臀部強調後手縛り 大手札三枚一組 略号△こら▽ 四〇〇円	羞恥に悶える全裸緊縛 大手札三枚一組 略号△こに▽ 四〇〇円	ホステスの緊縛姿態 大手札三枚一組 略号△こち▽ 四〇〇円	二つ折りで責める女体 大手札三枚一組 略号△こへ▽ 四〇〇円	佐々木真弓 略号△こへ▽ 四〇〇円
脈打つ全裸の臨月腹 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 四〇〇円	中河 恵子 略号△こふ▽ 四〇〇円	臨月腹の革紐股間縛り 大手札三枚一組 略号△こや▽ 四〇〇円	中河 恵子 略号△こや▽ 四〇〇円	猿轡の臨月妊婦腹縛り 大手札三枚一組 略号△この▽ 四〇〇円	卓上の股間縛り狂態 大手札三枚一組 略号△この▽ 四〇〇円	羞恥の足挙げ責め 大手札三枚一組 略号△こそ▽ 四〇〇円	悦虐責めの女体終着駅 大手札三枚一組 略号△こた▽ 四〇〇円	長井葉津子 略号△こた▽ 四〇〇円	片足挙げの鞭打ち責め 大手札三枚一組 略号△こら▽ 四〇〇円	関谷富佐子 略号△こら▽ 四〇〇円
柔肌に弾ける惨酷な答 大手札三枚一組 略号△こな▽ 四〇〇円	あぐら縛りの女体鑑賞 大手札三枚一組 略号△こえ▽ 四〇〇円	対談用に縛られた女 大手札三枚一組 略号△こて▽ 四〇〇円	左近麻里子 略号△こて▽ 四〇〇円	九月号、鈴木ゆり子様の「ふん どし物語」大変興味深く拝見いた して……。 (東京都杉並・岩手信夫)						

しました。特に、ふんどしの分類は気に入りました。よく考えてみますと、ビキニといっても前の三角が後の三角より大きいのは、貴女のいわれるようにビキニではなく、褌の部に入れるのが適当であると私も思いました。我家と申しまして、妻と二人きりの生活ですが、私の褌ビキニ好きにつられて妻もビキニパンティや褌を常用していますので、二人で何回も何回も読み返しました。ただ我家のビキニやビキニ褌は自家製ですが、少し作り方に特徴がありますので紹介したいのです。それは後の三角形を形づくる布の裁ち方ですがピタリとお尻の谷間に食い込むようにして、しかも布がお尻の双丘に、これまたピタリと張りつくようにするため、三角布を左右別々に裁つのです。この裁ち方はその人のお尻の丸みの具合や大きさ、お尻の谷間の深さに関係するので、寸法的に型紙で示すことはできませんが、要領を申し上げますと、後の布は左右別々に、これまた三角形に裁ち、これを縫い合わせて後の三角形に仕上げるのです。普通は一枚の布を三角に裁って、これをそのまま後の三角形に使いますと、布がピタリとお尻

の谷間に入りませんし、また入れると、お尻の双丘の部分でたるんだり、しわがよったりします。股下の巾は女性用で、一番せまいところは二センチぐらいです。そして腰の部分は、前は臍の下十センチ、後はお尻の割目がまだ終りにならぬところから左右に伸びて前の三角と結びます。つまり下腹部にやっとかかっている程度と申しましょうか、今にも脱げそうな露出感に溢れたものです。よく、お臍の上まで褌をしめた形のビキニがあります。あれでは私は感じがでません。黒の水泳褌の後のひもを通さずに引っぱってしめつけるといわれましたが、私も早速、妻にそうするように言いました。私の妻は褌やビキニの外に荷造用の細引だけで、これを七尺をしめるときはやり方で褌をするともあります。お尻の割目にかくれて見えなくなるくらい、きつくしめ込みます。ときには余った紐が上にのびて乳房を縛り上げることもあります。今度こういった写真をとりましたので、説明文と一緒に誌上に発表させて頂きたいと思っています。

(東京・禪生)

○ 私は毎月、奇クを愛読しております。特に「カメラハント」「花と蛇」など楽しく愛読しております。縛られた女性……この世でこれほど美しいものがありました。全裸での開股縛りや海老責めその他色々の羞恥責めに悶える女性の姿は、もっとも美しいものだと思います。M女性の方々に私のプレイ相手になって下さる方、お手紙をお持ちしています。もちろん紳士的な、おつき合いをお約束いたします。申しおくれましたが、私は信用第一としている職業につとめ、ある程度の地位にある会社員です。まだ見ぬ貴女からのお便りを首を長くしてお待ちいたします。

(東京都・林美樹夫)

○ 浣腸マニアの皆様、お元気ですか。ぼくは、すっかり浣腸の魅力にとりつかれてしまった二十才の学生です。奇クを読み始めてから一年になります。浣腸以外の記事には興味がありません。浣腸関係の記事は、スクラップしています。今までで一番よかったものは三月号の大川恵子様の「A子さんとのプレイ」と五月号の中野昭子様の「病院での一日」でした。つぎに、ぼくの現在のプレイについて書かせていただきます。もちろん相手のいない一人プレイです。ぼくの部屋の押入れの奥には三十三CCの浣腸器二本、大人用オムツカバー、便器があります。そして先ずプレイの始めに、奇クにのっている女性の浣腸プレイの告白記事を読み、自分がその女性になったような気持ちになります。そして私は女なんだと自分に言いかけ女装します。女装といっても大げさなものではなく、パンティをはくだけです。そしてパンティをずらし、グリセリンなら一〇〇CCほど、石けんなら五〇〇CCほど一気に注入します。そしてその上からオムツカバーをすると、ころげ廻って苦しさを楽しみます。がまんがまんを重ねて「あっ、もう駄目」という、つぶやきとともに、その瞬間、オムツカバーの中に広がるドロドロした流れ。ぼくは、一生、浣腸から離れることができないでしょう。大川恵子様中野昭子様をはじめ、浣腸マニアの女性の方、どうかお便りを下さ

(東京都・橋本義也)

大阪東区女王様。貴女のように

(次号十二月号)は十月二十五日に発売いたします

な、お方の出現を心待ちにしておりました。小生をドレイにして、あごでこき使い、馬にしたり座布団にしたり、果てはトイレにつないで、排泄物の処理やトイレットペーパーとして使用したり、いろいろな縛りや羞恥責めにして責めぬいて下さい。小生は女王様の忠実なドレイとしてご奉仕しますので、もしお気に召しましたら、お呼びかけ下さい。小生は年令四十才、身長一メートル七五です。何分よろしくおねがいします。

(名古屋市・ドレイ男)

私のつたない「ふんどし物語」が九月号、十月号と、のべて二十頁も提供して下さい。九月号の二三四頁にフランス映画「悲しい奴」のふんどし娘をアンナ・アスターと書きましたが、しらべてみるとポーラ・マルテルのまちがいでしたので、訂正させていただきます。アンナ・アスターの方が有名なので主演扱いになっていますが、服を着たままの、私たちに与ってはツマラヌ役でした。それか

ら二〇六頁に、赤ふんどしの伊藤ますみ様のお名前を落としてしまったので、お詫びいたします。ついでに、十月号七五頁のカラドはカラヤ、七八頁のエナメルドは、エメラルドの誤植ですから、念のため。それでは、今井陽子様、梅本八重子様はじめ全国のふんどし女性の皆様ごきげんよろしく。

(焼津市・鈴木ゆり子)

東区の女王様も、その後お交りなくお過ごしのことと存じ上げます。八月号では、女王様の労わりの言葉を賜わり、どんなにか私は慰められたことでしょう。私は女王様のお呼び出しのお言葉を、晴れて賜わる日を、このまま過ごしていいたいのであろうかと、考えるのです。今の私の身についていることといえば、家庭用電化製品や、フランスベッド、またはミシンなどを安く手に入れる方法や、カクテルの作り方を少し身につけているぐらいです。ほんとうに何のとりえもない私ですが、何か修得するものがあれば、申しつけて下さい。少しでも女王様の生活が楽し

く過ごされれば、奴隷の私にとりましては、この上もない幸せと存じ上げます。なお私は、色が白く細い体質です。幸か不幸か、神経のこまかい方です。このような私を、女王様のお好みの奴隷として仕上げて下さいませ。私の本心といたしましては、女王様に私の命のあるかぎり、お仕えさせていただければ幸いに存じ上げます。このような私を、お気に召さなかつたら、女王様の知人に売り渡して下さい。下さってもかまいません。これが東西古今における奴隷の宿命だとかように存じ上げます。このような私は、女王様のお好みの責めを甘んじてお受けいたします。その場になりますと、涙もろい私のことですから、泣き出して女王様の手をやかせることと存じ上げますが、どうか女王様のお好みの奴隷として、御飼育の程、おねがい申し上げます。(大阪・中野)

名古屋の小島友子様へ。浣腸のたのしみを見出され、自分で浣腸を施されている由を知り、貴女こそ私が求めていた女性と確信し、おたよりの書き送る次第です。二十七才の奥様と自己紹介されましたが、娘さんと異なり私も安心して

浣腸をしてあげられると喜んでおります。加藤さんから若し具体的なお返事がなかったら、ぜひ私と浣腸のたのしみを、わかちあって下さい。浣腸の本当の楽しみは、異性に施され盛り上げる感覚に悶えながら耐え、じっと覗きこまれている恥かしい肢体を収縮させ、鑑賞されることにあるのです。ぜひ私の施術を甘受して下さい。

(神戸市・見谷一郎)

茨木市の岡本優子様。二十才の若肌を独り淋しく朽ちさせるのは惜しい。私が優しく緊縛して、美しい貴女の若さを羞恥の内に固着させ、永久の命の中に保存してあげましょう。真白な敷布の上に、生まれたままの姿を仰臥開脚し、首から下は一毛も残さず剃毛。童女の如き美しき腿を憐れせ、恥かしげに排水する貴女にカメラが向けられ、最後の一滴をしたたらすすべすべとした艶肌に、フラッシュが輝くのです。花と蛇の美囚と同様に上向きに寝ころんで、両足を広げて竹の棒に吊りあげられ、若々しい双丘の下に枕を当てられた貴女は、静かに浣腸器のガラスの管に襲撃されるのです。ゆっくと注入される薬液の感覚に呻く

美女の美しさも、悦庵に溺れて、美の終宴を演ずる貴女の媚態も、すべてフラッシュの中に克明に捉えられるのです。

(神戸・大谷生)

十月号に楽しみにしておりました「花と蛇」がなくてとても淋しく思いましたわ。ストックなしとのこと、編集部の方は何をなさっておられますの。私は「花と蛇」がなくなってしまうたら奇クを買うのを止めますわ。これは私だけではございせんことよ。十一月号はこの埋め合わせに質量ともに素晴らしい力作の発表とか。嘘はな

しですよ。美沙江が浣腸をしておどかされて、排尿ショーに協力し、まるで母親にオシッコをさせて貰う幼な子のように、丸いすべすべした美しいお尻を剥き出しにして、鬼源に捧げてもらって、真っ向から覗きこんで揶揄する順子や川田の方に、真赤に体をほてらせて、ちびりちびりとしぶってみせ、更に押さえきれずに、見事な放物線を描き、放尿するシーンや珠江夫人が浣腸を施された上、木馬のおまるにまたがられ、下から鑑賞されながら、案外と太いのでおどろかすシーン等を夢に託してお待ちしております。ぜひ、モ

ーレツなのをお願いしますわ。岐阜の座頭孝司さま。その後、如何お過ごしですの。私は近頃、ニットの超ミニを身につけて新開地を散歩して楽しんでおります。勿論、下着をつけて体の線を崩すような真似は致しませんから、秋風がとっても心地よく裸の体を撫でていきますのよ。階段を登るときなど胸がドキドキして羞恥責めが加えられているような気が致します。夕暮れの暗さにまぎれて、先日、お渡しをしてみましたの。少し開き気味の褌つきの超ミニをはいて、靴下をつけず素足にサンダルばきの姿で階段の途中に立ち

散水しないように太腿を前で少し交又させて前部をおさえつけながら、下腹部の力を少し抜いてみましたら、あの幼女だった頃の忘れかけた感触が私をつつんだのです。上手に暖かいものが足を伝わりましたわ。もっとも少量のみですわよ。せっかく神戸の方からお手紙を頂きましたが、具体的な好みも記されておりましたし、その上、あまりお近くに住んでいらっしやる方とは一どうも一困りますわ。岐阜の座頭さまとの交信をお待ちすることになります。

(神戸市・小杉千恵)

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少なものをありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇〇円の御負担をお願いします。多数一括してお求めの際は、小包にて発送申し上げます。

昭和41年	昭和40年	昭和39年	昭和38年	昭和37年	昭和36年	昭和35年	昭和34年	昭和33年	昭和32年	昭和31年	昭和30年	昭和29年	昭和28年	昭和27年	昭和26年	昭和25年	昭和24年	昭和23年	昭和22年	昭和21年	昭和20年	昭和19年	昭和18年	昭和17年	昭和16年	昭和15年	昭和14年	昭和13年	昭和12年	昭和11年	昭和10年	昭和9年	昭和8年	昭和7年	昭和6年	昭和5年	昭和4年	昭和3年	昭和2年	昭和1年	昭和0年																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
41	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7

☆編集後記☆

○毎号のことながら、出来るだけ広く各嗜好発言(?)を収載したいと心掛けています。つくりだ、組み上ったものを見返してみると、やはり限られたものになっている。それが特色ではあるが、SMを主流とした事象ともしれば、犯罪以外に「小説より奇」なる事柄はそうそう転っているものではないらしい。

○「体験談」はともかく、「告白」となると執筆者の願望なり幻想が交錯して飛躍もあるわけだが、文の巧拙如何より、途中から自慰的創作にすり替ってしまう恐れが強い。尤もそれはそれで貴重とも思うが、既発表のものや、小説類と同一傾向だからとて、そのまま引写したようなのは、どうしても保留という

ことにせざるを得ない。

○いちばん変化を期待出来るのは「創作」だが、自由に飛躍出来るだけに、読ませるに足る筆力が重要視されるのは当然だろう。

○数多くの方々からの投稿を眼前に置き、しかも初記の心掛けでいながら尚、傾向、筆者共にお馴染みで殆どが埋まるのは、以上の要素が無意識のうちに作用するようだ。

○既往のものにないからというわけか、本来がSEX謳歌の筈だから、という論点からは知らないが、やたらにとび出す「ズバリ描写」を斬新とされるものには、頭をかしげざるを得ない。規制云々などの問題以外のことも、SEXという複雑微妙な世界を、かくも単純化出来るこの種の人を、一個の人間としてむしろ羨しく思うばかりである。

「懸賞原稿募集」

△体験、告白、手記△

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけ、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語△

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはと思う作品は必ず誌上に取り上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万元迄贈呈。

△感想、論評、批判△

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

△(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

△読者通信原稿△

巻末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆本誌御購読の栞☆

予約に限り

一月分(1冊)三五〇円(送料20円)
三月分(3冊)一〇五〇円(送料共)
半年分(6冊)二一〇〇円(送料共)

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

十一月号

〔第二十三巻第十二号〕
〔通刊第二百五十九号〕

昭和四十四年十一月二十日 印刷
昭和四十四年十一月一日 発行

編集人 杉原虹児
発行人 北村俊夫
印刷人 村田俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

郵便番号558
△振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大崎特別授受承認証第二二〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうが、本誌は充分に注意して編集いたしております。下す関係上、十八才未満の方には絶対販売し上げません。特にくれぐれもお願